花と龍「上」（火野葦平）

序章

女の出発

「たいそう暗いが、キヌさん、もう何時ごろかのう？」
「まあだ、三時にはなりゃあすまいね」
「やれやれ、この谷は一日がよその半分しかないよ。仕事も半分しか、でけやせん」
「その代り、夜がよその倍あるわ」
「倍あったって、電燈はつきゃせんし、油は高いし、寝るしか用がない。この村の者がどんどん都に出て行くわけがわかるよ。遠いところに行く者は、ハワイやブラジルまでも行っとる。成功しとる者もたくさんある。その成功した者は、もう二度とこんな草深い田舎には、かえって来やせん。かえらんのがほんとよな」
「マンさん、あんたもどうやら、出心がついたようにあるねえ。兄さんの林助さんは、関門の方に行ってなさるということだが、元気にして居りんさるかね」
「はい、門司で、沖の仕事をして、儲けだしとるとかで、わたしに、出て来んか、って、なんべんも手紙をくれなさる」
「だけど、たいがいなら、港なんどというところには出んがええよ。人気が荒うて、若い娘はモミクチャにされるというけえ。……マンさん、もう、煙草葉のばすこと、やめんさい。帰ろうや」
「お父っあんが、楽しみに待ってなさるけえ」
「親孝行もんよ。おふくろも安心でがんひょう。でも、その煙草葉、大丈夫なのけえ？」
「大丈夫とも」

深い谷の底である。四方の山がきりたっているので、この部落には、朝の光線がさすのはおそく、日の暮れるのは早い。まして、日の短い秋であるから、まだ三時というのに、もう黄昏のようだ。部落の名は、広島県比婆郡峯田村字峯。

はげしいせせらぎの音をたてる谷川の岸で、二人の若い村の娘が話をしている。健康そうなのは共通しているが、マンの方は丸顔の小柄、キヌの方は長顔で、おそろしく背が高い。

粗末な木綿着のマンは、川岸にある二段歩ほどの煙草畠にしゃがみ、しきりに落ちた古葉をさがして重ねる。ていねいに、皺をのばす。なれた手つきである。

野良着で、手に鎌を持っているキヌの方はススキの林のなかに、あおむけにひっくりかえって、
「やあれ、もう、狐さんたちが鳴き騒いどらあ」
と、のんきたらしく独りごとをいいながら、無意味に、バサッ、バサッと、ススキをたたき切っている。

深い山には、狐、狸、兎、猿、などがたくさん居り、ときどき、猪があらわれることがあった。昔から現在にかけて、狐に化かされた話は数えきれない。谷川には河童がいるという。河童と角力をとったという老人が、自分の実見談を、炉辺で、まじめな顔して話す。

マンは、煙草好きの父のために、一枚でも余計に葉をひろうつもりである。においの強い、黄色い枯葉が、笊(ざる)のなかにたまる。

すると、寝ころがっていたキヌが、突然、くるりと起きあがった。なにかを見つけたらしい。

「マンさん、大事(おおごと)、鬼が来たよ。早よ、隠れんさい」

切迫した語調で、叫んだ。

おどろいたマンも、狼狽したが、おそかった。

「こらあ、逃げることならんぞう」

と、太い声が、山の道からひびいて来た。

観音堂のある山道の曲り角にあらわれた一人の大男が、大股でバネ仕掛のようにとびながら、かけ降って来た。黒い中折帽をかぶり、黒い詰襟服で、これも黒の皮カバンを右手にぶらさげている。顔いろも、日やけと酒やけで赤黒く、ちょび髭が木炭をくっつけたようだ。

「とうとう、見つけられたなあ。ええかげんで、早よ、やめんもんじゃけえ」

キヌは、もう、青くなっている。

「かまうもんか」

観念したとみえて、マンは、煙草畠のなかに立ちあがって、男の近づいて来るのを待った。煙草の葉を入れた笊だけは、畠のくぼみに隠した。

「逃げるんでないぞう。逃げたってわかるぞう」

男は、まだ、そんなことを叫びながら、谷川の岸に来ると、朽ちかけた丸木橋を、あぶなっかしい足どりで渡った。二人のところにやって来た。

「こんなことだろうと思うた。お前、谷口の娘ッ子だな？」

「はい」

「盗んだ葉を出しなさい」

「盗みはしません」

「ちゃんと見とったんだ。そこの笊を出しなさい」

マンはあきらめて、黙って、くぼみから笊をとりだした。

「ほうら、こんなに盗んどる」

「盗んだんじゃありません。落ちていたのを拾うたとです」

「こんなに葉が落ちるわけがあるか。どうもこの辺の奴はたちが悪い。政府を馬鹿にしとる。今度は許さん。処罰してやる。……おい、そっちの娘ッ子、お前もいっしょにやったのとちがうか」

「とんでもない。わたしは草刈りに行った帰りに、通りかかっただけです」

「怪しいな。ま、ええわ。共謀としてひっくくるところだが、特別にこらえてやる。帰れ」

キヌは、籠を背に負うと、一散に走り去った。

「谷口の、わしについて来なさい。お前のお父(と)うに逢うて、ようと調べたうえで、罰金申しつけてやる」

「お役人さん、そればっかりは堪忍して……」

「ならん」

「ほんとに、盗んだとじゃないけえ」

「やかまし、行け」

男にはげしく肩をつかれて、マンはしかたなく先に立った。

黒服の男は専売局の役人である。煙草が専売制になると、厳重な規則ができた。この部落でも作っている家が多いが、

段に何本と定められ、それは専売局の原簿に記帳される。種は専売局からもらい、葉の数は精密に調査されて、一枚も私することはできない。ただ、葉の上、中、下とそれぞれ味がちがい、役にたたぬ部分もあり、その落ちた何枚かを自家用に吸うことだけが、大目に見られていた。

山峡の底は日没が早く、二人が歩いてゆくうちに暗くなる。点々とある家に、ランプがともる。ツクツク法師と狐とが鳴いている。

淵になった谷川の横に、水車小屋があった。水車がゆるく廻っている。そこまで来ると、役人は立ちどまった。あたりを見まわしながら、

「ちょっとお待ち」

「なんぞ……？」

「話したいことがある。そこの水車小屋に入んなさい」

マンは、ちらと水車小屋に視線を投げたが、その切れのながい、大きな眼に、不安のいろが浮かんだ。

「話なら、ここで聞きます」

「ちょっと、お前の持っとる煙草葉の数を読みたいんだが、外では風で飛ぶ。たいそう風が出て来た。小屋の中なら飛ぶ心配はない。さあ、入んなさい」

そういうと、役人はがたぴしと水車小屋の一枚戸をひきあけて、さっさと、先に入った。中から、マンをうながした。

マンも、しかたなく、おずおずと、小屋に入った。

暗い。鎧窓からさすかすかな光線で、三坪ほどの小屋の一隅に、土間に半分埋められた木臼（きうす）が、三つならんでいるのがわかる。その中に、籾（もみ）が入れられ、水車の廻転によって動く三つの杵（きね）が、それをおそい速度で、ドッス、ドッスと搗（つ）いている。たえ間なく、水の音がしている。小屋の中は、へんにかびくさい。

「煙草の葉を見せてごらん」

役人は、やさしい声でいった。態度がまるで変っている。帽子から、服、カバン、靴、顔にいたるまで黒い大男が、急に、猫なで声を出すので、マンは一層気味がわるくなった。無言で、笊をさしだした。

役人は、葉を一枚々々とりだして、手でもんだり、においをかいでみたりしながら、

「ずいぶん念入りに取ったものだなあ。お前は、わるい女のようではないが、どうして、政府の物を盗むようなことをするかね？」

「お父っあんが、煙草がしんから好きなもんですけえ……」

「なんぼ親孝行でも、法は法、可哀そうでも、罰金をかけにゃあなるまいなあ」

「お役人さん、もうしませんけ、どうぞ、堪忍して……」

「さあねえ」

思わせぶりに、役人は、じろりと、マンを見た。この、「鬼」という綽名をつけられている専売局の駐在員は、さっきから、マンの後から歩いてゆくうちに、下等な慾情をそそられた模様である。こりこりとひきしまった若い女の身体つき、腰や尻の弾力に富んだ動き、藁草履をはいた白い素足、ほつれ毛のたれかかっている小麦色の首すじ――この、眼前にある新鮮な熟（う）れた果実を、とって食べたくなったものにちがいない。

「谷口の、罰金はいやかね？」

と、舌なめずりする口調で、マンの方に寄って来た。三角眼が淫(みだ)らに光っている。
「はい、いやです」
「とりやめにしてあげようかね？」
「お願いします」
「じゃが、タダというわけにはいかんなあ。あんたもこれだけのことをしといて、タダですむとは、まさか思うて居らんだろう？」
「どうしたら、よろしゅう、がんひょうか？」
「そうじゃなあ、一番簡単なことですますとするかね。……な、それで、よかろ？」
マンも、男の考えていることが、やっとわかった。飛びすざった。
「それは、いやです」
「いや？　へえエ、ええことしたうえに、罪を帳消しにしてもらうのがいや？　もう、処女(きむすめ)でもあるまいに。みんな、そうするんじゃがなあ。それが、利口だよ」
そういううちにも、黒い大男の身体が、小柄なマンを、風呂敷につつむように、からんで来た。マンははげしく抵抗したが、強い男の腕力に抱きすくめられた。まったく身うごきができなくなった。
ドブロクくさい男の息が、顔に近づいて来た。マンは土間にあおむけに転がされ、恐しい力でおさえつけられた。
前に、一度、マンはこれと同じ目にあったことがある。
この夏の盆踊りの晩であった。草深い山峡の部落では、盂蘭盆会(うらぼんえ)は、若い男女が思いきり羽をのばす唯一の祭である。盆踊りは、柿ノ坂という、養蚕のさかんなことで有名な部落の仲蔵寺(ちゅうぞうじ)で行われる。谷口家先祖代々の墓も、この寺にあった。
父善助は、子供たちをこの寺につれて来て、祖先の墓の前に立たせ、昔ばなしをするのが好きだった。もう時代のほどもわからぬ古びた墓石は、原形をとどめぬほど、方々がかけている。文字もよく読めない。しかし、善助は、
「ほうれ、この紋を見れ」
といって、墓石の上部を、節くれだった指で示してみせる。
「なんにも、ありゃせん」
子供たちがそういうと、善助は得意になって、語りだす。
「お前たちにはわからんでも、お父っあんには、ありありとみえる。これはな、平家(へいけ)さんの御紋じゃ。源平合戦で敗れた平家さんの落武者は、源氏(げんじ)の追討が、えッときびしいもんじゃけえ、日本国中の山奥に逃げこんだんじゃが、このあたりにも来なさったんじゃ。今はこれだけでも開けたが、わしの小さいころは、この谷は昼間でもお化けの出るようなところでな、平家さんの残党が永いこと隠れて住んどった。国勢調査のとき、はじめてそれがわかってな、なんでも、まだ、チョン髷結うた、奇妙なサムライが山奥に居るちゅうんで、官員さんが調べに行ったらな、刀さしたのが出て来て――もう、源氏は亡びたか、と、きいたというわい。谷口家も、平家さんの一門じゃ。根ッからの土ン百姓とはちがうぞう」
マンは、先祖が平家であろうがなかろうが、格別、なんとも思わなかった。父の自慢するのがおかしかった。どうかすると、そのことに父の衰えを感じて悲しかった。

ところが、このことは村では由緒めかして取り沙汰され、村長の家から、二男というのに、ぜひマンをくれと縁談の申しこみがあった。二男坊は大学を出たということだったが、マンは、高慢ちきで、鼻眼鏡をかけたこの男を好かなかった。いく度、強硬に督促されても、拒絶した。すると、盆踊りの夜、この男から、寺の裏の杉林にひきこまれ、おさえつけられたのである。青白い顔なのに、恐しい力だった。すんでのところに、提灯をつけて、誰かが通りかかり、あやうく難をのがれることができた。

家に帰って、このことを父に報告すると、善助は、「馬鹿たれが。そんなことはこれからもある。よう覚えとけ」と、女の護身法を教えてくれた。

専売局の「鬼」に組みしかれたマンの頭に、ぱっと、そのときの父の言葉が浮かんだ。マンは、もう夢中だった。しかし、声は立てなかった。歯を食いしばり、眼だけを怒りに燃やした。男の股間にさしこまれたマンの右手に、あるかぎりの力がこめられた。異様な叫び声を発した男の顔色が、スウッと大根葉色に変った。はげしい痙攣をおこすと、「鬼」はぐったりとなって、そこへ倒れた。

マンは、はね起きた。飛びすざった。顔が熱く火照り、動悸がはげしく打つ。肩で大きく息をしながら、見ると、暗い土間に、松の大木をころがしたように、男は横たわっている。動かない。

そっと、近よった。眼がひきつり、乱杭歯をむきだしにして、唇の部厚な口が、ポカッと開いている。狸のようである。マンは、耳を男の胸にくっつけてみた。それから、そこらに散乱している煙草の葉をかきあつめ、笊に入れた。それを持って、水車小屋を出た。

井戸の底から見あげるような空に、うす赤い夕焼雲がただよい、一羽の鳶が悠々と舞っている。あたりには、家もなく、人影もない。キョーン、と一声、遠くに、狐の声が聞えた。

マンは、水車のところに来た。笊を置き、水車をまわしている瀬の岸にしゃがんだ。落ちて来る谷川の流れで、手を洗った。それから、水を両手ですくい、ごくごくと飲んだ。咽喉がひどくかわいていた。澄んだ冷たい水が、食道から胃袋へ通ってゆくのがわかり、

「ああ、おいしい」

と、思わず、声が出た。

かすかな黄昏の光のなかで、マンは、すぐ眼のまえの流れに一匹の鮠のいるのを認めた。水はかなりはげしく流れているのに、小さな魚は流れにさからって、間断なく鰭をうごかしながら、ほとんど停止している。すこしずつ、進む。それを見ると、マンはしいんとした気持になり、すこし落ちついた。

マンは、もう一度、両手で水をすくい、それを口一杯にふくんで、立ちあがった。小走りに、また、小屋の中に入った。

倒れている役人のところに行き、顔を目がけて、プウッ、プウッと、二度に、水をふきかけた。すると、男の顔がびくついて、開いていた口がふさがり、ウウン……と、くぐもった呻き声が、咽喉の奥底から起った。役人が動きだす気配を知って、マンは表に飛びだした。水車のところに置いた笊をとると、一散に、走った。

恐しいのか、悲しいのか、腹だたしいのか、それとも、うれしいのか、わからず、彼女は、ただ、早く家に帰りたかった。谷川に沿った小径(こみち)を、わき目もふらず急いだ。稔った稲穂のうえを、しだいに強くなった風がわたって行くと、湖のようである。また、キョーンと、するどい狐の一声が、今度はすぐ耳の間近でひびいた。

いくつも坂を越えた。やっと、前方にわが家が見えて来た。ランプの下で、ワラジを編んでいる母の静かな姿が眼に入って、マンは、突然、ぐっと胸がこみあげてきた。大声をあげて泣きだしたい衝動を、やっと、唇をかんでこらえた。涙があふれ出て来て、前方のランプの光がゆらゆらと流れた。

このとき、背後で、馬の蹄の音がした。

「マン坊」

と、声をかけられた。

ふりかえると、馬に乗った一人の筒袖姿の青年が、ススキの深い曲り道から、姿をあらわした。

「時やんけえ、びっくりしたあ」

「びっくりするこたあ、なあじゃろ。狐じゃあるまあし。……ほれ、郵便じゃよ」

「どこからな？」

「門司(もじ)の林助兄(りんすけあに)さんからと、……こっちの方は、専売局じゃ」

「専売局？」

マンは、どきっとした。

大川時次郎は郵便配達夫である。柿ノ坂の郵便局まで来る郵便物を、彼は馬に乗って、部落々々に配達して廻る。ときには、書留や小包などの大切な物も扱うので、信用の置ける者にしか委せられない。時次郎は、その点では村中での模範青年といってよかった。さらに、雨、風、雪、嵐のときにも、配達を休むわけにはいかないので、身体の頑健な者でないと勤まらない。その点でも、草角力の横綱である時次郎は、最適任者であった。

「おやあ」と、馬上から、時次郎は、マンの顔をのぞきこむようにして、「マン坊、泣いたのとちがうか」

「うんにゃ、泣きはせん」

「それでも、一杯、涙がたまっとる。マン坊の泣き虫は珍しゅうはなあが、また、村長の二男坊から、いじめられたとみえるなあ」

「誰が、あんな、鼻眼鏡……」

「マン坊の方はそんな気でも、まあだ、敬(けえ)やんはあんたのこと、あきらめんというぞ。根が狡ン坊のうえに、大学出の智慧者じゃけえ、惚れたがメッチャラで、なにを企らむか知れん。気をつけんさいや」

「なんでやって来ても、負けやせんよ」

「そんなら、ええが……」

ひろい縁の麦藁帽の下から、きりッとしまった面長の顔が、なにかの思いをこめて、マンを見る。すこし鈍くはあるが、眼には意志的な光があり、黒く太い眉がたくましい。

マンは、時次郎の瞳にただよっている、その思いというのが、なにか、よく知っている。そして、マンの方も、時次郎にたいして、或る気持を抱いていた。

「マン坊、今夜、閑(ひま)けえ？」

「うウン、今夜は、ちょっとばかし、用がある」

用はなかったけれども、水車小屋での事件が、どんな結果を生むか、閑であるとはとてもいえなかった。それどころか、マンは、今にも息をふきかえした「鬼」が、跡を追って来るにちがいないと、びくびくしているのである。
「そうか、閑なら、今夜遊びに行って、ゆるゆる話したいことがあったんじゃがなあ。……明日(あした)の晩は？」
「それも、わからんわ」
「たいそう忙しいんじゃなあ。いつか、おれのために、閑をつくってくれんさいや」
「そのうちにね」
時次郎は、つれないマンの態度に、あきらかに、失望のいろをあらわしたが、それでも、にこにこ顔をつくって、
「そんなら、また」
と、愛馬の頭(こうべ)をめぐらした。上背(うわぜい)のある、たくましい栗毛の四歳馬である。
「時やん」
と、マンは、急に、すこし狼狽した顔で、呼びとめた。
「あン？」
「あんた、七瀬(ななせ)の水車のところを通って、帰りんさるかね？」
「そうよ。あの道しかないけえ。それが、どうかしたな？」
「どうも、しやせん」
マンは、くるりと廻ると、飛びあがるようにして、家の方に走った。
家の下の崖まで来て、足音を殺した。斜になった石段を、そっと登った。母にさとられぬよう、裏手の牛小屋の方に廻った。
すると、どこにいたのか、愛犬のシュンが、暗闇のなかから飛びだして来た。はげしく尾をふり、クウン、クウンと鼻を鳴らして、まつわりつく。
「シイッ、シッ」
びっくりして、追ったけれども、シュンは逃げない。昼間からずっと、一番可愛がってくれる主(あるじ)を見なかったので、よっぽどうれしかったらしい。煙草葉を入れた笊を落しそうになるほど、騒々しく飛びかかって、じゃれる。
その気配に、
「おマンけえ？」
ランプの下から、母イワが、ワラジ編む手を休めて、表の暗がりをすかして見た。
「はい」
と、しかたなく、答えた。
「お父っあんには、逢わなんだけえ？」
「いンね」
「山に居ったんじゃあ、なあのけえ？」
「煙草畠に行っとりました」
「やンれ、やンれ、お父っあんは、炭焼小屋じゃろうという て、山の方に、お前を迎えに行きんさったんじゃが。今日は、朝っぱらから、たいそう、狐どんが鳴きよるけえ、おマンが化かされたらいけん、というて……」
「すみません」
マンは、牛小屋に行った。犬も、ついて来た。牛は、もう、マンの足音を知って、小屋の板壁を角でつき、足踏みをはじめた。去年生まれた小牛と二匹、親子ともよく彼女になつい

ている。ブルルルと鼻を鳴らす。歓迎の啼き声を出す。
牛小屋に入ると、マンは、棚のうえのランプに、火を点じた。飼料桶に、藁を入れてやった。牛は親子で、早速、それを食べはじめる。
マンは、牛小屋の戸をしめ、ふところから、二通の封書をとりだした。耳をすまし、誰も来る気配のないのをたしかめてから、兄林助の手紙から先に、封を切った。
小学校三年を中途でやめた兄の手紙は、片仮名で、ところどころに入っている漢字は、全部、嘘字である。しかし、意味はわかる。
「――関門海峡ニハ、タクサンノ外国船ガ入ッテクルコトトナッテ、沖ノ仕事モ増スバカリトナッテ、組デハ、若クテヨイ働キ手ヲサガシテオル。オ前ガ出テクルノヲ待ツ。ソンナ山オクデ、一生ヲ終ルナンテ、馬鹿クサイト思ワンカ。思イキッテ、出テ来ンサイ」
それから、いつでも、自分の親方の浜尾組で、部屋仲仕として引きとること、住居、賃銀、門司の港と町の賑わい、都会の面白さ、などが、たどたどしい、しかし、心をときめかさずには居られないような書きかたで、こまごまと、記されてあった。
マンは、二通目の封書を開いた。専売局のも片仮名文であったが、嘘字はなく、これはいかめしく印刷してあった。
「冠省、先般ヨリ申請中ノ願書、詮衡ノ結果、今回、谷口マン儀、煙草女工資格者ト決定セルニ付、採用ノ旨、通告ス」
マンは、二つの手紙を、何度も読みくらべながら、いくらか狂気じみた、夢みる瞳になって、牛小屋の中に立ちつくした。
（どうしたら、よかろうか？）
マンは、迷う。
村でも、専売局の煙草女工になりたい希望者は多い。ひょっとしたら、村娘にとっての、唯一最大のあこがれかも知れない。しかし、資格に面倒な条件がたくさんあって、なかなか採用にならない。その金的を、マンは射とめたわけである。普通なら、飛びあがってよろこぶところだ。
ところが、マンの顔は当惑したように、眉がよせられている。
――都会。
――港。
――自由の世界。
――ブラジル。
せせこましい谷底の故郷から、ひろびろとした天地へ出たい。青春の血を騒がせる漂泊と放浪の思いは、すでに、早くから、絶ちがたい情熱となって、マンの胸に燃えている。どこに行っても、鼻先のつかえる狭い山奥、田や畠をつくっても、五段歩とつづけられる土地がない。母の兄、マンには伯父に当る人が、ブラジル移民で成功し、大農園を経営している。そこには眼のとどかぬところまで続いた農場があり、四季を通じて、自由な耕作ができるという。マンの空想は、はるかに海を越えて、ブラジルの天地にまで飛ぶ。
――まず、門司港にいる兄林助を頼って行き、そこで足場をこしらえて、ブラジルへ。
これが、マンの憧憬の構図であった。

大川時次郎の顔が浮かぶ。郵便局に勤めているこの青年を、マンも好きだ。村一番の男と思う。時やんも、マンを嫁にしたがっている。しかし、時やんは一人息子であり、大川家を継いで、生涯をこの部落で終らねばならぬ。時やん自身も、引っこみ思案のところがあって、村を出る積極的な気持はない。彼の最後の理想は、柿ノ坂の郵便局長になることにあるらしい。

（そんなのは、いやだ）

と、マンは、思う。

表で、足音がした。牛小屋の前に来てとまった。

「マン坊けえ？」

父善助の声だった。

「はい」

と答えて、あわてて、兄林助の手紙の方を、ふところに隠した。

小屋の戸を開けた。マンより先に、犬が飛びだした。背に薪を負い、手に鎌を持った長身の父が立っている。

「なんじゃい、戸をしめこんでしもうて……」

「お父っあん、これ」

マンは、専売局からの封筒をわたした。ランプの明かりでそれを読む、善助の日やけした顔に、みるみる、狂喜にちかい表情が浮かびあがって来た。

「やンれ、よかったのう。万歳、万歳」

そういって、両手で、万歳の恰好をし、どんと、娘の肩をたたいた。

「おマン、お前も、うれしいじゃろうのう？」

「はい」

そう答えなければ、しかたがなかった。

囲炉裏端で、一家、にぎやかな夕食がはじまった。善助、イワ、長兄倉助、その嫁ミキ、その子の三歳になる松男、弟牛三、それに、マンの七人。マンの採用のお祝いといって、善助は芋焼酎の燗をつけたが、ふと、思いだしたように、

「専売局といやあ、あの駐在所の鬼が、七瀬の水車小屋でなあ……」と、話しだした。

マンは、胸のなかで、心臓が一廻転したような気がした。かあッと、顔が燃えた。眼を皿にして、父の顔を見た。

善助は、上きげんで、焼酎の徳利から、独酌をしながら、

「……なんでも、とうとう、狐に化かされたらしいぞ。あの鬼奴、いつも、威張りくさっとった。――この谷の者はみんな間抜けの阿呆たれじゃ。この文明の世の中に、狐が人間を化かすなんて、そんな馬鹿げたことがあるか。おれの方が狐を化かしてみせる。……なんて、いうてな。それが、今度は、狐どんからやられたんじゃ。罰よ」

「そりゃあ、ええ気味じゃが、どがあな風に、化かされんさったとな？」

これも、茶碗で焼酎をかたむけ、もう赤くなっている倉助が、きく。

「わしも聞いたことで、ようは知らんけどな、高門の武十旦那の話によると、こうじゃ。――旦那が七瀬の水車の横を通りかかんさった。そしたら、小屋の中から、ウンウン呻る声がして、なんか、入口から這いだして来た。旦那はびっくりしたらしいけんど、胆の太い人じゃけ、提灯をさしだして、

照らして見んさった」
「それが、専売局じゃったとけえ？」
と、母イワが、身体を乗りだす。
「そうよ。どがあしたわけか知らんが、腑抜けのようになってな、旦那が声をかけても、返事もせんし、フラフラッと立ちあがって、なんべんか倒けながら、川の岸をユウラユラ、酔いどれみたいに、歩いて行ったというわい」
「どっちの方に？」
マンは、切迫した声できいた。
「柿ノ坂の方じゃ。狐に化かされとっても、駐在所に帰る方角だけは、知っとったとみえるのう。服は泥だらけになったというが、そんなことも気づかん風じゃったらしい」
「カバンは持って居らんじゃったけえ？」
「カバン？　それまでは聞かんじゃった」といったが、ふっと、不審そうに、「マン坊は、どうして、鬼がカバンを持っとったこと、知っとる？」
「いンね、……役人さん、いつも黒いカバン持っとるけえ、どうしたか、と、ちょっと思うたもんじゃけえ……」
マンは、どぎまぎと答えた。
水車小屋の事件を、マンは父に話さなかった。誰にも話さなかった。盆踊りの晩、村長の二男坊から手ごめにされかけたことは、すぐに、父に打ちあけたのに、今日、ふたたび、同じ目に逢いながら、これは隠した。
盆のとき、父から、「これからも、そんなことはある。よう覚えとけ」といって、教えられた女の護身法を、習ったとおりに実行したのであるから、手柄顔で報告してもよいのに、マンは沈黙を守った。はからずも、危険から身を守ることができはしたけれども、その方法は、純真で一本気な若い娘を、はげしい羞恥（しゅうち）におとしいれたのである。得々と報告するどころか、真実を知られることを恐れた。マンに、新しい一つの秘密ができた。
けれども、また、別にマンの心の奥底に、奇体な力が生まれていた。
――女でも、必死になれば、自力で、男に負けぬ仕事をすることができる。
その、胸のふくらむような、自覚と、自信とであった。

一週間ほどが、過ぎた。
村の煙草工場の開所式が、盛大におこなわれた。貧乏部落のくせに、なにかの行事は派手にしたがる癖があって、この工場開きの日は、まるで、お祭騒ぎであった。
「こんな名誉なことは、なあよ。これで、わしも、もう、いつ死んでもええ」
村長は、禿げあがった頭をたたいて、本心から、そういった。まだ電燈もつかない、こんな山奥の村に、政府の指定機関が出来たことは、村長にとっては、一世一代の晴れであったかも知れない。
「村長さん、わたしも、あんたに負けんほど、うれしゅうがんす」
そういうのは、高門（たかかど）の武十旦（ぶじゅう）那である。
煙草工場といっても、単に、大地主である武十の家の倉庫を、改造したものにすぎない。煙草葉をきざむ初期の工程だ

けをやるのだし、女工も十六人しかいないのだから、結構、それで間にあうのである。
「村長さん、武十旦那さん、わしも、今度のことで、命が三年ほど延びやした。おおきに、ありがとうございやした」
谷口善助のその言葉も、お世辞ではなかった。娘のマンが採用されたばかりか、女工頭に任命されたのである。
開所式の当日、広島からやって来た専売局の若い出張員も、にこにこと、挨拶した。
「ここまで漕ぎつけることのできましたことは、村長さんはじめ、近郊各部落の方々の熱意の賜（たまもの）でありまして、本官は、今回、選抜された優秀なる女工さんがたによって、かならずや、期待される以上の成果が、生みだされるにちがいないことを確信いたします。特に、女工頭の責任ある地位に就かれた、谷口マンさんの活躍に嘱望するところ、はなはだ大であります。……本日は、当地方の駐在員である松富五八郎君が、列席できないことは、まことに残念のいたりでありますが、同君は、一週間ほど前、七瀬（ななせ）の水車小屋に隠匿されてあった不法煙草葉を調査、摘発中、ふいに持病の胃ケイレンをおこして以来、病臥中でありまして……」
どっと、会場内に、爆発するような笑い声がおこった。
得意で挨拶していた若い役人はなんで笑われたのかわからず、すこし、むっとした顔つきになって、
「同君は、技能抜群、誠実無類の人物でありまして、日ごろ、諸君を指導しながら、仕事熱心のあまり、今日、殉職に近い難にあわれましたことは……」
また、ひとしきり、会場内は、奇妙な笑いでどよめいた。役人に遠慮はしていたが、誰もおかしさがおさえきれなかったのである。
笑うことのできなかったのは、マンだけである。中央にしつらわれた、十六人の女工席の先頭に腰かけていたが、顔がまっ赤に燃えてきて、頭があげられなかった。
「マンさん、ウフフ……」
すぐ後にいたキヌが、マンの腰のあたりを指でつついて、意味ありげなふくみ笑いをした。キヌも、女工に採用されていた。
マンは、氷の鎌で腰を切られたような寒気がした。くらくらと、眼まいをおぼえた。
「誰もほんとのことを知らんらしいが、あたしだけは、なにもかも知っとるよ」
キヌの陰（いん）にこもった笑いは、明瞭に、そういっていた。
それから、毎日、マンは、高門の煙草工場に出勤した。心内ははげしく動揺していたけれども、表面は、この新しい仕事に嬉々として、没頭しているように見えた。
「やっぱり、マン坊はちがうのう」
武十旦那も、彼女の働きぶりに、大満悦である。毎日、面とむかって、ほめる。
「いンね、旦那さん、つまりません」
「一等葉を、日に三杯もつくるなんて、機械よりも、よう、やりんさる。五等葉でも、三杯、なんぼうにも出来ん者もあるとに……」
煙草葉は、よい部分、わるい部分と、一等から五等までに分けられる。それをきざむのだが、一日に、一等葉を一杯（一

貫六百目）つくるのも、なかなか骨だった。それを、マンは、正確に、三杯つくった。ぞんざいにきざむ五等葉なら、六杯ぐらい作る者もあった。一杯の賃銀、三銭から四銭。

「マン坊、村長さんとこの敬やんの嫁女になるげなのう」

或る日、工場で、武十旦那からそういわれて、びっくりした。きいてみると、マンが、煙草工場に採用されたことも、女工頭になったことも、すべて、二男坊の顔と口ききとによるものだということであった。マンは、唖然とし、嘔吐をもよおした。

敬造は、谷口家を、毎夜のように、訪れて来るようになった。にやけた声で、しかし、威嚇（いかく）するように、善助を口説く。

「僕が、一口きいたら、今日にでも、マン坊は、工場をクビになるんだよ。まったく、僕のおかげですよ」

善助は、苦虫をかみつぶした顔で、答えない。やけに、鉈豆煙管（なたまめきせる）で、煙をふかす。イワも、無言で、ワラジを編む。

或る雨のそぼ降る日、工場の入口から入って来た男を見て、マンは、思わず、手元が狂った。庖丁で、指を切った。

「やあ、精が出よるなあ」

「鬼」であった。相かわらず、黒の詰襟服、黒カバン、黒帽子の大男は、にこにこしながら、まっすぐに、マンの方に歩いて来た。女工たちの間に、くすくす笑いがおこった。

マンが、血のふきでた左の親指を口にくわえて、無言でつっ立っていると、役人は、

「怪我したのかね、どれ」

と、親切そうに、赤ら顔をつきだした。ドブロクくさかった。

「なんでも、なあです」

「そうかい」と、憎々しげにうなずいたが、仕事をしている女工たちを見まわして、「やあ、模範的娘ばっかりの展覧会だなあ」

そういって、身体中をゆすりながら、意味ありげに、哄笑した。

マンは、歯を食いしばった。「鬼」が、水車小屋の中で、罪を帳消しにしてやるからといって、身体を求めてきたとき、「みんな、そうするんじゃがなあ」といった言葉を思いだした。この女工たちの中にも、「鬼」の毒牙にかかった者があるのだろうか？　役人は、百姓が泣き寝入りするものと定めていたのだ。マンの例外におどろいたかも知れない。しかし、「鬼」は、かえって非を悔いるどころか、意地になって、新しく、マンを狙いはじめたようであった。

それから、数日後、時次郎が、また、専売局からの書留郵便を、マンのところに、届けて来た。

「専売法違反ノ科料、金二円五十銭也ヲ収メヨ」という命令書であった。

駐在員の松富五八郎が、谷口家を訪れて来た。マンの方を、じろじろ横目で見ながら、

「善助さん、罰金が来たそうだねえ？」

「来ました」

「姐御（むすめご）の親孝行が、かえって、仇になったというところですかな。……だが、なあ、善助さん、この罰金、収めずにすます方法が、なくもないんだがねえ」

「いンね、ええです。収めます」

「そんな空威張りしたって、損だよ。政府だって、血も涙もあるんだから、恩恵に浴してはどうかね？　便法があるが。……科料は大したことはないけど、前科がつくし、第一、罰金を収めに、岡山裁判所までも行かねばならんよ」
「行きます」
「お上に楯ついて、得はないのになあ」
「鬼」は、せせら笑って立ちあがった。大股で、悠々と帰って行った。
「お父っあん、すみません」
「マン坊、なあに、心配はいらん。お父っあんが、よう知っとる」
マンは、わっと泣き伏した。
善助は、罰金を収めるために、岡山に向かって、出発した。二円五十銭といえば、科料としては最低であったが、収めに行くのが大変である。大旅行といってよい。広島の山奥から、谷をわたり、山を越え、幾日も泊りを重ね、やっと、鉄道のあるところまで出て、汽車に乗る。岡山市にたどりつき、裁判所に、科料金を納入すると、また、同じコースを引きかえす。罰金の数倍の費用を使い、善助が、村に帰りついたのは、家を出てから十三日目であった。
善助は、疲れた顔も見せなかったが、日ごろ愛用していた鉈豆煙管、タバコ盆、タバコ入れ、等を、くるくると、油紙につつんで、仏壇の下の物入れにつっこんでしまった。
イワが、妙な顔して、
「あンれ、お父っあん、どがあに、しんさったな？　好きな煙草を、押しこんでしもうて……」
「おれが煙草を吸うもんじゃけえ、マン坊が心配して、罪をおかすようなことをする。今日かぎり、ふっつりとやめた」
マンは、また、涙が出た。
こういうことがあっても、なお、苦しい気持をいだいて、煙草工場に通っていたが、或る風のはげしい日の夕暮どき、マンは、七瀬の水車小屋の横で、大川時次郎とキヌとが、むつまじげに語らっている姿を見た。観音堂のかげから、眼を据えた。
遠くからで、言葉をききとることはできなかったけれども、肩を接するようにして、なにか、大声で、楽しげに笑いさんざめいている。これまで感じたこともない、不可解な嫉妬の感情が、マンの胸いっぱいに溢れた。
（なあんじゃ）
くッ、くッ、と、笑いのような、嗚咽のようなものが、胸の奥底からつきあげて来た。二人の姿が、狐と狸のように見えた。
清冽な流れを、黄昏のうすい光に散らしながら、水車がゆるい速度で廻っている。
それから、数日後、彼女の姿は、この谷底の部落から、消えていた。
明治三十五年、晩秋。
谷口マン、十九歳。

男の出発

「ええ天気じゃのう。お城があんなに、きれいに見えるぞな」
「天気ばかりようても、こっちの方は、大雨、大風、大嵐じゃ」
「そがいに、悪いのかい？　金坊」
「悪いというても、清ちゃんのような鍛冶屋の倅には、わかるまいけんどな。この車に積んどる蜜柑を、今日、問屋で、言い値で引きとらなんだら、破産じゃと、親父がいうとった」
「ふうン」
「それで、おれに、談判して来いというんじゃ。兄は上手者じゃけど、問屋からいいくるめられてばっかり居るけに、兄はやらん。いつも、むつかしい談判には、末ッ子のおれを使いさすんじゃ」
「そら、そうじゃろ。お父さんの考えが、おれにもわかるぞな、もし」
「どうなるか、当って砕けるつもりじゃが、もし、都合よう行ったら、道後の風呂に入って、遊んで来てええ、って、親父がいうた」
「その時は、おれもつれて行ってくれや」
「うん、……だが、どがいなことになるか……？」
　眼に痛いほど、濃く深く澄みわたった青空に、くっきりと、松山城の天主閣が浮き出ている。街の中央に、百三十メートルほどの高さで聳えている城山は、全山、豊富な樹木に掩われていて、緑の瘤のようだ。頂上の白い城は、しゃれた山高帽に似ている。
　はるかに、この城を望みながら、蜜柑山の間を縫っている街道を、一台の馬車が行く。その馬車には、蜜柑箱が数段に積みかさねられて、前部の箱のうえに、二人の青年がならんで、腰かけている。
　ひろい縁の麦藁帽をかぶっている方の男が、両手に持っている手綱と鞭とで、上手に、馬をあやつりながら、馬車を進める。金坊と呼ばれた方で、身体つきががっしりとし、肩幅がひろい。丸味のある顔は浅黒いが、まくりあげたシャツの先から出ているたくましい腕は、光るほど白い。
　片方の青年は、ちんちくりんで、色が黒く、貧相たらしい。かぶっている鳥打帽も、煮しめたように垢じみ、穴がいくつもあいている。
　二人とも、蜜柑山で掩われたこの村の青年だ。馬車の出発した、この部落の名は、愛媛県温泉郡潮見村字吉藤。
　くねくねと、やたらに曲りくねった道を、馬車は、松山市の方へ進む。この「七曲り」といわれている街道は、昔、敵兵が攻めて来るとき、城の天主閣から、どの道に来てもわかるように、わざと紆余曲折させたものだという。
「金坊、お前んとこの嫂さん、やっぱり、いけんかい？」
「どうもこうも、いけんなあ。だんだん、いけずになるばっかりじゃ。おれをこきつかう分はかまわんが、兄に、ひどい陰口をいうには、へこたれる。――金五郎に気をつけにゃいけん、あれは、末ッ子の癖に、この玉井家を乗っとる腹じゃ。……なんて、いう。小使を五銭くれりゃ、兄には、十銭やった、というし、髪つみに十銭貰や、人には、十五銭やったと

いう」
「そんなかな？　もし」
「清ちゃん」
　金五郎は、なにか思いついて、眼をかがやかせた。
「うん」
「一生の頼みがあるんじゃがな」
　鍛冶屋の清七は、お人よしで、かんの鈍いことで有名である。金五郎から、いつも、「お前は、朝、頭をたたかれて、夕方ごろになって、アイタ、というような男じゃ」といって、からかわれる。それで、今、親友が、切迫した顔つきと語調とで、一生の頼みがある、といっても、のびやかな顔で、表情も変えず、
「なんぞな？　もし」
　と、間のびした声で、ききかえしただけであった。しきりに、鼻糞をほじくる。
「鍵を、一箇、作ってもらいたいんじゃがなあ」
「どがいな鍵ぞな？」
「それが、……ちょっと、わからんのじゃが……？」
「わからん鍵は、でけんなあ」
「清ちゃん、お前じゃけに、打ちあける。実は、兄夫婦が、いつも、銭を入れとる箪笥がある。その箪笥の鍵は、嫂が持っとる。その鍵と同じ鍵が欲しいとじゃ」
「箪笥の銭を泥棒するんかな、もし？」
「いや、盗むんじゃない。借るんじゃ」
「箪笥をあけて、黙って借るんかな？」
「そうじゃ」
「借るんなら、鍵を作ってあげてもええぞな」
「どがいにしたら、同じ鍵ができる？」
「鍵穴に、墨を塗りつけてな、半紙で押して、型を取って来なさい」
「そうか、おおきに」
　かんは鈍いけれども、清七の腕の方は、金五郎は信用していた。馬の蹄鉄でも、馬車の軸でも、柑橘類の剪取に使うハサミでも、清七は、馬鹿叮嚀に念を入れるので、よその鍛冶屋のよりは、数等堅牢で永持ちがした。きっと、ちゃんと、箪笥に合う合鍵ができるにちがいない。
　やがて、馬車は、松山市内に入って行った。城下町の名残りをとどめている古い家が、いたるところにあり、武者窓のついた部屋の内側から、パタン、パタン、と、伊予絣を織っている機の音が聞えて来た。
　萱町にある果物問屋の前まで来て、馬車をとめた。「甚という、伊予蜜柑を一手にあつかっている店である。
　のれんをくぐって、金五郎は入った。暗い中に香ばしい果物のにおいが立ちこめている。
　ひっそりとした店の帳場で、内儀が一人、老眼鏡をかけて、雑誌を読んでいたが、表の方をすかすようにして、
「どなたかな、もし？」と、顔をあげた。
「吉藤の玉井です」
「ああ、金さんじゃなあ。ちょいと、お待ちいな。うちのも、あんたの来るのを、さきにから、待っとった。じき呼んで来るけに……」
　内儀と入れちがいに、主人があらわれた。色の青い、小柄

な中老人だが、辣腕な商人として鳴りひびいた男である。金壺眼の奥に、狡そうな淀んだ光が沈んでいる。

すぐに、商談がはじまった。店先の框に、腰を下した二人の間に、算盤が置かれた。

この取引が、うまく行くか、行かぬかで、玉井家の運命がきまる――父が、自分を使いに出した責任の重大さを考えると、金五郎は緊張せずには居られなかった。

算盤の玉を、四つ、下からはねあげておいてから、じっと、「甚の顔色をうかがった。

腕組みしたまま、思わせぶりに、「甚は、にやにや笑っている。いつもなら、電光石火に、値の交渉が行われて定まるのだが、どうしたのか、「甚は、返事をしない。金五郎が、算盤の玉で示した値段にも、さほど関心を持っていないようにすら見える。

金五郎は、すこし、じれて来て、

「どうですか、この値では？」

それでも、黙っているので、

「これ以上は、一銭もまからんですよ。早う、手を打って、金を渡しなさい」

すこし声を大きくして、詰めよった。睨むようにした。

正直のところ、金五郎は、心内、すこし狼狽していた。まずいことになった、と思う。こういう談判の仕方になっては、負けだ。いつもの「甚の手をよく知っているので、その作戦を練って来たのに、まるで、様子がちがう。こちらが、4とはじけば、「甚は、1と来る。そこを揉みあって、3に定まれば、大成功のつもりであった。

ところが、普段は、4と置いた玉を、抜く手を見せぬ勢で、パチッと、三つ弾きかえす「甚、が、沈黙したまま、全然、反応を示さない。のみならず、妙に意味ありげな微笑を浮かべている。

金五郎は、すこし、気味が悪くなった。そうなると、一層、いらいらして来て、追っかけられるように、「甚、さん、男らしく、定めましょう」と、叫び声になった。

「まあ、まあ」と、やっと、相手は口を開いた。

「金さん、あわてることはないぞな」

「あわてはせんけれど、愚図々々するのも、感心しませんでなあ」

「金さん」「甚は、落ちつきはらって、「どがいにしても、それだけの金が、お要りるかな？」

「要ります」

「じゃが、今は、もう、そんな値段は無茶ぞな」

「いつでも無茶なのは、「甚さんじゃないですか。あんたには、山殺しという綽名がついとるのを御存知ですか」

「そがいなことは、どがいでもええが、……金さん、ほんとに、それだけないと、玉井ではお困りかな？」

「困ります。破産します」

「それでは、こがいにしよう。うちも商売じゃけに、みすみす、大損はしとうない。あんたの言い値で取ったら、こっちが破算する。それで、玉井も助かるし、うちも損せんという取引をするが一番、金さん、どうかい？」

「そんな、うまいことができますか」

「できるかも知れん、……あんたの考えひとつで……」

そういうと、「甚は、はじめて、いきいきと眼を光らせて、すこし膝を進めて来た。
「わたしの考えひとつ？……」
わからなかった。
「なあ、金さん、ざっくばらんで行こう。あんたは、黒石家に養子に行くことを、どがいにしても承知せんそうじゃが、考えを変えて、行きなさい。それが、なにもかも円満解決の上分別。黒石はわしの親戚になるけに、あんたを養子に世話してくれりゃ、お礼の金を出す。それを、この腐れ蜜柑の代金として、あんたに払う。三方めでたくおさまるわけぞな」
金五郎は、唖然とした。呆然となった。思いも設けぬ伏兵である。
（一杯、食った）
唇を噛んで、息をのんだ。
「こがいなええ話、めったに、あるもんじゃないぞな」
してやったりというように、「甚は、にたにた笑って、返事をうながす。
黒石家から、金五郎を養子に欲しいという申し入れは、もう、長い話である。当主黒石幸作は、潮見村で一二といわれる分限者だが、子供が一人しかない。それが、娘で、角力取りのような大女のうえに、すこぶるつきの醜女と来ている。どうしても、婿養子をしなくてはならぬけれども、来手がない。女には眼をつぶり、財産目あてで来ようという者もないではないが、そういうのは黒石の方で気に入らない。身体が頑健で、仕事が出来、男ぶりも十人並、親を大事にし、娘を可愛がってくれる男が欲しい。その白羽の矢が玉井家の三男坊、金五郎に立てられたのである。
「村中見わたしても、金さんをおいては、他に一人も、これと思う男は居らんでなあ」
黒石幸作は、そういう。中風が出て、すこし不自由な身体を、自身で、何度も、玉井家に運んで来た。
父卯八や、兄卯太郎は、先方の莫大な財産に、食指がうごかないでもなかったので、
「どうじゃ、金坊、黒石に行って、ヤス坊を嫁にして、村一番の物持になるかい？」
と、誘いをかけてみたが、
「死んでも、行かん」
金五郎の答は、その一点張りであった。
村長や、有力者、商売筋、役人、警察、友人――あらゆる方面から、執拗に口説いたけれども、金五郎の決心は変らなかった。
日ごろ、金五郎を邪魔者あつかいにしている嫂のスギなどは、
「お前は、馬鹿ぞな。こがいな棚ボタばなしが、世界のどこにあるもんか。わたしがお前なら、慰斗をくわえて、飛んで行くが」と、義弟の無慾を罵倒した。
黒石の一人娘ヤスも、「金さんでなければ、いや」といって、駄々をこねているとのことである。
金五郎は、窮した。
「なあ、金さん」「甚は、もうひと押しというように、
「あんた、さっき、男らしゅう定めよう、と、いうたなあ？
それは、ここのことぞな。さあ、思いきって、手を打とう

じゃないけ？」
「わかりました。わたしが、黒石の養子に行けば、蜜柑を全部、四で、引きとってくれるというんですね？」
「そのとおり」
「四で、値引きを一つもせず、即金で払ってくれるというんですね？」
「そのとおり」
「よろしい。手を打ちます」
「そうけ」と、「甚は飛びあがって、「くどいようじゃが、黒石の養子のこと、承知じゃな？」
「承知です」
「おおきに。やっぱり、金さんはものわかりがええ。これで、三方、丸くおさまるというもんじゃ」
それから、金五郎は、「相違ナク、黒石家ニ養子ニ参リマス」という証文を書かされた。得意満面、ほくそ笑んでいる「甚から、蜜柑の代金をうけとって、悄然と、店を出た。
空（から）になった馬車に乗って、金五郎と清七とは、道後（どうご）温泉に行った。湯の町は、松山とはつづいている。
鍛冶屋の清七は、取引のなりゆきを、心配しながら、見ていたが、友人が、あんなにもいやがっていた黒石家の養子を承諾したので、びっくりした。馬車の前部に、肩をならべながら、「金坊、お前、ええのけ？」と、不審顔で、きく。
「ええ、ええ。どういうたって、仕方があるもんか。家の急場をしのぐにゃあ、もう、この一手じゃ」
「そがいにいうても、養子は一生のことぞな、もし」
「放っといてくれ。おれに、すこし考えがあるけに」
「そうけ？」
「それでな、清ちゃん、来るとき頼んだ箪笥の合鍵は、もう作ってもらわんでも、ええ。要らんことになった。今夜は、湯町で、やりっぱなしに散財しよう。もう、やけ糞じゃ。お前、つきあえよ」
「そら、つきあいはするが……ほんとに、金坊は、なにをしでかすか、わからんなあ……」
「お前にも、煙草銭やろ。……ほら」
「そうけ」
「甚に、四と吹きかけて、二で治まれば予定どおり、三なら大成功、という目算であったから、金五郎の胴巻は、現金でふくらんでいる。そのなかから、目ノ子算で、いくらかをつかみだして、清七の手のひらに握らせた。
公園になっている湯町の入口に、小さい骨董屋があった。あまり高級でないガラクタ店である。
馬車を止めると、金五郎は、つかつかと、その店に入った。
「やあ、金さん、おいで」
赤鼻で、禿頭の親父が出て来た。木魚のように、口が大きい。
「こないだから、銭がでけたら貰うというとった助広（すけひろ）の短刀な、あれをおくれんかな」
「がいに、儲かったのけ？」
「雀の涙ばかり」
「蜜柑じゃあ、今年は、みんなが損ばかりしよるとに、やっぱり、金さんじゃなあ」

紫の袋につつんだ一振りの小刀を、奥からとりだして来た。うけとると、鞘を抜き、よくあらためてから、金を払った。骨董屋を出た。

「あがいに、前から欲しがっとったのを、とうどう、手に入れたなあ」

清七も、金五郎の刀剣好きを知っていたので、祝福の言葉をのべた。

馬車を知りあいの果物店にあずけて、共同湯に、行った。浴室はいくつかあったが、「神の湯」という、ひろい湯槽に入った。

青く淀んでいる、ぬらりとした湯に、首まで浸ると、金五郎は、なにか、ぐったりとなって、不思議な疲れをおぼえた。白い湯気のなかで、眼をとじると、夢を見ているような心地になる。あまりよくない夢である。頭が重く、口中がほろ苦い。

その耳に、すぐ傍で、

「兄ちゃんや」

という、聞きなれぬ声が聞えた。眼をあけた。

さっきから、一人で、蛇口のすぐ下に浸っていた、角刈頭で、色の青黒い、全身に彫青をほどこした、眼つきの鋭い男である。

「わたしですか？」

と、金五郎は、問いかえしたが、すぐに、この男を見るのは、はじめてではないことに気づいた。

先刻、湯槽に降りて来る前、二階の大広間の脱衣場で、番茶をすすり、塩せんべいをかじりながら、清七と高話をした。

そのとき、二間とははなれていないところに、浴衣の諸肌をぬいで一人の男が寝ころがっていた。その男にちがいない。むきだしの痩せた身体を、いっぱいに埋めつくしていた、般若と大蛇の彫青に、見おぼえがある。四十年配だ。

二人は、蜜柑のこと、「甚のこと、刀剣のこと、浄瑠璃のこと、黒石のヤスのこと――手あたりしだいに、話題をとらえて、駄弁を弄していた。そのあげくに、

「今夜、散財するのもええが、大事な現金をたくさん持っとるけに、早目に切りあげて、帰った方がええぞな」

大きな声で、そういった清七に、金五郎は、いきなり、膝をつねって、合図した。かたわらの彫青男が、眼をぎらつかせて、聞き耳を立てていることに、気づいたからである。

しかし、かんのにぶい清七は、さらに、金五郎から、眼くばせされても、まだ、わからず、

「なんするのぞな、無茶しよって。痛いじゃないけ。金さんの力で、ひねられてたまるもんけ」

と、恨むまなざしで、友達を見た。

金五郎は、はがゆくてたまらなかったが、

「清ちゃん、お前、今度の鎮守祭には、「三勝半七」を語るのけ？」

と、話題を転じた。

「いんや、「太閤記十段目」にしようと思うとる。……じゃが、痛いなあ。青じみになったわ。どがいなわけで、金坊は、こがいなひどいことを……」

なおも、清七が、ぶつぶつと、そんなことをいいかけると、寝ころんでいた変な男は、くるりと起きあがった。浴衣をぬ

ぎ、手拭をぶら下げて、急ぎ足で、湯槽への階段を降って行った。
金五郎は、清七に、「もう、銭の話は、すな」といましめた。しばらくして、二人とも、裸になって、湯槽に降りた。すると、そこに、先刻の男がいたのである。「神の湯」の札を買ったことを知っていて、待ちかまえていたのかも知れない。
ひろい石の湯槽に、客は、三人しかいなかった。
「兄ちゃんは、きれいな身体してるなあ」
角刈の男は、折った手拭を頭にのせたまま、つうっと、金五郎の方へ、寄って来た。
「なに、土百姓じゃけ、泥と一つことです」
金五郎は、しかたなしに、苦笑して、答えた。
「いいや、そうじゃない。ほんとに、色が白くて、肌目がこまかい。おれの肌とは大ちがいだ。あんたのような身体に、彫青したら、そりゃあ、みごとなもんだがなあ」
「滅相もない。百姓の子が、彫青なんて……」
「兄ちゃんは、何年かね？」
「辰です」
「辰？　ほう、いい干支だ。おれは、巳の年だから、蛇を入れたが、兄ちゃんなら、ピシャリ、龍だなあ。彫りあがったら、惚れぼれするぞ。おれのは、こんなに、汚ねえが……」
男は、金五郎の腕をつかんだ。
医者が、患者を診察するような手つきで、しきりと、腕や、肩を、骨ばった指先で、さすったり、もんだりする。背中の方まで廻って、眺めながら、「ふウむ」と、なにやら、うなずく。
金五郎は、男のするがままに、まかせていた。清七は、気味わるがって、何度も、相手にするな、という風に、眼くばせしたり、湯の下で、金五郎の尻をつねったりした。
やがて、怪しい男は、診断を終った医者が、判定をくだすように、妙なことをいいだした。
「立派な体格だ。おれが女なら、首ったけになるよ。百姓には惜しい。龍の彫青でもしたら、大前田英五郎のような親分になることは、うけあいだ」
この男が土地の者でないことは、言葉からでも、態度からでも、明瞭だった。道後温泉には、旅の者が多く入湯に来るから、他国者のいることは珍しくない。しかし、こういう、生粋の江戸弁を使う、全身総彫青の男などは、よく湯町に来る金五郎も、これまで、見かけたことはなかった。
金五郎は、好奇心をおぼえて、からかってみる気持になった。
「土ン百姓の子でも、親分になれますか」
「そりゃあ、なれるさ」
「実は、わたしも、侠客が好きなんです。講談本を読んでいて――清水の次郎長や、国定忠治のような親分になりたいなあ。……って、考えたことはあります」
「とんでもねえ、兄ちゃん、そりゃあ、考えちがいだ」
「どうしてです」
「次郎長や、忠治、ってえのは、いけねえや。侠客の屑さ。喧嘩を売り物にする奴は、駄目だ。ほんとうのいい親分は、喧嘩をしねえな。だから、大前田英五郎ってえのは、えれえよ」

「大前田英五郎というのは、知りませんね」
「そうよ、斬った張ったをやらねえから、講談や浪花節にはならねえんだ。つまらねえ侠客というのは、みんな、派手なものさ」
金五郎は、はじめは気味のわるい印象を持ったこの男に、すこし、興味と親しみとを感じて来た。
「親分さん」
と、呼んでみた。
男は、ケッ、ケッ、ケッ、と、鶏のような声で笑いだして、
「おれは、親分じゃねえや」
「そんなら……」
「三ン下さ。……だが、なにか用かね？」
「親分になるのには、どがいにしたら、ええでしょうか」
「さあ、なあ、……？　一口では、いえんなあ。……兄ちゃんは、すこしは、やんなさるか」
「なにをです？」
「これさ」
男は、右手で、骰子（さいころ）を投げる恰好をした。しかし、金五郎は、その意味がわからなかった。
「それ、なんのことで？」
「ははあ、兄ちゃん、まだ、ズブの素人だな。丁半（ちょうはん）さ。ばくちだよ」
「やったこと、ありません」
「どうだ、兄ちゃん」と、男は眼を光らせた。「今夜、盆につきあわねえか。仲間が四五人来てるんだ。面白いぜ」
清七は、いよいよ、悪漢が本性をあらわして来たと思った。前よりも力をこめて、金五郎の尻をつねった。
金五郎は、その手を、湯の中で、はねのけておいてから、
「三ン下さん、ぜひ、今夜仲間に入れてつかあさい」
と、いった。
「いいとも、いいとも。そっちの兄ちゃんと二人で、やって来な」
そして、盆茣蓙（ぼんござ）の開帳される筈になっている場所や、時間を、詳しく教えた。それから、急に、「ああ、うっかり長湯して、のぼせてしまった」と、まるで、オットセイが水から飛びあがるような具合に、あわただしく、「神の湯」から、出て行った。
白くたちこめる湯気の中に、背に彫（ほ）られた恐しい般若の面が、すっと消え、ちょっとの間、妖しい雰囲気がただよった。
「金坊、お前、やめとけよ」
「かまん、かまん。なんでも、知らんことはやってみるんじゃ。勉強じゃけに」
「そうけ？」
金五郎は、手拭で、白い身体をゴシゴシこすりながら、遠くを見る眼になった。
――港。
――自由の天地。
――支那大陸。
金五郎が、支那へわたりたいと考えはじめたのは、もはや、二年や三年のことではなかった。せまい村の中で、こせこせと、ちっぽけな争いをくりかえしている息苦しさ、馬鹿々々しさ。伊予蜜柑の産地として、聞えているとしても、その面

積は猫の額ほどにすぎぬ。金五郎の眼には、一望千里の間、ふさふさと、あらゆる季節の果実をみのらせた大果樹園が浮かぶ。

――どこか、港に出て、基礎ができてから、大陸へ渡ろう。

おさえがたい青春の血は、すでに、自由を求める漂泊と放浪との思いを、たぎる情熱と化せしめていた。その金五郎の空想の中に、

――龍。

突然、奇妙な伝説の動物が、荒々しく登場したのである。

（龍になって、昇天するんだ）

湯槽の一角に、蛇口があって、そこから、間断なく、豊富な湯がはきだされている。その湯口は、青銅で彫られた龍である。これまで、注意したこともなかったのに、今、金五郎は、その龍が、自分になにかの謎をかけ、話しかけているような気がした。

（あの、変なバクチ打ち奴、つまらんことをいいやがる。からかってやったら、本気にしやがった。誰が、親分なんかになるものか。彫青なんて、馬鹿にするな。龍になり、雲と風とに乗って、大空を翔(か)けまわるんだ）

金五郎の大きな眼からは、狂気に似た光が、ギラギラと発散した。

湯を出ると、うどんを食べてから、彫青男から教えられた「四国屋旅館」に行った。散財は後廻しにした。この宿屋は、色町の中央にあって、料亭も、貸席も兼ねている。

例の男が、玄関まで、迎えに出た。盆の開帳されている奥座敷へ、案内してくれた。

襖がひらかれた瞬間、金五郎は、思わず、かるいおどろきの声が出た。

こういう光景を見るのは、はじめてである。湯槽の中では、四五人、仲間が来ていると聞いたので、狭い部屋で、こっそり、こじんまりしたバクチが、行われるものとばかり思っていた。ところが、今見ると、まるで、宴会場だ。

三十畳ほどの広間の中央に、四十人ほどの客が、ずらりと、二列になって向きあっている。列の間に、長い莫蓙が敷いてある。もう、早くから、はじまっていたらしく、座には、殺気のようなものが、漲(みなぎ)っているのが感じられた。むんむんする人いきれがただよっている。

金五郎がおどろいたのは、そればかりではない。博徒の中に、女が五六人いるうえに、男客の中には、顔見知りの者が、二三にとどまらぬことであった。

彫青男は、きょろついている金五郎を、会心そうに眺めながら、

「兄(あん)ちゃん、豪勢なもんだろう。遊びにも、いろいろあるが、これは、一番あたりまえの丁半だ。この街の堅気の旦那衆も、たくさん見えてござる。どんな素人でも、すぐに覚えられるという奴だ。丁方(ちょうかた)か、半方(はんかた)かになって、好きなだけを張ればいいんだ。……兄ちゃんは、どっちになさる？」

「どっち、といいますと？」

「丁かい？　半かい？」

骰子(さいころ)の目の偶数が丁、奇数が半くらいのことは、金五郎も知っていた。

「さあ、どっちがええかなあ……？」

「九半十二丁、といってな、二つの骰子の目の組みあわせじゃあ、丁の目が、半より三つ多いことになってるんだ」
「金坊」と、横から、清七が袖をひいて、「丁にしいな。なんぼうでも、多い方がええぞな」
「半にしましょう」
と、金五郎は、いった。
半方の列の間に、わりこんで坐った。
「やあ、これは」
と、何人もが挨拶する。伊予絣の呉服屋、魚屋、質屋の隠居、材木屋――日ごろは半纏や前だれがけで、勤勉に店で働いている商人たちが、眼の色変えて、バクチに熱中している姿に、金五郎は異様な昏迷をおぼえた。丁方の中に、「甚の顔まで、発見した。
でっぷり肥った五十男が、親分らしい。丁方の中央に胡床をかいて、悠然と、巻煙草をくゆらせている。
中盆と壺振りとを兼ねているのは、若い女である。銀杏返しの髪はすこしみだれ、ほつれ毛が、紅潮した長顔に、しどけなくたれかかっているが、金五郎の眼をひいたのは、腕まくりした女の右腕の、美しい彫青であった。大きな牡丹に、数羽の蝶の群れている図柄だが、その牡丹の花は、眼にしむほど、あざやかな朱で彩られている。
丁半両者の賭金がそろうと、
「勝負」
女は、丸味のある声でいって、ぱっと、白い手で、壺笊を伏せた。二つの骰子が、カラカラッと鳴って静まった。
金五郎は、その女の不思議な色気に、圧倒された。こういう女を見たことがない。思わず、見とれていると、壺笊に手をおいたまま、座中を見まわしていた女の視線が、自分に来た。
金五郎は、どぎまぎして、ふいに、赤らんだ。女の眼も、金五郎にとまって動かなくなった。
金五郎は、女から、二人置いた右手にいた。女の眼にも、おどおどした金五郎の田舎者らしい様子は、いかにも素人くさく映ったものであろう。やさしく、弟でもさとすような語調で、
「兄さんは、お張りになったの？」
と、いった。
「いいえ、……まだ、……」
思いがけず、声をかけられて、金五郎はびっくりして答えた。
「今からでもいいわ。お張んなさい。きっと、丁方で、受ける方がありますから」
「張ります」
なんだか、ぼうとした気持になって、財布から、一枚の紙幣をつかみだした。それを、前の莫蓙のうえにさしだした。
「ほう、……十円」女は、わざとらしく、おどろいてみせて、
「半方の若い兄さんから、猪が出ました。丁方で、どなたか、お合わせになる方はありませんか」
と、一座を見まわした。
「張った」
間髪を入れずにそういって、同じく十円札を出したのは、甚であった。

金五郎と、甚とは、顔見あわせて、人には通じない、異様な微笑をとりかわした。
「勝負」
もう一度、女は、そういって、ばっと、壺笊をあげた。
「半」
がやがやと、座はひとしきり、ざわめいた。
女は、負けた丁方の賭金を全部あつめ、半方の賭金額に応じて、それを分配した。どんな風に、テラ銭が差し引かれたのか、わからなかったが、金五郎の張った十円には、八円が配当された。
「兄さん、目が出そうだわね」
中盆の女が、二つの骰子を、手のひらで転がしながら、金五郎に笑いかけた。歯が美しい。
「おかげさまで、まぐれ当りいたしました」
急に、かえす言葉が見つからなくて、そんなとんちんかんな返答をした。そして、耳のつけ根まで赤くなった。どっと、囃(はや)すような笑い声がおこった。
それから、何度か、勝負はつづけられた。
金五郎は、四五回目には、もう、呼吸をのみこんでしまって、張ったり張らなかったり、金額も、増したり減らしたりした。
時間の経つのが、わからなかった。
チン、チン、チン、チン……
急に、時計の音に気づいて、柱時計を見た。十一時である。びっくりして、立ちあがった。
「こら、いかん。親父が心配しとるけに、帰ろう」
「勝ち逃げかね？」
彫青男が寄って来て、笑いながら、いった。
「家が遠いけに、失礼します」
「そうかい。そんなら、また、おいで。一週間ほどは、毎晩、やっとる。兄ちゃんは、しこたま取りこんでるから、途中、気をつけてな」
「はい、お邪魔いたしました」
金五郎の胴巻はふくれあがり、妊娠腹のようになっている。そのうえに、助広の短刀をさした。
清七と二人、また、空馬車に乗って、帰った。散財はやめにした。
月明である。冬の夜空に、松山城が浮きあがり、なにかの花の香が、街道いちめんに流れている。

その年が、明けた。
松の内に、黒石家では、金五郎を養子に迎えるめでたい式が、一種、狂気じみた盛大さで、もよおされた。式が派手で、金がかかるほど、養子をつなぎとめる鎖が太いわけなのである。
雪の降る日であった。
「お前は、がいな親孝行者(もん)ぞな」
厄払いができたうえに、まさかのときには、養子先から、金の引きだせるあてもできたので、嫂のスギは、大満悦である。急に、金五郎を、下に置かぬあつかいをした。
鍛冶屋の清七には、どうしても、友人の計算がわからない。黒石家には、「死んでも行かん」といっていたのだから、金が

できたら、やめればよさそうなものだ。玉井家が、破算するかせぬか、その瀬戸際の運命を賭して、狡猾な甚にぶっつかった。養子に行くなら、と、ペテンのような戦術にひっかかった。やむなく、承諾した。ところが、その帰りに、偶然にも、丁半バクチに加わって、大勝利を博したのだ。甚から受けとった以上の金が、ふところに入ったのである。

「金坊、「甚に、銭もどして、黒石の養子、やめたら、どがいぞな？」

そう忠告したのに、

「銭金のことじゃない。男が、いったん、約束したことは破られん」

金五郎は、不機嫌にそういっただけであった。

よろこんだのは、ヤスである。永年の宿願がかなったのであるから、露骨に、不器量な顔をほころばせて、どんなつまらないことにも、うれしげに、げらげら笑った。彼女は智能の程度も、小学三年生並であった。

ところが、それも、束の間であった。ヤスと、金五郎との間に、奇妙な争闘が展開された。それは、はじめは、閨房の中から、はじまった。

金五郎は、いつも、一人で寝て、絶対に、ヤスを相手にしないのである。いくら、ヤスが要求しても、応じない。

ヤスは、泣きだす。

「金さん、あんた、どがいなわけで、わたしを可愛がって、おくれでないのぞな？」

「おれは、養子には来たが、あんたの婿に来たんじゃない」

「養子に来れば、わたしが嫁にきまっとるじゃないけ？」

「養子に行くことは約束したが、あんたの婿になることは約束しとらん」

「ははあ、……」ヤスは、怒りと猜疑心とにあふれた眼つきで、「あんたも、財産目あてで来たんじゃな？」

「とんでもない。おれは、財産なんか、鐚一文欲しゅうはないよ」

「そんなら、なんで、来た？」

「だから、養子の約束したけに、養子に来たというとるじゃないけ」

二人の話は、水かけ論で、埒があかない。

ヤスは、我慢しきれなくなって、金五郎に飛びかかる。大女の怪力で、油断していた金五郎は抱きすくめられる。おさえつけられる。ヤスの身体は、火のようだ。金五郎は、やっと、情炎に狂う女をつき放して、表に逃げだす。

そんなことが、毎夜であった。

金五郎は、家を外にするようになった。道後温泉に行くと、三日も四日も、帰って来ない。

酔っぱらって、警察の厄介になったことも、数度あった。

自然の順序として、金五郎の放埒は、村の評判になる。

養子縁組の仲介役をつとめた村長が、金五郎を呼びつけた。

「金さん、目にあまるぞな。お前、どないなわけで、そがいな無茶するんじゃ？」

「どがいも、こがいも、家に居ったら、ヤスに殺されるけに」

まったく、醜女で、白痴で、大女のヤスが、らんらんと眼を光らせて、挑んで来る姿を想像すると、金五郎は、慄然として、頽廃的な気持にならずには居られなかった。黒石家は、

黒縄地獄である。
「金さん、お前、道後に、いいかわした女でもあるとじゃないけ？」
「そんなものは、ありません」
「わしには、打ちあけてくれんかい。黒石でも――もう仕方がない。ヤスを嫁としてあつこうてくれりゃ、その女を請けだして、メカケとして、ちゃんと、おさまらせる、というとるけに……」
「ほんとに、そんなものは、ないです」
それからも、金五郎の乱行は高じるばかりであったので、遂に、四月になって、正式に離縁された。
父卯八や、兄卯太郎、それから、仲介の村長への義理を立てて、黒石家を飛びだすことを我慢していたのであるから、金五郎にとっては、もっけの幸であった。
玉井家に帰って来ると、父や兄はなにもいわなかったが、嫂のスギは、
「この、糞馬鹿が」
と、以前より、数倍も、金五郎を酷使し、虐待した。
黒石家から、訴訟が起された。名誉毀損、結婚詐欺、財産横領、器物破壊、家宅侵入、損害賠償、暴力行為、傷害、印鑑・私文書偽造、貞操蹂躙――あらゆる罪名が、にぎやかに、金五郎のうえにつけられた。
金五郎は、苦笑した。
「もう、なんにも、いわん。ただ、おれは、ヤス坊の身体に、指一本、触ったことはない。暴力行為で、貞操蹂躙されかかったのは、こっちの方じゃ」
そのことだけを、釈明した。
黒石家からの復讐は、いろいろな形で行われた。それは、しだいに、悪質になった。
この近郊農村一帯は、四国東部、阿波徳島の影響をうけて、浄瑠璃が盛だった。吉藤にも、立派な衣裳や人形を持った「温泉座」という一座があり、百姓片手で、三味線をひき、デコを使う者もあった。金五郎も、若手の語り手とされていたのに、祭の日になると、誰も三味線をひいてくれず、人形も動かしてくれる者がなかった。
或る日、桜見に行った帰り、春の空気をふるわせて、一発の銃声がひびきわたった。弾丸が、金五郎の右耳をはじいて、飛び去った。果物をつつきに群れる鳥を追うため、空鉄砲を放つことは、許されているのである。
金五郎は、耳からふき出る血をおさえ、唇をかんで、さびしそうな顔をした。
或る日の黄昏どき、金五郎は、清七鍛冶屋の店先にあらわれた。
「清ちゃん、いつか頼んだ合鍵な、やっぱり、要ることになったけに、頼むよ」
「よし来た」
蹄鉄を打っていた清七は、金五郎のところに寄って来ると、耳に口を寄せた。
「金坊、お前を鉄砲で撃った奴、おれ、ちゃあんと、知っとるぞな」
「もう、ええ、ええ、放っといてくれ」
「黒石じゃな、お前に、犬神をとりつかせるというとるげな

ぞ」
「執念ぶかい奴じゃ」
「もう、四日も前から、あの痩犬のクロを、蔵の中に埋けてな、絶食させとる。あたりまえなら、一週間くらいで、犬神を追いだすのじゃが、今度は十日にして、はげしゅう、お前をいびるらしい」
「勝手にさせとけ」
土中に全身を埋めた犬に、永い間、餌をあたえずに置く。飢餓に瀕するのを見て、眼前に、御馳走を見せる。犬はそれが食べたくてたまらない。しかし、主はそれを見せびらかしておいて、「もし、これが欲しかったら、その前に、誰それに、とり憑(つ)いて来い」と命じる。怨霊となった犬神は、目的の人間の体内へもぐりこんで、方々を肉の瘤となって移動する。その苦痛は耐えがたい。――この地方に昔から伝わっている、不気味な呪いの方法であった。
金五郎は、清七が鍵をつくってくれるのを待った。
馬鹿叮嚀に、念を入れる清七が、半紙に墨で押した鍵穴の型をもとにして、一つの鍵をこしらえあげたのは、頼んでから、一週間目も後であった。
「やっと、でけたぞな。……そら、そうと、まあだ、犬神は来んけ？」
「待っとるが、一向に来ん。呼んで来てくれんか」
その次、逢った清七は、「とうとう、犬神奴、飢え死にしてしもうたげな」と、腹をかかえて笑った。
五月に入って間もなく、兄夫婦が伊勢詣りに旅立った。このときをおいて、機会はない。
金五郎は、清七の作ってくれた合鍵を、箪笥の鍵穴にはめた。ぴったりと合った。あけてみると、紙幣、銅貨、銀貨がとりまぜて、ざくざくと入っている。七百円ほどもあった。いきなり、そのうち、二百円ほどをふところに入れた。しかし、金五郎は、この金は、父が山を売って、苦心の果てに、こしらえたものだ、ということを知っていた。
金五郎は、いったん入れた金を取りだした。三十円だけにした。そして、「一金参拾円也、拝借仕候」という証文を書いて、そこへ残した。こうして置かないと、また、嫂が、「金坊が、三百円も盗んで行ったぞな」というのに、きまっている。
また、金五郎は、いつか、この金は、かならずかえすつもりであった。
着換えなどを、風呂敷に包んだりして行くと目立つので、六枚も、重ねて着た。ちょっとそこへ行って来る、というような恰好で、家を出た。汗がどんどん流れだし、道後(どうご)の湯に浸っているような気持であった。
それきり、彼の姿は、この村では見かけられなかった。
明治三十六年、初夏。
玉井金五郎、二十四歳。

第一部

男と女

門司港。

風師山のいただきを、強い風のわたっているのが、海鳴りのように聞える。二百十日が近づいた、その前ぶれかも知れない。遠くで、風の合間を縫って、汽笛が鳴る。

桟橋下の貯炭場を、すぐ前に望む、浜尾組の事務所に、あかあかと、灯がともっている。奥座敷に、大勢の人かげがうごき、なお、ぞくぞくと、集まって来る。やがて、七八十人になった。女が二十人ほどまじっている。

黒ガキの牀柱を背に、一人の巨漢が、入って来る人間をしらべながら、名簿らしい大きな帳面に、赤インキで、しるしをつけている。六尺をこえるかと思われる、色の黒い、出歯で、額のせまい、いがぐり頭の四十男だ。ネルのシャツのうえに、「浜尾組助役」と染めぬかれた半纏を着ている。眼が、するどい。

「どうやら、揃うたようにあるなあ。三人ほど来んが、半パ者ばかりだから、もう、これで、よかろう。……新公、お前、親分へ――揃いましたから、お出まし下さい。……って、取りついで来い」

「へい」

新公と呼ばれた、二十三四らしい、やはり、半纏姿の頑丈そうな男が、密集している仲仕たちの間を、敏捷に、かきわけて出て行った。

まもなく、浜尾市造があらわれた。牀柱のところに来て、つっ立った。中肉中背だが裃でもつけたように、おそろしく両肩が張っていて、瓢箪のように細長い顔は、へんに青白い。疳性らしい青筋が、ミミズのように、額に太く這い、びくついている。

一座が静まると、浜尾は、沈痛な面持で、口を切った。

「今夜、みんなに集まってもらったのは、浜尾組の浮沈にかかわる一大事が起ったからじゃ。学問のない者が多いので、わからんかも知れんが、フチンというのは、字でかけば、浮き沈み、浜尾組が浮くか、沈むか？　この浜尾市造の顔が立つか、つぶれるか？……今日まで、ばりばりと鳴らして来たが、明日のインド丸の荷役に失敗したら、おれは、この門司に居られん。つまりは、浜尾組は解散、お前たちも、路頭に迷うことになる。……わかってくれるな？」

一座は、しいんとしている。

「どうじゃ、親分のいうこと、わかるじゃろう？」

助役の大男が、鷹のような眼で、一座を見まわして、どなると、

「わかります」

十人ほど答える者があった。

「相手は、宿敵の大村組じゃ」浜尾は、そこに、大村がいるかのように、眼をぎらつかせて、「絶対に、負けられん。そこで、明日の荷役には、いつもの出番を変更して、しっかりした者だけを、三十人、出す。人選は、日ごろの成績によって、

ボーシン（助役）と相談のうえ、定めた。もし、勝てば、問題ないが、……いや、ぜひ勝ってもらわにゃならんが、……万一、負けるようなことがあったら、その場で、喧嘩をふっかけて、やっつけて、おれの顔を立ててくれ。……それじゃ、ボーシン、名前を読め」

「へえ」大男は、帳面をひろげた。「ええか。……大石良造、堀部安太郎、小山田庄三郎、大原源吾、谷口林助（りんすけ）、森新之助、玉井金五郎、……女では、丹羽フミエ、石川タツ、谷口マン、井上トモ子、……」

指名が終ると、一座は、ひとしきり、ざわついた。しかし、この人選は、個人の意志や、意見などは、はじめから、無視された。命令的なものであって、派遣に決定した者のなかから、不服をとなえることは許されなかった。

選に洩れた者のなかで、

「大将、わたしも、ぜひ、仲間に入れて下さい」

と、志願する男があった。

「駄目、駄目」と、大男の巨漢が、どなりつけた。「お前のような飲んだくれで、喧嘩ばかりは強くても、怠け者は資格がない。久松が入ると、仕事の段取りが狂うてしまう」

それから、浜尾市造の方をむいて、

「親分、どうやら、かたづきましたようで……」

「よし」

浜尾は、満足げに、うなずき、

「それでは、みんな、頼んだぞ。こういうときに、日ごろの恩をかえすのが、人間というものじゃ。明日が早いから、今夜は夜ふかしをしてはいかん。酒も、バクチも、やめて、早く寝れ。女買いにも行くな。あれが、一番、翌日の仕事にこたえる」

「女房とも、いけませんか」

そういう者があって、一座は、どっと、笑った。

「女房とでもわるいが、まかりちがって、喧嘩になれば、別れになるかも知れんから、すこしなら、よろしい」

また、隠微（いんび）な笑いが流れた。

「そんなら」と、助役が、「明朝は、三時に起す。四時、浜に集合。ええな？」

「はあい」と、何人かが答えた。

「玉井」

「はい」

座の後方にいた金五郎は、そう答えて、膝立ちした。

「お前、新米じゃが、特別に、明日の組に入れてやった。ありがとう思え。それで、ちょっと、相談があるけ、後（あと）に残ってくれ」

「なんごとですか」

「それは、後で話す」

「これから、友だちと、活動写真を見に行く約束しとるんですが……」

「いかん、いかん。夜ふかしすんなと、たった今、いうたばっかりじゃないか。残れ」

「はあ」

しかたなく、頭をかいて、金五郎は、また、一座の中に沈んだ。

解散が宣せられて、仲仕たちは、どやどやと、散って行っ

た。幹部の五六人と、金五郎とが残った。
風師山のいただきをわたる風は、一層、強くなるようである。十夜ほどの月が、山の肩に出ている。ぼうと、カサをかぶって霞み、円光のような、うすい七色の虹が美しい。
三々五々、黒い影になって、仲仕たちは帰って行く。そのなかに、谷口林助と、マンも、まじっていた。肩をならべて歩きながら、兄妹は、口をきかなかった。足どりも、重い。
背後で、プッ、プウッ、と、ラッパの音が起った。提灯をつけた一台の人力車が、景気よく、横を走りすぎて行った。
「兄(あに)さん、親方さんじゃないけ？」
「そうよ、これから、オメカケさんのところに行きんさるとよ」
二人は、また、黙って歩いた。
運河に添って行くと、遠くに、長屋の灯が見えて来た。誰か、井戸端で、洗濯をしている。
「兄さん」
なにか考えながら、重い足どりで歩いていたマンが、顔をあげた。
「あン？」
「女って、損ねえ」
「なにが、損か」
「はじめから、男とは段ちがいに、定められてしもうとる。なんでも、下廻りばっかりで……」
「そら、しかたがないわ。昔から、そうなっとるんじゃから」
「なぜ、そうなっとるの？　それが、あたし、おかしいのよ。いいえ、はがいいのよ。仲仕だって、そうでしょ。男が一人前とるのに、女は六分、そりゃあ、女は男ほどの仕事はできんかも知れんけど、男の中にだって、女の半分もできん人があるんじゃけ。それでも、賃銀は定められたとおり。不公平やわ」
「そんなこと、いうたって、通りゃせん」
「それが、はがいいのよ。まちがったことでもなんでも、そのまま平気で押し通す――それが、男の権利なの？」
「権利ちゅうわけでもないが……」
「権利と思うとるのね。親方さんだっても、そうやわ。ちゃんとごりょんさんがあんなさるとに、オメカケさんを囲うて、さっきも、人力で乗りこみなさる。メカケの一人二人持つのは、男の甲斐性というて、メカケを持たぬ者が、かえって、馬鹿にされる。そんなことが、当りまえみたいに通るのは、まちがいよ」
「まちがいというてみても、世の中のことはなあ……」
「ふウン、兄さんも、金でもできたら、二号を持ちたい口ね」
「馬鹿なこと、いうな」
林助は、妹の鋭鋒が自分にむいて来たので、うろたえた。
「どうかしらん？……兄さんが、義姉(ねえ)さんをいつもいじめて、毎日、打(ぶ)っとるの、あたし、腹が立ってたまらんわ。義姉さんも義姉さん、それが当りまえみたいに、ただ、メソメソ泣いて、あやまっとるのだもん。あたしなら、承知せんのじゃけど……」
「お前のような女を女房にした男は、命がけじゃのう」
「そんなことないわよ。理不尽なことには、泣き寝入りせんだけよ」

広島の山奥から、兄を頼って来て以来、十ヶ月ほどになるので、マンの言葉にも、故郷の訛りがいくらか抜けていた。
長屋の灯が近づく。七色の虹のなかにある月が、しだいに、雲の厚味で、ぼやける。
「おマン」
「はい」
「お前、玉井金五郎という男を、どう思う？」
「どう思う、って、なんとも思わんわ、男っていうのは、誰も彼もおんなじ、みんな、きらいよ」
「あの男、癪にさわる。このごろ来たばっかりなのに、俺よりも、三分も余計に取りやがる。おまけに、今夜も、残されよったが……」
マンは、ぶつぶつとぼやく兄の横顔を、ちらと見た。その眸（まなざし）には、軽侮のいろがあった。
「明日は、また、喧嘩か、畜生」
林助は、やけのような声を出す。
長屋に帰った。

一番鶏（どり）が鳴く。まだ暗い午前三時の空気を、羽ばたきの音がゆるがせる。提灯をつけた大男が、長屋のせまい路地を走るように過ぎ、一軒々々、戸をたたいて、起して廻る。
「時間ぞ、時間ぞう」
静かであった長屋が、急に、ざわめきはじめる。戸をあける音、水をくむ音、火をおこす音、どなる声、走る足音。
向こう鉢巻をした助役（ボーシン）の巨漢は、一軒の戸口の前に来て、急に、顔色を変えた。
「なんてや、それ、ほんとか？」
喪心せんばかりに、狼狽した声で、喚（わめ）いた。
「ほんとです」
寝ぼけ眼の男が、今にも叩かれはせぬかと、もう首をちぢめて、おどおどと答えた。
「畜生奴、尻（けつ）割りやがったか」
助役は、呻（うめ）いた。
「昨夜は一緒に寝たんです。たしかに、六人、蒲団をしいて、蚊帳（かや）に入りました。それなのに、今、ボーシンさんに起されたら、わたし一人しか、いないんで……」
「間抜け奴」
予期していたとおり、鉄の八ツ手のような平手が、風をおこして飛んで来た。病身らしい中年仲仕は、将棋の駒のように、わけなく倒れた。
「五人も、ずらかるのに気づかんなんて、貴様は、鉛か。……どうも、昨夜（ゆんべ）、玉井の様子がおかしいと思うた」
助役は、ばりばりと、歯がみをした。
独身者ばかり、六人が、この部屋にいるのだった。六畳、四畳半、それに、台所がついていて、男の手で自炊をしている。この六人のうち、三人が、昨夜、指名されていた。玉井金五郎も、その一人であったが、助役が手筈どおり、起しに来てみると、六人のうち、五人の姿が見えないのである。
（玉井の奴が、そそのかして、逃げやがったにちがいない）
前夜、金五郎を残して、「明日、喧嘩になったら、お前が指揮をとれ」と命じたところ、金五郎は、「わたしは、喧嘩は下手ですから」といって、どうしても承引しなかった。のみな

らず、「喧嘩は嫌いですから、喧嘩になったら、逃げだします」などとも、いったのである。それでも、現場に行くことだけは、堅く約束したのであった。

助役は狼狽の極に達した。とっさに、人選を変更して、昨夜、指名されなかった仲仕を、三人、別に起した。

マンは、兄林助の家の一部屋を借りていた。襖で仕切られた四畳半であるが、女一人には充分だ。おまけに、狭くとも、自分一人の部屋を持つことは、生まれてはじめてである。

仕事着をつけ、林助と二人、集会場である桟橋の浜に急いだ。

「おマン、玉井の奴が、ケツ割ったらしいぞ」

「ふウン」

マンは、問題にせぬ顔で答えたが、その顔に、かすかに、なにかの動揺が感じられた。

集合場で、人影と提灯とがちらつき、しきりに、けたたましく、喚いている。

「おうい、急げ、急げ。大村組の伝馬(てんま)船は、もう、漕ぎだしとるぞう。出遅れたぞう。……急げえ、走れえ」

敵に、機先を制せられた模様である。

「早く乗れ、早く乗れ」

巨漢の助役は、もう、狂人のようだ。彼の作戦としては、四時に集合して漕ぎだせば、大村組の鼻をあかすことができると、胸算していた。ところが、浜に来てみると、すでに、大村組の伝馬船が、人間と道具とを満載して、暗い海のうえを、インド丸に向かって漕いで行くのが見えたのである。

「なに愚図々々しとるか。間抜けども」

間抜けは自分であった、と、この男も感じていたので、その飛ばちりを、怒号と罵倒とで、部下たちにぶっつけた。

キイ、キイ、と、敵の伝馬船の櫓の音が、嘲けるように、海上から伝わって来る。風のために波だっている、暗黒の関門海峡に、数隻の汽船が浮いている。目じるしとして、特に、緑の舷燈をともしているのが、インド丸らしい。

やっと、仲仕たちが、伝馬船に乗ってしまったとき、道具番の男が血相かえて、飛んで来た。

「ボーシン、大きな大事(おおごと)です」

「どうした？」

「道具を積んだ小伝馬が、見あたらんです」

「なにや？」

助役は、バネ仕掛のように、跳躍して、道具番の肩をつかんだ。夜ではっきりしないけれども、彼の顔から血の気が引き、ふるえだすのがわかった。腰の抜ける思いである。

「よく探したか」

「いくら探しても、見えません」

「うウム」

唸(うな)った。手ちがいばかりで、ことごとく目算の外れた、単純な助役の頭脳に、反応的に浮かんで来る対応策は、暴力以外にはない。逆上が、彼に歪曲された勇気をあたえる。

「おい、みんな」

と、彼は、ほとんど、凜然として、部下たちを睥睨(へいげい)した。

「大村組と決戦するときが来たぞ。船は出し遅れたし、大切な道具は、どこかに行ってしもうた。敵に盗まれたのかも知れん。もう、仕事にはならん。こうなったら、大村組の現場

に乗りつけて邪魔してやらにゃ、腹がいえん。みんな、しっかりしろ。がんばれ。……よし、漕ぎだせ」
三挺の櫓を立てて、伝馬船は、岸を離れた。異様な昏迷と興奮とが、沖仲仕たちを緊迫させていた。暗い波のうえを、船は、ぐんぐんと、インド丸へ、漕ぎ進んで行った。
「おマン、危いから、後にひっこんどれよ」
兄の言葉に、マンは、答えなかった。
「右舷に、つけろ」
インド丸が近づくと、助役が叫んだ。右舷は、大村組の持場である。
ところが、左舷で、奇妙なことが起っていた。焚料(バンカ)積込みの口のある舷側に、数枚の棚が吊られてある。そのうえに、四五人の人影が立っている。つまり、いつの間にか、仕事の準備がちゃんと出来ていて、伝馬船が着きさえすれば、すぐに、仕事にかかれるようになっているのであった。
「早う来うい。段取りはすんどるぞう」
そう叫びながら、インド丸の甲板から、カンテラを高く振っているのは、玉井金五郎であった。
それを認めた助役は、伝馬船の舳(へさき)につっ立ちあがった。狐にでも化かされたような、ぽかんとした顔つきである。
「早う、船を着けえ。すぐに、仕事にかかれえ」
金五郎は、なおも、どなっている。
「そうか」
助役は、首が落ちたかと思われるほど、強く、うなずいた。事態の真実を、やっと、理解したのである。
「よし、船を控え廻せ。左舷に、変更じゃ」
右舷に向かっていた伝馬船は、方角を急転回した。三挺の櫓に、にわかに、活気が満ちわたり、船は、全速力で、インド丸へ接近して行った。
「やっぱ、金さんはちがうわ」
タカという女仲仕が、うっとりとした眼つきになって、呟いた。
「ヘン」と、一人の仲仕が、「何十ぺん、肱鉄食うても、あきらめられんとみえるのう」
「いつか、わたしのもんにして見せるよ」
「来年三月かい？」
その言葉に、船の中に、明かるい笑い声が起った。喧嘩をしなくてもすんだ、という安堵感が、仲仕たちの憂鬱と緊張とを、解いていた。
「おい、タカさん、おれに、五十銭、奮発せえ。金さんを取りもってやるぞ」
艫(とも)の方で、からかう者があって、げらげらと、また、笑いが流れた。
マンひとりだけが、この笑いに同調せず、インド丸の甲板に立っている金五郎の姿を、またたきもせず、凝視している。
巨大な暗黒の中に、カンテラの光で浮き出ている金五郎の半纏姿は、マンの眼に、なにか、神々しいものさえ感じさせて、映った。いっぱいに瞠(みは)られた眼球に、潮風がしみて痛くなり、やっと、マンは、一つ、瞬きをした。
二千二百トンのインド丸の舷側に、石炭を満載した八十トン艀(はしけ)がつながれている。伝馬船をその艀に漕ぎよせると、仲仕たちは、ばらばらッと、飛びあがった。

「玉井、おおきに」
巨漢の助役は、艀の舷に立って、下から、インド丸の甲板に、声をかけた。
「ボーシン、そんなこた、どうでもええです。すぐ、持場について下さい。まだ、大村組は、棚を吊りよるところです」
「よし来た。……みんな、すぐ、かかれ」
仲仕たちは、敏捷に、あらかじめ定められた自分の部署についた。
金五郎は、甲板から、ロープを伝って降りて来た。六段に吊られてある棚の三段目に立った。微笑をふくんで、
「そら来い、そら来い」
と、調子をとるように、両手を上げ下げした。
汽船の舷側に、風変りな雛壇が作られたような具合である。長さ一間、幅は下に行くほど広くなる板が、ロープで、六段に吊られ、一段に二人ずつ、美しい雛のかわりに、ごつい沖仲仕が立っている。
艀の中にいる、「入れ鍬」と称する仲仕たちが、直径一尺三寸ほどの丸籠に、雁爪で、石炭を入れる。それが、一つずつ、棚立ちの仲仕によって、敏速に、下から上へ押しあげられる。天狗とり荷役である。
活溌な作業が、開始された。
「玉井、たまげたぞう」
金五郎の上段に立っている助役が、籠を送りながら、話しかけた。
「すみません」
「すまんこたない。殊勲甲じゃ。それでも、一時は、どうなることかと思うたわい」
「ボーシンに、話して行く間がなかったもんですから……」
「勘弁してくれ。さっきまでは、お前がケツ割ったもんとばっかり、思うちょった。浜に出てみりゃ、道具を積んだ小伝馬は居らんし……」
「今朝、眼がさめてから、わたしも気づいたんです。一番鶏の鳴くのをきいて、――こりゃ、いかん。先に行って、段取りだけでもしとかにゃ、大村組に負ける。……そう思うたもんで、あわてて、同じ部屋の者だけ、四人起して、二時ごろ、家を出たんです」
「それは、おれも気づかんじゃった。これで、もう、こっちの勝ちじゃ。親分に話して、お前を取り立ててもらうようにしてやるぞ」
「いえ、そんなこた、ええです」
殺風景な雛段を伝って、石炭を満たした丸籠が、ぐんぐん上がる。二列のエスカレーターのようである。甲板に達すると、移し方の手で、焚料口に、石炭が投げこまれ、空籠が艀の中に投げ落される。この迅速な循環によって、みるみるうちに、艀の中の石炭が減って行く。
マンは、「入れ鍬」の組にいた。女の力では、棚立ちはできなかった。籠は、バスケットが訛って、バイスケと呼ばれている。マンは、同僚がバイスケ一杯満たす間に、かならず、三杯、入れた。正確な機械のようである。
「そら来い、そら来い」
拍子をとりながら、金五郎は、上から、艀の中を見下していた。その眼は、マンに、釘づけされている。

「みんな、がんばれ。船を傾けてしまえ」
助役は、もう、勝利の確信に有頂天だ。図に乗って、号令を降す。
両舷から、焚料炭を積みこむのであるから、平衡が破れると、船は傾斜してしまう。それは、船では困るので、傾けないように懇請するのであるが、ただ、意地と張りとの競争意識に燃えている仲仕たちは、船の迷惑など、そっちのけだ。まして、宿敵、大村組との、浮沈を賭した荷役であるから、浜尾組は、日ごろの倍以上の馬力をかけた。
「おいおい、頼むから、船を傾けんでくれ」
機関長が出て来て、どなったけれども、しだいに、インド丸は、左舷へ向かって傾きはじめた。
「もっと、寝かせろ」
助役は、得意満面だ。
傾くと、傾いた側は、棚が浅くなって、仕事がやりやすくなる。逆に、傾けられた側は、舷が高くなって、さらに荷役が遅れる。
右舷の大村組も、躍起になっていたが、すでに勝敗は決していた。
東の空が、かすかに、白みはじめたころ、甲板のうえに、大村組の仲仕たちが、全員、飛びあがって来た。それを見た浜尾組の巨漢助役は、「生意気な」と叫んで、部下たちを、甲板に乗りこませた。
「喧嘩すんな。喧嘩すんな」
金五郎が、必死に叫んだけれども、遅かった。
どっちから、かかったともなく、たちまち、乱闘になっていた。
浜尾組と大村組との印半纏が入りみだれ、集団となった人間と声とが、インド丸の甲板上を、滑稽な交響楽になって、もつれあう。武器は、雁爪、スコップ、六尺棒、バイスケ、素手など。怒号と、悲鳴と、笑い声とが、暁の港の空気をふるわせて、交錯した。
「喧嘩やめえ。喧嘩やめえ」
金五郎は、カンテラをぶら下げて、なおも、そう叫びながら、逃げまわった。
幾度か、大村組の者から、六尺棒や、雁爪で追っかけられたが、すばやく、船橋や、煙突のかげに隠れた。
ところが、その何度目かに、送風パイプの根にしゃがんでいると、背後から、したたかに、頭のてっぺんを殴られた。スコップを平にして打ち降したらしく、うすい鉄板が、ピーンと鳴り、金五郎は、くらくらッと、眼まいがして、そこへ、昏倒した。
誰かに、顔に、冷たい水を吹きかけられて、蘇生した。仰向けになったまま、ブルブルッと頭を振り、濡れた顔を手でなでた。くるりと、はね起きた。
金五郎の顔に、口にふくんだ水を吹きつけたマンは、パイプのかげに潜んだので、金五郎の眼には、とまらなかった。
「糞う」
怒りの虫が、金五郎を、飛びあがらせた。張りのある大きな眼が、ギラギラ光った。
金五郎は、プッ、プッ、と、両手のたなごころに、唾をはきこんだ。それから、親指を中に包んで、拳をにぎりしめ、

猛然と、修羅場の中心に、おどりこんだ。
インド丸の船長をはじめ、船員たちが、出て来た。
「静まれ、静まれ」
必死に喚いたり、止めに入ったりしてみたが、効目(ききめ)はなかった。
金五郎は、あばれた。持って生まれた馬鹿力と、糞度胸と、小さいときから、ターザンのように、山から山、木から木を飛びまわった敏捷さと、いくらか囓(かじ)った柔道と、草角力の大関までのぼったことのある、四十八手の裏表と――悲しみに似た、いいようもない憤りに駆りたてられて、金五郎は、ぶっつかる敵を、片はしから、甲板に転がした。何人かを、高い舷から、海に投げこんだ。
大男の助役が、大村組の、これも劣らぬ巨大漢に組みしかれて、咽喉をしめつけられている。三角眼を白黒させ、今にも、息が切れそうな、不景気な声を出している。
金五郎は、それを見たが、助ける気持は起らなかった。煙突にもたれ、唇を噛み、汗をふいた。
一人の敵が、そっと、金五郎に忍びよった。雁爪をふるって、襲いかかった。金五郎は、気づかなかった。六つの刃のある雁爪を打ちかけられたら、命にかかわったかも知れない。しかし、その男は、襲撃の寸前に、ワイヤにつまずいて、どさッと、金五郎の足元に倒れた。マンが、突き飛ばしたのである。
金五郎は、その男の襟首をつかむと、舷側まで引きずって行って、海中に、投入した。
金五郎は、マンを睨んだ。
「女の癖に、出しゃばるな」
そう叫ぶと、くるりと廻転して、また、乱戦の中に、飛びこんで行った。
両軍入りみだれる戦場に、突然、太い水の鞭が降って来た。水夫長(ボースン)が、ポンプの水を、マストの梯子の上から、浴せはじめたのである。強い水しぶきが、喧嘩男どもを、ピシピシと、たたいた。
水上警察署のランチが、汽笛を鳴らしながら、近づいて来た。
「サツが来たぞう」
誰かが、叫んだ。
その声は、まるで、魔法の箒に似ていた。びしょ濡れになって、組んずほつれつしていた両組の仲仕たちは、その一声で、さっと、甲板から掃きだされた。一人のこらず、消えた。
見る間に、仲仕たちは、伝馬船に乗り移った。舷側に吊られていた棚は、最上部から切断された。機敏に、道具と、怪我人とを収容してしまうと、二隻の伝馬船は、インド丸の舷側を離れた。全速力で、陸に向かって、漕ぎだした。
「逃げるのは、早うて、上手じゃのう」
「サツばっかりは、苦手じゃ」
「これぐらい、なんでも、パッパと、やるとええけんどな」
あまりにも、迅速で、整然とした退却ぶりが、われながら、おかしく、仲仕たちは笑いころげた。これも、熟練の結果である。というのは、港では、この種の喧嘩が、日常茶飯事のごとくになっていることを、証明するものに外ならなかった。
負傷者だけが、仏頂面をしている。喧嘩のはげしかった割

りに、大きな怪我人はなかった。手拭や、シャツを破って、応急手当をほどこしている。巨漢の助役は、青い顔をして、船底に、横たわっているが、死んだように、元気がない。

壇ノ浦の方角にあたる東の空に、太陽がのぼって来た。真紅である。昨夜からのどんよりとした雲の中に、くっきりと、輪郭を見せている。

舳(へさき)に腰をおろしている金五郎は、むっつりした顔で、膝をかかえていた。スコップでどやされた脳天がずきずきし、身体の節々が痛い。金五郎は、無性に、腹が立ってたまらない。

（仕事に勝ちさえすれば、喧嘩をせずにすむと思ったので、先に段取りしに行ったのに、勝っても、負けても、喧嘩か）

馬鹿々々しくてならなかった。

その金五郎の眼に、すぐ横にいる谷口マンの姿が映った。

マンは、麻の煙草入れから、キザミをとりだし、短い煙管で、煙草を吸っている。マッチで、雁首に火をつける。吸口を唇にはさんで、軽く吸うと、ポウッと、火が大きく明かるくなる。すこし胸を張り、フウッ、と、煙をはきだす。いかにも、おいしそうである。

金五郎は、珍しい気持で、

「おマンさん」と、呼びかけた。

「はい」

「あんた、煙草のみじゃな？」

その言葉に、マンは、ふいに、赤らんだ。

「わたしに、一服」

金五郎にそういわれて、マンは煙管と煙草入れとを、黙ってさしだした。

なれぬ手つきで、キザミをつめ、火をつけて、一口吸った金五郎は、はげしく、せきこんだ。その眼に、真紅の太陽が、くるくると、廻転した。咳が、脳天の傷にこたえる。涙が出た。

夫婦

真昼間なのに、長屋は、ひっそり閑と、静かだ。今日は、仕事は休みだが、どの家にも、誰もいない。鶏が、二三羽、餌をつついている。

長屋の中央にある井戸端で、かんかんと照りつける秋の陽を浴びながら、マンと、兄林助の女房チヱとが、二人、話をしている。

インド丸荷役の勝利は、浜尾市造をすこぶる満足させた。喧嘩の方は、どっちが勝ったかわからないけれども、大村組から仕掛けて来たのであるから、浜尾組にお咎めはない。浮沈の瀬戸際を乗りきることのできた浜尾は、大よろこびだ。今日は、子分の全員を引き具して、遠足に出かけた。今ごろは、壇ノ浦を望む和布利神社の境内で、祝いの酒盛が、たけなわの時分である。

チヱは、盥を前にし、大儀そうな手つきで、洗濯に余念がない。背中に、二つになる男の赤ん坊を帯でくくりつけているが、腹の方は、もう臨月で、動くたびに息苦しいらしい。ときどき、肩で大きな吐息をつく。

五ツになる上の女の子は、マンが、バケツの中で、猫を洗っているのを、心配そうな顔つきで、のぞきこんでいる。泥溝に落ちこんだ猫は、マンの自由にされながら、おとなしい。しかし、こまかい毛にしみこんだ青黒い泥土は、石鹸でこするのに、なかなか落ちない。ひどく臭い。

「叔母ちゃん、猫、死なん？」

女の子は、涙ぐんでいる。

「安心なさい。死にはせんよ。でも、もう、ちょっと、気づかなんだら、仏さまになっとったかも知れんねえ」

「よかったねえ」

「ほんとに、よかったよ」

チヱは、笑いながら、

「おマンさんたら、しんから、猫好きね」

「動物なら、なんでも、好きですのよ」

「猫、何匹になった？」

「八匹。でも、ミイが、また、腹が太いですけ、近いうち、三匹ほど増えますわ」

「ウフフ……」チヱは、妙にさびしげな含み笑いをして、「増えるのは、子供だけね。猫も、人間も。……家、これから生まれる猫の子も、人間の子も入れたら、十七人の大家族よ」

「ミイの腹、この前より、ずっと大きいようにあるけ、五匹くらい、産みはせんかしらん？」

「あたしも、双生児かも知れないんだって……」

「まあ」

二人は、顔見あわせたが、どちらも、今度は笑わなかった。奇妙な沈黙が、流れた。

「義姉さん」

マンの表情は、真剣になっていた。

「なあに？」

「あたし、不思議でたまらんことがあるんだけど……」

「どんなこと？」

「こんなこと、いうの、ごめんなさい。……ねえさんたち夫

婦のことです」
「不思議なこと、って？」
「あたし、広島から出て来て、ずっと世話になっとって、こんなこというと、怒られるかも知れんけど、……兄さんと、ねえさん、毎日のように、喧嘩して、……それも、いつも、あんなにはげしい夫婦喧嘩しとるのに、……どうして、別れんで居るんじゃろうか、と……？」
　チヱは、眼を落して、洗濯する手をつづけた。痩せた長顔に、油気のないほつれ毛が、たれ下って、かすかな風にゆらいでいる。
　マンは、洗い終った猫を、前だれの中に包んで抱き、
「きっと、今夜も、喧嘩でしょ。いつも、兄さん、外で飲んで帰ると、ベロンベロンで、ねえさんをいじめる。あばれる。障子や襖を破る。茶碗を割る。ランプのホヤを割る。そして、朝になったら、喧嘩でくずした物を修繕したり、新しく買ったり。それを、また、こわす。また、買う。きりがありゃせん。まるで、夫婦喧嘩のつくろいをするために、働いとるみたいに見えるわ。ところが、そんなに、仲が悪いくせに、別れようともせんし、……子供は、どんどん、生まれるし……」
　チヱは顔をあげて、笑いながら、
「おマンさんは、まだ、若いわ。夫婦って、奇妙なものよ。今に、わかるわ」
「そうかしら？……あたし、もし、亭主を持つことがあっても、兄さんのような横暴、絶対、許さんわ」
「おマンさんなら、どうなさる？」
「あたしなら、とっくに、別れます。……ねえさんは、我慢づよいのね。今年の春、兄さんが、変な女にかかりあったときだって、別れようとせんのじゃもん。あたしは、女房以外に女を作る男なんて、承知せんですよ」
「おマンさんに、三国一のええ婿さんが出来るように、祈るわ」
　チヱは、若いマンの世間知らずを、いたわるような、しんみりした語調で、いった。それは、羨む気持も手つだっていたと同時に、嘗ては、自分もそういう一本気であった、娘時代をふりかえる哀愁の思いでもあった。
（しかし）と、チヱは、思う。（マンさんは、わたしたちと、どこか違うところがある。自分たちが、生活の圧力と習俗とに、わけなく屈してしまったようには、マンさんは屈しないかも知れない。このひとは、なにか、強いものを持っている）
　猫は、マンの前だれの中で、眠ったらしい。ゴロゴロと、咽喉が鳴っている。
　マンは、遠いところを見る眼になった。
「あたし、だいぶん、当てが狂ったわ。林助兄さんが、何度も手紙くれるんで、思いきって、田舎を飛びだして来たのに、こんなことでは、いつ、ブラジルに行けるのか、わかりゃせん。貯金をして、旅費を作って、アメリカ行の船を見つけて、と思うたのに、……仲仕の賃金なんて安いし、それを辛抱して、ようやく、すこし蓄まると、兄さんから借りられるし……」
「すみません」
「いいえ、ねえさんの罪じゃありませんわ。兄さんが、甲斐性なしだから……」

井戸端の花崗岩(みかげいし)に腰をおろすと、マンは、ふところから、煙草入れをとりだした。放心したような顔つきで、キザミを煙管につめ、マッチで火をつけた。一服、吸って、

「ああ、おいしい」

と、思わず、呟いた。

「のみぶりの、ええこと」

「まあ、ねえさん」

はにかみながら、マンが、二服目をつめようとしていると、路地の奥に、下駄の音が聞えた。

赤い顔をした、着流しの玉井金五郎が、折詰をぶらさげて、近づいて来た。

マンは、狼狽したが煙草をかくす間がなかった。（かまうものか）と、不貞腐れた。二服目をつめた煙管を、口にくわえて、マッチをすろうとした。

「待ちなさい。待ちなさい」

傍に来た金五郎が、軸木を持ったマンの右手を、おさえた。折詰を、井桁に置いて、

「わたしが、火をつけて進ぜる」

にこにこと、笑いながら、腹巻をさぐって、妙なものを取りだした。

一寸五分と一寸ほどの、平べたい矩形の、金属製の小箱である。銀色に光っているが、それはメッキらしい。どこに仕掛けがあるのか親指でイボを押すと、パチッと蓋があいた。同時に、あらわれた中のしんに、火がともっている。石油くさい。

「さあ」

機械の火をさしだされて、マンは、鼓動を感じながら、くわえたまま、煙管の雁首を近づけた。火を吸いつけてから、かあッと、顔が、真赤に燃えた。耳まで、赤くなった。

「おマンさん、これ、懐中ランプというもんじゃ。アメリカ通いの汽船で、事務長(パーサ)から貰うたんじゃが、あんたにあげよう。わたしは、煙草をのまんけに、用がない」

「いいえ、要らんです」

「遠慮せんで、貰うときなさい」

と、チヱがいった。

「実をいうと」と、金五郎は、快活な調子で、「わたしは、煙草をふかす女なんて、好きじゃない。じゃけど、林助さんから、あんたが、どうして煙草のみになったか、ちゅう話を聞かされて、急に、あんたが好きになった。それで、この懐中ランプを、あんたにあげる気になったんじゃ」

マンは、兄林助が、どんな風に話したのか、と、気がかりになった。

煙草好きであった父善助のため、専売局の眼をかすめてまで、煙草葉を集めて、キザミを作ってやった。マンは、父にのませるために、まず、自分が火を吸いつけてから、父に煙管をわたした。それが習慣になると、はじめは、苦くて、からくて、むせかえっていたが、しだいに熟練するとともに、いつか、煙草に味が出て来た。すると、義務でやっていた吸いつけが、後には、楽しみになるようになった。

ところが、専売局から発見されて、罰金を申しつけられると、父善助は、それきり、ふっつりと、煙草を断(た)ってしまった。しかし、そのときには、マンの方は、もう、味が忘れら

れなくなっていたのである。
（そういう風に、兄さんは、ちゃんと、金五郎さんに、話しただろうか？）
マンは、あやふやな兄が不安でたまらない。しかし、もう、ためらわず、
「そんなら、頂戴します」
と、その珍しい点火器を受けとった。
「玉井さん、うちのは、どうしとりましたか」
チヱが、きいた。
「まあだ、みんな、大騒ぎの最中ですよ。林助さんも、ステテコを踊ったりして、上機嫌でしたよ。わたし一人、なんだか、馬鹿くさくなって、抜けて来ました。浜尾の親方がつまらんことばっかりいうし、……おマンさんにも、ちょっと話したいことが、あったもんじゃけ……」
「わたし、帰るわ。どうぞ、二人で、ゆっくり、お話しなさい」
「いや、おかみさん、そんな、秘密の話じゃない」
金五郎は、あわてて、止めたけれども、チヱは、洗濯物を丸め、女の子の手を引いて、長屋の奥へ去って行った。
金五郎は、苦笑したが、
「やっぱり、居らん方がええ」
そういって、マンの方に、向きなおった。
マンは、間隔をおいて、堅い姿勢で、つっ立った。
（変な真似をしたら、承知せん）
そう、思っていた。
「お話、承ります」
「大層、しゃちこばっとるなあ。……ま、ええわ。ざっくばらんに話そう。……おマンさん、あんた、この浜尾組に、いつまでも、いなさる気かね？」
唐突すぎて、返事が出なかった。
「林助さんから、あんたが、去年の暮近くに、浜尾組に来なさったこと、聞いた。もう、十ヶ月ほどになるわけじゃね。あんたの方が、ここでは、先輩じゃ。わたしは、この夏に来たばっかりの新米にすぎん。しかし、わたしは、もうこの浜尾組に居ることが、いやになった。はっきりいうても、ええ。わたしは、浜尾親方に、愛想がつきたんじゃ」
ぽつりぽつりと、重い調子で語る金五郎の顔を、マンは、瞬きもせず、見ていた。
「わたしは、仕事が好きじゃし、なんでも、ええ加減にすますことは嫌いじゃから、どんなつまらん仕事でも、一所懸命、やった。それで、来てから間もなく、一人五分くれるようになって、それはありがたいと思うたが、その後、じっと見ると、どうも、浜尾親方のやりかたが、万事、気に食わん。これは、長居するところじゃない、と思うとるうちに、今度のインド丸事件が起った。それで、きっぱり、見切りをつけたんじゃ」
マンは、胸をしめつけられる思いだった。
「荷役に負けたら、喧嘩をふっかけろ、なんて、わたしはあきれたよ。ところが、どうにか、浜尾組の顔が立ったもんじゃけ、今度は、わたしを助ボーシンに取りたててやる、というんじゃ。結構です、というて断ったら――お前の手柄に対して、褒美をやる。三人居るメカケを一人やる。……そんな

ことを、いう。それも断ったら――なんでも、いえ。なんでも、聞いてやる。……親方が、そういうもんじゃけ――暇を下さい。……そういうたら、それは許さん、というんじゃ。でも、わたしは、もう、心にきめた。明日にでも、この組を出る。……わたしの気持、わかってくれるかしらん？」
「よく、わかります」
「それで、……おマンさん、あんたも、……あんたのような、仕事の出来るひとも、……こんな組に居って、腐ってしまうのは、惜しいと思うて、……出たら、どうかと……」
すると、このとき、長屋の入口が、にわかに、騒々しくなった。
がやがやとなだれこむように帰って来た仲仕たちの中に、寝かされた人間をのせた戸板が、幾つもある。異様な恐怖の表情が、どの顔にも、満ちていた。誰も彼も、酔いなど醒めはてた顔である。
長屋は、瞬時に、大混乱におちいった。
森新之助が、血相変えて、自分の家の方へ駈けだして行った。跣足（はだし）になり、緒の切れた下駄は、両手につかんでいる。
井戸端の横を通りさま、
「玉井、その折詰、食べなんな。死ぬぞ」
そう叫んで、走り去った。
戸板に乗せられて、ぐったりとなった助役（ボーシン）が、五六人にかつがれて、やって来た。口辺に、ねばねばした黄色い粘液がまつわりつき、三角眼は白くなって、眉がつりあがっている。それでも、まだ、視力はあるとみえて、金五郎をみとめると、
「玉井、……仇を討ってくれ」
と、硬（こわ）ばった唇で、とぎれとぎれに、呟（つぶや）いた。
「どうしたんです？　ボーシン」
「やられた。……毒を盛られた。……大村の奴、喧嘩に負けやがったもんじゃけ、仕出し屋を抱えこんで、弁当に、毒を入れやがったんじゃ。……畜生」
マンは、おどろいた。
「シロ、シロ」
と、狂気のように、叫んだ。
金五郎と話をしている間に、マンの前だれを抜けだした猫が、井桁に置いてあった折詰を、下に引きずり落して、食べている。泥溝に落ちて、腹が減っていたとみえ、蓋をかき破って、イカのサシミ、焼き鯛、カマボコなどは、もう、あらかた、かたづけていた。
マンは、猫を抱きとり、折詰を、はげしく、蹴飛ばした。
金五郎も、さすがに、おどろいて、
「危いとこじゃったなあ。おマンさんにお土産のつもりで、わたしは、手をつけずに、ぶらさげて来たんじゃが……」
と、長大息した。
祝いの酒盛であったのに、突如、死の饗宴と化したのである。しかし、それは、助役がいったように、大村組の復讐ではなかった。単純な助役の頭脳では、そうとしか考えようがなかったらしい。彼は、自宅にかつぎこまれると、なおも、
「大村の悪党奴、……死んだら、幽霊になって、とり殺してやるぞ」
などと、喚（わめ）いていたが、医師の来るのを待たずに、息を引きとってしまった。

このとき、門司市全体を、暗黒の戦慄におとし入れた「上海コレラ」の猖獗は、浜尾組のみならず、すでに、市内の各所に、その兆候をあらわしていた。

朝は気持よく起きて、話をしていた人間が、昼すぎに、四五回、ビイビイと、口から黄色い粘液汁を吐いたと思うと、一時間も経たずに死んでしまう。大して腹痛もないのに、便所に行って、下痢をすると、もう動けなかった。死者が、続出した。疑似コレラか、真性コレラかを判断する暇さえなかった。そのはげしさは、言語に絶した。

浜尾組の長屋でも、三十人近くの患者が出たため、附近一帯、二百五十人ほどの者が、隔離された。周辺の人達は逃げてしまった。

張りめぐらされた縄の中に、金五郎も、マンも、残された。マンは、兄の林助が羅病したので、附ききりで、看病した。義姉のチヱと、子供たちとは、無理矢理に、隔離室に押しやった。

兄の枕許にいるマンの周囲で、八匹の猫が、一匹ずつ、死んで行った。

「チヱ、チヱ」

林助は、熱で真赤になりながら、囈言のように、妻の名を呼んだ。

「兄さん」

その声で、林助は眼をあける。妹の顔を見て、不審そうに、

「チヱは、どこに行った？」

「元気でいます。だけど、ここには、居らんわ」

「どうして、ここに居らん？　呼んで来い。つれて来てくれ」

「いいえ、いけません。ねえさんは、身重の大切な身体よ。病気がうつったら、大変です」

「馬鹿ぬかせ」

怒った林助は、憎悪の眼で、マンを睨んだ。起きあがろうとした。

「兄さん、……駄目よ」

「貴様、鬼か。おれが死にかかっとるのに、可愛い女房に逢わせんのか」

「いいえ、兄さん、死にはせん。今、逢ってはいけない」

「チヱもチヱじゃ。亭主を見殺しにして、知らん顔しとるなんて……」

林助は、ばりばりと歯を鳴らしたが、その眼から、ポロリ、ポロリと、太い涙があふれ落ちた。それから、がっくりとなって、痩せた顔を、すとんと枕から落した。虫の息である。

マンは、昏迷した。疑念と、狼狽とが、急に、マンを不安にした。

（どうしたら、よいのか？）

いろいろ苦労はしたつもりであったのに、こういう凄惨な人間の土壇場に、立ちあったことは、はじめてであった。強い心で割り切っていたのに、今、不可解な人間の魂の呻き声が、マンの人生観と、生活の規律とをゆるがせる。生命をも超えたものの声が、若いマンの胸をかきみだす。

連日連夜、夫婦喧嘩ばかりをくりかえしている林助とチヱ、そして、家庭内では、一種の暴君である兄が、死の床で、ただ、妻の名ばかり呼んでいる。病気を感染させてはならないという一心で、義姉を隔離したのに、マンを、鬼呼ばわりし

た。気が弱く、どこか、妹に気兼ねしていた兄としては、心底からの、最後の言葉であったかも知れない。
マンは、立ちあがった。
「兄さん」
呼んだが、返事がなかった。
胸のうえに、耳をつけてみた。かすかに、弱々しい鼓動が打っている。
マンは、薬缶(やかん)の水をふくむと、兄の顔に、プッと、吹きかけた。林助は、かすかに、眼をひらいた。顔は動かさず、横眼づかいに、じろりと、妹を見た。マンは、ぞっとした。
「兄さん、ねえさんを呼んで来るわ。それまで、死なないで……」
表に、飛びだした。
台所の片隅にある蜜柑箱に、六匹の猫の屍骸が入れてある。あとの二匹は、どこに行ったかわからない。それをちらと見たが、マンは、唇を噛んで、一散に、隔離室の方に、走った。
長屋中は、騒然としている。棺桶をたくさん積んだ車力が、二台、井戸端のところに止まっている。
そこで、玉井金五郎が、なにか、青い腕章をした市役所の役人と、声高に、いい争っていた。
「いやですよ」
と、金五郎は、役人から、握られていた腕を、ふり離した。
五十年配の、胡瓜(きゅうり)のような顔に、八字髭を生やした吏員は、横柄に、呶鳴った。
「そんなことをいっては、困るじゃないか。早く、死人を、棺桶に入れろ」
「いやなこと」
「いつまで経ったって、片づきはせん。早くせんと、お前も、コレラにかかって、死んでしまうぞ」
「コレラにかかったって、あんたのいうことは、聞かん。消毒したり、棺桶に入れたりするのは、市役所の仕事じゃないか。わたしは、市役所の使用人じゃないよ」
金五郎は、褌一つの素裸である。羅病した仲間を介抱するのに、着物を着ていては邪魔くさいので、脱いでしまったらしい。胸の厚い、たくましい筋骨の、肌理(きめ)のこまかい、まっ白な身体が、秋の陽に、まぶしく、光っているようである。胸毛が、濃い。
そこへ、
「玉井、どしたんじゃ？」
と、浜尾市造が、やって来た。火事装束をして、黒いマスクをかけている。
役人が、横から、
「これは、浜尾君、大変だね。なにね、この男、僕が、死人を棺に入れろといったのに、どうしても、いうことを聞かないんだよ」
「そうですか。……玉井、役所も手が足らんらしいから、すまんけど、お前、世話ついでに、ひとつ、死人を棺桶に入れてやってくれんか」
「わかりました。入れます。親方がいうのなら、いつでも入れますよ。死人を舐(ねぶ)れ、といわれや、ねぶります。料理(つく)って食え、といわれても、いわれたとおりします。役人の命令なんて、誰がきくもんか。権柄(けんぺい)ずくなら、いやなこってす。…

…なあ、新公」
と、かたわらの森新之助を、かえりみた。
「そうじゃ、そうじゃ」
新之助も、こっくりこっくりをして、八字髭の役人に、ペロリと、舌を出した。
そこまで、見ていて、マンは、隔離室の方へ、また、走った。
監視に立っている警官に、わけを話して、チヱを出して貰った。女の子と、赤ン坊とは巡査はどうしても許可しなかった。二人は、長屋の方へ急いだ。
臨月腹をかかえているチヱは、肩と腹とではげしい息をしながら、
「神さま、林助さんを助けて、……林助さんを殺さないで……」
と、夢中のように、叫びつづけていた。
マンは、走りながらも、
(あたしが神さまだったら、兄さんを殺しはしない)
と、自分も、いつか、祈る気持になっていた。
一軒の長屋の前に来ると、マンは、ひとりでに、足が止まった。
部屋の中に、真裸の金五郎がいる。彼は、蒲団のうえに馬乗りになっているが、その下には、女仲仕のタカが、
「苦しい。……苦しい……」
と、咽喉の裂けるような声で、喚いている。そのたびに、口から、黄色い唾が飛ぶ。
「タカさん、辛抱せえ。じっとしとれ、あばれたら、いかん。もう、じき、癒るぞ」
金五郎は、子供をさとすように、いう。
「金さん」
急に、静まったタカは、下から、金五郎の顔を見あげた。
「うん?」
「わたし、うれしい」
「どうした?」
「わたし、……金さんのおかみさんに、なるつもりだったよ。……こうやって、金さんに介抱されて、死ぬの、うれしいわ」
「そんな気の弱いこと、いいなさんな。死にはせん。死にはせん」
「わたし、もう、……死んでも、ええ」
「死ぬな。死ぬな」
「しっかり、抱いて……」
「これで、ええか」
金五郎は、蒲団のうえから、タカをくるむようにして、抱きしめた。
マンは、物かげに潜んでいたが、これ以上、見るに耐えなかった。また、走った。マンが立ちどまっている間に、チヱは、とっくに、林助のところに帰ったとみえて、姿がなかった。
マンは、嘗て、二度ほど、タカから嚇(おど)かされたことがある。
「おマンさん、金さんはわたしのもんよ。手出ししたら、あんた、命はないものと思うとんなさい」
タカは、マンだけにではなく、浜尾組の独身女仲仕は、全部、そういって、脅迫していた。よっぽど、金五郎に惚れていたらしい。そのタカは、死に瀕している。

隔離室での、さまざまな光景を、マンは思いおこした。夫婦でも、別々にされている者が多かったが、つれあいの無事を祈っている者があるかと思うと、「コレラにかかりやがったのが、もっけの幸、あんな奴、死んだが増し」と、うそぶいている夫や、妻があった。マンは、錯倒せざるを得ない。

家に帰りつくと、マンは、入口のところに、釘づけになった。足が進まなくなった。

兄は、さっきとは打って変って、元気になっている。横になったままではあるが、チヱの手を取り、落ちくぼんだ眼を、妖しく、ぎらつかせながら、なにか、弾んだ語調で、叫んでいる。その言葉は、舌が廻らないため、はっきりとは聞きとれないけれども、マンの耳には、たしかに、

「お前を残して、誰が死ぬもんか。シズ子や、松吉や、今度生まれて来る子を置いて、誰が死ぬもんか」

と、聞えた。それを、お経のように、単調に、くりかえしている。

マンは、戸口に、佇立したまま、したたかに、背負い投げを食わされた思いだった。味気なく、自分の無力さを、痛感せずには居られなかった。

人々を、恐怖と戦慄のどん底におとし入れた「上海コレラ」騒動は、それから、半月以上も続いた。浜尾組でも、巨漢助役をはじめ、二十人近くの死者を出した。谷口林助は、辛うじて、一命をとりとめたが、タカは死んだ。

青い腕章をした市役所の吏員が、やって来て、玉井金五郎と、森新之助とを呼びだした。

「お前たち二人には、コレラの黴菌(ばいきん)が、いっぱい、ひっついとる。絶対に、出ることはならん」

そうして、二人は、監禁された。

長屋の一隅に、一間四角の掘立小屋が作られた。雨露を凌ぐに足るだけのバラックである。扉はあるけれども、外から錠前が降され、その鍵は、役人が持っている。

両側に、空気抜きと採光とを兼ねた、一尺四方の小窓がつけてある。別に、大小便口がある。この箱の中に、二人は、一週間、蟄居(ちっきょ)することを命ぜられた。

「一週間目に検疫して、一匹でも、黴菌が居ったら、もう一週間、隔離を延長する」

青い腕章の市衛生課吏員は、小気味よげにそういいすてて、大威張りで、帰って行った。

「木ッ葉役人の畜生奴、棺桶の仇討ちをしやがったな」

新之助は、ぶりぶりと、腹を立てた。

金五郎は、笑って、

「新公、まあ、そう怒んな。わざわざ、家を新築してくれたんじゃないか。骨休めに、ちょうど、ええわい。もう、こうなったら、寝るの一手じゃ。一年分ほど、寝溜めしようや」

「そういえば、そうじゃが……」

と、新之助も、不承々々、機嫌をなおした。

箱の中での奇妙な生活が、はじまった。

二日も経たぬうちに、もう退屈してしまった新之助は、「こんな小屋、わけない。打(ぶ)ち破って、脱走しようか」といいだしたが、金五郎は、「そんなことしたら、他人に迷惑かける」といって、なだめた。

三度々々の食事は、マンが、差し入れした。

檻(おり)の中の囚人どもは、おかずの贅沢ばかりをいい、ときには、酒も注文した。ちびちびやりながら、中で、一日、将棋をさしている。
「おマンさん、今夜は、すき焼を頼む」
などと、いう。
マンは、笑って、七輪やら、鍋やら、砂糖、醤油、団扇、牛肉、葱、豆腐――すき焼に必要なものを入れてやる。
「まるで、旦那じゃな」
気楽な居食いの生活で、箱の中の二人は、日ごとに、まるまると、肥えた。
しかし、旦那の豪奢とはやはり違っていた。雨の日には、天井から雫がたれるし、風の日には、家全体が吹っ飛びそうに、ゆれ動く。床のすぐ下で、コオロギや地虫が鳴く。
夜は、もう寒い。ランプを消して寝ると、野犬が箱のまわりをうろつき、しきりに、遠吠をした。月の光も、冷たい。深夜、眼がさめると、コレラで死んだ幽霊たちが、あたりを徘徊しているように、不気味だった。
「花をあげましょ」
或る日、一升徳利を花瓶がわりにして、大束の菊の花を、マンが、小窓からさし入れた。
「これは、これは」
金五郎が、受けとると、
「あたしの家の庭に、咲いたものです。枯れたら、また、とりかえてあげますわ」
「この花の枯れるまでは、居らんよ」
新鮮な菊の強い芳香は、一坪立方の邸内を、いっぱいに、むせかえるほど満たした。のみならず、二つの小窓から流れだして、荒廃した長屋の隅々まで、匂った。
一つ蒲団にくるまって寝る狭い箱の中で、金五郎と新之助との友情は、急速に、そして、堅確に、結ばれた。二人は、兄弟分の誓いを立てた。同年配ではあるが、金五郎が、兄貴分である。
「新公、おれは、この箱から出されたら、すぐ、浜尾組を暇取ろうと思うとるんじゃが……」
「おれも、そう思うちょる。ひでえ親方じゃ。今度のコレラ騒動でも、たった一ぺん、顔を出しただけ、まるで、寄りつきゃせんで、メカケのところに、べたべたしとる。おかみがコレラで死んだのをええことにして、二号を家に引きこむ算段らしいわい。それは、まあ、勝手じゃが、組の者が、こんなむごい目に逢うちょるのに、見舞にも来んし、医者も、看護婦も、さし向けやせん。死んだ者のところだって、かえって迷惑そうな顔して、ほったらかしじゃ。親方がしゃんとしとりゃ、おれたちだって、こんな箱の中に、一週間も、閉(と)じこめられんで、すんじょる」
「ま、ええわ。おれにすこし考えがあるけに、一緒に彦島(ひこしま)に行こう」
「うん、金さんの行くところなら、どこでも行く」
いずれは、二人で、支那大陸に渡ろう、という約束をした。
或る日、また、マンが、小窓の外から、笑いながら、
「はい、新聞」
見ると、土地の赤新聞に、大きな見出しで、でかでかと、「コレラの海の中で、すこしも感染しなかった、不思議な二人の

不死身男」、そして、金五郎と新之助との写真が、ならべてかかげられてある。
「生まれてはじめて、新聞ちゅうもんに、載ったのう」
二人のしがない沖仲仕は、妙に、くすぐったくてならなかった。
一歩も出られぬ箱の中が、やはり、どうにも寂しくてたまらなくなり、二人は、酒盛をしては、手をたたいて、唄を歌ったりした。
八日目に、やっと釈放された。金五郎は、その足で、谷口林助の家を訪れて行った。マンは裏庭にいると教えられて、そちらに、廻った。垣をあけると、菊の香が鼻を打った。
マンは、柿の木の根元にしゃがみこんで、泣いている。新しい土盛りの上に、カマボコ板でこしらえた、小さな二つの墓標がならび、線香の細い煙がながれている。
「猫の墓です。こっちの方は、夫婦猫(みょうとねこ)なので、別にして、花を供えてやりました」
金五郎を見ると、マンは、そういって、また、手ばなしで、おんおんと、泣いた。

裸一貫

「おい、あの女、とんと、ここらでは見かけん女じゃが、どこの者じゃろか？」
「洋装のハイカラ美人なんて、一年に、一ぺんも見たことないなあ」
「しかも、二人もな」
「西洋の活動写真のごと、あるのう」
「声かけてみようか」
「止めちょけ。ハイカラさんが、おれたちのようなゴンゾを、相手にするもんか」
　海をへだてて、巌流島が、盆景の島のように、小さく、こじんまりと見える。先ごろ、この北九州を吹き荒らした、二百二十日の烈風で折れたらしく、島の中心にある丘の一本松が、タコの足のような根をあらわにして、横倒しになっている。
　その松の根に、ハンカチをしいて、二人の女が腰をかけている。どちらも、似たような白のドレスで、黒い手袋をはめ、桃色と緑とのパラソルをさしている。二人の視線は、関門海峡をへだてた小倉の延命寺燈台の方角にそそがれ、ときどき、顔見あわせて、たのしげに、笑いさんざめく。
　かたわらに、中年の厚司男が立っていて、しきりと、方々を指さしながら、口を動かしているのは、このあたりの風景や史跡を説明しているらしい。延命寺には、宮本武蔵の墓があるから、巌流島に於ける武蔵と佐々木小次郎との決闘について、一席弁じたてているのかも知れない。三人の乗って行った小伝馬船が、渚につながれ、船頭は、待っている間を利用して、魚を釣っている。
「あの女、なんじゃろか？」
　好奇心に駆られて、仲仕たちは、なおも、しきりと評定をするが、誰も、その正体をいい当てる者がない。
「うちの親方のところに、誰か、また、えらい客人が来とるのかも知れんなあ。きっと、その人のつれじゃよ」
　その観察が、いくらか当っているようだった。
　彦島貯炭場での昼休みである。彦島は、下関とは川を一つ隔てているだけであるが、市街地の方とは、まったく違った雰囲気があった。いたるところに、貯炭の山があり、その繰替をしたり、艀への積込みをしたりする仲仕たちが、方々に、屯していた。語源があきらかでないけれども、この地方では沖仲仕も、陸仲仕も、ひっくるめて、「ゴンゾウ」と呼ばれている。
　昼弁当を使っている十七八人の仲仕たちの中に、谷口マンも、まじっている。女は五六人、マンのとなりに、松野菊江という、マンより三つほど年配の女仲仕が、杉の木の四角な重箱から、麦飯を、番茶漬けにして、いそがしげに、かきこんでいる。
　菊江は、頬面に飯のついていることなどかまわず、巌流島の方をながめながら、呟く。
「おマンさん、人間には、いろいろな階級があるなあ。わたしたちのように、石炭の中で、まっ黒になっとるゴンゾもあるかと思や、あんな、ピカピカ光る西洋の着物着た、まっ白

な女もあるよ」
「それが、どうしたかね？　情ないこと、いいなさんな。あたしたちだって、いつまでも、ゴンゾで居るもんか」
　そのはげしい言葉に、菊江はびっくりして、マンを見た。
　森新之助が、このとき、握り飯を口に頬ばりながら、急に、ものものしげに、声をひそめた。
「おい、みんな、気をつけろ」
「なにをや？」
　一人の老仲仕が、鈍重な語調で、きいた。
「おれは、今、ひょっくり、気がついたんじゃよ。あの女たち、露探（ろたん）かも知れんぞ」
　誰も答える者はなかった。急に、前とは違った、緊張した顔つきになって、厳流島の女たちを眺めなおした。洋装婦人たちは、なにがそんなにおかしいのか、肩をたたきあうようにして、笑いころげている。
　それを見るマンの瞳には、一種軽侮に似た光と、憤りの感情とが、まじりあっていた。
「それに、ちがわん」新之助は、確信にあふれた顔つきで、「このごろ、ロシヤは、日本の女を、さかんに、スパイに雇うとるちゅう噂じゃ。この十月八日が、約束の日じゃったのに、ロシヤは、満洲から撤兵するどころか、どんどん、兵隊を南進させよる。あっちは、もう、日本を馬鹿にして、戦争する腹じゃ。それでも、日清戦争のことがあるもんじゃけ、用心して、日本の様子を探っとるんじゃ。それに、女を使うちょる。こないだは、長崎で、女の露探が捕まえられたが、あの女たちも怪しいぞ」
「そういやあ、女が、なにも、厳流島までも行って、関門海峡を見物せんでもええなあ」
　老人仲仕も、新之助の意見に、同感の意を表した。
　日露の風雲は、ようやく、急を告げつつあった。国内には、開戦論と非戦論とが沸騰していた。三万七千人の会員を擁する全国青年同志会が、露国膺懲（ようちょう）の建白書を、桂首相に提出するかと思うと、非戦論者である堺利彦、内村鑑三、幸徳秋水の三人が、「万朝報」を去るというような事件が、この関門地方をも騒がしていたのである。旅順の日本人は引き揚げを開始し、この地方に帰って来た人もあって、
「ロシヤは、旅順に、大層もない要塞を築きよる。どうで、戦争はまぬがれん」
　と、決定的に強調していた。
　山下組の仲仕たちも、国の一大事に、無関心では居られない。なおも、厳流島の不思議な女たちについて、ひそひそと、語りあった。
　詰所の中から、山下組の助役（ボーシン）が出て来た。
「玉井は居らんか」
「居りません」
　と、新之助が答えた。
「どこに行った？」
「さあ、飯食うて、どこかに出かけよりましたが、……また、飯代部屋（はんだいべや）で、将棋さしとるのとちがいますか」
「将棋の好きな奴じゃなあ。急用があったんじゃが、……」
　そういって、当惑したように、長い顎をつまんだが、マンに気づくと、「おマンさん、あんた、玉井と夫婦になるそうじゃ

ね。玉井が、話しとったが……」
「嘘ですよ。誰が、あんな……」
「そうかね？　……嘘かね？」
新之助は、策略的な顔になって、助役の袖を引いた。
「ボーシン、あのハイカラ女ども、どこの者ですか？」
「そんな口きくと、碌なこたないぞ。今売り出しの、若松の吉田磯吉さんが、客人といっしょにつれておいでになったんじゃ」
新之助は青くなった。
「そういえば」と、助役は、ふと気づいた顔で、「森、お前にも用があったんじゃ」
「なんごとです？」
「昨夜から、うちの親方のところに、若松の吉田親分をはじめ、下関、小倉、博多、別府などの顔役方がお見えになって、泊りがけで遊んでいなさるんじゃ。それが、今朝がた、お開きになってな、今、別れの昼御飯を食べておいでになる。博多、別府方面の親分衆は、二時の汽車で、門司からお帰りになる」
「それで、わたしに用事というのは？」
「吉田磯吉親分がな――この組に、玉井金五郎、森新之助、ちゅう二人の若い衆が居るそうなが、逢いたい、といいなさるんじゃ」
「なんで、また？……」
「光栄に思え」
「どうして、玉井とわたしの名を、特に、吉田さんが……？」
吉田磯吉のつれて来た女を、露探などといったばかりなので、新之助は気味が悪かった。
助役は、そんなことは知る由もないので、
「あれよ、ほら、こないだうちからの上海コレラ騒ぎ、あん時に、お前たち二人が、新聞に出たろうが。コレラの黴菌の海の中で、素裸でおって、コレラにかからんじゃった――そのことを、吉田親分が、知っていなさってな、逢うてみたいといわれる」
「ふウン、そんなことか。吉田親分も物好きじゃのう」
「おい」助役は、新之助の肩を、指でぽんとつついて、卑屈そうな笑みを浮かべ、「羨しいぞ。お前たちの運がひらけて来たんじゃ。吉田さんは、新聞を読んでから、大層、興味を感じられた様子でな、門司の浜尾組に聞きあわせなすったらしい。そしたら、もう浜尾を出て、彦島の山下組に居るちゅうことを知って、今日、どうしても逢わせてくれ、といいなさる」
「ごめんを蒙りたいですなあ」
「馬鹿なことをいうなよ。罰が当るぞ。今売り出しの吉田親分が、名ざしで逢いたい、……いや、うちの親方に向かって、逢わせてくれ、というて、頼みなさるなんて、冥利に尽きるじゃないか。きっと、子分に欲しいんじゃよ」
「玉井にも、意見を聞いてみます」
「なんの意見を聞く？」
「玉井が、逢うというか、どうか？……」
「変なことばっかりいう奴じゃなあ。吉田親分が逢いたいといいなさって、うちの親方もよろこんで、お目通りさせます、と約束したことに、逢うも逢わんもあるもんか。……ええな、

玉井を見つけて、いうとけよ。――今夜、吉田親分が河豚(ふぐ)を御馳走して下さるそうじゃから、四時までに、親方の家の裏口から入って来い、……ってな」
色黒で、せっかちの助役は、そういい残して、すたすたと、詰所の方へ引っかえして行った。
新之助は、当惑した顔つきで、かたわらのマンをかえりみた。
「弱ったなあ。……おマンさん、どうしようか?」
「止(や)めなさいよ。つまらん。金五郎さんだって、きっと、行くといわないにきまっとるわ」
厳流島の方から、二人のハイカラ美人を乗せた小伝馬船が、帰って来た。
桟橋から、山下松次の屋敷へ抜ける道は、運河沿いのところにあって、この貯炭場の中を通ってはいない。ところが、小伝馬船から、二羽の鶴のように、桟橋に飛びあがった洋装の女たちが貯炭場の方に廻って来た。
「おい、露探が、こっちに来るぞ」
一人の仲仕が、笑いながら、新之助の尻をつついた。
新之助は狼狽して、
「露探なんて、いうなよ。間違いというものは、ときどき、ある。おれが、さっき、露探というたことは、取り消す」
「それでも、もう、あのハイカラ美人の耳に、入ったのかも知れんぞ」
「冗談いうな。二町も離れとるのに、聞えるもんか」
そんな話をしていると、二人の女は、仲仕たちの屯しているところへ、近づいて来た。なにか、用事ありげな足どりである。
追風のため、女よりも先に、強い香水と白粉のにおいが、流れて来た。
「やあ、皆さん、御精(ごせい)なことで」
案内役の厚司男が、立ちどまって、仲仕たちに、声をかけた。「先生」と呼ばれている、山下組の玄関番のような、色の青い、猫なで声を出す、温厚で、卑屈な男である。
「やあ、先生も、御精なことで……」
誰かが、幇間(たいこもち)のような態度にあてつけて、そういったので、くすくすと、笑いが起った。
「あんた、ちょいと」
桃色のパラソルをさした方の女が、マンのすぐ前に来て、蓮っ葉に、呼びかけた。
マンは、びっくりして、
「はい……?」
「あんたはん、珍しいもの、持ってやはったらしいけど、それ、あてに見せてんか?」
「なんでしょう?」
「なんや、こう、手に持って、パッと火のつく、小(ちっ)さな機械やったわ。煙草のみはるのに、煙管に、マッチとは違うた、その機械でつけはったでっしゃろ?」
「懐中ランプのことじゃよ」
と、新之助が、横から、マンにいった。
マンは、腰にぶら下げていた麻袋から、懐中ランプを取りだした。
「これでしょうか?」
女は、受けとると、銀色の小箱を、子供のようにひねくり

ながら、もう一人の女に示した。
　どちらも、年配は二十二三、似たような丸顔である。桃色パラソルの方は、眼尻が下り、唇がうすく、軽薄で、厚顔らしいが、緑色傘の女は、下ぶくれで、眼元が涼しく、唇にしまりがあり、どこか落ちついているところがあった。唇の右下にある大きな黒子(ほくろ)が、昆虫が止まっているように見える。妙に、色っぽい。
　女たちは、小伝馬船の上から、マンが、煙草をのむのに、妙な点火器具を使用していたのを、好奇の眸(まなざし)で、遠望していたものらしい。
「あんたはん」と、桃色傘の女は、いく度か、火をつけてみたあと、「これ、あてに、ゆずっとくなはれや」
「いえ、それは、……」
「タダやないわ。お金、たんと払うさかい」
「お金、頂いても……」
「二円、どう？　あんたはん等、一日働いたかて、五十銭にも、ならへんのやろ。二円、大金よ。……ほな、三円」
「いやです」
　桃色傘の女は、狐のように、眦(まなじり)をつりあげて、軽侮のいろを浮かべた。
「ゴンゾの癖して、三円なんてお金、いっぺんでも持ったこと、あらへんのやろ。黙って、ゆずったが、増しやで」
「ゆずりません。かえして下さい」
「ほな、五円、どや？」
　まだ、未練があるらしい。後には、ライターなど、掃きすてるほどになったけれども、そのころは、珍品中の珍であった。それを、女仲仕風情が持っているので、洋装婦人は、自分たちが使う方がよっぽど似つかわしい、と思ったものであろう。権利があると思ったのかも知れない。
「失礼ですが」と、横から、新之助が、「それは、五十円でもゆずりますまいなあ。ええ人から貰うた、大切な品ですけ」
「新さん、あんた、なにを……」
　マンは、びっくりして、赤らむと、新之助の膝を、はげしく、つねった。
「ふウン」桃色傘は、いよいよ、憎さげに、「色男(れこ)のプレゼントだッか？　ゴンゾでも、一人前、恋をするのやな。……そか、そか、ほな、かえすわ。……なんや、けったいに臭い思(おも)たら、男のにおいやな。あ、汚(きた)な」
　ぽんと、懐中ランプを、石炭の中に投げすてて、
「君香(きみか)さん、さ、行こ。阿呆らしい。こんなわからず屋、相手にしたって、仕様あらへん」
　桃色傘の女は、ぷんぷんとふくれて、靴で、石炭の黒塵をまきあげながら、さっさと、桟橋の方へ、去って行った。
　マンは、無言で、懐中ランプを拾いあげた。唇を噛みながら、そのよごれを、手拭でふいた。
　君香と呼ばれた、緑色パラソルの女は、マンの傍に来て、
「あんたはん、気にせんといてや。あの人、あんな短気やけど、気は、ほんに、ええ人やさかい」
　いいわけするように、そういって、案内の厚司男をうながして、帰って行った。
　菊江が、呟くように、
「おマンさん、慾のない人じゃなあ、五円出すというのじゃ

け、売ったらよかろうに。五円なんて金、わたし等が、一年働いたって、蓄まりゃせんのに」
「なに情ないこと、いうとるかね。今に、十円、百円の金を、あんな人たちの顔に、打っつけてやるよ」
マンの眼は、妖しく、ぎらぎらと光っていた。しかし、その黒眼勝ちの瞳は、うっすらと、涙でぬれている。
飯代部屋の方から、玉井金五郎が、頭をかきながら、帰って来た。
「敗けた、敗けた。どうも、今日は調子が悪い。甚公から、二枚落しで、四番も立ち投げを食うた」
「金さん」
新之助は、吉田磯吉が、コレラ騒動の新聞を見て、今日、二人を晩飯に招ぶ、といっていることを、ひととおり、話した。
「どうする？　おれは、いやじゃが……」
「行ってみよう。吉田磯吉さんの名は、聞いて知っとる。どんな親分か、逢うてみたい。なんでも、ぶっつかてみんことにゃ、わからん」
金五郎の語調は、弾んでいた。

その夜、饗宴は、深更までつづいた。
山下松次は石炭荷役の請負師であるが、手遊びが好きで、土地は勿論、九州一円の顔役とは、その方面のひろい交際があった。そして、山下邸で、四季に一度くらいずつ、相当大きな賭博が開帳される。今度は、その秋の集まりらしかった。
御馳走は、河豚のサシミ、チリである。人数は二十人ほど、女が五六人。吉田親分の名ざしで、特別に、金五郎と新之助とが、座に加えられた。
金五郎は、裏口から入り、座敷の襖をあけた途端、はっとして、胸がどきんと鳴った。眼を皿にした。
（ちがうらしい）
気抜けしたような、安堵したような気持で、心に呟いた。
席に侍っている女たちのうち、銀杏返しに結った、黒襟の若い女を、金五郎は見ちがえたのである。いつか、道後温泉の「四国屋」で逢った女、牡丹に蝶の彫青をして、中盆と壺振りとを、あざやかな手さばきでやりながら、金五郎に声をかけて、にっこりと笑った女――横顔がそっくりだったので、その女かと思ったのだが、正面むくと、まるで、違っていた。
（ちがっていて、よかった）
あのとき、印象に残ったその女が、金五郎の心の中に占めている位置は、不可解なものであった。別に、どうと取り立てる感情でもなく、行きずりに見た花の記憶にすぎないのであるけれども、忘れている間にも、写真の乾板にいったん焼きつけられた映像のように、その全容が消えていなかった。
しかし、その花には、艶めかしさのほかに、危険な毒のようなものが感じられて、金五郎は、その女に、もう一度逢いたいと思っていたわけではなかった。だから、どきんとして眼を瞠った女が、別人であると知って、或る安堵感をおぼえたのである。
座には、白いドレスの洋装女が、二人いた。
金五郎と、新之助とは、肩をすぼめるようにして、末席に坐った。

大黒柱に背をもたせ、腕組みして、一座を、するどい鷹の眼光で眺めまわしているのが、吉田磯吉らしかった。黒い結城(ゆうき)の袷羽織、太い綱のような白縮緬の帯、角刈にしている頭髪の下に、利(き)かぬ気らしい、精悍な、面長の顔がある。眉が張り、心持尖った唇が、うすい。

吉田の両方に、劣らぬほどの剽悍な連中が、居ながれている。

(暴力団が、大層、えらそうにしとる)

威圧されそうなものに、反撥するように、金五郎は、強いて、心に、そう呟いた。

吉田磯吉が、山下松次に、なにか、耳打ちした。山下は、ぺこぺこしている。

「おうい、玉井に、森」

「はあ」

「吉田親分が、こっちに来い、って、いいなさっとる。お流れを下さるそうじゃ」

金五郎と、新之助は、吉田の正面に来て、坐りなおした。

「お前たちか」

吉田は、組んだ腕と、据えた眼とに、力を入れるようにして、二人を、無言で、じろじろと眺めた。

「玉井、とか、いうたな。君、幾つになる?」

「二十四になりました」

「二十四?……ああ、辰年じゃな。若いなあ。これからじゃ。そっちの……」

名前を思いださないらしいので、山下が横から、「森新之助と申します」と、註釈した。

「ああ、森君か。……君は?」

「二十四です」

「玉井と同い年か。どっちも、辰じゃね。辰は龍、威勢のええエトじゃ。わしは、慶応三年生まれ、兎じゃよ。三十七になる。兎じゃあ、二匹の龍殿の前では、勝負にならんなあ」

吉田は、そういって、高笑いした。

しかし、実際は――お前たちのような青二才が、二人かかって来ても、取るに足らん。……吉田の哄笑(こうしょう)は、はっきりと、そういっているように、金五郎の耳には、聞えた。

「まあ、顔を見知っといてくれ」

吉田は、左右にいる腹心らしい子分たちを紹介しておいてから、

「どうじゃね? 玉井も森も、その気があったら、いつでも、若松に来て、わしの家に、草鞋(わらじ)をぬぎない」

と、つけ加えた。

「おツタ、盃をやってくれ」

その吉田の言葉で、さっき、金五郎が道後の女とまちがえた銀杏返しが、銚子をさげて、にじり寄って来た。

「兄さん、ひとつ」

金五郎は、盃を受けとったが、

「吉田親分さんに、申しあげます」

「なんな?」

「この盃、親分子分の盃ではありませんでしょうね?」

「そういうことに、しても、ええ」

「いいえ、それなら、頂きません。それは、もうすこし考えさせて下さい。なんでもない酒なら、よろこんで頂戴します」

「大層、仁義がやかましいのう。君の好きなようにして、飲んだら、ええわい」
吉田は屈託なげに笑ったが、その表情には、不快そうなものが、露出していた。
この両者が、生涯を宿敵として、渡りあう運命の出発は、このときにしたのかも知れなかった。
酒がまわると、座はにぎやかになって来たが、やがて、吉田磯吉のなにかの話がはじまると、一座は、急に静まって、それに耳をかたむけた。
金五郎は、はじめの方は聞きそこなったが、どうやら、吉田の回想談らしかった。三四年前の出来事らしい。
酔ってはいても、すこしも乱れない吉田は、赤い顔に陶酔の面持を浮かべ、身ぶり手まねを入れて、咄々と、語る。
「その晩は、大雨降りでなあ、雷まで、ゴロンゴロン鳴りだしやがって、まあ、なぐりこみには、あつらえ向きといえんこともなかった。なにしろ、相手は江崎満吉、今でも、子分を何百人と持って、幅をきかせとるが、その頃は手のつけられん横暴の最中でな、紀元節の日に、決戦をやろう、ちゅうて、わしのところに、果し状をつけて来とった。それを、こっちから、先を越して、鼻を明かしてやれ、というわけで、ここに居る、友田喜造やら、大谷剛一、市川弥兵衛、松部五八郎、などの暴れん坊が、八人ほどで、夜討ちをかけたんじゃ。向こうは、不意を食ろうて、あわてたらしいが、喧嘩の準備は、ちゃんと、出来ちょる。竹槍、日本刀、猟銃、ピストル、熊手、出刃、鎌――ようも揃えたもんじゃ。約束の刻限が丑満じゃったもんで、まだ、人数は半分くらいしか集まっとらん。吹き降りの大嵐の中を、こっちの同勢が、近づいて行くと、ポオン、ポオン、音がする。もう射って来たかと思うたら、四斗樽の鏡を抜きよったんじゃ。江崎満吉というのは、派手な奴でなあ、自分も大酒飲みじゃが、喧嘩の首途にゃ、どんな小人数のときでも、新しい四斗樽を買いこんで、景気をつけよった」
「その酒代は、払うたことがないそうですよ」
友田喜造が、横から、いった。
色のどす黒い、細い眼の奥が、鳶のように、底光りしている、中肉中背の男である。女のような声を出す。まくりあげた袖の下や、はだけた胸から、全身に彫青をしているのがわかる。顔に、数ヶ所の傷痕がある。吉田磯吉の一の子分らしい。
「そうらしいなあ」吉田は、大笑して、「酒屋が掛け取りに行くと――金がいるのか。よし、払うてやる。長いのがええか、短いのがええか。……と、いうて、嚇かすそうじゃなあ」
「喧嘩の話は、どうなりました？」
と、誰かが、催促した。
「うん、喧嘩は、いうまでもない。大勝利さ。第一、気がまえがちがうよ。江崎の方は、人数ばかり多うても、烏合の衆、同然。こっちは、一人々々が、一騎当千、この友田なんか、女みたよなやさしい声出しちょるが、国定忠治か、清水の大政小政にも負けん荒武者でな、その晩、敵を何人斬ったやら、わかりゃせん」
「わたし等より」と、友田喜造が、「おギンさんの働きが見事でしたよ」

「そうそう、おギンの活躍ぶりを、みんなに、見せたかったなあ」
「おギンさんというのは、女子ですか」
森新之助が、きいた。
「君等、なんにも知らんなあ。今、若松で、「ドテラ婆さん」ちゅうたら、ばりばりの女侠客じゃ。婆さん、というても、なにも、年寄りじゃない。三十五六の女盛りじゃ。また、ドテラ着とるわけでもない。角力取りみたいに、恰幅がようて、どっしりしとるもんじゃけ、いつか、みんなが、「ドテラ婆さん」なんて、呼ぶようになったんじゃ。でも、江崎との喧嘩のときには、今のように、肥えては居らんで、すばしこかったよ。両軍入りみだれての乱闘のまん中で、味方に、弾丸を配ってまわったりしてな……」
それから、なお、勇壮で、けたたましい喧嘩の説明が、ながながと、つづいた。吉田磯吉の表情は、ほとんど、恍惚としていた。
金五郎が、はじめて、口を挟んだ。
「吉田親分さんに、お訊ねいたします」
「なんじゃ？」
「さっきから、お話をうかがって居りますのに、親分さんが一向にあらわれませんが、そのとき、あなたは、どうして居られました？」
「おれか。おれは喧嘩場には、行かん。家に、居った」
それをきいた金五郎の眼に、失望と、軽侮のいろが、同時に浮かんだ。
吉田磯吉は、そんな、青二才の反応などには、全然、無頓着で、
「明治町辺から、本町三丁目筋にかけて、篠つく大雷鳴のなかを、文字どおり、血の雨が降ったわけでな、なんちかんち、その荒けないことというたら、この友田の愛用の白鞘の一刀なんど、鋸の歯のようになっとった。おまけに、飴ン棒みたよに曲ってしもうたもんじゃけ、敵の刀をぶんどって、戦う始末よ。なにしろ、こっちは、進退、法にかのうた喧嘩上手ばかり、敵の人数の多いことなんて、恐れはせん。そしたら、……」
と、なおも、自分が顔役として売りだすきっかけとなった血闘談を、たのしげに、つづける。
――やがて、警察の手が入ったので、一時、子分たちは、地方に、身を隠した。吉田は、一歩も家から出なかったので、お構いなし。これには、町の長老や、有力者の諒解運動があって、これだけの大喧嘩がウヤムヤになった。ひとり、吉田磯吉の名声が高まったのである。
この騒動を機に、若松には、警察のほかに、憲兵屯署が設けられるようになった。
それから、吉田の話は、
「玉井、森、君たちは、まだ、苦労が足らんぞ」
という言葉から、若い時代の苦闘談になる。いつ尽きるとも知れない。
「おれは、川舟乗りじゃったよ。十六くらいのときから、船頭になって、えらい苦労をした。夏は、まあええが、冬分は死ぬ思いじゃったなあ。遠賀川の洲の岸に、水棹を立てて、それに、舟を綱で纜う。寒風が吹きさらす。雪が降る。積荷

の石炭の上にゴザをしいて、赤毛布（あかげっと）一枚にくるまって寝たよ。今どきの若い者が、あたたかいものを充分に着こんでいながら、寒いなんち、いうちょるのは、ちゃんちゃら、おかしい。おれは、そんな時代でも、いっぺんでも、寒い、と、いうたことがない」

川舟乗りから、角力取りになるつもりで、大阪に出た。褌かつぎになって、地方巡業に廻った。山陽線は、まだ全通していない時分のこと、寒中、素肌に浴衣一枚、巡業の荷物を積んだ大八車の後押しをして歩いた。

それから、若松に来たが、日清戦争の風雲に乗じて、朝鮮にわたった。

「おれも、ゴンゾをやったことがある。じゃが、朝鮮では、支那人仲仕が大層えばっとってな、癪にさわってたまらんもんじゃけ、或るとき、船の現場で、二三人、海に投げこんでやった。そしたら、支那の領事館から、日本大使館に、強硬談判を持ちこんで来やがったよ」

吉田磯吉は、身をゆすって、大笑した。

「それから」

と、その後の来歴を語ってから、

「人間、裸一貫、ことに、男は、力と度胸――これじゃよ。……玉井、森、わかったか？」

そういって、吉田は、肩を怒らし、右拳で、厚い胸板を、つよく、ドスンと、たたいた。

煙にまかれた金五郎は、わかったような、わからぬような顔付で、返事をしなかった。

――裸一貫。

その一語だけが、自分流に、わかった。

翌日になって、ほぼ同じ刻限に、二つの事件が、おこった。

追放

巌流島の見える桟橋横で、マンは煙草をのみながら、魚釣りを見物していた。

昼休みである。

魚を釣っているのは、彦島の諸式商「なんでも屋」の親爺、まだ、五十には遠いのに、すっかり頭髪が絶えてしまい、橙色に光っている。釣り気ちがいで、店は女房まかせ、そのために、いつも、夫婦喧嘩の絶え間がない。喧嘩といっても、常に、細君の方の一方的勝利に終るので、「なんでも屋」は、嗚天下として、鳴りひびいている。

マンは、ひやかす。

「あたしの林助兄さん夫婦と、おたくは正反対ね。兄さんの方は、亭主が威張っとって、オンピン・メンテレやけど、「なんでも屋」さんは、オンテレ・メンピンやわ。しっかりしなさいよ」

「そげんこというたって、世間には、オンテレ・メンピンが、多かとばい。まあまあ、女房には負けとくが、よかとたい」

「そんなだらしのないことで、どうするとですか。見とって、はがいいわ」

「フフフ……」

「なんでも屋」は、マンの顔を、じろじろと見て、妙な笑いかたをし、

「そりばって、マンさんが嫁女になったら、はげしいメンピンになるとじゃろうもん……？」

「あたし、亭主が理不尽なことせんかぎり、おとなしい、ええおかみさんになるつもりよ」

「そういえば」と、諸式屋は、なにか思いついたように、「マンさんは、玉井さんと夫婦になるそうじゃねえ？」

「誰が、そんなこと、いうの？」

「玉井さんが、話しよったばい」

「馬鹿にしとるわ。あっちこっち、自分でいいふちしとるのね。ボーシンさんからも、聞いたわ。……フン、自分で勝手にきめたって、あたしの知ったことか」

「そげんこつかい？　わしゃ、また、もう、話しあいでも、出来ちょるのか、と思うとったに。それで、二人が夫婦になったら、どっちもはげしかけん、オンピン・メンピンが出来るなんて、思うちょった」

「あたし、仲仕の女房になんか、なる気はないのよ。ほかに、いろいろ、考えとることがあるの。それに、まだ、結婚したいなんて、思うたこともない」

「早うはないがなあ……」

「早い、おそい、じゃないとです」

静かな秋の海に、糸をたれて、魚のかかるのを待ちながら、「なんでも屋」は、横目で、ときどきマンを見る。

飾りけのない手甲脚絆の仕事衣は、マンを、キリッと、甲斐々々しく見せる。そして、若さの内部に充実している、なにかの力が、マンに溌剌としたかがやきをあたえている。そのマンが、煙管で煙草を吸う手つきや、その味を心から楽しんでいる頬のふくらみと、眼のいろに、不思議な色気がある。化粧のことなど、考えたこともないのに、妖しいもので彩ら

れて見える。
「やあ、食うた、食うた」
「なんでも屋」が、急いで、竿をあげると、また、小河豚である。
このとき、背後で、
「谷口マン、というのは、お前さんか？」
と、荒々しい声がした。
ふりかえると、四五人、遊び人風の、人相の悪い男たちが立っている。マンを、取りかこんだ。
マンは、びっくりして、立ちあがった。吸いつけていた煙草の火を、あわてて、帆前掛けで、もみ消した。
魚を釣りあげたばかりのところへ、突然、無頼漢があらわれたので、小胆な「なんでも屋」は、地面に、尻餅をついた。ふるえながら、そのまま、両手で、後すざりしはじめた。投げだされたヒガン河豚が、癇癪をおこして、まん丸くふくれあがり、石炭粉の中をはねまわっている。
「ちょっと、それを、収すな」
マンが、麻袋のなかに、煙管と、懐中ランプを入れようとすると、一段と背の高い、顎のしゃくった、茄子色の、角刈の男が、マンの右手をつかんだ。
「なにを、なさるんです？」
マンは、手をふりきった。
「その懐中ランプを、こっちによこせ」
「いやです」
マンは、あわてて、麻袋も、煙管も、ライターも、いっしょくたに、ふところに突っこんで、上から、両手でおさえた。ぽっかりと、かたく盛りあがった二つの乳房が、久留米餅の仕事着の下で、かすかに息づいている。
「生意気なねえちゃんじゃなあ。四の五のいわんと、おとなしゅう出した方が、お前さんのためど。……見てみんかい。こんな立派な兄哥さんたちが、四人も揃うて、お前さんから、懐中ランプを頂こうというて、わざわざ、お出ましになっとるんじゃ。それでも、楯つくつもりかえ？」
蛙を見こんだ蛇のように、茄子色は舌なめずりしながら、ギョロリと、眼を光らす。
それを合図のように、他の三人も、それぞれ、凄んだ恰好をつくり、ギョロギョロ、無理に、眼玉をうごかす。こう、四人もが威嚇したら、手をくださずとも、小娘が青くなってふるえだし、懐中ランプをさしだすは必定と、胸算用しているらしい。
マンは、なんのために、彼等がやって来たかを、すぐに、悟った。
（あの、ハイカラ美人から、頼まれたにちがいないわ）
いったんは、懐中ランプを投げすて、捨台詞して去ったのに、よくよく、欲しくてたまらないのであろう。それで、やくざをさしむけたにちがいないが、女一人に、男四人とは仰山すぎる。現場には、男仲仕たちもいるし、「その懐中ランプは、ええ人から貰うたもの」などと、新之助がいったので、まさかのときの用心からかも知れない。しかし、マンは、魚釣り見物のため、現場を離れていたので、たった一人、掠奪団にとっては、もっけの幸というわけであった。
「さあ、出した、出した」

と、茄子色が、長い顎をしゃくる。
マンは、青ざめてはいたけれども、ふるえてはいなかった。きっと、唇を噛み、瞬時、ためらっていたが、ふところに右手をさしこんで、懐中ランプを取りだした。
「感心なねえちゃんじゃ。どれ、こっちに出しな」
長顎が、にたついて、そういったとき、マンの右手は高く伸びて、懐中ランプは、はるか海の彼方に、投げこまれていた。
青空に、銀色に光る小さなものが、弧をえがきながら、コポッと、波の上に、消えた。
「畜生奴」
四人の悪漢たちは、あっけにとられていたが、茄子色の男が、われにかえったように、怒りだした。歯糞のたまった、黄色い乱杭歯を、猿のように、むきだして、
「なんで、海に捨てやがった？」
「あんただちを、泥棒にすまいと思うたとです」
「泥棒に？……」
「あたしの持っている物を、無理に、取りあげたら、強盗でしょ？　だから、あたし、捨てたとです。捨てたら、もう、あたしのもんじゃない。どうぞ、海にもぐって、拾って下さい」
「この野郎、途方もないこと、ぬかしやがる」
茄子色の鉄拳が、マンの頬に飛んで来た。
しかし、掌は空間で空舞いし、男はよろめいて、味方の一人にぶっつかった。
「娘ッ子と思うて、甘くあつこうとりゃ、ええ気になりやがって……」
四人の男たちは、いっせいに、マンに襲いかかって来た。
マンは、袋の鼠になった。
ところが、もみあって、幾ばくも経たない間に、角刈の茄子色は、奇妙な呻き声を発すると、そこへ、提灯をたたむように、へなへなと、坐りこんでしまった。顔色は大根葉色に変じ、眼も、口も、顎も、ひきつって、やがて、涎をたらして、地面に伸びた。
「おいおい、どうした？」
他の三人は、おどろいて、ぐったりとなった兄貴株の男を、抱きおこした。
そのときには、もう、マンの姿は、どこにも、見あたらなかった。
「殺られたのか？」
三人は、きょろきょろと、悶絶男の身体中を探したが、どこにも、傷痕はなかった。血も出ていない。しかし、男は虫の息である。
桟橋のところへ降りた一人が、海水を、手拭に浸して来た。それをしぼって、人事不省の男の顔をぬらした。数回、そうすると、どうやら、意識を取りもどした。三人は大男を手取り足取りしてかつぎ、山下組の詰所の方に、去って行った。
詰所の裏に、飯代部屋がある。独身仲仕たちの下宿である。もとセメント倉庫だったものを改造して、畳がしいてあるだけだが、広さは三十畳敷ほどもある。それが、三と一の割合で、男仲仕と女仲仕とに仕切られ、台所には、大きな五升釜が、三つならんでいる。

海の見える窓際で、向こう鉢巻をして、将棋をさしているのは、玉井金五郎と、山口甚七だ。二人は、昼休みを待ちかねて、将棋盤を持ちだす。甚七は「ノロ甚」という綽名があるが、将棋は彦島随一で、金五郎は、二枚落しで、どうしてもかなわない。負けん性が強いので、負ければ負けるほど、仕掛かって行き、また、負ける。今も、四苦八苦だ。

「おい、金さん、あら、なんじゃ？」

この島では見かけぬ遊び人が、一人を三人でかついで、窓の外を通るのを、甚七は指さしたけれども、金五郎は、ちらと一瞥しただけ、「どうせ、つまらん喧嘩じゃろうよ」

と、雪隠詰になりそうな、自分の王将へ、情なさそうな瞳をかえした。

石炭の中に、腰をおろして、森新之助は、仲間たちに、前夜のありさまを、声高に説明していた。

昼食のときは、いつでも、こういう座談会のようなことになる。くたびれて、石炭のうえにごろ寝する者もあるが、たいていは、昼休みの一時間、馬鹿話に花が咲く。いずれ、仲仕たちのこと故、その場かぎりの埒もない話、まず、定石どおり、「酒とばくちと女」から始まって、最近のトピックを拾う順序になるのだが、今日の「酒とばくちと女」の話題は、いつもの常套的な、退屈談とは、すこしちがっていた。

貯炭場の岸壁から、つながれている艀に、歩板がわたしてある。今日は、艀積みをしているのだが、その艀の「カラス」という綽名の船頭も、珍しく、座談会に加わっている。「カラス」は、いつでも、

「お前らの話は、下作で、根も、葉も、シンものうて、聞いただけ損になる」

といい、一人で、焼酎をのんでいるのだが、今日は、誘われもしないのに、太った身体を、歩板に乗せて、のこのこ、岸にあがって来た。

「なにや？　吉田磯吉親分を、お前が、蹴った？」

いきなり、焼酎くさい息で、わめくように、そういうと、石炭のうえに、どすッと、腰をおろした。

新之助は、びっくりして、

「誰も、おれが吉田さんを蹴ったなんて、話しはせん。聞きちがいすんな」

「それでも、さっきから、船のうえで聞いとったら、昨夜、吉田親分の盃をつっかえした、ちゅうて、話しとったじゃないか」

「そんな風に、いうたんじゃない。あんたは、そそっかしやじゃけ、すぐ、勘ちがいして、困る」

「今売り出しの吉田親分を、お前らのような若僧が、蹴ったちゅうから、おれは、かけつけて来たんじゃ。蹴ったのじゃないのけえ？」

「どうも、おっさんの話は、言葉が悪いなあ。蹴った、の、つっかえした、の、って。そうじゃないよ。玉井が――ただの酒なら、頂戴しますが、親分子分の盃なら、もうすこし考えさせて下さい。……そういっただけさ」

「ほれ、見ろ。それが、盃をつっかえして、蹴ったことになるんじゃ。馬鹿な奴じゃなあ。おれなら、よろこんで、子分にして貰うのに。お前ら、運を取りにがしたぞ」

「まあ、カラスのおっさん」と、横から、老人仲仕が、「そう、横から飛びだして、まぜくらんでくれ。今、話が面白うなりかかっとるところじゃけ」
新之助も、助け舟が出て、ほっとした面持で、一つ、咳をし、
「それで、江崎満吉が、吉田さんに、果し状をつきつけて、大喧嘩になるんじゃが……」
と、話をつづけた。
吉田磯吉の一の子分、友田喜造の刀が、鋸の歯のようになったところまで来たとき、足音がして、五六人の見なれぬ遊び人があらわれた。背はひくいが、眼の鋭い一人が、
「おい、おしゃべりしとる、そこの兄ちゃん、ちょっと、向こうまで、顔を貸してくれんか？」
そして、ひょろ長い、跛の一人が、新之助の腕をつかんだ。
新之助は、道具倉庫の裏に、つれて行かれた。
竹籠、スコップ、雁爪などが積みあげられ、赤錆になった錨が一本、足を切られた蛸のように、投げだされてある。その上にとまっていた一羽の雀が、どやどやと、やって来た人間の群におどろいて、海の方へ、飛び去った。
立ちどまると、新之助は、
「わたしに、なんぞ、用ですか？」
と、きいた。
新之助は、年よりはすこし老けて見える。身体つきは頑丈だが、面長の色白で、整った顔立ちをして居り、癇癪持ちで、利かぬ気の半面、どこかに気の柔いところがあって、争いごとは好きではなかった。だから、遊び人たちに拉して来られると、はじめから、日ごろの敏捷さにものをいわせて、隙をうかがって、逃げだすつもりにしていた。
「おう、用がないのに、誰が呼ぶか」
と、相手は、もう、喧嘩腰である。
「どんな御用で？……」
「お前は、親分のおつれさんを、露探というたそうじゃなあ？」
新之助は、ぎくっとして、
「いえそれは……」
「それはも、糞もあるか」
もう、そのときは、背後にいた一人が、新之助の腰を蹴飛ばしていた。不意を食らって、よろめくと、五人の男たちは、一度に、新之助にむらがりかかった。殴る。突く。蹴る。首をしめる。新之助がたおれると、めちゃくちゃに、顔といわず、頭といわず、胸、腹、手足の区別なく、下駄や雪駄で、踏みつけた。
新之助は、鼻血を出し、傷だらけになって、昏倒した。
「ざまみやがれ」
暴漢どもは、人事不省になって、だらしなく伸びている新之助に、まだ、唾をはきかけたり、足で泥をはねかけたりして、詰所の方角へ、意気揚々と引きあげて行った。
飯代部屋の中では、金五郎は、まだ、うんうん、唸っている。雪隠詰になりかかった王は、やっと脱出したものの、今度は、うっかりしていて、王手飛車を食った。
「じたばたするほど、悪いどな」
「ノロ甚」は、にたついて、鉈豆煙管をひねくりまわしている。この将棋には、いくらか賭かっているので、どちらも、

真剣だ。
　金五郎は、へこたれたが、意地っ張りなので、待ったはいわない。持駒と盤面とを等分に睨めまわして、起死回生の策を練っている。
「江戸ッ子なら、もう、投げる時分じゃがなあ」
　そんな嫌がらせをいっていた甚七は、ふっと、窓の外を眺めて、
「金さんや、また、喧嘩らしいぞ」
　煙管で、詰所の方角を指さした。
　金五郎は、ちらと、そっちを見ることは見たが、すぐに、盤に、眼を落した。
「ほっとけ。喧嘩商売の奴なんか、相手にすんな」
「金さん、金さん、ちょっと、見ろよ。ありゃあ、森の新さんじゃねえか」
　新之助の名をきいて、金五郎は、あらためて、顔をあげた。ガラス越しに、瞳をこらした。
　仲間たちにかつがれて行く、血だらけの男が、親友だと知ると、新之助は、おッと叫んで立ちあがった。表に飛びだした。将棋盤がひっくりかえり、駒が散った。
　それから、十分ほど後、金五郎は、顔面を怒りで紅潮させながら、山下親方の屋敷の方角へ、急いでいた。
（いくら、吉田親分でも、無道は、許さぬ）
　病院へかつぎこまれた弟分の新之助のむざんな姿を見たときから、その憤りは、全身をふるいたたせていた。
　新之助は、意識朦朧となって、口をきくことができなかったけれども、理由をきく必要はない、と思った。昨夜、親分子分の盃を拒否したことを遺恨の種に、子分をさしむけたにきまっている。貯炭場に来て、自分を探したが、いなかったので、新之助一人を槍玉にあげたのであろう。――金五郎は、そうと、信じた。
（男らしくない）
　いつでも、自分はかげに隠れていて、子分を踊らせている。そんなのは、立派な親分とはいえぬ。――金五郎は、怒りと、蔑みと、憎しみとで、歯がみする思いだった。
　いくつも黒い山になっている貯炭場の間を抜けて、町はずれに出た。そこから、山下邸の二階の屋根と、庭の銀杏とが、見える。
　急いでいると、
「玉井さん、玉井さん」
　と、呼びとめられた。
　ふりかえると、「なんでも屋」の親父が、あわてふためいて、店から駈けだして来るところだった。橙色の禿頭を、太陽に光らせながら、金五郎に追いつき、息をはずませて、
「玉井さん、ちょっと、話がある」
「話は、また、あとで聞く。急用があるけ……」
「どこに行きなさる？」
「吉田磯吉親分に逢いに行くんじゃ」
「そんなら、ちょっと、わしの話も聞きなさい。まんざら、無関係のことでも、なかけん……」
「おっさんの話は長いからなあ」
「いや、一分。……三十秒でも、よか」
　金五郎も、ただごとでないと悟って、ごたごたと品のなら

んでいる諸式商の軒先に入った。
「なんでも屋」は、奥の方で、赤ん坊を寝かせつけている女房に、気がねするように、おどおどした小声で、昼休み、桟橋横で起った事件を、かいつまんで話した。
マンの遭遇した危難の物語は、金五郎の怒りを、倍にした。
「よし、わかった」
と、ほとんど、血相を変えて、表に出た。
焼杉板の黒塀に沿って、山下邸の門をくぐった。昨夜のように、裏口からではなく、表玄関に回った。
「おごめん」
三度ほど、案内を乞うと、玄関番のにやけた「先生」が出て来た。厚司着で、突っ立ったまま、
「誰かと思や、金さんか。用があったら、勝手口に廻れや」
「願います。吉田親分さんに、コレラの玉井金五郎が、ちょっと、お目にかかりたい、というて、来て居ります、と、取り次いで下さい」
「吉田親分に、なんの用かや？」
「それは、お目にかかって、じかに、申しあげます」
「先生」は、うろんな眼つきで、金五郎を見たが、不承々々に、引っこんだ。
まもなく、出て来た。
「大将が、逢うてやる、といいなさっとる。わたしに、ついて来なさい」
「先生」に案内されて行くと、幾つも、廊下を曲った。
山下親方は、どこにいるのか、姿が見えなかったが、前夜の宴席にいた客人たちは、方々の部屋に、三々五々、屯していた。花札を繰っている組もあれば、女を加えて、酒盛をしている組もある。
突き当りの離れの前に来て、「先生」が、襖の外から、
「吉田の大将、玉井をつれて来ました」
「そうか、お入り」
「先生」が襖をひらくと、金五郎は、どきっとした。すぐに、馬鹿々々しくなって、赤面をした。部屋の中にいた女を、また、道後（どうご）の女とまちがえたのである。
寝そべった吉田磯吉の腰をもんでいる、銀杏返しに黒襟の女は、金五郎から見える位置では、横むきになっていて、また、金五郎に錯覚をおこさせた。こんなに横顔の似ている女は珍しい。それとも、一度逢ったきりの女を、こんなにも、明確に、記憶に再現する金五郎の方が、珍しいというべきか。
吉田は、腹這いになったまま、にこにこと、
「やあ、玉井君、よう来たなあ。遠慮せんで、中に入んなさい」
「失礼します」
金五郎は、六畳の座敷に入り、正座した。
「そう堅くならんと、楽にしたら、ええ。昨夜（よんべ）は失敬したなあ。よう遊びに来てくれた」
「ようも、参りません」
「大層、気色ばんじょるが、どげえかしたのかね？」
「吉田親分さんに、話があって参りました。ちょっと、起きて下さいませんか」
「どげな話か知らんが、くたびれちょるけ、これで、こらえてくれ。話次第じゃあ、起きんこともないが……」

「それでは、そのまま、聞いて下さい」
金五郎は、激昂して来る胸の虫をおさえて、ぐっと、生唾をのみこんだ。
「森新之助は、半死半生になって病院にかつぎこまれました」
「へえ、そりゃ、また。……いったい、どげえしたとな？」
「袋叩きに逢うたからです」
「誰に？」
金五郎は、白を切る吉田の顔を、槍の絆で睨みつけて、
「親分さんが、それを、わたしに聞きなさるとですか」
「知らんことは、聞かにゃわからんよ」
そうさりげなくいったが、吉田は、なにかに気づいた様子で、「おツタ、ちょっと待て」と、女の按摩の手をとめると、むっくりと、起きあがった。茶襟のついた銘仙の丹前を着ている。
「玉井君」
と、あらたまった語調で、吉田はいった。
「はあ……？」
「わかった。君は、なんか、勘ちがいしとる。森君が怪我したのを、おれが指図したと思うとるんじゃな。おれは、なにも知らん。それは、どうで、後でわかろう。じゃが、おれがさせたように思われたのは、おれの不徳のいたすところじゃ。どんなことか知らんが、子分がしたことなら、おれが謝(あやま)る。すまん。いずれ、正式に挨拶はするが、勘弁してくれ」
吉田は、そういって、軽く、頭を下げた。
金五郎は、気抜けがした。瞬時、ぽかんとなった。次第に、赤面する気持になって来て、座にいるのが、苦痛になった。
「失礼いたしました。それだけ、申しあげれば、用はすみましたとです」
吉田が、両手をあげて、
「まあ、玉井君、ちょっと待て。まだ、話が……」
と、とめたが、逃げるように、廊下に出た。すたすたと、入って来たときの落ちついた足どりとはちがった、狼狽の歩調で、客人たちのいぶかる中を、表玄関に出た。
（おれの馬鹿）
軽率が悔まれた。よく事情も糺(ただ)さず、一途に、思いつめて行動したのだが、若さから来る客気の頼りなさを、したたかに、思い知らされた。
（こんなことでは、駄目じゃ）
そう自省する反面、とりかえしのつかぬことをしてしまったような悔恨と、焦躁とが、はげしく、金五郎を苛(さいな)んだ。
「そそっかしくて、早合点しました。すみません」
と、何故、率直に、いえないのか。
吉田は――自分の知らぬことだが、子分のしたことなら、自分が謝る、すまぬ、といって、一介の沖仲仕の前に、頭を下げたではないか。金五郎は、昨夜から作りあげていた、勝手な吉田磯吉とは、別個の吉田磯吉に、威圧を感じた。
谷口マンのことをいうつもりだったのに、それどころではなかった。いわなくて、よかった。懐中ランプなどを、吉田磯吉が子分を使って取りあげさせる筈がない。
金五郎は、足が重くなった。次第に、あたりが黄昏れて、暗くなるような、奇妙な不安感に包まれて、唇をかみかみ、歩いた。

（龍になって、昇天するなど、おこの沙汰じゃ。あべこべに、地に潜らねばならん）
涙のにじむ思いで、自分を叱りとばした。
飯代部屋に、帰って来た。
誰もいない。がらんとしている。さっき、新之助の遭難をきいて飛びだしたとき、蹴ちらした将棋の駒が、散乱したままになっている。
金五郎は、そこに、坐ると、静かに、将棋の駒を拾いあつめた。飛車を手に取り、裏返して、龍の字を眺め、将棋盤の中央に、心をすますようにして、パチッと、打った。
金五郎は、部屋の隅にある柳行李を引きよせた。これが、全財産である。蓋を取り、ごたごたと詰めこんである衣類を持ちあげて、底の方に、手をさしこんだ。
（おや？）
と、不審の面持になった。
急に、あわてて、中をまぜかえした。
「ない」
顔色を変えて、呟いた。
道後湯の町で買いもとめた助広の小刀、故郷を飛びだすときにも、どこを放浪しても、常に、肌身はなさず持ち歩いたのである。
（盗まれたか？）
悪いときには、悪いことが重なる。乱れた心を、助広の美しい肌を眺めて、落ちつけようと思ったのに、碌なことはない。
――と、金五郎は、いよいよ腐った。
「金さん」と、いつ入って来たか「ノロ甚」が、「短刀じゃろ？ありゃあ、おマンさんが借りてゆくちゅうて、持って行ったどな」
「なんて？　おマンさんが、おれの短刀、持って行った？」
金五郎は、唖然とした。
「おれが、一人で、ここに寝ころんどったらな、おマンさんが入って来て――金五郎さんをいくら探しても、姿が見えん。相談して借りようと思うたけんど、居らんけ、仕方がない。急に、要ることが出来たけ、借りて行きます。あんた、証人になっといて。……そんなこというてな、その行李の中から、取りだして持って行ったよ」
金五郎は、立ちあがった。
貯炭場に、行ってみた。もう、みんな午後の仕事にかかっている。
探すまでもなく、マンの姿は見えた。雁爪を持って、入れ鍬をしている、きびきびした働きぶりは、いつもとすこしも変りがない。
金五郎は、狐につままれたような気がした。
マンは、金五郎の姿を見つけると、雁爪をおいて、かけ寄って来た。声を落して、
「金五郎さん、あなたの留守に、刀を借りました。吉田の子分が、仕掛けて来るかもわからんと思うたもんじゃけ……」
「刀は？」
「石炭の中に、隠してあります」
指さすところを見たけれども、黒い石炭だけで、なにも見えない。帆前掛けを外しているから、それにくるんで、埋めてあるのであろう。

（この女は、無頼漢どもが仕返しに来たら、刀を抜いて、戦うつもりじゃ）
金五郎は、マンの若々しく、どこか、あどけないところさえある顔を、おどろきの眸（まなざし）で、あらためて、見なおした。
（こういう女を、女房にしたい。これは、女の龍かも知れない）
男龍と女龍とが、仲よく、二匹ならんで、黒雲をかきわけながら、ぐんぐん、昇天してゆく幻影が、金五郎の眼に、ありありと、浮かんだ。さっきから、悄然と、地に潜る不景気な龍のことばかり考えて、気の滅入っていた金五郎は、マンの雄々しさに勇気づけられて、すこし、元気が出た。しかし、言葉では、
「おマンさん、女だてらに、あまり、事を荒立てん方がええよ」
と、たしなめた。
「それでも、身にふりかかる火の粉は、払わにゃならんけ」
「まあ、ならず者がやって来たら、逃げときなさい。……わたしは、ちょっと、森のところに、行って来る」
金五郎は、貯炭場を出た。
仲仕たちは「病院」といいならわしているが、実際は小さな小児科医院である。松野医師は子供専門なのだが、近くに医者がいないので、いつの間にか、仲仕たちの怪我人をかつぎこむ、外科医院みたいになってしまった。
石炭酸くさい廊下を抜けて、新之助の部屋に行った。若い代診に出逢ったので、容態をきいてみた。傷は二十三ヶ所ほどあるが、派手なばかり、どれも浅いから、命には別状ない——それを聞いて、安堵した。
病室の扉を、あけた。
金五郎は、ノッブを握ったまま、ちょっとの間、立ちすくんだ。まっ白に光る着物が、まず眼に入ったので、看護婦かと思ったのに、それは、昨日見た、洋装の、ハイカラ美人のうちの一人であった。
「玉井はん、おいでやす」
女の方から、声をかけて来た。
「今日（こんち）はあ」
と、仕方なく答えたが、金五郎には、なんのことやら、えたいが知れない。語調もぶっきらぼうで、怒ったようだった。
うすぎたない部屋の中に、いきなり、不似合な百合の花束を投げこんだようである。下ぶくれの丸顔で、眼元の涼しい女は、どこか打ち沈んだところがあって、おどおどしてさえいた。唇の右下にある大きな黒子が、女の顔に妖（あや）しい色気を附与している。金五郎は、たしか、この女の名は君香（きみか）というのだったと、昨夜の記憶を呼びおこした。ベッドの枕元に、ボンネットと、緑色のパラソルと、黒い絹の手袋とが、置いてある。
「新公、どうかい？」
壊れた人形を修繕したみたいに、全身、繃帯でつつまれている森新之助は、絆創膏だらけの顔を、苦しそうに、友達の方に向けた。
「殺されたかと、思うたよ」
「コレラより、よっぽど、人間の方が恐しいのう」
「ほんとに、すみまへん」と、君香は、美しい顔に、消え入

りたいような、陳謝の表情を浮かべて、
「なんというたらええか、わからしまへん。あて、なんにも知りへんのに、こんなことになってしもうて。あてらのこと、森はんが、露探(ろたん)やいうた、いうて、誰や、おたくの組の人が、来やはったけど、あて、そんなこと、なんとも思わんね。ほたら、子分さんたちが、森はんとこ仕掛けて行ってこないなひどい目にあわせて、……忠義だてらに、要らんことばっかり……吉田の親分さんは、玉井はんから、話聞きはった、いうで、あてを見舞によこしはりました。少いけど、膏薬代を、といやはって、ここに、あずかって来て居ります」
「そんな銭、要らん。馬鹿にすんな」
新之助は、苦痛に歪む顔で、唾を吐きだすようないいかただった。
「君香さん、よくわかりました。吉田親分さんのお志、ありがたく頂戴いたして置きます」
「こら、金さん、そんな汚れた銭、受け取んな」
「まあ、おれに委せとけ」
金五郎は、そういって、君香から、「御見舞」と、表に、太く墨書された、部厚な慰斗(のし)袋を受けとった。
「ほな、また、参ります。お大事に」
君香は、傘と帽子と手袋とを取ると、新之助の方にも、叮嚀に挨拶して、部屋を出て行った。しばらく、えもいえぬ芳香が、部屋のなかに、残っていた。消えるのが惜しいようである。
「敵は、どこに居るか、わからんなあ」
椅子に腰をおろすと、金五郎は、しんみりと、述懐するような語調で、呟いた。
新之助がうっかり口を辷らせた「露探」という言葉を、誰か、山下組の仲間が密告しているのである。
(世の中は、むずかしい)
人と人との関係、そのつながり、結びつき、などの複雑さ、人間の外にも、内にもいる「敵」というもの、若さの美しさと危険、これからの生きて行く前途を考えて、唇をしっかりと結んだ金五郎の厚い胸に、いろいろな想念が浮かんだ。

数日が、過ぎた。
また、なにかの波瀾が起るかと思われたが、意外にも、颱風が一過したに似て、平静だった。吉田磯吉が、子分たちを一人残らず引き具して、彦島を退散したためであろうか。
しかし、この彦島での出来事は、歴史的なものといってよかった。その禍根と、影響とは、誰が考えたよりも、はるかに、深く、遠いものとなったのである。
秋の雨が降った。それが、石炭を黒光りさせ、厳流島の横流しになった松を、よみがえらせたように、緑に染めた。晴れると、日ごとに、空も、海も、青の濃さを増す。
或る日の夕方、松野医院に、新之助を見舞に行っての帰途、道具倉庫の横で、金五郎は、マンに、呼びとめられた。
「これは、おマンさん、なんぞ、用かね?」
「ちょっと、ここまで」
金五郎は、普段着のマンが立っている、錨の傍に行った。
もう黄昏れて、煙って来た海上からの風が、冷たい。船も、対岸の門司も、灯をちりばめて、汽笛が、ときどき、海峡の

空気をふるわせる。
「金五郎さん」
「うん」
「困りますよ」
「なにが？」
「あなた、方々に、あたしと夫婦になる、というて、いいふらしていなさるらしいけど、自分勝手にきめたとて、あたしは知らないわ」
「そうかね？　困るかね？」
「あたりまえじゃないですか。大迷惑やわ」
「そうかなあ……？　わたしは、なにも、いいふらして歩いたわけじゃない。人から――玉井さんも、もう、おかみさんを貰うて、身をかためたら、どうか。……とか、ええ嫁女（よめじょ）を世話しようか、とか、いわれるもんじゃけ、そのたびに――いや、結構、わたしは女房貰うなら、谷口マンさんのような女が欲しい、と、いうたまでじゃ。他人の口に移ると、なんでも曲ってしまう。あんたと夫婦になる、って、いいふらすなんて、そんなこと、するわけがない。でも、わたしが、そう思うとることをいうのが、あんたに、そんなに、迷惑かね？」
「迷惑ですとも」
「困るかね？」
「困りますよ」
「そうか。それは、すまんじゃった。わたしはあんたが好きじゃし、ひょっとしたら、あんたも、わたしに好意を持ってくれやせんじゃろかと、思うたもんじゃけ、うっかりしたこと、いうた。勘弁しておくれ。もう、いわん。……わたしに、話があるというたのは、このことな？」
「そうです」
「そんなら、今いうたとおりじゃ。……さよなら」
　金五郎は、くるりと廻ると、すたすたと、飯代部屋の方へ、去って行った。
　その後姿を眺めるマンの眼に、不思議な狼狽の光がただよっていた。
　夕食時間なので、飯代部屋も、夫婦長屋も、これから食事がはじまるところである。マンの黒眼勝ちの瞳には、珍しく、ブラジルの天地を望む強い光より、家庭を恋している、柔い光がにじみ出ていた。
　また、数日が、過ぎた。
　金五郎は、どうしても、「ノロ甚」にかなわないので、躍起になって、連日、挑戦した。しかし、いつも、鴨になる。今日も、昼休みに、将棋をさしていると、「ノロ甚」が、いつもとすこし違う緊張の面持で、
「金さん」
「あン？」
　と、顔をあげた。
「うちの親方が、大層、あんたに、機嫌が悪いそうなで」
「なんで？」
「いつか、吉田親分のところへ、乗りこんで、かけあいに行っとろうが。あのことで――玉井の奴、おれをさしおいて、じかに、吉田の大将に面会するなんて、生意気な奴じゃ。おれの顔をつぶした。……ちゅうて、はげしゅう、怒っとるそうじゃ」

「ふウン……」
それから、また、二三番、さした後、
「金さん」
「あン？」
「あんた、谷口のおマンさんと夫婦になるそうじゃなあ」
「誰が、いうたな？」
「おマンさんが、自分で、いいよった」
金五郎は、そのことを聞くのは、はじめてではなかった。この二三日、どこに行っても、それをいわれる。それというのが、マンが、誰彼に逢うごとに、「金五郎さんの嫁女になる」と、いいふらしているらしかった。その癖、マンは金五郎に出あっても、つんと横をむいて、ものもいわずに、通りすぎてしまう。
金五郎は、苦笑する。
（おかしな女じゃ）
その夕方、新之助の見舞に行くと、君香がいた。毎日、来ているらしい。派手な洋装はやめて、簡単服のような、質素な風をしている。どこにも、ボンネットや、絹手袋、パラソルのようなものは見あたらなかった。
（なんだか、妙じゃな）
と、金五郎は、直感した。新之助と君香との関係が、あたりまえでない。――そう、気づいたのである。
もう、繃帯はほとんど取っている新之助は、ベッドの上に、坐れるようになっていた。
友人を見ると、にこにこと、
「おめでとう」と、いった。
金五郎は、眼をぱちくりさせて、
「なにが？」
「おマンさんと、いよいよ、式をあげることに、定まったそうじゃないか」
「そんなこと、誰がいうんじゃ？」
「今さき、おマンさんが見舞に来てくれてな、そういうとった」
君香が、横から、微笑を浮かべて、
「あの、懐中ランプを海にほりこんで、遊び人を向こうに廻して、勝った人でっしゃろ。面白い人やわ。あんたはんと、こんな似あいの夫婦はあらへん」
「金さん、おれが退院するまで、祝言（しゅうげん）をのばしといてくれよ」
こういう風になって来ると、話は早かった。
「なんでも屋」が、仲介役を買って出て、玉井金五郎と谷口マンとは、結婚した。
彦島の弟子待（でしまつ）に、小さい家を一軒借り、はじめて、世帯を持った。
四畳半に、三畳、それに、台所と便所とがついている。古ぼけて、屋根と壁との落ちた家、畳は破れ、天井も穴だらけ、夜になると、鼠と、蜘蛛（くも）と、蚤とが、しきりに活躍する。新婚家庭は、荒廃のかぎりをつくしていた。
新鮮なのは、金五郎とマンの心だけである。
「とうとう、一緒になったなあ」
「ウフフ……」
顔見あわせて、奇妙な含み笑いをしあう二人の心は、この結合の宿命を、おたがいの胸で、しっかりと、うなずきあっ

ているようであった。
森新之助のいったように、
「あんただち二人は、生まれん前から、夫婦になることが、定まっとったんじゃよ」
金五郎も、マンも、そんな気持がしていた。
男は四国の田舎を出発した。女は広島の山奥を出発した。どちらも、みずからの意志によって、飛びだして来たのではあるけれども、逆にいえば、追放されたに似ていた。そういう二人の邂逅(かいこう)は、単なる偶然ではないような気がする。一点から伸ばされた二本の太い綱で、ぐいぐいと、二人、同じところへ引きよせられたような、運命的な気持が、金五郎の胸も、マンの心も、領していた。
もとより、二人とも、この小さな島で、仲仕生活をしながら、一生を終る気持は毛頭なかった。寝物語は壮大である。
「わたしは、ゆくゆくは、支那大陸に渡って、一旗あげるつもりじゃ」
金五郎が、そういえば、
「あたしは、ブラジルに行って、大農場を経営したいわ」
マンは、眼をかがやかして、それをいう。
青春の夢の構図は別々で、方角は西と東とに別れていたけれども、雲を望む漂泊と放浪の思いは共通していて、どちらも、これからの人生の難行路を歩むのに、よい伴侶を得た、と満足していた。夢も健康であれば、肉体も健康であった。
下関の街に揃って出て、世帯道具を買いととのえた。あまり一度に買うと、楽しみがなくなるので、一つずつ、間に合わせの物から買った。といっても、貧乏生活で、箪笥(たんす)一本買えず、ただ、鍋、釜、バケツ、水がめ、米とぎ桶、飯台(はんだい)、箸、茶瓶、などというような、まったく、食うに必要な、最小限度のものばかり、新夫婦のくるまって寝る蒲団も、「なんでも屋」から、借りたものだった。
それでも、ぼろ家の表に、「玉井金五郎」と、自分でしたためた表札を出すと、一家の主人のような気持になる。金五郎は、小学校も満足には終えていなかったが、独特の、どっしりした、肉太の字を書いた。
「うまいもんじゃなあ」
「なんでも屋」が、表札の字を見て感心し、自分の店の看板を頼みに来たりした。
ところが、二人の新家庭は、僅か二週間と続かなかったのである。
山下松次の命を受けたといって、助役(ボーシン)がやって来た。
「お前たちは、すぐに、山下組を出てくれ。親方もこれまで我慢しとったが、どうも、お前たちのため、吉田親分に、顔が悪うなってしもうた。彦島から、一時も早う、足を抜いてくれ」
「承知しました」
と、金五郎は答えた。抗弁する気持は、はじめからなかった。
助役が帰ると、マンがいった。
「金五郎さん、これから、すぐ、出ましょうよ」
「そんなに急がんでも、ええ。新公にも、ちょっと、相談があるけ」
「あたし、こうなったら、もう、一分も、こんなところに居

るの、いややわ。それに、新さんはいませんよ。今朝、あたしが飯代部屋に寄ったら、昨日から、別府温泉に行って、半月ほど帰らん、ということでした」
「そうか」と、金五郎は、沈痛に、首を振って、「君香と一緒じゃな。傷の療養に行くのはええが、どうも、あの君香と、変な風になるのは、感心せん。新公も、考えが足らんなあ。君香は、誰か、……吉田磯吉じゃないらしいが、……その身内の、うるさい奴の二号らしいけ、どうせ、碌なこたない。いっぺん、忠告しようと思うとったんじゃが……」
「別嬪さんの誘惑にかかると、男って、もろいのね。金五郎さんも、そうとちがうの？」
「馬鹿なこと、いいなさんな」
「どうか知らん……？　わたしのほかに、女でもこしらえたら、承知せんけん」
「お前こそ、間男すんなよ」
若夫婦は、はじめての焼き餅喧嘩の真似ごとをして、げらげらと、笑いあった。
マンの意見にしたがって、すぐに、出発することにした。
「なんでも屋」や、「ノロ甚」は、おどろいたけれども、金五郎とマンとが、格別に悲しんでいる様子もないのを見て、いくらか、安堵した。島を追われる二人は、かえって、勇気凜々としているようにさえ見えた。
陰険な山下松次は、はじめから終いまで、顔を出さない。しかし、なにかの指命が組内に発せられた模様で、金五郎とマンが島を出て行くのに、仲間は、一人も姿を見せなかった。
桟橋まで、「なんでも屋」と、「ノロ甚」とが来ただけである。伝馬船に、世帯道具を積んだ。「ノロ甚」が、櫓を漕ぐ。「なんでも屋」は、餞別に、金五郎夫婦の寝ていた煎餅蒲団を、二枚くれた。
関門海峡には、どんよりとした雲が映って、重苦しい波が騒いでいる。
「さようなら、達者でな」
そういう「なんでも屋」のしょぼついた眼に、いっぱい、涙がたまっていた。
厳流島の横を通って、門司の岸壁に、伝馬船をつけた。
櫓をこいで、ふたたび、彦島へ帰って行く「ノロ甚」に、金五郎は、
「今度、逢うときは、将棋がお前より強うなって、コテコテに、やっつけてやるぞ」
と、闊達にいった。
戸畑まで行くつもりで、門司駅に行った。困った。汽車賃一人十七銭なのに、三十銭しかない。四銭、足りない。そのころ、米一升、十二銭であった。
「歩きましょう」
と、マンがいった。
「うん、仕方がない」
蒲団、柳行李、信玄袋、鍋、釜、米とぎ桶、茶瓶、などを、それぞれ、分担して、身体につけ、乞食のような恰好で、海岸添いの道を歩いた。四里ほどの道のりである。
前途は、暗澹としていた。
明治三十六年、十一月。
玉井金五郎、二十四歳。

谷口マン、二十歳。

仇花(あだばな)

二年ばかりが、過ぎる。

日露戦争は、日本の勝利に終った。

対馬(つしま)の近い北九州では、日本海々戦の砲声が、遠雷のように、聞えた。全滅したバルチック艦隊の敗残兵が、ボートに乗って、近くの海岸に流れつく事件があって、百姓や漁師たちが、鍬、鎌、櫓などをふりまわす珍騒動がおこった。

連日、威勢よく、号外のリンが、町々、村々を、かけまわる。

「どうやら、勝ち戦(いくさ)らしいのう」

「ロシヤのような大きな国に仕掛かって、日本みたいな小さい国が、ようも、ここまで、やったもんじゃ」

「図体が大きいばかりじゃあ、なんにもならん。小そうても山椒(さんしょ)はピリッと辛い。正義には、勝てるもんか」

「それでも、旅順が、なんぼ攻めても落ちんころには、ひやひやしたのう」

「日本が勝ちゃあ、港も、景気が出るばい。そん時は、ゴンゾ様々たい。……なあ、ボーシン」

呼びかけられて、金五郎は、帳面をつけていた手を休めた。

「なんか、いうたな？」

「ロシヤが負けたら、港の景気も出て、こちとらゴンゾも、芽が出ろう、というたとよ。ボーシンの考えは、どうじゃ？」

「そら、芽が出るじゃろうよ」

金五郎は、仕方なく、そう答えたが、彼の厚い胸の中の芽は、そんな、ここの港だけのような小さな芽ではなく、支那大陸へおろされ、すくすくと伸び、無限にひろがる壮大な芽であった。

（いよいよ、宿願の大陸へ渡れる時期が近づいたぞ）

金五郎の眸(まなざし)は、遠い空を望む。

金五郎の着ている印半纏の襟には、両方に、永田組の文字が染め抜かれ、上部に、助役と、赤で入れられてある。助役をボーシンというのは、汽船用語のボースンが訛(なま)ったものらしく、一つの組の世話役を意味している。ボーシンとて、一介の仲仕であることに変りはないけれども、ともかく、金五郎は、二年間の苦闘によって、一つの組の切り盛りをする立場まで、こぎつけることが出来たのであった。

二年前、妻と二人、彦島を追われて、放浪の旅に出たとき、

「どこに行っても、これというて、心服の出来る親方というのは、居らんなあ」

と、述懐しあった。

裸一貫――力と頼むのは、自分たちの身体だけしかない。金があれば、とっくに支那大陸か、ブラジルかに渡っている。でなければ、なにか、商売でもはじめているかも知れない。また、学問があれば、ちがった道の歩きようもあろう。無学で、無銭、ということになれば、資本は、ただ若く力の溢れた肉体一つ、そして、労働が生活の方便となるほかはなかった。金五郎夫婦は、その身体を、粉にして、働いたのである。

「なんでも屋」が、「まあ、行ってごらん」といって、紹介状を書いてくれた。戸畑の永田組で、どうやら、二年間、落ちついたのであった。

二千トンの高野山丸の船橋（ブリッジ）を、初秋の風が吹き流れる。昼休みの弁当を食べ終った仲仕たちの多くは、甲板や艀などに横になって、昼寝をしている。

帳面をつけ終った金五郎は、ブリッジのデッキから、はるか下につながれてある、伝馬船の艦に向かって、声をかけた。

「おうい、マン」

マンは、顔を上げて、下から、笑いかけた。

「釣れるかあ？……」

「ほうれ、こんなに」

マンのさしあげた小籠に、十匹ほどの蟹（かに）が入っている。針金で縁をつくった丸い網に、イワシの頭を入れ、ラムネの空ビンをオモリにして沈めると、蟹がかかる。

「お前のおかげで、毎日、おかずは買わんですむのう」

「米も一緒に釣れると、まだ、ええけんどね」

上と下とで、そんな話をして笑いあっているのを、艀の舷に、仰むいて寝ころんでいる、角助（かくすけ）という仲仕が、憎々しげな横眼で、睨んでいた。

まさか、顔の形から名をつけたのでもあるまいが、角助の顔はほとんど四方形である。色が青黒く、頬骨がつき出ていて、唇がひどく厚い。髭の生えかたがまばらで、不潔な雑巾のような感じがする。四十をいくつか過ぎていようか。魯鈍と、陰険と、残忍さとが、犯罪者じみた顔に、露骨にあらわれている。

（生意気な新参野郎奴）

と、その白濁した眼は、あきらかに、そういっていた。

永田組に、平尾角助は、もう、五年以上いる。順序から行けば、彼が助役になるところだが、新米の玉井金五郎から、見る間に追い越された。角助は、金五郎を憎むとともに、親方の永田杢次（もくじ）を恨んでいた。

金五郎は、デッキにもたれて、港内を見わたした。

洞海湾（どうかいわん）の風景は、関門海峡とは、また、趣を異にしている。

瓢箪形の巨大な入海は、戸畑（とばた）、八幡（やわた）、若松、という三つの町に取りかこまれ、中島（なかのしま）、葛島（かつらしま）という二つの島を浮かべている。小倉の足立山（あだちやま）、八幡の帆柱山（ほばしらやま）、若松の高塔山（たかとうやま）などの山々が、この湾を包んで、八幡製鉄所をはじめとする大小工場の煙突が林立し、煤煙が空を掩っている。港の中の多くの船舶、沿岸を走る汽車――そういうすべてのものの底から、湧きあがって来る力動的な騒音。

（ここの港は、生きている）

金五郎は、洞海湾の溌剌とした鼓動が、じかに、自分の心臓にふれて来る思いで、この風景に、不思議な魅力を感じた。

しかし、視線が、若松の方に移ると、金五郎の顔が、しかめ面になる。

（若松はうるさいところじゃ。吉田磯吉親分をはじめ、江崎満吉、友田喜造、ドテラ婆さん、などという暴力団が、たくさんいる。若松は、行くところでも、住むところでもない）

金五郎は、若松を敬遠する気持が強かった。

「金さんよい」

呼ばれて気がつくと、艀（はしけ）の舷（ふなべり）に寝ていた筈の角助が、横に、立っている。

「なんですか？　角さん」

金五郎は、角助が、日ごろから、自分に悪感情を抱いていることはよく知っていたが、格別警戒する気持はなかった。

角助は、醜悪な顔に、狡そうな笑みを浮かべて、
「あんたに、頼みがあるんじゃ」
「どんなこと？」
「おれを、退(の)け者にせんでくれ」
「角さんを、誰も退け者にしやせん。それは、ひがみですよ」
「おれを押しのけて、あんたがボーシンになったことは、おれに力がないんじゃけ、もう、いわん。じゃが、永田組では、おれは古参じゃけ、交際(つきあい)には外(はず)して貰いとうないなあ」
「意味が、よく、わからん。はっきり、いうて下さい」
「今度、聯合組(れんごうぐみ)の秋の遠足で、武蔵温泉(むさしおんせん)に行くちゅうじゃないか」
「そうらしいです」
「それに、おれを入れてくれ」
「そんなこというても、わたしは下ッ端じゃから、わたしの考えでは、どうにもならんですよ」
「うちの親方が、呑んだくれの助平で、能なしと来とるもんで、はがゆうて、たまらん。大事な組の仕事はほったらかし、酒ばっかり酔いくろうて、メカケのところに、入りびたっちょる。おれたちのこと、碌(ろく)に、面倒もみてくれやせんし、考えたこともない。今度の遠足だって、おれを外すなんて、親方の糞たれ奴」
角助が怒ると、顔が、化けもののようになる。
金五郎は、不快な気持をおさえて、
「そんないい方をしては、いけませんよ。永田の親方は、ええ人です」
「そら、そじゃろ。あんたは、可愛がって貰うて、若い身で、ボーシンに引き立てられたんじゃ悪うはいえまい。……ま、そんなこた、どでも、ええ。今度の遠足に、おれをつれて行って貰や、おれの顔が立つんじゃ。永田組の角、というて、古くから、名が通うっとるに、外されたんじゃ、この港を、向こうむいて、歩けん」
「弱ったなあ」
「弱るこたないじゃないか。あんたが遠慮すりゃ、おれが行かれる。それくらいの仁義は立てても、ええじゃろ？」
角助は、強引である。
下の伝馬船の艫(とも)から、マンが、心配そうな顔で、ブリッジを見あげている。なにかはわからないが、夫が、悪漢に難癖をつけられて、困惑している様子だけはわかる。
マンは、はがゆかった。金五郎が、強そうで、気の弱いところもあるのを知るようになっていて、
（どうして、角助なんかのいうことに、一々、かかりあうのか）と、じれったい思いで、いらいらした。
その夜、マンは、金五郎から、角助の申し出を聞かされて、笑いだした。
「なんですか。そんなことやったの？　角助に、なんの仁義を立てるの？　どんなことがあっても、あんたが、行きなさいよ」
と、強く、武蔵温泉行をすすめた。
その旅先で、どんな途轍もないことが起るか、もとより、マンに、わかろう筈はなかった。
遠足の当日は、あいにく、雨になった。しかし、風をとも

なわぬ、春雨のような、しっとりした降りかたで、かえって、旅情を添えるものといえなくもなかった。
戸畑駅は、閑散である。九州鉄道の幹線が開通し、この戸畑町に停車場が出来たのは、三年ほど前、人口も、六千人に半満ちているにすぎなかった。しかし、筑豊炭田を受ける洞海湾の一角の町として、海岸には、鉄道院が設備した、近代的な炭積機械が、巨大な鉄の昆虫のようにそびえ立って、秋の雨に濡れている。牧山にあるホイスト・クレーンの繋船壁も、工事が進行中で、もう、完成が近い。
雨中に煙る、こういうものを眺めながら、大庭春吉は、かたわらの金五郎をかえりみて、
「港も、石炭にかけちゃあ、盛になるばっかりじゃなあ。今に、日本一になるぞよ」
と、蛭子顔で、いった。
「さようですなあ」
金五郎は、そう返事はしたものの、上の空である。さっきから、きょときょとと、駅前の方角を、不安の眸で、眺めまわしている。
大庭春吉は、それに気づいて、
「永田を待っとるのか？」
「はい」
「ほっとけ」
その語調は苦々しげで、放棄的だった。さっきの蛭子顔が、鍾馗面に、一変している。
「でも、たしかに、来ることになっとるんですが……」
「あんな奴、来にゃ来んでもええんじゃ」
「いえ、今日は、どうしても、来て貰わんことには……」
金五郎にとっては、港が日本一になるよりも、今は、親方の永田杢次の不参が、はるかに重大問題であった。このごろの永田の不行跡は、仲間うちでも、眼にあまるものとされている。もし、今日の、聯合組の親分衆の集まる遠足に洩れたならば、交際を知らぬ者として、進退問題になりかねない。金五郎は、気が気ではない。
やがて、雨合羽をまとった駅の小使が、停車場前の広場に、大きな振鈴をぶら下げて、出て行った。それを、カラン、カラン、カラン、と、大きく振って鳴らしながら、
「汽車が出ますよう、……汽車が出ますよう」
と、どなりだした。五分前である。
金五郎が、なおも、気をもんでいると、前方の町角を、番傘をさしたマンが、駈け足で、急いで来る姿が見えた。やっと、駅にたどりつくと、ふうふうと、息を切らしている。
「どうしたんじゃ？」
「あなた」と、マンは、夫を物かげに引っぱって行き、「気をつけて下さいよ。角助さんが、どこかで、あなたを汽車から突き落してやる、というて、小倉から、この列車に乗りこんだらしいです」
「ふウン」と、金五郎も、ちょっと、眼をぎらつかせたが、「それより、親方が来んが、お前、知らんか」
「また、メカケのところで、飲んだくれとるのでしょ。仕様がないわねえ。……どこが、あんな女、ええのか知らん……？」
マンは、歯ぎしりしそうに、口惜しい顔になる。
発車間際になって、一台の人力車が、「アラヨッ、アラヨッ」

と、やけ糞のような掛声で、駅に向かって、疾走して来た。饅頭(まんじゅう)笠をかぶった車夫の顔からは、雨と汗とが一緒くたになって、だらだら流れ、白い湯気が立っている。

幌(ほろ)をめくると、永田杢次と、メカケのサクとが、一緒に乗っていた。泥酔している永田は、ナマコのように、骨なしになって、サクの膝のうえにうつぶし、ほとんど、意識がない。

「親方、しっかりしなさい」

金五郎は、永田を、ひっかついだ。たくましい金五郎のひろい肩のうえに、小柄な永田の身体は、セメント袋のように、軽々と、乗った。

「ああ、間に合うて、よかったわ」

サクも汗だくで、ほっとしたように、呟きながら、車夫へ金を払った。

列車が、プラット・フォームに、入って来た。

「大庭の親分さん、ちょっと、汽車を待たせといて下さい。切符、買うて来ますけ」

金五郎は、乗車券売場の窓口に行った。行先をいい、金を出した。

気がつくと、すぐ後に、くっつくように、サクが立っている。切符を買うつもりらしい。

「おサクさん、あんたは行かんでも、ええです。親方には、わたしが、ついとる」

「いいえ、あたしが傍に居らんことには、旦那は、赤ン坊とひとつことですから……」

マンが、横から、はがゆそうに、

「親分衆の集まるところに、おメカケさんなんか、行くものがあるもんですか。そんな出しゃばりしたら、永田の親分に、わざわざ、恥かかせるようなもんやわ」

そんな騒ぎをおぼろげに聞いていて、金五郎の肩のうえの永田杢次は、口の中で、なにか、しきりに、ムニャムニャと、呟く。涎(よだれ)が、金五郎の着ている、セルの単衣(ひとえ)をつたって落ちる。なにをいっているのかわからないが、サクの名が、数度、呼ばれたようであった。

改札口を出て、汽車に乗った。乗客たちが、なにごとかと、この騒動を見物している。

駅長が、ピリピリピリと、笛を吹いて、手をあげた。土地の顔役である大庭春吉の頼みで、永田と金五郎とが乗りこむまで、一分足らず、待ってくれたらしい。

列車が動きだしてから、サクが、あわてて、飛び乗った。客席はすいていた。永田を二人分の座席に寝かせると、サクがやって来た。仕方なしに、委せた。

「大庭の親分さん、すみません」

サクは、首をちぢめる恰好で、遠慮勝ちに、そういったが、大庭春吉は渋茶をのんだ顔つきで、返事をしなかった。しかし、サクは、他人がどう思おうともかまわぬといった態度で、永田の傍により、これをいたわり、介抱した。もとは、左褄をとっていた女なのに、そんな派手さや、なまめかしさは、ちっともなく、むしろ、地味で、看護婦のようなところがあった。

九州本線と、筑豊線とは、折尾(おりお)駅で交錯する。若松から、博多、熊本方面に行く者は、ここで、乗り換えるのである。そういう人たちが、折尾で停車した列車に、どやどやと、乗

りこんで来た。
　その新しい乗車客たちを眺めていた金五郎は、あっけに取られた顔になり、眼をぱちくりさせた。
「やあ、大庭の大将」
「これは、皆さん、お揃いで……」
　聯合組の親分連中は、大庭春吉と、口々に、そういう挨拶を、とりかわした。
「杢次どんは、相かわらず、もう、グデ助じゃのう」
　とか、金五郎を見つけて、
「永田の大黒ボーシンも来ちょるな。いっぺん、君とゆっくりやりたいと、思うちょった」
　などと、いう者があった。
　金五郎も、それぞれ、適当に挨拶をしたが、今度の遠足のつれの、派手で、賑やかで、闊達で、色っぽくて、だらしのないことに、一驚せざるを得なかった。
　列車は、折尾駅を出発し、なお降りしきる雨の中を走る。沿線は一面に緑の畳をしきのべた稲田である。案山子のおどけた顔が、いくつも、窓外を後方へ飛ぶ。
　眼をさました永田杢次は、ゆらゆらと立ちあがった。サクにつき添われ、
「よう、お歴々」
　と、呂律のまわらぬ舌で叫んで、新しい道づれの中に割りこんで行った。
　そこでは、もはや、酒盛である。阿鼻叫喚の巷といってよい。他の乗客の迷惑などは、おかまいなし、どこかの料亭の大広間で、宴会でもしているつもりらしい。二十人近い同勢のほとんどが、相当に酔いを発していて、特に、永田杢次の酔態が目立ちはしなかった。げらげらと、間断なく笑う。
　金五郎が、眼をそばだてたのは、親分たちの半数以上に、一人ずつ、女のくっついていることである。いずれも、馴染らしく、メカケか、芸者か、娼妓か、女給か――細君らしい者は一人もいない。
「なんじゃい、永田の大黒は、独り者かい？　そんな野暮人でもなさそうな顔しちょるが、ほれ、こいつででも、間に合わせちょけ」
　そんなことをいって、カフェの女給らしい女を、金五郎へ、どんと押しつける親分もあった。
　列車は、ゴウと音を立てて、長い鉄橋をわたった。金五郎は、雨に煙るひろびろとした川面を眺めながら、呟いた。
（遠賀川、……川筋……）
　石炭が、この遠賀川を、川舟によって積み出されたことに起因して、いつか、川筋気質というものが発生した。それは、吉田磯吉をはじめとする仁侠の風となって、北九州の地を掩うている。親分といわれる者はもとより、石炭仲仕でさえ、普通の労働者とは異って、博徒、やくざ、遊侠の気風を帯びていた。
　金五郎は、盃を手にしながら、あらためて、一つの決意に、眼を光らせる。
（どんな世界でも、拒否してはならぬ。ぶっつかり、これを乗り越えねばならぬ）
　ただ、前進あるのみだ、と思う。
　郷里を飛びだしてから、転々した。門司に来て、浜尾組、

下関にわたって、山下組、今は、戸畑の永田組――新しい世界の展開につれて、新しい知人も出来る。それらは、すべて、龍となって昇天する道程で、踏破して行く山であり、峠であり、峯々だ。

（引きかえすな。ただ、前へ）

金五郎は、眉をあげる。

列車は、博多をすぎて、二日市駅着。下車した一行は、なお止まぬ雨のなかを、鉄道馬車で、武蔵温泉へ向かった。

筑紫館に、宿を取った。

浴衣に着かえ、まず湯に入ったりしているうちに、黄昏れて来たが、雨は止まない。街には、柳の並木が風にゆれ、遠く、太宰府の背後に聳える宝満山の暗いいただきは、低い雲ととけあっている。

「みんな、自由行動にしよう」

遠足団長格の田中光徳親分が、いう。

いわれるまでもなく、はじめから、勝手な行動を取っている腕白連中は、夜に入ると、それぞれ、自然に、「飲む」「打つ」「買う」の三班に分れた。

しかし、もとより、出鱈目な者ばかりであったわけではなく、庭に面した広間に集まって、真面目な話をしている親分連もあった。

大庭春吉が、ぽつりぽつりと、重い口調でいっている。

「聯合組も、もっと、しっかりせんと、共働組に、仕事を食われてしまうぞ。なにしろ、相手は、吉田磯吉の一の子分の友田喜造じゃけなあ。……どうも、いざとなると、腕力で来るんじゃけ、うるさいわい」

「港の仕事にまで、ドスを持って、食いこんで来られちゃあ、たまらんなあ」

「なあ、玉井」

と、縁側で、助役仲間と、盃片手に、将棋をさしていた金五郎へ、大庭春吉の顔が向いた。

「はあ……？」

ふりかえると、

「永田杢次はあげな風で、さっぱり、頼りにならん。玉井、ゆくゆくは、お前のような、しっかりした若い者に、聯合組を守って貰わにゃならんど」

「いえ、わたしなんぞ、……」

金五郎は、びっくりして、尻込みした。

このとき、廊下に、草履の音がして、襖が開いた。一人の若い女が、顔を出して、

「盆が始まります。親分衆たち、どうぞ」

「打つ」組の案内らしい。

金五郎は、眼を凝結させた。そこは、いくらかうす暗くて、女の顔は、はっきりと見きわめられなかったのに、金五郎の胸は、もう、ドキドキと、波打ちはじめた。銀杏返しに、黒襟、面長の顔――正面を向いていて、見誤まりはなかった。二年前、道後で、一度逢ったきりなのに、必要に応じて、その全容が再現される、金五郎にとって、不可解な存在の女。彦島で、二度も横顔のよく似た女に、はっと、鼓動を感じたが、今度は、正真正銘、ほんものであった。

先方は、そんな金五郎に、まだ、気づかないらしい。中膝になって、三本指をつき、

「二階の「菊の間」でございます」
と、丸味のある声でいう。
「玉井、行ってみるか」
そういって立った大庭春吉の声に、金五郎も、ふらふらと、立ちあがった。
廊下づたいに行った。夜の庭では、竹林が雨にたたかれて鳴っている。ホオズキを噛むような声で、鳴いている蛙。泉水(せんすい)の音。
曲り角の便所のところに来ると、大庭春吉は、小便をもよおしていたとみえて、「ちょっと」といって、引戸をあけて入った。
それを待つ姿勢になったとき、先に立っていた案内の女と、金五郎との視線が合った。
「お久しゅうございます」
その金五郎の言葉に、銀杏返しの女は、きょとんとした顔つきで、若い男の顔を見た。
暗い電燈が、ついている。
「お忘れですか。いつぞや、道後温泉の「四国屋」で、お目にかかりましたが……」
「ああ、あのときの……」
女も、やっと気づいたらしく、あらためて、眼に力をこめて、金五郎を見なおした。
金五郎は、耳まで赤くなるほど、顔が火照(ほて)ってはいたが、いくらか、気分は落ちついていた。
「あれから、もう、三年ほどになります」
「忘れてはいませんわ。……そうですか。立派におなりになって……」
それは、お世辞かも知れなかったけれども、たしかに、あのときは、四国の土百姓で、見るからに田舎者然としていた金五郎は、この三年ほどの間に、どこかに、泥と垢との抜けたところが出来ていた。眼の光も、ちがっている。
そういえば、女の方も変っている。あのときの若さと堅さとにくらべて、妖(あや)しいばかり、爛熟(らんじゅく)したものを感じさせる。堅肥りしていて、やや受け口の厚ぼったい唇にも、青んだ細い眼にも、二重にくくれたふくよかな顎にも、胸をどきつかせるような色気が、みなぎっていた。元禄模様の単衣を、キリッと締めあげた博多帯が、全身にあふれている妖気に似たものを、発散させる噴霧器の役をしている。赤い緒の草履を、無造作につっかけた、指のしなった素足が美しい。
女は、急に、いきいきと、切れ長の眼をかがやかして、金五郎に近づき、
「奇遇ですわね、三年も経って、こんなところで、お目にかかるなんて。でも、あたし、ほんとに、あなたのこと、ときどき、思いだしましたわ。「四国屋」での印象、忘れられないんですもの。だって、素人の方で……ことに、あなたは初めてらしかったけど、……あんなに、あざやかな勝ちっぷりを見せた人なんて、やくざ渡世の永年に、一度も見たことなかったわ。玄人連中が、アレヨ、アレヨ、とあっけに取られている顔つきったら、なかったのね。半方(はんかた)の定張(じょうば)りで、一度もくずれずに、あっさり、勝ち逃げ。……ホホホホ、……後で、関東の親分衆が――あれは、なんだ？　素人面して、鬼殺しじゃねえか。……なんて、話してましたよ。……でも、一度

っきりだったのね。こんなところで、お逢いできるなんて……」
便所から出て、手水を使っていた大庭春吉が、
「なんじゃ、玉井は、その姐さんとは近づきかい？　隅に置けんなあ」
と、笑った。
二階の「菊の間」に行った。客が揃わないので、盆莫蓙はまだ始まっていなかった。やがて、二十人ほどになると、開帳された。もう、こういう雰囲気にも、金五郎はおどろかない。
銀杏返しの女が、半方の中央に位置して、壺振りをやるらしいので、金五郎は、丁方に廻った。壺をあつかう柔軟な女の手つきを、眼を皿にして見た。
「勝負」
その丸味のある声を、金五郎は、三年ぶりで聞いたのである。右腕をまくると、牡丹に蝶の美しい彫青が出た。
二つの骰子を壺笊に入れ、女が白い手で、ぱっと伏せる。骰子はカラカラッと鳴って、静まる。狐、狸、猿、狼、虎――瞬間の輸贏に賭ける、いろいろな眸を、客たちは女の手元に集中する。壺笊が、勢よく、あげられる。
「丁」
その女の声で、一座の悲喜こもごものざわめき。
客は、温泉へ集まった各方面の旅人ばかりで、聯合組の親分連の顔は、五六人しか見えない。
「打つ」組より、「飲む」「買う」組の方が多いらしい。しかし、他の客も、炭鉱主、土木建築業者、請負師などが多く、賭金の額はかなりだった。日ごろ温厚な大庭春吉も、思いきった金を張っている。
たかが、一助役にすぎない金五郎は、こういう旦那ばくちに入る柄ではなかったが、大庭親分が、資本を貸してくれたので、大胆な張りかたをすることが出来た。
七八回、勝負がすすんだとき、金五郎は、妙なことに気づいた。
銀杏返しの女が、鉄火の道ひと筋で、三年前より、さらに、手練が習熟していることは当然だが、金五郎は、その女の鮮やかな壺ふりの手つきに、ふと、なにかのかげを感じた。乱れを感じた。そうすると、
「勝負」
といって、一座を見まわす女の張りのある声にも、眼にも、なんとなし、わざとらしい、詐術めいたいろが看取される。
金五郎は、どきっとして、槍の眸で、女の手元を睨んだ。直感は誤まっていなかった。おどろいた金五郎は、狼狽する気持で、立ちあがった。躊躇しては居られなかった。
「ちょっと、壺ふりの姐さん」
と、女を呼んだ。
「あたしですの？」
「そうです、すみませんが、ちょっと、廊下まで……」
満座の不審そうな視線のなかを、二人は、廊下に出た。
雨ははげしくなっていて、竹林の奥のどこかで、滝のように、水の流れる音がしている。
「なにか、あたしに？……」
「姐さん、壺笊を取りかえて下さい。インチキはいけません。

わたしが気づいたからよかったものの、他の客に知れたら、大変なことになります。相当にうるさい親分衆がいますから」
女も、多くを聞かなかった。
「わかりました」
青ざめた顔で、一言いったきり、くるりと廻転して、盆茣蓙にかえった。
どうも、変なので、はじめは、骰子に仕掛けのある道具賽を使っているのかと思った。しかし、眼を金盥にしてみて、壺笊の一部が巧妙に偽装してあって、外から中の殻子の目が読めることがわかったのである。女とぐるの仲間が、それによって、莫大な勝ちかたをしていた。
金五郎が、座に戻ると、横にいた大庭春吉が、にやにや笑いながら、細い声で囁いた。
「おれが、満座のなかで、ばらしてやろうかと思うちょったんじゃが、……玉井、お前は、ええとこがあるのう」
一時間ほど、盆茣蓙につきあっていたが、「打つ」のにも飽いて、大庭春吉と金五郎とは、「飲む」方に、鞍替した。勝負はほどほどで、痛くも痒くもない程度だった。
階下の大広間「松の間」に、「飲む」組が屯(たむろ)していた。十二三人の聯合組連中に、つれて来た女たち、土地の芸者が加わって、乱痴気騒ぎである。
「こら、永田の大黒、どこ行っちょったか。今夜は、お前を酔いつぶさにゃ置かんど」
何人もの親分が、金五郎に向かって、それと似た言葉を、口々に投げた。霰(あられ)のように、盃が飛んで来た。
永田杢次は、サクに膝枕させて、死んだように、のびている。金五郎が、「永田の大黒」と呼ばれるのは、永田組の大黒柱という意味だ。永田組は玉井金五郎がいなかったら潰れる――それが、通り相場になっていた。
「お酌をしましょう」
横で、なまめいた女の声がした。ふりかえると、いつ来たか、賭場にいた銀杏返しの女が、にこにこ顔で、銚子をさしだしている。
「疲れたので、盆から抜けて来ましたわ。ここで、しばらく、遊ばせて貰っていいでしょう?」
「それは、ええですよ」
金五郎は盃を取って、女の酌を受けた。ぐっと干してから、女にさした。酒の方も、女はなれた手つきである。
「ほんとに、久しぶりでしたなあ」
金五郎は、だいぶん、酔っていた。なんだか、夢幻のような気持である。
「あなた、玉井金五郎さんとおっしゃるのね。聞いたわ。あなたのおかげで助かりました。お礼に、お酌をします。今夜は、ゆっくり、飲みましょう。いろいろ、話したいこともあるし。……あたし、京子といいます。お京、と呼んで頂戴」
女は、金五郎へ、しなだれかかるように、寄り添った。木犀(もくせい)の花の香のような、官能をえぐる、誘惑的なにおいが、こころよく、金五郎の鼻をくすぐる。
「お京さん? ……ええ名じゃ」
と、金五郎は、柄にもないお世辞をいう。
「おつれさんがた、どういう方ですの?」
「北九州の親分さんです」

「親分といってもいろいろあるわ」
「石炭の親分ですよ」
「炭鉱を持ってらっしゃるの？」
「いんや、その炭鉱から出る石炭を、港で積む親分です。三井、三菱、安川、貝島、麻生、古河、……そんな金持の炭鉱が、筑豊炭田に、たくさんあるでしょう。その石炭が、汽車や、川舟で、洞海湾（どうかいわん）に出る。若松港に入っとる汽車や、帆船に積みこまれて、上方（かみがた）の方に送られる。その積みこみを請けあうとるのが、親分さんたち。……ほら、あそこの大庭春吉親分、田中光徳親分、そんな親分衆が、請負師で、聯合組というのを作っていなさるんじゃ」
「金五郎さんは、その子分なの？」
「いんや、子分の子分です。聯合組に、何人か、小頭（こがしら）ちゅうのが居る。まあ、下請けみたいなもんじゃな。自分で、仲仕を抱えて、伝馬船、その他、道具一切を持って、現場の仕事をやるんです。……あそこに、女の膝で寝とる人が、小頭の永田杢次さん、わたしの親方じゃ。……向こうで、ステテコ踊っとるのが、小頭の安藤親分……」
「金五郎さんも、いずれは、立派な親分さんになるのね」
「とんでもない」
金五郎は、しだいに、呂律が怪しくなって来た。
一座は、男と女と入りみだれる乱戦になっていて、金五郎とお京とが、さしつさされつしながら、親しげに話している姿など、格別に、目立ちはしない。誰一人、注意する者もない。それどころか、痴呆的な頽廃の雰囲気は、夜が更けるとともに、さらに、濃密になる。

甘い言葉で、巧妙に盃をさすお京の酌で、金五郎は、酔眼朦朧となった。そのぼんやりと霧をかけた瞳に、うす化粧しているお京は、夢幻の女のように、妖艶に映る。
「金五郎さん、逢いたかったわ。道後の初会のときから、あなたのこと、忘れたことなかったのよ。いつか、逢えると思ってた。今日逢えて、うれしい」
「わたしもですよ」
そんな出鱈目の言葉が、自然のように、口をついて出る。
「さあ、酌をさせて」
「お京さん」
「あい」
「あんた、さっき、なにか、わたしに話があるというたなあ？」
「もっと飲んでからで、いいわ」
盃が、梭（ひ）のように、二人の間を往復する。金五郎も弱い方ではないが、お京の強さはおどろくばかりだった。金五郎と対等に飲んでいるのに、男の方は、深酒とともに、意識不明になって行き、女の方は、いよいよ、青くなって、冴えかえる。胸に一物あるので、酔わないのかも知れない。
「女なんかに、負けてたまるもんか。……馬鹿にすんな」
そんな負け惜しみを、くどくどと、くりかえしていた金五郎は、遂に、前後不覚に、酔いつぶれた。……
どれくらい、時間が経ったか。
ふと、眼をさました金五郎は、あたりを、きょときょと、見廻した。森閑と、静まりかえっている。先刻のどんちゃん騒ぎも、聯合組の仲間も、大広間も、いつの間にか消えて、六畳ほどの一室に、一人、寝かされている。格子天井の中央

にある電燈がまぶしい。眼球が痛く、にぶく頭がうずいて、まだ、酔っているようだった。
欄間に下げられた風鈴が鳴っている。外では、雨の音が、蛙の声をまじえて、聞える。
様子がまるでわからないので、夢でも見ているのかと思っていると、
「お目ざめ？」
その声に、びっくりして、ふりかえった。
お京が、坐っている。あおむけになった金五郎の左肩のところにいた。なにをしていたのか、金五郎が、ふりむくと、手に持っていた筆を、かたわらの小机のうえに置いた。下から見あげると、下顎のくくれが一層ゆたかで、白い富士額には、うすく、汗がにじんでいる。
お京は、不思議な微笑をたたえて、
「金五郎さん、起きて、鏡をごらんなさいな」
と、いった。
「鏡？」
奇妙なことをいうと思い、酔いしれて、鉛のように重い上半身を、やっと起した金五郎は、思わず、あッ、と、叫び声が出た。
眉をつりあげ、団栗眼をむいて、正面の大きな鏡台の中を、睨んだ。
いつ裸にされたのか、むきだしになった両腕に、左右とも、絢爛たる彫青がほどこされてある。よく見ると、左腕には、黒雲をかきわけて、天に顔をあげている昇り龍、右腕には、地に鼻先をむけている降り龍、その二匹の龍とも、らんらんときらめく巨大な眼、弾力のある長い鬚、つき立った角、張りのある鱗、焔のような尻尾、朱でいろどられている蛇腹などが、ものすさまじくいきいきとしていて、どちらも、前肢には、宝珠がつかまれている。
それは、金五郎の肌理のこまかい、光るばかりの白い皮膚のうえに、青々と、美しく、浮きあがっていた。
「金五郎さん、いかが？」
あまりのおどろきで、返事の出ぬ金五郎は、両手で、交互に、自分の腕をさすってみた。生身の腕と、鏡の中とを、いく度も見くらべた。腕の彫青が、彫られたものではなく、絵筆によって描かれたものであることは、すぐわかった。
やっと、われにかえったように、金五郎は、女の方を向いた。
「お京さん、これ、あんたが描いたのですか」
「そうよ。お気に召して？……」
金五郎は、唸った。あらためて、お京の顔を見なおした。
「これも、あたしが、自分でやったの」
そういったお京は、いきなり、くるりと、着物の右袖を、肩のつけ根までまくった。牡丹に蝶の彫青のある腕を出すと、それを、金五郎の左腕に、ぴったりと、くっつけた。
「自分でやった、というのは？」
「あたしが、彫ったの」
「あんた、彫れるのかね」
「彫れるわ」
金五郎は、道後温泉での記憶を呼びおこした。鍛冶屋の清七と二人、「神の湯」に行ったとき、全身に、般若の総彫青をした若い男に逢った。その三ン下博徒に逢ったのが、お京を

知るきっかけになったのである。
　お京の素姓は、まだ、わからない。若い女の身で、鉄火の世界を渡り歩いていることだけは明瞭だが、どんな閲歴（えつれき）を持ち、どんな親分の後楯があるか、さっぱり、わからない。温泉地を経めぐって、地方の旦那衆をカモにしている渡り師のようにも思われるし、彫青の技倆も相当らしいから、そっちの方が本職のようでもある。そういえば、仇っぽい女彫青師（ほりものし）の話を聞いたことがあるような気がする。しかし、それがこのお京であるかどうかはわからない。いずれにしろ、金五郎にとっては、謎の女である。そして、金五郎は、以前、お京に、危険な毒を感じていたのに、今、その毒気にあてられていながら、妙に、こころよい夢見心地になっているのであった。
　総身彫青の男のことをきいてみると、
「ああ、般若（はんにゃ）の五郎さん、……さあ、どうしましたかねえ。風来坊だから、風吹くまま、どこをうろついてるやら、わかりはしないわ」
　お京は、問題にしていない風だった。
　二本ならべた模様のある腕が、鏡に映っている。金五郎の昇り龍が、お京の牡丹の花を、食べようとしているように見える。お京のやわらかい腕から、生あたたかい体温が伝わって来て、金五郎は、変な気持になって来た。
　遠くで、三味の爪びきの音がしている。

愛憎

四五日来の雨があがると、夏がぶりかえして来たような残暑が、人々をうだらせた。ツクツク法師も戸まどいしたようで、また、森では、油蝉が鳴いた。

マンは、土間に、莫蓙をしいて、ワラジを編んでいた。

台所の七輪にかけた鉄瓶が、シュンシュン、鳴っている。飯台のうえには、ちゃんと夕食の支度がととのえられ、金五郎の好きなイワシを煮た鍋、焼き茄子、豆腐汁、などの横には、一合徳利も置いてある。茶碗も、皿も、箸も、それぞれ、二人前、いつ、夫が帰って来ても、すぐに、一緒に、晩飯が食べられるようになっていた。マンの膝の上に一匹、方々に、五六匹の猫が散在している。

三足目のワラジを編みかかったときには、外は、そろそろ、暗くなっていた。

「今日も、帰らんのか知らん……?」

マンは、黄昏の表を見て、ふっと、ためいきのように、呟いた。

下駄の音が、聞えた。

(帰って来たわ)

心をはずませて、立ちあがると、入口に、永田親方の細君、ヨネがあらわれた。茂次平という、八つになる男の子の手をひいている。ヨネは、三十を幾つかすぎているが、いつも、マンをはがゆがらせるほど、おとなしく、従順で、すべてが地味な女だった。いつも、なにかにおびえたように、おどおどしている。

「これは、お姐さん、どうぞ、お入り下さって……」

夫かと思ったマンは、がっかりしたが、なにげない顔で、ヨネを家の中にみちびいた。

ヨネは、家中を見まわしていたが、

「金さんは、まだ、帰らんとな?」

「はい、帰りません」

「おかしいなあ……?」

「親方さんは?」

「うちのも帰らんけんど、うちのは、いつものことじゃけ、不思議なこたない。女をつれて出たら、一週間や十日、鉄砲玉になることは珍しゅうない。金さんが、遠足に行ったきり、五日も帰らんのは、変じゃな」

「お姐さん、仕方ありませんですよ。あきらめています。男商売は交際が大事、女房のさびしいくらいは、我慢します。女房にゴマすって、交際を怠るようでは、世間を大手ふって通られませんけ」

「そら、わかっとるがな、大庭の親分さんも、田中の親分さんも、聯合組の遠足のつれは、もう、二三日前、みんな、帰っとるばい。帰らんのは、うちと、金さんだけじゃ」

「わかりました。玉井は、永田親方さんの守りをしとるとです。親方思いですけ……」

「守りは、おサクが居る筈じゃがなあ」

「女に委せては、居られんとでしょう。そのうち、親方さんのお伴して、帰って来ますわ。……お姐さん、番茶でも」

「はい、おおきに」

ヨネは、お茶を飲み、十分ほど、話して帰った。夫の放埒と、メカケの愚痴ばかりである。

その夜も、マンは、一人で寝た。

助役(ボーシン)になってから、すこし大きい家をあてがわれた。といっても、部屋仲仕のいる長屋の一角、六畳と四畳半、二間の古ぼけた家である。それでも、彦島の家より、ずっと上等であった。

深夜、マンは、奇妙な物音に、眼をさました。

裏木戸をこじあける音、やがて、足音を忍ばせて、何者かが、マンの寝ている六畳の部屋へ、近づいて来た。

マンは、耳をすました。

月が出ているのか、表からの光で、家の中は、ぼうと明かるい。そのうす明かりで、枕元の置時計が見える。何時ごろかと思い、顔を近づけると、そんなことしなくてもええですよ、というように、チン、と、一つ、一時を打った。外では、風が吹いている。

足音は、襖の根に来て、立ちどまった。息を殺して、中の様子をうかがっているらしい。

マンは、蒲団の中に腹ばいになって、

「あなた、ですか？」

と、声をかけた。

夫が帰ったのではないか、と思ったのである。剽軽(ひょうきん)なところのある金五郎は、夜おそくなると、よく、こっそり、入って来ては、マンをおどかすことがあった。それは照れくささをごまかしているのだが、今夜も、五日も留守をあけた気兼ねで、そっと、忍びこんで来たのかも知れない。

「あなた、でしょ？」

と、もう一度、いった。

ガタガタと、あわてふためいた開けかたで、襖が開いた。頬かぶりした、菜ッ葉服姿の男が、調子の狂ったゼンマイ人形のように、騒々しく、おどりこんで来た。

マンは、びっくりして、蒲団のうえに、はね起きた。坐ったまま、急いで、寝巻のうえに、着物をひっかけた。

「どなたですか？」

「泥棒様じゃ、さ、騒ぐな」

右手に、出刃庖丁を持っている。それを、マンの鼻先につきつけた。月光のほてりで、ずんぐりした兇器の厚ぼったい刃が、にぶく白い。その庖丁に、マンは、鉄と魚のにおいをかいだ。ところが、よく見ると、その庖丁は、まるで電気アンマの機械のように、間断なく震動している。つまり、泥棒が全身をわなわなとふるわせているのにつれて、庖丁も動いているのである。泥棒は、終始、そわそわと、落ちつかず、あたりをきょろきょろ見まわす。足袋跣足で、足ぶみをしきりにして、片時も、じっとしていない。騒いでいるのは、泥棒の方だ。

マンも、一時はおどろいたが、泥棒の様子を見て、まもなく、落ちついた。

ほろ酔いで帰った金五郎が、いつか、これと同じ恰好で、マンをおどかしたことがある。しかし、眼前の泥棒は、夫とは似ても似つかぬ貧弱な体格で、声にも、凄味がない。嗄(しわ)がれたふるえ声である。もう五十歳を越えた年配かと、推定された。

「お金が要るんですか？」
「あ、あたりまえじゃ。……か、か、……金が要るけん、ど、泥棒に、入ったんじゃ」
「今、あたしとこ、金ありませんわ。夫が、旅行に、財布をさらえて持って行ってしもうたし、……この二三日、仕事もあぶれとるもんで……」
「う、嘘をこくな。は、は、早く、銭を出せ」
「どうしても、要るんですか？」
「どうしても、い、要る」
「困ったわねえ」マンは、ちょっと小首をひねったが、「そんなら、十分ほど、待っとって下さい。借(か)って来てあげますけ」
「まちがうなよ」
「煙草でものんで、一服していらっしゃい」
マンは、立ちあがると、そういい残して、裏口から、出た。
静まりかえった深夜の街を、襟をかきあわせて、急いだ。
十五夜近い月光が明かるいので、そんなにさびしいとも思わない。故郷の山奥はもっとさびしかった。しかし、音も人影もない月夜の静寂さは、どこかに、故郷の谷を思い出させるものがあって、マンは、唐突に、郷愁を感じた。どこかで鳴いた犬の声が、狐の声のように、耳にひびいた。
（みんな、どうしているだろうか？）
父の顔、母の顔、弟の顔、それから、大川時次郎の顔が浮かんだ。時やんは、まだ、馬に乗って、郵便配達をしているのか知らん？――マンの胸の奥の奥で、ちくちく疼(うず)くものがあった。
永田杢次の家まで、一町半ばかりだった。
マンは、裏口にまわり、戸をたたいた。
ヨネが、寝ぼけ眼をこすりながら、台所の硝子戸のところへ出て来た。
「おマンさんかえ？」
「はい」
「今ごろ、どうしたんじゃね？」
ヨネは、戸を開いた。
「親方さんは？」
「まあだ、帰らん」
「お姐さん、すみませんけど、お金を十円、すぐ貸して下さい」
「今ごろ、だしぬけに、いったい……？」
「わけは、明日(あした)、話します。急ぎます。お願いします」
「そうかな？」
ヨネは不審そうな顔をしたが、うなずいて、ひっこんだ。まもなく、一円札を十枚揃えてあらわれた。
「おマンさんのことじゃけ、まちがいあるまい。詳しいことは、明日、聞こう」
「ありがとうございます」
それを受けとると、走るように、わが家に急いだ。
秋の夜気が冷たく、襟首にしみる。月は氷の塊のようである。
帰ってみると、家の中では、活劇が展開されていた。泥棒が出刃庖丁をふるって、猫とたたかっている。七匹いる猫のうち、勇敢で忠実な数匹が、怪しい闖入(ちんにゅう)者に向かって、背の毛を逆立ちにし、歯をむきだして、唸りながら、対峙(たいじ)してい

た。泥棒は屁っぴり腰で、庖丁をふりまわし、ただ、「シイッ、シイッ」と、追っているばかりだ。
マンの姿を見ると、猫は静まった。鳴き声を立てて、マンに寄って来た。
「借って来てあげましたよ。……ほら」
マンは、十枚の一円札をさしだした。
泥棒は、ふるえる手で、それを不器用に数えていたが、なにか考えこむように、黙りこんでしまった。洟水(はなみず)をすすりあげている。やがて、顔をあげた。
「こ、こんなには、要らん。六円あれば、間に合う。四円はかえす」
「ええですよ、持って行きなさいよ」
「いんや、六円で、ええ。あんたも借りたもんなら、またかえさにゃなるまい。そんとき、大変じゃろうけん、余分は戻す」
「そうですか」
「おおきに。それじゃあ、これで……」
「待ちなさい。今時分、表をうろついとったら、怪しまれる。さっきも、巡査さんが廻りよった。あたしが、送って行ってあげる」
マンは、泥棒とつれだって、また、月光の街に出た。
「どっちの方角に、帰りなさる?」
「さあ、どっちでもええが、……ステンショの方にでも行こか」
停車場への曲り角で、巡査に出逢った。カンテラをさげている。つかつかと、寄って来た。
「おいおい、コラ」
マンは、相手の顔を見て、
「安木の旦那さん、あたしです」
「なんだ、玉井のおかみさんか。今ごろ、どこへ?」
「親戚の人が来ましてね。お腹(なか)がすいたもんで、うどんでも食べようかと思うて……」
町角に、夜泣きうどんの提灯が見えるのに気づいて、マンは、とっさに、そんな出まかせをいった。
「そうかい、秋の夜は腹が減るもんだからなあ。行っておいで」
巡査が同じ方向に歩くので、仕方なく、夜泣きうどん屋に、立ち寄った。巡査は、カンテラをふりながら、サーベルと靴の音を派手にさせて、行ってしまった。
「「当り矢」さん、狐うどん、二杯、下さいな」
うどん屋も、顔見知りだった。
「玉井のごりょんかね。おそいなあ。もう、仕舞おうかと思うとったんじゃ」
「一時に仕舞うのは、早いじゃないの? いつもは、二時すぎまでもやっとるのに……」
「ケタイ糞が悪いけ」
「どうして?」
「角助(かくすけ)の奴に、今、売りあげを、みんな、持って行かれてしもうた。さんざ、飲み食いした揚句の三八に。もう、これで、四度目じゃよ」
「警察にいうたら、ええのに」
「そんなことしたら、命がない。どうも、この土地は柄が悪

いなあ。真面目な商売は出来やせん。暴力団が威張っとるし、このごろじゃあ、泥棒も増えた。わしも、もう、明日から商売が出来ん。資本をさらわれてしもうたけ、こっちも、泥棒でもしようごとある」

二杯の狐うどんを、マンと、もう一人の男にわたして、夜泣きうどん屋は、しきりに、愚痴をこぼした。

「「当り矢」さん」

「へい」

「これ、資本の足しにしませんか」

マンは、泥棒から返して貰った一円札二枚を、帯の間からとりだした。

「いえ、ごりょんに迷惑かけたんじゃあ……」

「かまいませんよ。困ったときは、おたがいですわ」

「そうですか。……そんなら……」

「当り矢」は、おしいただくようにして、それを受けとった。もう六十を越えた、小柄で、おとなしそうな色白の老人である。

「そらそうと」と、うどん屋は、急に、あたりをはばかる声になって、「角助が、さっき、飲んだくれでな――玉井金五郎が、畳の上で死のうと思うたって、そうは問屋がおろさん。……なんて、いうとったけど、なにか変ったことでもあったですか」

「妬んどるのでしょ」

「永田組をケツ割ってやった。あんなオイボレ爺、先の望みがない。若松の「ドテラ婆さん」の子分になるんじゃ。――そんなことも、いうとったばい」

泥棒は、屋台のランプに顔を照らし出されないように、向こうむきで、うどんを食べている。

犬が、また、狐のような声で、鳴いた。

翌朝、マンが、猫を集めて、御飯を食べさせているところへ、永田ヨネが、息子を負ぶって、やって来た。

縁側はにぎやかだ。猫の御馳走は、前日、金五郎のために準備しておいた料理の残りである。夫へのマンの心づくしは、この五日ほど、毎日、猫への奉仕と化している。七つの皿に、七匹の猫。

「おマンさん、お早よう」

「お早ようございます」

「ほう、こりゃあ、猫の花が咲いたごとあるなあ。おマンさんは、ほんに、猫好きたい。やっぱり、子供のない者は、動物を可愛がるというのは、ほんとうじゃろうかなあ。それにしても、あんただち夫婦、どっちも身体が丈夫なのに、どげえもて、子供が出来んとじゃろか。まあだ、なんの印もないのかな」

「ありません」

「おかしいなあ。もう、一緒になって、二年になるとじゃろ？」

「子供が産まれんで仕合わせですわ。こんな貧乏世帯では、養いきりませんけ」

「なんの、一人口は食えんでも、二人口は食える、というてな、猫を七匹も飼うよりゃ、わが子を育てる方が楽よね」

ヨネは、猫の群れている縁側に、茂次平をおろして、自分も腰をかけた。

すがすがしい朝の光線が、いっぱいに、縁にさして来た。

港の方で、汽笛の音が聞える。
「そらそうと、昨夜は、いったい、どげえしたとな？」
「泥棒が入りましたとです」
「泥棒？」
ヨネは、団栗眼をむいた。まだ、そこらに、その泥棒がいるかのように、気味悪そうな眼つきで、あたりを見まわした。
マンは、笑って、
「泥棒にやる金を、お姉さんのところに借りに行ったんです」
「なんてな？」ヨネは、仰天して、「そげな馬鹿なことが……」
「ほんとです。昨夜の泥棒は、正直そうな人でした」
「なんちゅうこと、いうかね。正直な人間が、泥棒なんかに入るもんか。悪人じゃよ」
「いいえ、わたしには、その泥棒が悪い人とは思えませんでした。きっと、初めて泥棒をする人じゃったとでしょう。よっぽど、切羽つまることがあったにちがいありません。どうしても六円の金がないと、夜逃げでもしなくてほならんか、生きるか、死ぬるか、……そんな追いつめられた気持で、思いあまって、泥棒する気になったんですわ。それで、あたしも、お金をなんとか都合してあげる気になって、お姉さんのところに、借りに行ったとです」
「とぼけた話じゃなあ。泥棒にやるために、金を借りに行く者も行く者じゃが、帰って来るのを、てれっと待っとる泥棒も、泥棒じゃ。巡査を引っぱって来はせんか、という疑いの心も湧かんとじゃろか。近ごろ、間抜けな話を聞いたわ」
「お姉さん。この二円、余りましたけ、おかえししときます」
「十円のうち、泥棒に六円やって、どうして、二円余る？」
「夜泣きの「当り矢」さんが、強盗に逢うたというもんじゃけ、二円あげました」
「気前のええ女子じゃなあ」
ヨネは、ほとほと呆れた、という顔つきだった。
それから、また、二日経ったが、なお、金五郎は帰って来なかった。
留守の間、荷役のある日は、マンは、助役たる金五郎の責任を自分が果す気持で、組の仕事をてきぱきと切りまわした。早朝の荷役のときには、さびしい未明から、一人で、組内の仲仕を起してまわり、仕事の段取りも、跡始末も、率先してやった。しかし、どうしても、女の力では及ばぬことがある。そうすると、情ないやら、腹立たしいやらで、いらいらし、（なにをしとるんじゃろか？　親方がぐうたらじゃけ、うちのまでが引きこまれる。親方の守りなんか、ええ加減で切りあげて、引きずって帰りゃ、ええのに……）
と、もっぱら、罪を親方になすりつけて、永田杢次を恨んだ。
金五郎の下で、助ボーシンをしている松川源十は、顔中、菊石なので、「六ゾロの源」と、仲間から呼ばれている。六ゾロは骰子の六の目が二つ列んだ形だ。源十も小博徒である。しかし、仕事熱心で、金五郎とは気が合っていた。三十歳。彼は、マンに、
「おマンさん、心配せんでもええ。金さんが帰るまで、わしが引き受けた。金さんの顔をつぶすようなことはせん」
と、口癖に、いった。
「すみません」

「すまんこたない。角助が居らんようになりゃあ、この組で、金さんを蹴落そうというような考えの者は、誰も居らん。いんや、そればかりじゃない。永田組の者は、親方があんな風じゃけ、もう、気持のうえでは、金さんを親方と思うとる者が多いばい」
「おおきに」
「このごろ、変な噂がありよる。なんでも、聯合組じゃあ、永田親方のやり口があんまり悪いもんじゃけ、番下(ばんさ)げ処分にするということじゃ。金さんが居るもんで、現場は他組以上じゃが、肝腎の親方がああじゃけ、永田組を取りつぶせ、という者があるらしい。聯合組の内輪同士というても、請負師仲間には野心のある人が居るけ、油断がならん。組が解散にでもなったら、大きな大事(おおごと)じゃ」
「早う帰って来ればよいのに、はがいい親方ですねえ」
マンは、一途に、永田杢次が恨めしくてならない。

次の日の夜、マンが、いつものように、土間に莚(むしろ)をしいて、ワラジを編んでいると、
「居やはりまッか？」
大阪弁の女の声で、入口から、案内を乞う者があった。
マンが立って行くと、
「おマンはん、久しぶりだすなあ」
「まあ、君香さん」
マンも、おどろいた。二年前、彦島で別れたきりである。
金五郎夫婦が彦島を追われる前日、新之助と君香とは、別府温泉に行ったとのことだった。その後、杳(よう)として消息を絶ち、誰に聞いても知っている者がなかったのである。夫婦は、寝物語に、いく度、「新公はどうしたかなあ」と、話しあったか知れない。
「森の新さんは？」
君香を招じ入れると、マンの口をまっ先について出たのは、その言葉だった。
「新之助はんは、福岡の監獄に居やはります」
「監獄？」
「へえ。実は、そのことで、あて、伺いましたのやけど、……玉井はんは？」
「うちのは、こないだから、ちょっと、旅に出とりますけど、……新さんが、どうして、また監獄なんかに？……」
聞きたいのは、なによりも、そのことだった。
彦島のとき、洋装のハイカラ美人として、マンたちの眼をそばたてさせた君香は、もう、どこにもいなかった。なにからなにまで純日本式で、どこかの料亭の女将風である。鬘下(かつらした)にした頭髪も小粋だし、黒襟からのぞいている青いほどの襟足も水々しい。あの時分から、下ぶくれの丸顔に、落ちついた表情があったが、二年間の歳月が、さらに、その顔に或る重味を加えている。それは、太々しさのようにも見えた。唇の右下の黒子(ほくろ)だけが、昔のままだ。
マンの汲んで出した番茶をすすりながら、君香は、家の中を見まわした。
「赤ちゃんは、出来はらしまへなんだのだッか？」
「まだですのよ」
「あて、出来ましたねん」

「ほう」マンは、意外の面持で、君香をあらためて眺め、「お母さんのようには見えませんわ」
「もう、二つになります」
「新さんの子供？」
「さよだす。娘の子やよってに、百合香（ゆりか）という名つけました」
「あなたと新さんに似たら、可愛いでしょうね？」
「ほんまに」
「それで、新さんが、どうして、監獄に？　なんの罪で？……」
「人殺しだす」
「まあ、殺人罪なのですか？」
「いうたら、そんなもんで。……恥を話さな、わかって貰えんさかいに、なんもかんも、打ちわって話しますけど……」
そういって、君香は、彦島以後の消息を語るのだったが、それを聞くマンは、追われて彦島を出発する日、金五郎が沈痛な面持で呟いた言葉が、頭に浮かんで来た。
「新公も考えが足らんなあ。君香は、誰か、……吉田磯吉身内の、うるさい奴の二号らしいけ、どうせ、碌（ろく）なこたない」
その予言が当ったのであった。
君香は、「うるさい奴」の二号であったが、その男は吉田磯吉身内ではなかった。下関の顔役で、「蝮一（まむしいち）」と俗称された土建屋である。新之助と君香とが別府に行ったことをかぎつけた「蝮一」は、早速、別府に乗りこみ、新之助を殺そうとして、あべこべに殺されたのである。はじめから、新之助の方には殺意などなく、追いつめられた果ての兇行で、正当防衛的な意味も多少あったために、刑は軽かった。君香は、自分を「露探（ろたん）」と呼んだという、つまらないことがきっかけで、半死半生の目にあった森新之助を、はじめは気の毒に思って、見舞に行ったり、同情したりしていたのだが、いつか、それが愛情に変化して、殺人事件にまで発展してしまったわけである。
「新さんが――絶対に、このこと、玉井に知らせてくれるな。……って、いやはるもんやさかい、これまで隠して居りましたのやけど、今度、どないしても、相談に乗って貰わんならんことが、いくつも出来ましたよって、お邪魔に上りました」
「あたしとこに、相談というのは？……」
「新之助はんが、もう四五日したら、牢屋から出やはります。まだ刑期はすまへんのやけど、成績がよろしいよって、仮出獄の恩典で、出して貰えるのだす。それで、その身元引請人に、玉井はんになって貰おうと思て。……新之助さんがいやはりました――これまでは隠して居ったけんど、娑婆に出たら、やっぱり、玉井金五郎はんの弟分になって、万事、やって行きたい。いっぺん、兄貴をつれて、牢屋に面会に来てくれたら、ええなあ。……って」
「それは、よろこんで、玉井も迎えに行きますわ。それで、新さん、出てから、なにか、仕事のあてでも？」
「へえ、それは、もう、ちゃあんと。そのことでも、玉井はんに力になって貰わんならんのだすが、あての昔の贔屓（ひいき）のお方がおましてな、あてらに同情して、気安うに、ちょいとした料理屋を譲ってくれることになりましたんや。新之助はんも、乗り気で、それやろ、といやはるし、あてはあてで、芸者衆を五六人抱（かか）えて、そこで、置屋（おきや）もやる考えだす」

「どこでですか？」
「若松だす」
「若松？」
マンの顔が、ちょっと、曇った。
吉田磯吉をはじめ、友田喜造、江崎満吉、ドテラ婆さん、その他、うるさい親分衆、顔役、暴力団のたくさんいる街として、夫金五郎も、若松を敬遠していたが、マンも同様に、若松を、あたかも、猛獣の棲んでいるジャングルみたいに考えていた。
君香には、そんなことがわかる筈もないので、希望に燃えたいきいきした顔つきで、
「新之助はんは、興行の方もやりたい、いうではりました。なんや、あて、よう知りまへんのやけど、牢屋のなかで、友達になった人がいやはりましてな、その人も、若松の方とかで、えろう気が合うたらしゅうて、娑婆に出たら、玉井はんにも、ぜひ紹介して、兄弟分になって貰うんや、いうてはりましたわ」
「なんという方ですの？」
「熊丸虎市、とか、いやはりました」
「恐い名ですこと」
二人は、顔見あわせて、ころころと、笑った。
「それが、おマンはん、恐いどころか、えろう優しい、……新之助はんの口でいうと――二十日鼠みたよな、色白で、コチョッコリした、おとなしい人。……やそうやし。――監獄ちゅうところは、どんな悪い奴ばかり来とるところかと思うたら、みんなええ人間ばかりじゃ。娑婆でのさばっとる奴等の方に、よっぽど悪人が居る。……そないなことも、いうてはりました」
君香の話は、明かるいことばかりである。マンも、新之助と彼女との新生活をよろこぶ気持に変りはない。それにもかかわらず、マンの心に、えたいの知れぬ不安の気持がわき、かすかながら、不思議な動悸が打つ。牙と歯のするどい猛獣のうようよしているジャングルで、料亭をひらき、興行をするという森新之助、そして、そのことの、夫金五郎へのつながり――マンの予感と予見とは、かならずしも、空虚の中に幻影を見る、錯覚だけでもないように思われた。
君香は、金五郎が帰ったら、すぐ連絡してくれるようにと、若松の住所を書き、土産のウニを置いて、いそいそした足どりで、帰って行った。

翌朝、洗濯をしているところへ、大庭春吉からの使いが来た。庭番の弥吉という老人である。せかせかした語調で、
「おマンさん、これから、じきに、親分の家へ来てつかあさい。なんか、大事なことで、ぜひ話したいことがあるげなけん」
マンは、すぐに、着物を着換え、弥吉老人とつれだって、家を出た。
大庭家は、牧山の高台にあった。鬱蒼とした森林を背後に、深い孟宗竹の林にかこまれて、こじんまりした白壁の家がある。うるさいほど、雀が鳴いている。
大庭の家に行くと、先に助ボーシンの松川源十が来ていた。これも、使者を立てて呼び寄せられたらしい。

春吉は、納戸の座敷で、二人を待っていた。無言で、茶と、菓子と、煙草とを供してから、突然、怒ったような口調で、
「大事が起ったなあ」
と、口を切った。
「なんごとですか？」
「六ゾロの源」は、びっくりして、菊石面の長い顎をつまんだ。
「東京よ。交番やら、電車やらが、どんどん焼かれよる。日比谷で講和反対の国民大会が開かれたり、大臣の家に押しかけたり、帝都は大騒ぎじゃ。とうとう、戒厳令が布かれたちゅうぞ。当り前のことよ。これだけの戦争をして、こげな屈辱外交をされたんじゃあ、国民が黙って居られるもんか。俺だって、焼討ちに加わりたいくらいじゃよ」
「今日の用件というのは、そのことですか？」
「まさか、なんぼ腹が立ったとて、東京まで、焼討ちの加勢に行くわけにゃいかん。実はな、東京も大事じゃが、こっちにも、大事が出来かかっとる。そのことで、来て貰うた。明日、郵船のパナマ丸が入港する。荷物炭を千トンも積みこまねばならぬ大仕事じゃ。これは、聯合組の縄張りで、永田組が番に当っとるんじゃが、どうも、友田喜造の一派が、横取りしようという企らみをしとるらしい。「ドテラ婆」の子分が、現場に乗りこんで来るかも知れん、という噂がある。無茶は通らん筈じゃけど、無法者揃いじゃけ、どんな横車を押すかわからん。こんなとき、玉井が居りゃあ、なんの心配もないが、どうしたのか、まだ、帰って来んし……」
「親分さん、すみません」マンは、肩のちぢむ思いだった。「でも、永田の親方もあんまりですわ。親方が帰らんもんで、親方思いのうちのが引きずられて……」
「永田は、一昨日の晩、帰った。玉井のことを聞いてみたが、知らんというんじゃ」
マンは、心臓が、ひっくりかえったようだった。どきどきと、はげしく動悸が打って来た。
（角助から、殺されたのではあるまいか？）
夜泣きの「当り矢」が、話していた――玉井が畳の上で死のうと思うても、そうは問屋がおろさん、といったという角助の言葉が、恐しく、思いだされた。
大庭春吉は、金五郎が、牡丹と蝶の彫青をした怪しい女と仲よくしていたことを知っていたが、それは口に出さなかった。
「それで」と、パナマ丸荷役のことを、くれぐれも依頼して、二人を帰した。
乱れた重い心をいだいて、マンは、家に帰って来た。すると、家の中に、誰かがいる。
夫かと思って、駈けこんだ。
「マン坊」
故郷の山奥の大川時次郎であった。
「これは、時やん」
と、さすがに、マンも、おどろいた。
「ようよう逢えたわい」時次郎は、満面によろこびのいろを浮かべて、「どんなに探したかわからん。マン坊に逢おうと思うて、田舎を飛びだしてから、北九州中を、足が棒になるほど、うろついた。よかった、よかった」

「まあ、そんなところに立っていないで、おあがり」
マンは、時次郎を、六畳の座敷にあげた。見なれぬ男を、七匹の猫がうさんくさい眼つきで、眺めている。
時次郎は、郵便局の詰襟服を着ている。いつも、この服装で、馬にまたがり、谷や、丘や峠を越えて郵便を配達していた。四年ぶりで逢うのに、時次郎を見ていると、表に、愛馬の四歳馬がつながれているのではないかという錯覚をおぼえるのだった。日にこげているが、昔と変らぬ頑健さで、濃い粗野な眉や、節の太い手の指に、故郷の谷のにおいがあった。
「なにから話したら、ええか……？」
四年間の思いをこめる眸（まなざし）で、時次郎は、昔とは変ったマンを見る。
時次郎の眼に映るマンは、もう、四年前、太陽の光線のさすことの少い谷間で、煙草の葉を巻いたり、牛に餌をやったり、炭を焼いたりしていた百姓娘ではなかった。マンの顔から、野性が失（う）せてはいなかったけれども、時次郎の知らぬなにかによって、別の彩（いろど）りがつけられ、磨きがかけられていることは、疑うことが出来なかった。それは、不思議な一種の圧力になって、時次郎を圧迫する。広島の山奥では、マンに、こんなものを感じたことはなかった。それだけに、時次郎は、いよいよ、平静さをうしない、追っかけられるように、気分が尖って来るのを、どうすることも出来なかった。
「お父（と）さんや、お母（か）さんたち、元気でいなさるか知らん？」
そんなマンの当然の質問も、はがゆい気持で、
「元気で居りんさる」
と、怒ったように答え、
「マン坊、あんたは、ひでえ女子（おなご）じゃなあ」と、もうなんの修飾も忘れて、恨みがましい口調になった。四年間の思いと癇癪とをぶちまける、爆発の瞬間である。「あんたが、田舎から居らんようになってしもうてから、わしは、どがあに淋しかったか、薄情なあんたには、わかるまあ。わしはあんたと夫婦になるつもりで居ったし、あんたも、わしの嫁女になってくれる気で居るとばかり、思うとった。村長の二男坊の敬やんが、あがあに、あんたを口説いても、縦に首をふらんのは、わしのためと思うとった。それに、わしに一言もいわんで、村を飛びだすなんて……」
時次郎は興奮で、言葉もとぎれとぎれである。
マンは、唐突な告白に、当惑した。堅くなって、うつむき、昔の恋人の声を、雷鳴のように、耳に聞いた。
時次郎は、必死の面持である。膝を乗りだして来た。
「なんでも、ええ。これからでも、ええ。わしと夫婦になりんさい。そのことだけで、村を出て来たんじゃ。村の人から、どがあに思われても、どがあに悪ういわれても、あんたと夫婦になりさえすれや、わしは本望じゃ」
「時やん、あんた、そんな無理なことを、今ごろになって、いうたって……」
にじり寄って来る時次郎の膝が、マンの膝小僧にぴったりとくっついた。しかし、マンは、身体を引こうとはしなかった。興奮した時次郎は、女の手を取った。それも、マンは、なすがままにしていた。
「無理なこと？……今ごろになって？……」
「そうじゃないの」

「無理なことがあるもんけえ。今からだっても、遅うはなあ。今すぐ、夫婦になろう。おれは、あんたが、一度は村を出ても、きっと、また、帰って来ると思うて、待っとったんじゃ。そりゃあ、夫婦約束したわけでも、なんでもなあ。じゃけど、もう、おたがい、心の中ではわかっとった筈じゃ。なあ、マン坊、そうじゃろ？」
「時やんの嘘つき。浮気ン坊。キヌさんのことは、どがあにしたとな？」
　皮肉をいおうとして、思わず、故郷の言葉になった。
「キヌ坊？」
「そうよな。キヌさんと大層仲ようして、あたしのことなんて、どがあでも、よかった癖して……」
　マンの眼に、ありありと、黄昏（たそがれ）の水車小屋の風景が浮かんで来た。ススキの穂の光る流れの土堤で、時次郎とキヌとが、肩を接するようにして、むつまじげに、なにか語らっていた。いかにも楽しげに、笑いさんざめいていた。その二人が、狐と狸のように見えた。そのとき、（なあんじゃ、そうじゃったのか）と、投げだされた気持になり、はじめて感じた嫉妬の思いに、村をすてる決心が定まったのであった。
　時次郎は、仰天した顔つきになって、
「とんでもなあ。キヌ坊と、おれと、なんのことがあろうか。そりゃ、友達じゃけえ、話をしたことはある。水車小屋のところで出逢うて、専売局の「鬼」が、狐にだまされた話して、笑うたこともある。じゃけど、友達なら、そがあなことは当りまえじゃなあか。マン坊、お前、おれを嫌うて、難癖でもつけよるのとちがうか。おれは、真剣じゃぞ。キヌ坊は、もう二年も前に、高門（たかど）の武十旦那の三男坊に貰われて嫁った。おれは、女子のことは、マン坊のほかに考えたことはなあ。郵便局もなにも、放（ほ）からかして、村を出たんじゃ。おれと夫婦になってくれんさい」
「時やん、あんた、あたしが、もう人の嫁女になっとることが、判りんさらんとな？」
「門司の林助兄（りんすけあに）さんを尋ねて行って、あんたの行先を聞いたんじゃよ。そんとき、玉井金五郎とかいう変な男に誘われて、下関の彦島に渡ったと教えられた。その玉井の嫁女になったとは、聞かなんだよ」
「その変な男の嫁女になったとよ」
「どうせ、沖仲仕のばくち打ちで、彫青かなんかしたゴロツキじゃろ？」
「彫青なんて、そがあな馬鹿なもん、しとるもんけえ」
「なんでもええ。そがあな男とは別れんさい。籍に入っとるわけじゃ、あるまあが？」
「籍には、入っとらんけど……」
「子供は？」
「出来んわ」
「そんなら、なんでもなあ。マン坊、頼む」
「ちょっと、待って」
　マンは、時次郎の手を払うと、かたわらの煙管を取りあげた。落ちついた手つきで、キザミをつめ、静かに、一服、吸った。
　時次郎の眼は、妖（あや）しくぎらつき、額に、大粒の油汗がにじみ出ていた。

マンは、頬をへこませて、煙を深く吸いこみ、それから、胸を張るようにして、フウッと、それを吐きだした。火鉢の縁に、雁首をたたきつけて、火を落した。
「時やん」
「う？」
「玉井金五郎が帰るまで、待って」
「いつ、帰るんじゃ？」
「わからんわ」
「どこに、行っとるんじゃ？」
「一週間ほど前に、二日市にある武蔵温泉というところに行ったとよ」
「ほうれ、そがあなことよ。温泉に行って、一週間も帰らんといやあ、そこで、淫売みたよな湯女（ゆな）と、でれついとるに定まっとる。そがあな男は早よ見切りんさい」
「見切るかも知れんけえ、ともかく、帰るまで待ちんさい、玉井に聞いてみて、玉井が、時やんの嫁女になってもええ、というなら、なる」
「そがあな、まだろこしいことより、今からすぐ、二人で、この家を出ろうや」
「時やんの判らず屋」
はげしい語調だった。猫が二三匹びっくりして、飛びあがった。大川時次郎も、不意に、頬に平手打ちを食ったようなおどろきで、きょとんとした顔つきになった。それまでにも、妙に、威圧されるものを感じていたのに、その叱咤（しった）の声は、完全に、時次郎を打ちのめした。
時次郎は、俄かに、言葉をうしない、首を深くたれて、うつむいた。
マンは、無言で、また、煙草を吸った。
時次郎は、しょんぼりした顔つきで、頭をあげた。
「マン坊、その玉井金五郎という人の帰るのを、待つことにするよ」
力のない声で、いった。
それから、やっと、二人は、久しぶりで逢った故郷の人間同士の平静さにかえって、一別以来の村の話に、花を咲かせた。
その日が暮れても、夜になっても、金五郎は帰らなかった。
時次郎は、泊ることになった。マンは六畳の方に、客人は四畳半に寝ることにしたが、蒲団がない。彦島を追われるとき、「なんでも屋」が餞別にくれた煎餅蒲団は、年が経って、幾度も綿を打ち替え、表の布を張りなおした。それが上下二枚あるきり、客用の蒲団を作るほど、まだ、家計に余裕がなかった。
「時やん、これにくるまって寝ておくれ」
マンは、厚い敷き蒲団の方を、時次郎に渡した。
「いんや、おれは蒲団なんか要らん。寒いこたない。ごろ寝するよ」
「夜は冷えるけ、風邪を引くばい。まあ、これを着んさい」
「ええというのに……」
二人が、蒲団を中にはさんで、押し問答をしていると、突然、ガタッ、ピシャッと、家なり震動するほどのはげしさで、障子が開いた。
マンと、時次郎とがびっくりして、ふりかえると、部屋の

入口に、金五郎が突っ立っている。
金五郎は、団栗眼をひんむき、上歯で下唇を噛み、諸肌をぬいでいる。その右手には、短刀がにぎられ、左腕には、肩から二の腕にかけて、昇り龍の彫青が、青々と、浮きあがっていた。
「間男、見つけたぞ。二人とも、打ち斬ってくれる。そこへ、坐れ」
金五郎のすさまじい剣幕に、時次郎は、思わず、畳のうえに、膝をついた。坐った。
マンは、ぽかんとなって、眼を白黒させた。その眼は、金五郎の左腕に、釘づけされた。夫の誤解や、怒りを解こうという気持よりも、彼女にとっては、夫の腕に、これまで見たこともない、怪しい模様の出来ているのが、重大関心事であった。
天井から吊るされたランプの火屋に、さっきから、一羽の大きな蛾が、しきりと、戯れていた。バタバタと飛ぶたびに、羽から細かい金粉を散らしていたが、このとき、金五郎の方に飛んで行って、左腕にとまった。その途端、ふっと、蛾の姿が消えた。
マンは、ぎょっとして、眼を皿にした。夫の腕のうえで、らんらんと、巨大な二つの眼をきらめかせ、雲を望んで昇天している龍が、その蛾をバクッと呑んだように見えたのである。それは妖怪じみた幻想となって、マンを戸まどいさせた。これまで二年間、夫婦として親しんだ夫が、まったく別人と化したような、不思議な錯覚におちいって、奇態な吐息が出た。
「その彫青、いったい、どうしたんですか？　いつ、どこで、誰から彫れて貰ったんですか？」
そんな当然の問いが、怒りの形相ものすごく、突っ立っている金五郎を見ると、どうしても、口から出なかった。といって、マンには、時次郎との仲を疑われた弁解をしようという気持も、湧いては来ないのである。
待ちこがれた夫を見たうれしさや、腹立たしさや、悲しさやがこんぐらがって、
（ふン、今時分まで、どこをほっつき歩いとったか知らんけど、いきなり、飛びこんで来て、間男呼ばわりするなんて、勝手のええにもほどがあるわ）
心のうちで、そんな天の邪鬼な意地を出していた。
マンは、金五郎が右手に握っている刀に気づくと、不審の眉をひそめた。夫が、後生大事にしている助広だ。二年ほど前、彦島で、遊び人たちの襲撃に備えて、金五郎の柳行李から無断で借りて行ったことがある品。結婚してからも、ときどき、取りだして手入れをしているので、マンも、刀の肌や形や色に、見おぼえが出来ていた。
（あの小刀は、家の桐箪笥に入れてあった筈じゃが……？）
そうとすると、夫は帰宅すると、いきなり、飛びこんで来たのではないことになる。しばらく、様子を見ていて、そっと、箪笥から、刀を取りだしてから、障子を開いたのであろうか。
正坐した時次郎は、握った両拳を太股のうえにつき、金五郎を無言で、凝視している。恐怖の感情からではなく、この変な男の正体を、見きわめようとしているもののようだった。

（これが、恋敵か？）
マンは、彫青なんかしていないといったが、やっぱり、クリカラモンモンのゴロツキではないか――時次郎は、軽侮と、憎しみとの眸を光らせ、戦いの姿勢をととのえた。武器は持っていないけれど、村の草角力で横綱になった腕力とわざとには自信がある。時次郎の濃く太い眉が、ぐりぐり、動く。
金五郎は、立ちはだかったまま、二人の様子を見ていたが、おもむろに、口を開いた。
「知らぬは亭主ばかりなり――とは、昔の人が、よう、いうちょる。マンだけは信用しとったが、ちょっと、留守をしとる間に、もう、これじゃ。女子の心ちゅうもんは、恐しいのう。女子は魔物じゃ」
（なに、いうとるかね、男の方が、よっぽど、魔物じゃないか）
マンは、そう思ったが、口には出さなかった。
金五郎は、腕組みした。右手の小刀が、左腕のところに行き、龍がそれをくわえているように見えた。
「マン、間男」と、二人を、交互に睨みつけるようにしてから、「お前たちは、運がええ。本来ならば、この場で、二人を重ねて置いて、四つにするのが、間男成敗の定法じゃが、今夜だけ、それを延期する。明日の晩にする。どうしても、その前に、やらねばならん仕事があるからじゃ。……マン、旅から帰りに、大庭親分のところに、お詫びの挨拶に寄って、パナマ丸の荷役の話、聞いた。親分さんは、おれがこの仕事に間に合うたことを、大層よろこんでくれて、頼むぞ、と、おれの手をとっていいなさった。おれも、ええときに帰って来たと思うて、うれしかった。この仕事は、永田組、……いや、聯合組全体の浮沈にかかわる大事な荷役じゃけ、どんなことがあっても、やり遂げにゃならん。旅から帰ってみりゃ、お前が間男しとって、腸は煮えくりかえるごとあるが、明日のパナマ丸を失敗っては、おれの男が立たん。話は全部、パナマ丸の後にする。……マン、ええな？」
マンは、夫の顔を鋭く見つめたまま、無言で、大きく、ひとつ、うなずいた。そのとき、はじめて、瞬きをした。
金五郎は、吊るされたランプを見あげながら、独りごとのように、「明日の仕事は、ただではおさまるまい。「ドテラ婆」の一味が、邪魔に入るかも知れんちゅうから、当りまえではいかん。「ドテラ婆」の背後には、友田喜造が居る。友田は、腕力で、この港の仕事を、端から、自分のものにしようと企らんどる。おまけに、おれの留守中に、角助がケツ割って、「ドテラ婆」の子分になったちゅうことじゃけ、問題は一層うるさい。角助は、おれのやり口を知っとるけ、おれの裏をかくかも知れん。それで、こっちも、今度は、もう一つ、その裏をかかにゃならん。……マン」
きっと、金五郎の強い眸が、ふたたび、マンを刺した。
マンは、なお、無言で、夫の口もとに注意した。
「お前、これからすぐ、部屋中を起して廻れ。午前二時、新川岸壁集合、大伝馬船を、燈台沖まで漕ぎだして置いて、パナマ丸の入港を待つ。助ボーシンの源公とも、よく打ちあわせてある。小方に全部知らせたら、永田親方の家に行って、朝飯を六十人前、すぐ炊いて、パナマ丸に届けろ。そのころは、もう、船は港に入っとる筈。……おい、間男、猫の手一つで

も借りたいところじゃ。というて、うちの猫は七匹居っても、さっぱり、役に立たん。お前も、手伝え」

人情の谷

永田家の台所には、三升釜が二つ、据えられてある。どこの小頭の家でもそうであるが、夜業、朝業、遠出などの荷役のときには、五十人前――百人前という弁当をつくることが稀でないので、炊きだしの整備はととのっていた。

マンの指図で、炊かれた熱い飯が、どんどん、握られる。大きな握り飯三つに、これも太く輪切りにした沢庵の片が五つ、これが一人前、竹の皮で巻かれ、古新聞に包まれる。敏速に、出来る端から、籠に詰められる。

永田ヨネを加えて、女仲仕たちが四人、弁当作りに、余念がなかった。

「おトキさん」

と、マンが、一人の女を呼んだ。

「はい」

「あんた、すまんが、酒屋に一ッ走り、行って来ておくれんか。五升樽を二つ、すぐ、永田まで届けて下さい、って」

「一斗ですね？　行って来ます」

トキが門口を出ると、入れちがいに、永田組の印半纏を着た、少年のような男が、入って来た。「中学生」と愛称されている、谷俊次である。

「弁当、もう出来ましたか？」

「もう、じき、出来る。俊ちゃんが持って行ってくれるとな？」

マンは、「中学生」が、故郷にいる弟の牛三によく似ているので、可愛がっていた。

「はあ、僕が持って行きます」

俊次は框に腰をおろして、そこに置いてあった薬缶から、ゴクゴクと、咽喉を鳴らして、水を飲んだ。それから、思いだしたように、沢庵をきざんでいるマンの方を向いた。

「玉井の姐さん」

「はあ？」

「今、新川の岸壁から来たんですが、大庭の親分が、浜に出て居られましたばい」

「大庭の親分さんが？……」

「聯合組の提灯を持った人が、桟橋のところに居るもんじゃから、誰かと思うたら、大庭の親分でした」

「そら、いかん」

マンは、急に、びっくりしたように、立ちあがった。

「酒が来たら、弁当といっしょに、俊ちゃんに持たせてやって下さいな」

永田ヨネに、そう、いい置いて、あわてふためいた様子で、表に駈けだした。右手に、永田組名入りの弓張提灯を持っていた。

冷えきった秋の夜気が、手をさしこむように、懐に飛びこんで来た。月がぼうと霞んでいる。マンは、左手で襟元をかきあわせ、その腕で、乳房の盛りあがっている胸をおさえて、急いだ。

夜泣きうどんの「当り矢」の横を、通った。

「玉井のごりょん、こないだは、ありがとう。熱いのを一杯、どうな？」

そんな「当り矢」の言葉も聞きすてて、一層、歩度を伸ば

した。
停車場の裏手に当る狭い路地の奥に、永田杢次の妾宅があった。格子戸を、どんどんと、叩いた。
「電報、電報」
赤い長襦袢姿のおサクがあらわれた。髪がみだれている。
「永田の親方に、すぐ、あたしといっしょに帰るように、いうて下さい。パナマ丸の仕事を心配なさって、大庭の大親方まで、出張っていなさる。玉井をはじめ小方(こかた)は、もう、燈台沖までも漕ぎ出しとる。肝腎の永田親方が居らんで、すみますかって」
いったん引っこんだサクは、まもなく、あらわれた。長襦袢のうえに、羽織を引っかけている。髪のほつれも、かきあげていた。
「旦那は、どうしても、お起きになりませんわ」
「死んどるとですか?」
「いえ、死んでは居られんけんど……」
「死んどらん者が、起きんわけがありますか? あんた、ほんとに、起したの?」
「ずいぶん、声をかけてみたのですけど、……ひどく酔ってらっしゃるもんだから……」
「ちょっと、失礼」
マンは、玄関の上り框に、提灯を置くと、草履をぬいで、つかつかと、奥に通った。
家は狭いので、すぐに、永田杢次の寝ている蒲団が見えた。部屋は、青白い。天井のガス燈のマントルが、白い布地の網を、呼吸でもしているように、明かるく、鈍く、光らせている。饐(す)えたような異臭が、鼻を打った。朱の剥げ落ちた箱枕が、永田杢次のビリケン型の禿頭の横にころがり、うつぶせになった半裸体の中老人は、奇妙な恰好に、腕と足とをよじらせて、鋸の目立てのような鼾(いびき)を、かいている。
マンには、その親方の姿が、鬼火に照らされた墓場で、棺から発(あば)きだされた屍骸のように、見えた。それは、しかし、不気味さや、恐しさではなく、いいようもない佗しさ、悲しさ、寂しさであり、やり場に困る腹立たしさであった。そして、その憤りは、親方に対してよりも、一層はげしく、サクの方へ向いていた。
(この毒の花のような女が、このよい親方を殺してしまったのだ)
マンは、一見しおらしげなサクへ、はげしい憎悪をおぼえた。
「親方、……永田の親方」
膝をついて、肩をゆすぶった。
永田は鼾を止め、軽い呻(うめ)きを発するだけで、眼をさます様子がない。
「こんなに疲れていらっしゃるんですから、もう、このままに……」
そのサクの言葉には答えず、マンは、枕元にある水さしを取った。永田をあおむけにしておいてから、水を口にふくみ、ブウッと、親方の顔にふきかけた。二度、冷たい水を浴せると、永田は、ようやく、眼を開いた。
「親方」
「おサクかい?」

舌のもつれたような声である。
「わたしですよ。玉井のマンです。わかりますか？」
「わかるが、……なんで、おマンが来たんじゃ？」
「親方を迎えに来ました。すぐ、あたしと帰って下さい。永田組が潰れかかっています。夜業の現場に、大庭の大親方がお出ましになって――もし、今夜の荷役に、永田が姿を見せなんだら、考えがある。……そう、おっしゃっています。親方、親方は永田組が潰れても、ええとですか？　永田組と、おサクさんと、どっちが大事なのですか？　子分全部と、メカケ一人と、天秤にかけて、どっちを採るとですか？　どっちが、可愛いとですか？」
マンのその言葉は、麻痺した神経にも、鋭く中枢にひびいたものか、永田杢次は、
「そら、大事じゃ。そら、大事じゃ」
と、囈言のように、呟いて、蒲団のうえに、起きなおった。
「お帰りになりますの？」
サクは、ふらついている旦那が、まだこころもとないとみえる。
「当り前ですよ」
親方にかわって、マンが、そう、叩きつけるように、答えた。
マンは、乱れ箱に入れてある衣類を取り、親方に着せた。骨なしのような永田杢次を立たせ、頑是ない子供にしてやるように、襦袢、着物、羽織、そして、帯まで締めてやった。サクがしようとするのを、手をはねのけて、扱わせなかった。
玄関に、引きずるようにして、つれて出た。
「旦那、俥を呼びましょうか？」
そのサクの猫なで声に、マンは、はがゆそうに、
「俥なんて、要るもんですか。そんな悠長な時間はないわ」
玄関に置いた弓張提灯は、火が消えていた。
サクが、マッチを持って来て、火を点じようとした。マンは、提灯を引いた。
「あんたの火は借らん。今夜は月夜じゃけ、足元は明かるいわ」
腹立ちまぎれ、無茶のような捨言葉を残して、妾宅を出た。そして、永田杢次の手を引き、おぼろ月に煙る深夜の街を急いだが、マンは、遠くに、永田家の灯が見え、そこで、忙しく弁当ごしらえに立ち働いている人たちの影が見えて来ると、急に、胸が疼いて来て、涙が、ボロボロと、流れ落いた。
永田が、ぐにゃぐにゃで、幾度もつまずいて倒れるので、マンは、親方を、背に負った。張り子のように、軽い。
また、新しい涙が流れ、
（ええ親方じゃったのに……）
と、二年前、「なんでも屋」の紹介状を持って、永田杢次を頼って来て以来のことが、走馬燈を急廻転させるように、目まぐるしく、マンの脳裡を去来した。
「どこに行っても、これというて、心服の出来る親方は居らんなあ」
門司や、下関にいたころ、金五郎は、口癖に、そう、述懐していた。浜尾市造も、山下松次も、親分として仰ぐに足る人物でないとして、見切りをつけた。その金五郎が、永田組で、二年も腰を落ちつけたのは、畢竟、永田杢次の人柄に惹

かれたためである。
二人が、乞食のような恰好で、彦島を追放され、暗澹とした気持におち入って、さして深い希望も抱かずに、戸畑にやって来たとき、永田杢次は、暖かい気持で二人を迎え、親身もおよばぬ面倒をみてくれた。その親切は、金五郎夫婦の骨身に浸みた。そして、身を粉にして働き、二年間が過ぎたのであるが、この半年ほど前から、永田杢次は豹変してしまったのである。
（あんな女、どこが、ええのか知らん？　どうして、あんな女のために、男一匹が、腐ってしまうのか知らん？）
マンは、不思議でたまらない。そして、その理解の出来ないもどかしさ、はがゆさ、いらだたしさで、ただ、無性に、腹が立って来るのだった。顔を、涙で濡らしたまま、マンは、永田家に帰った。永田杢次は、いつか、マンの背中で、気持よさそうに、眠っていた。

防波堤の突端にある燈台の灯が、ゆるやかに、廻転しながら、夜の幕のうえに、光の条をきらめかす。霞んだ空の月が、海上を、ほのかに、照らしているので、伝馬船の行動に、不便はない。八幡の上空は、製鉄所の熔鉱炉の火が高く反映して、大火事のように、赤く燃えている。その空の火が息をしているように、明滅する。風が、冷たい。
「今、何時ごろかな？」
誰かが、そういったけれども、時計を持っている者はなかった。
「五時じゃ」
と、断定的に、いう者があった。
「どうして、わかる？」
「安養寺の鐘が鳴りよる」
そういわれて、耳をすますと、未明の空気の奥底に、余韻をながく引いた鐘の音が、かすかに、ひびいていた。若松にある安養寺は、古い由緒のある浄土宗の寺である。朝の五時には、かならず、時鐘を撞く。鐘楼は街を一望に見下す高台の突端にあるので、その音は、ひろく、遠く、伝わる。それでも、港外になる燈台沖までは聞えにくいのだが、西風のせいであろう。
「五時か？」と、舳に腰をおろしていた金五郎は、ちょっと、不審そうに、「パナマ丸は遅いなあ。四時過ぎには、入港する予定ちゅうことじゃったが……」
「ボーシン、すこし遅れた方が、ええよ。明かるうなってからの方が、危険がないけ」
「それも、そうじゃが、暗い方が、こっちの作戦が、敵方に知られんですむ」
「角助の野郎、人非人じゃなあ」
「繋船が、三番浮標じゃけ、きっと、あいつ、ブイのところに、伝馬を漕ぎだして待っとるよ。それで、こっちの鼻を明かそうと考えとる。おれたちが、燈台沖までも出とるとは、まさか、気がつくまい。角助は、今日の荷役で、ドテラ婆さんに忠誠を示す、一番手柄を立てるつもりじゃろうが、あべこべに、大眼玉を食うぞ」
「ドテラ婆というのは、はげしい奴らしいなあ。誰かを殺そうという目安をつけたら、その相手の後の方に立って、合図

に、右手をあげる。そしたら、子分が、その男を斬る。そんな話を聞いたよ。人間を殺すのを、大根か、茄子(なすび)を切るくらいにしか、考えとらん奴ばっかりじゃけ、困るわい。ボーシンも、気をつけたが、ええばい」

「おれは、喧嘩は嫌いじゃけ、斬られはせん。斬られそうになったら、三十六計、逃げだすよ」

その金五郎の言葉で、笑い声が起った。

若松港内は静かであるが、ここまで来ると、さすがに、波が高い。防波堤には、白いしぶきがあがっている。燈台の真下になる暗い海上に、二隻の大伝馬船が浮き、舷側に、夜光虫を青白く光らせながら、パナマ丸の入港を待っているのだった。

一隻には金五郎、別の一隻には、「六ゾロの源」が、統率役として乗っている。煙草を吸う火のほか、明かりはつけていない。

金五郎の乗っている船の艫(とも)には、大川時次郎が、膝をかかえてしゃがんでいた。郵便局の制服は脱いで、借りものの沖仲仕の仕事衣を着ている。永田組部屋仲仕のほかに、「バゾク」と称する、組に所属しない浮浪仲仕も、何人かまじっていたので、時次郎もその「バゾク」の一人のように見え、特に、彼に注意する者もなかった。

時次郎の関心は、ただ、玉井金五郎の言動にあった。

「来た。来た」

と、松川源十の方の船で、声があがった。みんなは、一斉に、沖の方を見た。

六連島(むつれじま)を背景にして、一隻の汽船が、左に赤、右に緑、檣(ほばしら)に白の航海燈をともして、こちらに、近づいて来る。霞んだ暗い海のうえに、光を鏤(ちりば)めた黒い船体が、幻のようである。パナマ丸は、ボウオッと、重々しいひびきを立て、白い蒸気をふきあげて、入港の汽笛を鳴らした。

「よし、漕げ」

と、舳に立ちあがった金五郎は、弾んだ声で、叫んだ。

二隻とも、二挺の櫓を立て、パナマ丸に向かってではなく、港内に舳を向けて、漕ぎだした。

待ちくたびれていた伝馬船内に、俄かに、活気がみなぎって来た。

港口に近づくと、汽船は速力を落す。それでも、人間の漕ぐ伝馬船には、すぐ追いつく。間近に、ビルディングのようなパナマ丸の巨体が、近づいて来た。

金五郎は、弓張提灯に、火を点(つ)けた。松川源十も、それに倣(なら)った。永田組の三字が入った十個ほどの提灯が、俄かに咲いた花のように、海上に光を落した。

キイ、キイと、櫓臍(ろべそ)が泣く。二隻の伝馬船は、十間ほどの間隔をおいて、力一杯、港内へ向かって漕がれている。その中間に、やがて、追いついて来たパナマ丸が、舳を乗り入れて来た。

「本船(ほんせん)に寄せろ」

金五郎のその号令で、伝馬船は、パナマ丸と平行して走りながら、ぐんぐん、汽船の船腹へ寄って行った。巨船のまきおこす波のあおりが、急に、ざわついた大きな横波になって、伝馬船をはげしく動揺させた。下手が漕ぐと、櫓が浮いてしまうのだが、櫓方(ろかた)も鍛えた腕だった。吸いつけられるように、

伝馬船は、赤い腹を出している汽船へ近づく。
「危いぞう」
すでに、パナマ丸では、船の進路に、提灯を点した二隻の小船のいるのを認めていて、甲板の上から、船員たちが怒鳴っていた。赤いカンテラを振り、
「ぶっつかるぞう」
「沈んでしまうぞう」
「離れろう」
などと、口々に、叫んでいる。
舳に突ったった金五郎は、提灯を、丸く、輪形に、振っていたが、汽船の舳が、二隻の伝馬船の中間を過ぎると、それを、傍の仲仕に渡した。用意していた一本のロープを取りあげた。先に、錨(いかり)のような鉤(かぎ)がついている。
「ヨウッ」
と、腹の底からのような、低い掛声とともに、そのロープを、汽船の甲板に向かって、投げあげた。習熟しつくした手練である。ロープは甲板の上に飛んで行き、先の釣が、ガチャッと、音を立てて、デッキの欄干(てすり)に引っかかった。
「よし」
と、金五郎は、会心の面持で、強く、うなずいた。
ロープの下端は、伝馬船の舳につながれてある。綱が斜にぴんと張ると、伝馬は汽船と同じ速力になって、走りだした。
金五郎は、ロープに手をかけた。二三度、しごいてみてから、足を伝馬船から放した。ロープを伝い、するすると、登って行く。猿のようである。時次郎は、眼を瞠って、金五郎の行動を凝視していた。
（あの男、海に落ちれば、面白い）
時次郎の心に、意地悪な気持が湧いた。
（落ちて、死ねば、なお、ええんじゃが……）
彼の胸中の奥底を探れば、そんな悪魔の心であったかも知れなかった。
――恋敵。
憎いのである。マンへの慕情が、いささか、常軌を逸するほどであっただけに、マンを独占している男に対しては、歯ぎしりしたいほどの、嫉妬と憎悪の思いが湧く。それは、マンへの恨みもこめて、模範青年であった大川時次郎を、瞋志(しんい)の地獄へ誘いこむのであった。
（あの男がいなくなれば、マン坊は、おれのものになるのだ）
盲目的な恋愛のエゴイズムが、時次郎に、そんな悪辣な期待を抱かせていた。
時次郎の切なる願いにもかかわらず、金五郎は、海には落ちなかった。敏捷に、ロープをよじ登って、欄干に達すると、ひらりと、舷(ふなべり)をおどりこえて、甲板に消えた。
三分も経たぬうちに、船上に、姿をあらわした。欄干から、身体を乗りだし、下の伝馬船に向かって、
「すぐに、棚吊(たなつ)りに、掛かれ」
と、怒鳴った。
船の進行中に、舷側に、手揚げ荷役の段取りをするなどは、異例に属する。第一、危険であるし、これまで、一度も、例がなかった。しかし、船に乗りこんだ金五郎は、短時間の間に、その諒解を得たものらしい。これも、交渉の結果とみえ、船の速力が、一段と落ちた。

出発のときから、充分に、打ち合わせは出来ていたので、金五郎の号令で、仲仕たちは、敏活な行動を開始した。
金五郎が、舷側に、縄梯子をぶら下げた。それを伝って、三人ほど、甲板に上がった。ロープや、棚板が、次々に操作され、見る間に、第三ハッチの舷側に、六段の雛壇が出来あがった。それは、右舷だけではなく、左舷も同様だった。左舷を指揮していたのは、「六ゾロの源」である。
「どうやら、うまく行ったなあ」
金五郎と、源十とは、さすがに、ほっとした面持で、微笑を取りかわした。
段取りが終り、パナマ丸が、洞海湾の入口に横たわっている、中ノ島の横を通るころには、東の空は白み、港内も、ぼうと、暁のうす光に、浮きあがりつつあった。
「玉井君、君は、相かわらず、元気だなあ」
船橋のうえで、そういうのは、船長である。門司以来の顔見知りで、荷役のたび、何度も逢ったことがあった。
「外に、能がありませんからな。親ゆずりの健康だけが、取り柄ですよ」
「いや、謙遜せんでもいい。僕も、今度ばかりはおどろいたよ。型破りだ。こんな無鉄砲、君でなけりゃ、出来んよ。これは、健康だけの業じゃない」
「わたしがしたんではなくて、港の悪漢がさせたんですよ」
「大きに、そうだ。どうも、港をかきまわす毒虫がいて、困るなあ。こっちが、端迷惑だ。船を喧嘩場と思ってるんだから。……今日も、喧嘩になりぁすまいねえ?」
「わたしの方は、喧嘩なんかしないつもりですが……」
三番浮標が、薄明の中に、近づいて来た。
遠目であるが、そのブイのまわりに、二隻の大伝馬船がつながれているのが、明瞭に、認められた。「友田」の二字を入れた数十張りの提灯が、光の針鼠のように、二箇所、海上に、密集しているので、見まちがいようがない。
「やっぱり、おれの考えていたとおりじゃったな」
金五郎は、威嚇するような、派手な光の集団を見て、おかしそうに、笑った。
「友田喜造の名で、脅かそうとしていやがる」
源十も、苦笑して、警戒する眼のいろになった。
「こっちも、提灯を点けよう」
「それが、ええ」
二人の合図で、永田組の弓張提灯に、全部、灯が入れられた。両舷の雛壇に、四人ずつ立った。六段で二十四個、提灯山笠みたいである。パナマ丸は、あたかも、大手、搦手を、軍兵によって護られた城郭のように、美しい。天主閣のうえで、ボオオウと、法螺貝のような、太い汽笛を鳴らしながら、船は、水先案内の小蒸気に誘導されて、三番ブイに近づいた。
この、ものものしい、暁の灯の祭典は、港の周辺のどこからでも望まれる。各所から、数千の好奇の視線が、三番ブイに、集中されていた。
パナマ丸が、中ノ島横を通過するのが見えると、石炭を満載した数隻の艀が、曳蒸気船に曳航されて、若松側の鉄道桟橋下から、本船に向かって、進行して来た。
パナマ丸は、ブイに、繋留された。
永田組の伝馬船に、「友田」方の伝馬船が、漕ぎ寄って来た。

舳に、提灯を高くかかげた平尾角助が、突っ立っている。
「永田杢次は、居らんか？」
二隻の舷が接すると、角助が呶鳴った。不潔な雑巾のような、醜悪な正方形の顔に、陰険で、狡猾そうな眼が光っている。
金五郎は、デッキから、棚伝いに降りて来て、角助と相対した。
「角さん、なんか、用ですか？」
「お前に、用はない。永田の親方を出せ」
「わたしが、現場の責任者じゃけ、仕事の話なら、わたしが聞きます」
「下ッ端は、引っこんどれ。永田組の仕事の話は、永田の親方にするんじゃ」
「角さん、それでは、筋が通らんですよ」
「なんでや？」
「あんただって、友田さんでも、ドテラ婆さんでもないじゃないか。それとも、その伝馬船の人たちは、平尾組の若い衆かね？」
平尾角助は返答に窮して、眼を白黒させた。頭が悪いので、条理を立てて来られると、すぐに、言葉に詰まる。
「わたしも、下ッ端なら、あんたも、いわば、下ッ端。そんなら、下ッ端同士で、話は出来る筈です」
金五郎は、静かな語調でいった。
「よし、そんなら、話をする。玉井、すぐに、永田の若い衆全部を引きつれて、この場から退散せえ。このパナマ丸の荷役は、ちゃあんと、こっちでやる約束が出来ちょる。それを分取りしようなんて、横着にも程がある。さっさと、引っこめ」
「約束？……誰と？……」
「お前の親方の、永田杢次とよ」
金五郎は、せせら笑って、
「奇妙なことを聞くもんですなあ。他人が出鱈目の約束するなら、そんなこともあろうかと思うが、自分の大切な仕事を、本人の永田親方が、なんで、他人に譲ったりなんかしますか？
気でも違わんかぎり……」
「ワッハッハッハッ、永田が狂人ちゅうこと、子分の癖に、気がつかんとか。玉井、お前を贔屓にしとる永田が、お前たちを売っとるんじゃよ」
「そんな途轍もない因縁をつけても、誰も、ほんとうに、する者はない。正当な仕事の邪魔をしたりせんで、ともかく、引き取って下さい」
「ワッハッハッハッ」
と、角助は、また、哄笑した。いかにも、会心そうである。
敵味方の視線が、鋭く、二人に、集中している。
「玉井、引き取らにゃならんのは、そっちじゃぞ。いくらいうても、おれを信用すまいから、証拠を見せてやる」
角助は、腹掛けの丼を探って、一枚の紙片を取りだした。ひろげて、皺をのばし、筋くれだった平手で、ぱんと叩いてから、金五郎の鼻先に突きつけた。
「これを、見れ」
金五郎は、その青罫紙を受けとって、読んだ。
譲渡証である。――「次回入港予定ノパナマ丸、荷物炭一千トン積込ミ荷役ハ、本日、頂戴致シタル金員ノ代償トシテ、

貴殿ニ譲渡仕候段、相違無之、後日ノ為、並ニ一札認メ置候也」そして、永田杢次の署名と捺印。

本文は別だが、その署名の筆蹟は、乱れてはいるけれども、永田のものに相違なかった。印形も、実印だ。

（また、やられたか？）

しまった――と思い、金五郎は、唇を噛んだ。

前にも、数回、同じようなことがあった。そのときは、事件が小さすぎたので、問題とするに足りなかったけれども、永田杢次は、充分、戒心していた筈である。近来、酒乱の傾向があり、泥酔中の記憶は、ほとんど喪失するようになっていた。それを奇貨として、陰謀が企らまれる。それには、サクが利用された。無知なサクは、ただ金が必要なために、奸計にやすやすと陥って、永田杢次に、いろいろな証書に、署名捺印させた。甘い永田は、サクのいうことなら、なんでも聞く。

（この譲渡証も、親方の酔いにつけこんで、サクを介して、行われたものにちがいない）

金五郎は、鉛の熱塊を、咽喉に突っこまれたような感じがしたが、表面は、さあらぬ態で、

「これ、親方の字と違うようですなあ」

と、うそぶいた。

「それじゃけ、永田本人を出せ、ちゅうたんじゃ。現場に、顔をまるきり出さん者に、親方の資格があるか」

「角助さん、親方は、ここに、いますよ」

その女の声で、ふりかえると、いつ来たか、小伝馬船の中に、マンと、永田杢次とが、立っていた。「中学生」の谷俊次も乗って居り、朝食弁当の籠と、五升樽二つが積んである。

「そうか」と、角助は憎々しげに、「そら、あつらえ向きじゃ。……永田さん、その証書を見てくれ。自分で書いたもんを、まさか、見ちがいはすまい」

いくらか酔いも醒めている永田杢次は、永田組の文字の上に、小頭と入った印半纏を着ていた。久しぶりに珍しい仕事装束である。

永田杢次は、角助が、友田の名入り半纏を着て、敵方の船に乗っていることが、腑に落ちないらしい。しょぼついた眼を何度もこすって、

「角よい、お前、いつ、友田の若い衆になったとかい？」

「いつも、かつも、あるもんか。あんたのようなグウタラ親方のところに居ったんじゃあ、先の見込みがないけ、こっちから、ケツ割ってやったんじゃ。……そげなこた、どうでも、ええ。その書付を、よく見て、さっさと、永田組は引きあげれ」

「なんの書付や？」

「これです」

と、金五郎は、譲渡証を、永田に渡した。金五郎は、悪いところに、親方が来た、と思ったけれども、仕方がない。もし、永田が、それを認めると、大変なことになる。まさか、親方の譲渡証など角助が持っていようとは思わなかった。また、この日ごろ、現場に来たこともない親方が談判の最中に、姿をあらわすことなども、夢想だにしなかった。意外なことの連続だ。といって、満目衆視の中で、親方に姑息な智慧づけをすることも、許されなかった。

永田杢次は、うすい青罫紙を両手でひろげ、不審げな顔つきで、読んだ。ようやく白んで来た朝の光にあてて、透かしてみるように、天に向かって、高くさしあげ、小首を傾けた。
「こら、なんじゃ？　妙なもんじゃなあ」
と、呟いた。
それを聞いて、金五郎は、ほっとした。
角助は、いよいよ、顔をまっ四角に尖らせて、白濁した三角眼をひんむき、
「妙なもんちゅうことが、あるもんか。あんたが、ちゃんと、承認のうえ、自分で、署名して、判子をついたんじゃないか」
「こんなものに、なんで、判をつくもんかい」
「今さら、白ばくれても駄目じゃ。その字も、判も、あんたのものに違いないよ」
「こんな馬鹿な書類に、名を書いたり、判をついたりした覚えはない。字も、判も、ようもまあ、似せたもんじゃなあ」
永田杢次は、まったく、記憶がないのであった。実際は、知覚を失した泥酔中に、サクに手伝わせて、署名捺印したのである。手付として、貰った金も使ってしまった。しかし、その片鱗だに記憶に残っていないので、柔和な眼に、しだいに、猜疑のいろを浮かべて来て、怒りはじめた。
「角よい、お前は、それでも、人間か。こんな偽の書付をこしらえて、恩になった親方に、後足で、泥をはねかけるようなことをするなんて……」
「そんなことじゃろうと、思うた」
金五郎は、そういうと、素早く、永田の手から書類を取って、ずたずたに、引き裂いた。出来るだけ細かく、特に署名捺印のところが、後に痕跡を残さぬように注意して、粉々にした。
「なにを、無茶するか」
おどろいた角助が、喚くように叫んで、飛びついて来たが、左手でおさえて、
「無茶は、そっちじゃ。仕事師なら、こんなインチキせんで、もっと、男らしゅうしろ」
そういって、霰のように、紙片を、海に、散らした。うすく脆い和紙は、水に落ちた雪のように、溶けて行く。
「畜生、ウウウ……」
角助は、呻いた。痙攣ったように、ふるえだした。醜悪な顔が化物のようになり、むきだされた乱杭歯が、ガチガチ、鳴る。
金五郎を、憎悪の眸で、睨みつけていたが、急に、身体をひるがえし、提灯をかきわけて、自分の伝馬船の最後尾に、撤退した。金五郎の膂力をよく知っているので、正面から立ち向かっても、勝ち味のないことは、角助自身が、百も承知している。
角助は、艫に突っ立つと、俄かに、虚勢を張り、胸を反りくりかえして、
「永田組の野郎どもを、たたんでしまえ」
と、絶叫した。
「友田」の提灯を持った仲仕たちが、どよめいて、永田組の伝馬船へ、殺到する気配を示した。
「手出しをするな」
舳に立っていた金五郎は、ふりかえって、落ちついた語調

で、組内の者に、声をかけた。
これが、人気(ひとけ)のない野ッ原かなにかであったならば、大喧嘩になったかも知れない。しかし、あまりに、観衆が多すぎた。洞海湾(どうかいわん)という、巨大で、花やかな、いわば、野天舞台の中央でのページェントだ。しかも、突発的事故ではなく、前々から、不穏の空気は察知されていたのである。
そのうえ、当日の、三番浮標(ブイ)を中心とする舞台装置、大道具、小道具の仕掛けが、派手すぎた。
どちらも、あかあかと、提灯をともしているので、金五郎と、角助とか、談判をしている最中に、すでに、水上警察署のランチが、ブイのところへ来ていた。ランチには、帽子の顎紐をかけた警官が、鈴なりに、満載されている。
また、石炭の荷主である麻生のボートも、到着していて、会社の本船係や、現場監督が、この場のなりゆきを注視していた。
角助の号令で、友田方が動きはじめると同時に、警察のランチから、大勢の巡査が、伝馬船に飛び移って、二組の間に、垣を作った。
「邪魔すんな、退け、退(どと)け」
逆上した角助は、もう、相手の見さかいがない。狂気のように、喚く。
しかし、そのときは、友田方は、警官たちに遮られて、行動の自由をうしなっていた。
結局、友田方が引きあげることになり、二隻の伝馬船は、水上のランチに曳航(えいこう)されて、若松側へ帰って行った。
失意と、憤怒とで言葉をうしなった角助は、ただ囈言(うわごと)のように、
「憶(おぼ)えちょれ。……今に、見ちょれ」
と、それを、くりかえしているばかりだった。
「すぐに、荷役をはじめてくれたまえ」
麻生の本船係が、ほっとしたように、金五郎に、いった。
「そうしましょう」
金五郎は、ひどく浮かぬ顔をしていた。
「いや、君のおかげで、無事に、すんだよ。ありがとう。一時は、どうなることかと思った。偽の譲渡証を作って、仕事を奪おうなんて、ひどい奴等だね。……でも、よかった。よかった」
金五郎には、勝利の快感など、まるでなく、或る後(うしろ)めたさで、気が滅入って仕方がなかった。
「玉井、早よ、仕事に掛かれ」
永田杢次は、満面に、よろこびと、得意のいろをうかべて、金五郎をうながす。
マンも、
「あなた、すぐに、はじめたら、……」
と、憂鬱そうな夫を、不思議そうに、眺めて、顔をのぞきこんだ。夫の両眼に、なにか、きらめいているものがある。涙だと知って、マンは、はっとした。とっさには、それが、なんの涙なのか、理解出来なかった。
「あなた……？」
どうなさったの？――それは、心の中でいって、金五郎に、近づいた。
「ようし、仕事、はじめえ」

マンを避けるように、金五郎は、くるりと廻転すると、右手を高くあげて、叫んだ。マンには、顔を見せず、舷側の棚紐をつたって、猿の敏捷さで、瞬く、間に、高いパナマ丸のデッキを躍りこえた。

活溌に、荷役が、開始された。

この種の仕事に馴れない大川時次郎は、艀(はしけ)の中で、「入れ鍬(くわ)」をした。スコップで、籠に、石炭を入れる役である。女の領分だ。しかし、元来が百姓で、力はあるので、ちょっとの間に、要領をおぼえると、女の三倍は能率をあげた。

しかし、時次郎の関心は、無論、そんな、仕事を憶えることにはない。彼の胸中には、これまでに見た恋敵の言動が、一杯に、つまっている。

時次郎は、息苦しい。それは、肉体の過動から来るものではなくて、明らかに、精神の昏迷から、来ているものであった。

(玉井金五郎という男は、おれの考えていたような、飲んだくれの、ばくち打ちの、ゴロツキとは、すこし、違うようじゃ)

時次郎にとっては、マンを独占している男が、醜男(ぶおとこ)で、グウタラで、無能で、なんの取り柄もないヤクザ者であった方が、はるかに、よいのであった。前夜、マンと、蒲団のことで、押し問答をしているところへ、突然、あらわれ、彫青(いれずみ)の肌をむきだして、「打(ぶ)ち斬ってくれる」といったときには、金五郎を怖れる気持は、すこしもなかった。ところが、今、そのゴロツキが、なにをしたかを、終始、目撃した時次郎は、しだいに、金五郎を怖れる気持を生じていた。

(憎い恋敵奴)

景気づけに、強いて、時次郎は、心の中で、呟く。嫉妬の感情に変りはない。けれども、軽侮と憎悪の念は、いつか、影をひそめているのである。といって、マンを、あきらめる気持はなく、

(なにがなんでも、マン坊は、おれのものにするんじゃ)

と、時次郎は、力(りき)みかえるのだった。

時次郎は、マンの方を、そっと、見た。同じ艀の中で、雁爪(がんづめ)を持って、せっせと、入れ鍬をしている。その甲斐々々しい働きぶりは、たしかに、時次郎のことなどは念頭になく、玉井金五郎のこの大切な仕事へ、全心全力を傾けて、協力している姿にちがいなかった。

マンは、ときどき、汗をふき、仕事の手を休めて、デッキの上の金五郎を見る。時次郎の方は、一度も見向きもしない。

印半纏をぬいだ金五郎は、丼のある紺の腹掛けの両側に、腕をむきだしにしている。その左腕に躍っている昇り龍が、朝の光線に、青々と浮きあがり、眼を光らして、荷役の采配を振っているかのようだった。

「そら来い。そら来い」

金五郎の声は、弾んでいる。

(あの男、パナマ丸の荷役の後で、おれとマンとを成敗するというたが、ほんとに、おれを斬りはせんじゃろか?)

そのことが、時次郎は、急に心配になって来た。

「珍しい荷役じゃなあ」

船長も、会社の本船係りも、感心したように、眺めている。

普通、荷物炭荷役の場合には、舷側に、棚は吊らない。雛

壇をこしらえて、天狗取り作業をやるのは、焚料(バンカ)炭の場合に限られていた。それを、今日、特に、棚を吊ったのは、敵の裏をかく作戦である。たしかに、燈台沖までも漕ぎだして、危険をかえりみず、棚を吊っておいたおかげで、敵は手出しが出来なかったのである。

荷物炭は、艀から、本船へ、長い歩板(あゆみ)をかけ、その上を登り降りして、振りわけにした担(にな)い籠(かご)で、積みこむのが通常だ。金五郎の苦肉の策にしたがって、今日は、二通りの荷役が、同時に、行われているのだった。これには、人数を多く要するけれども、荷役の能率は倍に近かった。

一千トンもの仕事は、一日では終らず、掛かってから三日目に、ようやく終了した。

この間、妨害に対する警戒が、充分になされていたが、友田喜造からも、ドテラ婆さんからも、平尾角助からも、なんらの不穏な働きかけはなかった。静かなのが、かえって、不気味なくらいである。問題が大きくなりすぎて、警察が干渉して来たためであったかも知れない。

パナマ丸荷役が、つつがなく終ったことをよろこんだ大庭春吉は、永田杢次をはじめ、金五郎、松川源十、マン、その他、七八人の主だった部下を、自邸に、招待した。

「玉井が居らなんだら、どうなっとったか、わからん。玉井は、永田組だけじゃない、聯合組の大黒じゃ」

大庭は、そういって、しきりに、金五郎を賞揚した。

しかし、金五郎は、何故か、仏頂面をしていて、終始、憂鬱そうだった。

この宴席から、永田杢次は、いつの間にか、姿を消してしまった。

金五郎も、自宅に、「六ゾロの源」をはじめ、十人あまりの仲間を招いた。すき焼で、ささやかな犒(ねぎら)いの宴を張った。

「みんなが、よくやってくれたので、どうにか、無事にすんだ、ほんとに、ありがとう」

金五郎は、そういい、座にいる大川時次郎の方を向いて、

「御苦労さん、あんたにも、一杯」

と、盃をさした。

「金さん」

と、もう、菊石面(あばたづら)を真赤に染めている源十が、すこし、声を落した。

「なんじゃね？」

「角助が、右手の小指に繃帯しとるのを、見た者があるちゅうぞ。新しい繃帯で、石炭酸のにおいが、しよったちゅうけ、きっと、今度のしくじりで、小指を切って、ドテラ婆さんか、友田かに詫びを入れたんじゃよ」

「ふウン」

「あいつ」と、「中学生」の谷俊次が、「指ばっかり切っとるなあ。左手の小指も、薬指も、先がありゃせん。そのうちに、どの指も、第一関節から先が無(の)うなって、生姜(しょうが)のような手になるぞ」

その言葉で、一座は、どっと笑ったが、時次郎には、なんの意味なのか、わからなかった。きょとんとした顔つきで、

「どがあなわけで、指なんか切るとですか？」

源十が、

「ドジを踏んだお詫びに、指を切って、こらえて貰うんじゃ

よ」
「ドジ、というのは？」
「たとえば、今度のように、こっちの仕事を取り損うたり、ばくち場で、インチキをして抑えられたり、親分の顔をつぶすようなことをしたり、選挙の運動をして、候補者を落選させたり、……それから、間男を見つけられたり……」
「間男、も、ですか？」
「そうよ」
時次郎は、びっくりした顔になって、金五郎を、見た。マンを、見た。二人の顔を、かわるがわる、見くらべた。
「ワッハッハッハッ」
と、金五郎が笑いだした。時次郎はひやっとした。
「広島の客人は、まるきり、自分が間男したみたいな、心配そうな顔しとるなあ。それとも、広島で、間男でもして、逃げて来たのかね？」
「とんでもなあ。そがあなこと、僕がするもんけえ」
「そんなら、なにも、びくびくすることはない。あんたは、間男するよな顔は、しちょらん。真面目らしいし、よう、仕事も出来る。……ところで、客人は、これから、どうなさる？」
時次郎は、眼を白黒させた。なにがなんだか、さっぱり、わからないのである。
マンは、とっくに、すべてを理解していた。
（得意の、おどけ芝居だわ）
蒲団を中にして、時次郎と押し問答している最中に、金五郎が入って来た。ガタッ、ピシャッ、というわざとらしい障子の開け方、家に置いてあった筈の助広の短刀、「間男、見つけた」という、芝居もどきの台詞、無理矢理に、ぐりぐりとひんむいている眼ン玉――マンを信じていて、姦通したなどと、微塵も疑ってはいない癖に、彫青について訊ねられることを封じての芝居なのだ。そう、マンは、あの夜から、すでに、看破していたのである。
くすくす、笑いだしたいのを我慢しながら、時次郎が、なんと答えるかを待った。
時次郎は、ちょっとの間、考えていたが、顔をあげると、きっぱりした語調でいった。
「この組に、置いて下さい。玉井さんの家来にして下さい。一所懸命、働きます」
歌が出たり、踊ったり、賑やかに、気持よく、おそくまで騒いで、仲間は引きあげて行った。
大川時次郎は、独身者の飯代部屋に入れることにして、「六ゾロの源」が、つれて帰った。
杯盤狼藉のなかに、二人だけが残されると、まるで、半年も逢わなかった後のような気持で、金五郎も、マンも、ぽかんとした顔をつきあわせた。金五郎が帰った夜以来、パナマ丸の荷役に追われて、夫婦は、なにひとつ、ゆっくり、話す間がなかったのである。
時ならぬ御馳走の散乱に、七匹の猫が、それぞれの場所で、活躍している。
「マン、くたぶれたろう？」
いたわるような、金五郎のその言葉に、マンは、ぐっと胸がつまって来たが、
「いいえ、あなたこそ」

そういって、煙管を取りあげた。キザミをつめて火をつけ、一口吸ってから、夫に渡した。
無言で、金五郎は、それをおいしそうに吸い、蛾の戯れているランプの火屋(ほや)を、じっと、見あげていたが、ふいに、その両眼から、ラムネ玉のような、大粒の涙が、タラタラタラと、あふれ落ちた。
マンは、びっくりして、
「あなた……？」
マンの眼に、パナマ丸の現場で見た、夫の不思議な涙の記憶が、よみがえって来た。
金五郎は、妻からされたように、黙って、キザミを雁首につめ、火をつけ、一口吸って、マンに煙管をかえしてから、
「おれは、駄目じゃ」
と、唇を噛んで、呟いた。
「どうなさったの？」
「なっとらん」
「あなた、仕事場でも、泣いていなさったようにあったが……？」
「泣いたんじゃない。口惜しいやら、情ないやら、馬鹿々々しいやら、恥かしいやら、……あんまり、腹が立つもんで、笑うてやろうと思ったら、どうしたわけか、眼から、水が出たんじゃ。角助をインチキ呼ばわりしたが、こっちの方が、よっぽど、インチキじゃった。こんなことじゃあ、龍になって、天に昇るどころか、谷底に落ちて、這いずりまわるが、関の山じゃ。なっちゃあ、居らん」
金五郎は、憂鬱そうに、膝をかかえた。

――龍。
その言葉を口にされて、マンは、どさくさで忘れていた夫の彫青のことを思い起した。
「あなた」
「うん？」
「彫青、どうなさったの？」
「これか」
金五郎は、片肌を脱いだ。愛撫するように、右手のたなごころで、二三度、龍のうえを撫でさすった。ランプの光の下で、青の色が美しい。
「誰から、彫(ほ)って貰ったんですか？」
「親方たちと、武蔵温泉に行ったとき、ひょっくり、腕のえ彫青師(ほりものし)に出逢うてなあ。おれの肌を見て、どうしても彫りたいという。こっちも彫って貰いたいと思うて、いっしょに、博多に行ったんじゃ。これだけに、一週間かかったよ」
金五郎は、お京との秘密を、マンに知られることを恐れた。胸の奥底が、疼(つ)く。
憑かれたような、夢幻のような、一週間であった。金五郎はマンへ秘密を持ちたくはなかったけれども、それは、強力無双な運命の軛(くびき)のように、いったん捕えた金五郎を、離そうとはしなかったのである。
あの夜、泥酔した果、お京から、両腕に、龍の絵を描かれて、おどろいた。牡丹と蝶のお京の右腕と、昇り龍の自分の左腕とをくっつけて、鏡の中に映したとき、金五郎は催眠術をかけられたように、妖艶なお京の毒気にあてられていた。
「ねぇ、金五郎さん、きれいでしょう？」

お京は、男の腕をさすり、甘たるい声で、ささやいた。
「うん、きれいじゃなあ」
金五郎も、そう、思った。
「どう？　絵ではなくて、ほんとうに、彫ったら？」
「そうじゃなあ……」
「あなたのような身体は、彫青を入れるために、あるようなものよ。あたし、これまで、随分、いろんな人の身体彫ったけど、金五郎さんのような美しい肌、見たことないわ。涎のたれるほど、惚れ惚れする。白のままで置いとくなんて、ほんとに、もったいないわ」
「般若の五郎さんも、そんなこと、いうとったなあ」
「ねえ、彫んなさいよ。立派な男の紋章じゃないの」
「お京さん」
「あい」
「あんたが、彫ってくれるのかね？」
「勿論、そうよ。誰が、ほかの人に彫らせるもんですか」
「よし、彫ろう」
後には、生涯の禍根となり、そのときになって、どんなに後悔しても追っつかなかった彫青を、このとき、金五郎は、或る陶酔感をもって、肉体に刻印しようと、決意したのであった。
「えらい」
お京は、大仰に、賞讃の声をあげて、ニタッと、会心の笑みを洩らした。
その翌朝、まだ暗いうちに、二人の姿は、武蔵温泉から、消えた。

博多市を貫流する那珂川、春吉橋の畔、流れに面した小粋な待合の一室で、二人の奇妙な生活がはじまった。
まず、左腕から、昇り龍を彫ることになった。どこを旅するにも、お京は、道具一式を携帯しているらしい。お京は、下絵を描かない。ぶっつけに、白紙の腕に、彫って行く。右手に、小町針を数本、束にして持ち、左手に、墨をふくませた筆を持って、針を肌に突きさす端から、色を入れる。熟達したみごとな腕前である。
なにもない白い金五郎の腕のうえに、龍の眼玉、鼻、角、髭、と、順々に、浮きあがる。金五郎は、チクチクと、痛いけれども、我慢した。
お京が笑って、
「痛そうね？」
「なんの、擽ゆうて、気持がええわい」
「腕なんて、一番、痛くないところよ。尻や、腰のときは、気の弱い者は、涙をこぼすわ」
針が、龍の上肢に来たとき、金五郎は、
「ちょっと待って」
と、お京の手を止めた。
「どうしたの？」
「その肢には、なにをつかむ？」
「宝珠の玉よ。きまってるじゃないの？」
「菊の花を、描いて貰いたいんじゃ」
「菊？　変ねえ」
不審げに、そういったけれども、お京は、いわれるまま、大束の菊を、龍の肢につかませた。

夜になると、心得顔の仲居が、粋をきかせて、蒲団を一つ、枕を二つならべて、出て行った。
おどろいた金五郎は、廊下まで、仲居を追っかけて出た。
「もしもし、姐さん」
「なんですかいな」
「床は、二つ敷いてくれんと、困るよ」
「阿呆らしか。野暮なことば、いいんしゃんな。そげんかことしたら、お京さんに叱られます」
「いかん、いかん。絶対、二つ」
「知らん、知らん」
「おい、待て、待て」
そんな押し問答をしていると、騒ぎを聞きつけて、お京が出て来た。腹をかかえて、笑いだした。
「笑いごとじゃないよ」
不機嫌なその金五郎の言葉には答えず、お京は、なお笑いながら、仲居に、蒲団は二つにするように、命じた。
夜も、彫青作業はつづけられた。
時期を指示されて、金五郎は、風呂に入る。特に彫青のために、一日中、湯が湧かしてあった。熱い湯にひたると、針を立てられる以上の苦痛をおぼえた。腕がしびれ、もげそうに、疼く。しかし、入浴しなければ、ほんとうの色が出て来ないのだった。
寝る段になると、金五郎は、一苦労だ。お京が風呂に行った隙に段取りをした。仲居が敷いて行った二組の蒲団を、六畳の端と端へ寄せ、間を出来るだけ離す。それでも、不安なので、中間に、部屋にあった金泥の二枚屏風を立てた。
湯から上って来たお京が、笑いだして、
「金五郎さん、それ、なんの呪禁？」
「魔よけじゃ」
「魔がいるの？」
「居るよ」
「どんな魔？」
「気色の悪い魔じゃ」
「変なひとねえ」
笑っていたお京の切れ長の眼が、複雑な思いをこめた秋波になる。
お京が、金五郎に対して抱いている関心は、単に、彫青だけではなくなっていることは、疑いなかった。うすうす、金五郎もそれを感じていたので、境界線を作ったわけである。
しかし、狭い六畳の部屋に、若い男女が二人居れば、蒲団は、一つでも、二つでも、同じことだ。屏風の城壁など、なんの役にも立たない。
金五郎が眠っていると、ぶつかるように、お京が飛びついて来て、眼をさます。お京は白い襟のついた緋縮緬の長襦袢を着ている。鬘下にした髪からは、濃いビンツケの香が立ち、白粉と香水とのまじった官能的なにおいは、金五郎の鼻孔をくすぐる。
金五郎は、胸がどきどきして、
「お京さん、どうした？」
「鼠よ。鼠、あたし、大きらい」
そういって、金五郎へしがみつく。
おどろいた金五郎は、お京を突きのけるようにして、立ち

あがる。部屋中をうろうろし、
「鼠はどこに居るんじゃ？　鼠なんて、怖くないよ。……シッ、シッ」
と、頓狂な恰好で、追い声を出す。鼠の姿など、どこにも見えない。やっと、別々に寝たかと思うと、「壁虎（やもり）が出た」といって、また、金五郎の方へ、出張して来るのだった。
ようやく、一夜が明けた。
どうやら、なにごともなくて過ぎたが、金五郎は、不思議な疲れかたをしていた。
朝食のとき、お京は、元気がなかった。
「お京さん、どうしたかね？」
「今ね、考えていたら、つくづく情なくなったの。あたし、ほんとうに力になってくれる男の人って、誰もないのよ。やっぱり、女って、男が頼りね」
しんみりと述懐するお京の眼に、涙さえ浮かんでいるのではないかと思われたが、金五郎の方は、反撥するように、心のなかで、
（なにをいうとるか。あんたほどの女を、誰が放っとくものか。男はうようよ、惚れ手は山ほど、黒い紐、赤い紐、青い紐、紐だらけじゃろうよ）
そんなことを、考えていた。
しかし、口には出さず、
「お京さん」
「あい」
「わたしは部屋住みの主人持ち、仕事の責任もあるもんで、長くは家をあけられん。出来るだけ、早う、願いたんじゃが……」
「ウフフ、おかみさんのところへ、早く帰りたいのとちがうの？」
「女房なんて、どうでも、ええが……」
「どうか知ら……？」
お京は、どうやってみても、金五郎が誘惑に乗って来ないので、あきらめたらしい。
「大体、定法から行くと、彫青が終ってしまうまでは、男女の慾は禁物なのよ。皮膚がたるんだり、脂くさくなったりして、出来上りが不様になるから……」
そんなことをいって、金五郎の警戒心を解こうと努めた。深謀遠慮、長期作戦の決意をした模様である。
昼夜兼行で、仕事がつづけられた。二日、三日、五日、と過ぎた。金五郎の左腕に、みごとな昇り龍が、日とともに、完成されて行った。
お京は精魂を傾けつくしているように見えた。豊麗な顔に、やつれがあらわれた。
しかし、危険は増大して来た。どんなに忍耐していても、若い男女が、二人きり、一室で起居をともにしているということは、杓子定規では行かない。道後以来、三年間も、不可解な思慕の像を、心の乾板に焼きつけていた金五郎の方にも、いつ陥没しないともわからない要因があった。ときどき、ふっと、悪魔の心に誘われて、切ない瞬間がある。
日夜、顔をつきあわせ、裸の肉体を身近に接触させつづけている生活が、金五郎は、息苦しく、恐しく、なって来た。

そして、遂に、片腕だけ仕上った夜、お京の隙をうかがって、待合を脱出したのであった。金五郎は、
（お京のことは、マンには、話すまい）
そう、心の中で、思い定めた。
重々しく掩いかぶさって来るお京の幻影を、追いはらうようにしながら、金五郎は、龍が上肢につかんでいる菊の花束を、マンに、示した。
「この菊は、門司時代のお前のことを思いだしたもんじゃけ、特別に入れたんじゃ。上海コレラ騒ぎで、森の新公と監禁されたとき、お前が、箱の中に、菊の花を入れてくれた思い出は忘れられんよ」
それを聞いても、彫青など好きでないマンは、なにか疑い深そうに、不機嫌な顔をしていた。

日露戦争は終焉を告げ、十月十六日、平和克復の大詔が、換発された。
東京湾で、大観艦式が行われることになって、東郷司令長官率いるところの聯合艦隊が、関門海峡を通過した。北九州地方は、このために、日の丸の旗に埋めつくされ、凱旋部隊を歓迎する声のどよめきは、文字どおり、天にとどろき、地を揺がした。
金五郎夫婦も、旗を持って、門司まで、見物に出かけた。
そのとき、群衆のなかで、浜尾組時代の古い仲間に、ひょっくり、顔をあわせた。
「おや、こりゃあ、金さん、珍しい。あんた、長いこと見なんだが、戦争に行っとったんじゃあなかったな？」
「わたしは、甲種の籤脱れでなあ」
その男の話で、旧親方の浜尾市造が、一儲け企らんで、軍夫長で渡満し、奉天戦のとき、流弾にあたって、戦死した消息を聞かされた。
敗北したロシヤに、革命の動乱が勃発した。モスクワでは、革命党員が政府軍と交戦して、数万の死傷者を出した旨が、新聞によって報じられた。
この年の冬は、北九州は、雪が深かった。その大雪のうちに、新しい年を迎えると、洞海湾は騒然として来て、石炭積込みの聯合組にも、革命が起った。
降り積んだ雪のうえに、さらに、牡丹雪が霏々として降りやまぬ或る日、金五郎は、大庭春吉の屋敷に呼ばれた。
「玉井、折り入っての頼みが、あるんじゃが……」
そういう大庭春吉の言葉は、はじめから、意味ありげだった。
金五郎も、緊張した表情になって、大親方の顔を仰いだ。
「承ります」
「どうしても、お前に決心をして貰わねばならんことが出来た。お前を男と見こんで、頼みたい」
「どんなことでしょう？」
「お前に、永田組の跡を継いで貰いたいんじゃ」
金五郎は、びっくりして、すぐには、返事が出なかった。
低く、頭をたれた。唇を噛み、ぐっと、唾をのみこんでから、呟くように、
「それは、私には出来ません」
と、答えた。

「お前が、そういうにちがいないということは、わしにも、わかっとった。親方思いのお前としては、当然のことじゃ。じゃが、玉井、大事なのは、ここぞ。ようく、噛みわけて考えなおしてくれ」
腕組みした大庭春吉は、ひと膝、乗りだした。一段と、語調を強めた。
「今、この急場を救うてくれる者は、お前を置いてない。勝戦のおかげで、港も仕事の増える目安がついて、これから忙しゅうなるんじゃが、そこに、また、別の心配がある。吉田磯吉の勢力をバックにして、友田喜造一派は、いよいよ、これから暴れる算段をしとる。この前のパナマ丸では失敗し居ったが、この先、どんな手段で来るかも知れん。ロシヤじゃないが、港に、血の雨が降りそうにある。そうなったとき、聯合組は、今の陣容では、太刀打ち出来ん。それで、重役会議の結果、大改革をやることになったんじゃ。その席で、まっ先に、槍玉にあがったのが、永田組じゃよ。いや、永田杢次じゃ」
金五郎は、うつむいたまま、下唇を軽く噛んで、当惑しきっていた。
大庭春吉の声は、さらに、熱にあふれる。
「永田杢次を処分しなくてはならんということは、今に、はじまったことじゃない。堪忍袋の緒が切れた、というところじゃ。聯合組全体の統制上、なんとも仕方がない。玉井、もう、永田組の札を番下げにすることは、定まってしもうたことなんじゃよ」
大庭夫人が、茶道具を盆にのせて、入って来た。長火鉢に坐って、銅壺から、熱い茶を入れた。大庭春吉が今日あるのは、夫人の内助の功に、半を負っていると噂されるほど、勝気で、さばけた女である。もう五十に近いが、色艶が娘のように若々しい。
「金さん、番茶を」
「頂きます」
腰高障子のガラス越しに、音もなく、紛々と、降りしきる雪が、絣の模様のように見える。
「なあ、玉井」
「はい」
「わしが頼みというのは、ここじゃ。永田組が番下げになってしまえば、当然、解散。永田はええとしても、小方は路頭に迷う。そこを、お前が、跡を継いでくれることになると、小方は勿論、聯合組にも、筋金が入ることになる」
「親方を退けた後釜に坐ることなど、とても、出来ません」
「お前のその気持は、よくわかる。じゃが、それが、結局、永田を救うことにもなるわけじゃよ。永田の名を復活することは、もう、絶対に出来ん。重役連中も――玉井金五郎が責任者になって、玉井組の名で札を掛けるのなら、これまでの永田の荷役権利を認める。……そういうとるんじゃ。……な、玉井、決心をしてくれ。わしが、頭を下げて、頼む」
大庭春吉は、そういうと、腕組みを解き、膝のうえに両手をのせて、軽く、頭を下げた。
金五郎は、仰天して、
「大親方、なにをなさいます？」
「玉井、わしは、前々から、お前を、永田組ではのうて、聯

合組の大黒柱になって貰いたいと考えとった。それで、すこし、出過ぎたかも知れんが、永田組の札のあとに、玉井組の札を掛けることも、もう、すっかり、段取りしてしもうた。それから、本腰を入れて、仕事を切り盛りして欲しいと思うて、お前のために、家も一軒、借りてある。若い衆を十人くらいは置けるくらいの、ちょっとした二階家じゃ。そこへ、移って貰いたいと思うとる」

「その家というのは、どこですの？」

と、夫人が、訊ねた。

「若松の新仲町じゃ。どうで、洞海湾の石炭荷役は、若松港が主じゃけ、仕事師は、若松に住んどらんと、本式にならん。この戸畑はなにかと不便じゃ。聯合組の事務所も、若松側にあるし、……な、玉井、そうしてくれ」

「困りました」

「若松は、うるさい奴が、いっぱい居るけ、怖いか？」

「怖いことなんか、ないですけど……」

「そんなら、行ってくれ。若松で、玉井組の看板を掛けて、立派な男になってくれ」

「金さん、あたしからも頼みますよ」

「帰って、家内と相談してから、御返事します」

金五郎は、牡丹雪を被りながら、重い足どりで、帰宅した。

金五郎夫婦は、額をつきあわせて、青息吐息である。

「どうしたもんかなあ……？」

「困ったわねえ」

港では、一つの仕事の権利を取り、組の名札を掛けることは、金的を射とめたと同じ栄誉となっている。このために、日夜、野心家の間に、血なまぐさい争闘が展開されているほどだ。

ところが、金五郎の場合は、野心もなければ、欲望もなく、まして、運動をしたわけでもなかったのに、予想もしない、一つの組としての権利が、天くだって来たのであった。普通の者ならば、飛びあがって、この棚から落ちて来た巨大なボタ餅を、大あわてで掴むところだ。しかし、金五郎にとっては、この御馳走が、すこぶる苦痛なのであった。

夫婦の寝物語から、壮大な青春の夢は、まだ、消えていない。

「おれは、ゆくゆくは、支那大陸に渡って、一旗あげる。幸い、日露戦争の勝利で、存分に活躍出来るようにもなったし……」

「あたしは、やっぱり、ブラジルよ。大農場の経営、すてきだわ」

二人が、仲仕をしながら、力をあわせて働いたのも、その青雲の志あればこそといってよかった。

ところが、複雑で微妙な人間の実生活は、二人を、ぐいぐいと、思いもかけぬ方向へ導いて行く。避けようと努力している方角へ、強力な運命の軛が、二人をねじ向ける。また、二人の気質が、否応なしに、人情の谷間へ落ち、そこへ二度と這いあがることが困難なほど、深々と、沈む結果をも将来しているようであった。

――若松。

金五郎も、マンも、猛獣のうようよしているジャングルとして、敬遠し、行くところでも、住むところでもない、と考

えていたのに、運命の暴風に吹きまくられて、その若松に根を下さなくてならぬ廻りあわせが、おとずれつつあるのであった。
「弱ったなあ……」
「どうしたら、ええか知らん……？」
困惑しきっている金五郎夫婦を、憤然と、永田杢次が訪れて来た。しおれ切っている。
「玉井、おれの後を頼む。長いこと、聯合組に尽したおれを番下げにするなんて、腸（はらわた）がちぎれそうじゃ。本来なら、腹いせに、事務所のまん前で、舌噛んで、死んでくれるところじゃが、お前が後（あと）をやってくれるちゅうんなら、我慢する。外の者（もん）がやるんじゃったら、承知すりゃせん」
「親方、わたしは、いやです」
「やってくれ。お前がやらにゃ、外の者から、仕事を取られるだけの話じゃ」
「六ゾロの源」をはじめ、永田組の小方連中も、金五郎へ、懇請するところがあった。
松川源十は、いった。
「金さん、おれたちは、みんな、よろこんで、あんたの子分になる。みんな、あんたのため、命も惜しまんというとる。玉井組の札を掛けて、おれたちの親分になっておくれ」
金五郎は、遂に、決心した。マンも、同意した。金五郎夫婦は、若松に移住した。
聯合組の事務所の壁から、古ぼけた「永田組」の札が外され、真新しい「玉井組」の札がかかげられた。
その日は、明治三十九年二月十九日。
金五郎、二十七歳。
その記念すべき日の朝、マンは、夫に、
「あなた、あたし、赤ちゃんが出来たかも知れんわ」
そういって、ぱっと顔を染めた。

七人の敵

「喧嘩じゃ。喧嘩じゃ」
そう叫びながら、幔幕の外を、走って行く者があった。
「どこで、やっとるんじゃろうか？」
角助が、呟くと、
「放っとけや。珍しゅうもない。花見に喧嘩はつきもの、景物の一つたい。喧嘩のない花見は、花見のうちに入らん。そんなことより、おれが歌うけ、芸者衆、三味線をひけ」
島村ギンは、そういって、酒を一杯満たした湯呑茶碗を、ぐっと、一息に、飲みほした。
「ドテラ婆さん」と呼びならされて、本名の方は忘れられているギンは、赤毛氈のうえに、胡床をかいて、もう、だいぶん、陶然たる様子だ。その名の起った、チャンチャンコまがいの袖なしドテラを着て、白足袋をはいている。女角力のように、堂々とした体格だ。色は浅黒く、利かぬ気らしい精博の気が顔にあふれ、糸のような細い眼に、異様な光がある。大丸髷に、桜の花びらが幾ひらも乗っている。
洞海湾を中心とする北九州を、眼下に一望できる金比羅神社の境内は、撩乱たる桜の花ざかり、晴れあがった春空の下で、各所に、花見宴が張られていた。
「ドテラ婆さん」も、十四五人の子分づれで、朝から、気焔をあげていた。芸者も、五人ほど、席に侍って、取り持ちをしている。
ギンの命令で、二人の芸者が、三味線を取りあげた。一人が、
「なにをお歌いになるの？」
「磯節。……ええな」
女親分は、細い眼をさらに細めて、歌いだした。
若松名所を知らない人に、
若松名物、知らせたい。
金比羅山から、岬の山、
桟橋、眺めりゃ、
岡蒸気が、ピイ……
まるで、申しあわせたかのように、眼下の鉄道桟橋のうえを走る汽車が、ピイッと、汽笛を鳴らしたので、どっと、拍手と笑い声とが起った。
「さあ、今度は、角助どんの番じゃ。なんか、やれ」
男のような言葉つきであるが、その声は、黄色い金切り声である。
「やります」
角助も酔っていて、そういうと、坐りなおした。正方形の醜悪な顔が、ベンガラ色になっている。膝のうえに乗せた手には、左の小指、薬指、右の小指、いずれも、第二関節から先がない。丸太ン棒のようである。
「三味線は、要らん。日露戦争の尻とり歌じゃ。言葉の最後の字が、次の言葉の頭になっとるところを、照覧あれ」
「講釈は、それくらいで、ええ」
「そんなら」
角助は、天に顔をあげ、「日本の、乃木さんが、凱旋す、雀、目白、ロシヤ、野蛮国、クロポトキン、きん玉、マカローフ、

褌、しめた……」
「ちょっと待った」と、女親分が、笑いながら、「角助どんは、しめようにも、褌がないのとちがうか。いつも、ドジばかり踏んで、玉井から、赤恥かかされちょるが……」
「玉井金五郎は、かならず、わたしが殺しますよ。まあ、見とって下さい」
芸者の中にいるお京の眼が、その言葉に、妖しく、光った。
「玉井組も、今日は、来とりゃせんかね」
「来とりますよ。幹部だけらしゅうて、六ゾロの源公たち、五六人、神社の裏手で、こっそりやっちょります」
「金五郎は？」
「さあ、後から来たかも知れんけんど、わたしが見たときは、子分だけでした」
「玉井金五郎って、図々しい奴じゃないか。おれたちの縄張りの若松に、のそのそ、入りこんで来やがって、頭をもたげるなんて……」
「ドテラ婆さん」は、憎々しげないいかたである。腕まくりし、ぐいぐいと、酒を飲む。
角助も、金五郎を憎む点では、誰にも劣らないので、
「ヘン、あいつが、若松に来て、頭をもたげようたって、そうは問屋がおろしませんよ。畳のうえで死ぬ気なら、当てが外れまさあ」
「玉井組は、半纏に、ここの金比羅さんと同じマークをつけとるなあ。生意気な」
「名が金五郎じゃけ、丸の中に、金の字を入れたんでしょう。罰当りですよ。図に乗りやがって、……良心のある者なら、神様に遠慮せんならんとこですばい」
「ちいたあ気の利いた子分でも、居るとかい？」
「碌なのは、居らんですよ。六ゾロの源のような間抜けがボーシンじゃけ、後は大概わかっとる。田舎の郵便配達じゃったという大川時次郎、こいつ、金五郎の女房のおマンと、どうやら、田舎に居ったときから、怪しい仲じゃったちゅうけ、今に、痴話喧嘩が始まりますばい。間男の現場を、金五郎に見つかった、ちゅう噂も聞きましたよ」
「それで、よう、玉井が黙っとるなあ？」
「あいつ、おマンに首ったけで、オンテレ・メンピンじゃけ。わたしなら、惚れた女でも、間男したら、泣寝入りはせんです」
「オコゼを釘にひっかけたような顔しとって、女に惚れる柄かい」
その言葉で、一座は、どっと、笑った。角助はむくれた。
「そのほかには？」
「おマンの兄とかいう谷口林助、門司から、夫婦子供づれで、頼って来たんじゃけど、こいつは、人がええばっかりで、まるきりの意気地なしです。玉井金五郎が、若松で、玉井組の看板をあげたと知って、前の永田組の子分のほかに、方々から、いろんな奴がやって来たらしいですな。金五郎の郷里の四国から、鍛冶屋の清七という頓馬が来て、道具番をやったり、下関の彦島から、「ノロ甚」という綽名の、将棋は馬鹿に強いが、さっぱり仕事の出来ん大とぼけが来たり、それから……」
角助の口にかかると、玉井組は、一人残らず、能なしの役

立たずで、堅められているように聞えた。
お京は、笑いをこらえて、素知らぬ顔で、聞いていた。
「三井物産では、今度、玉井に、焚料口を、一口、持たせるという話を聞いたが……？」
「わたしも聞きました。ほんとらしいです」
「他所者に、縄張の中で、御馳走の撰り食いをされちゃあ、他の者の顔は、丸つぶれじゃないか」
「まあ、わたしに委せといて下さい」
角助は、そういって、自信ありげに、うなずき、指の短い両拳を握って、反っくりかえらせた胸を、どすんと、たたいた。
島村ギンは、ゆらゆらと、立ちあがった。
「しんきくさい話は、やめじゃ。どんちゃん騒ぎをしようや。……芸者衆、踊らんか」
そう喚くように、叫んだ。また、「若松名所を知らない人に」と、歌いだし、三味の音につれて、踊りはじめた。肥満した身体つきに似あわず、柔軟な手足のこなしである。それは、この「ドテラ婆さん」の前身を、物語っているもののようだった。
子分たちも、皆、立った。三人の芸者もまじって、円陣になった。にぎやかに、踊りながら、紅白だんだらの幔幕の内側を、ぐるぐる廻る。
お京も、踊りの列のなかにあった。
（聞きしにまさる大姐御だわ）
ギンの豪快で、すさまじい女親分ぶりを、ひそかに、腹の中で、感歎していた。お京とて、鉄火の世界を渡り歩いた女であるが、どこに行っても、ギンのような女親分を見たことがなかった。女侠客といわれる者は、他にもあるが、「ドテラ婆さん」のような、男か女かわからない、人を殺すことを屁とも思っていない、執拗残忍な女に逢ったのははじめてだ。
（金五郎さんは、殺されるかも知れない）
その不安が、湧いて来るのだった。
お京は、若松検番から、やはり、「お京」という芸名で、芸者に出ている。博多の待合から逃げられた金五郎に対して、長期作戦の腹を定めて、若松に来たのである。
監獄から帰った森新之助と、君香とが始めた「飛鳥」という置屋で、三味と踊りの出来る、年増芸者を探していると聞いて、そこへ抱えられた。金に窮してのうえではないので、自前でもよいのだが、身分を隠すため、わざと、借金をした。新之助も、君香も、「よい妓が来てくれた」といって、すこぶる、よろこんだ。二人とも、まだ、金五郎とのことは、なにも知っていない。
今日は、花見の客を、「ドテラ婆さん」と知って、志願して来たのである。ギンの方は、芸者を五人、花見線香をつけて出せ、というだけのことで、格別、お京に注意もしていなかった。
「ああ、小便がしとうなった。芸者衆、肩を貸せ」
踊っていたギンは、そういうと、傍にいたお京と、染奴という若い芸者とを、引きよせた。両脇に抱きよせるようにし、太い両手を、二人の肩から首に巻きつけた。重くのしかかって、足どりも怪しく、幔幕の外に、出た。
「危いですわ」

お京が、たおれそうになったギンの身体を支えると、
「酒くらいで、引っくりかやるドテラ婆と思うちょるか」
そういって、女侠客は、全身を大きくゆるがして、哄笑(こうしょう)した。
金比羅神社の裏手に、臨時共同便所がこしらえてあった。そこは、断崖になっている。石段は三百段あるから、そこから落ちれば、無論、命はない。
ふっと、お京の胸に、悪逆の心が湧いた。
(素知らぬ顔で、崖の下に落してやろうか。死んだところで、酔余の果ての過失として、誰も、疑う者はないにちがいない)
すると、ギンが、急に、顔をあげて、呟いた。
「おんや、玉井の奴、なにをしちょるとじゃろか? 江崎満吉の子分と、喧嘩やっちょるのか?」
大鳥居から、狛犬(こまいぬ)の石像にかけて、「若松金物商組合(かなものしょう)」という、紺の幕が張りめぐらしてある。
そこのところで、金五郎が、四五人の遊び人風体の男たちと、なにか、いい争っていた。金五郎の方は、やわらかく話をしているが、相手は喧嘩腰だ。金五郎は、着物のうえから、玉井組の印半纏を羽織り、手に、一升徳利をぶら下げている。頬は赤いが、酔ってはいない。
このなりゆきを、心配そうに眺めているのは、金物商組合の人たちらしい。事の起りは、金物屋連中が花見をしているところへ、江崎満吉の子分たちがやってきて、
「ここは、おれたちの場じゃ。お前らは、他所(よそ)に行け」
と、立ち退(の)きを命じたことが、発端のようだった。通りあわせた金五郎が、見るに見かねて、仲裁、に出たのである。
「お前なんかの知ったことじゃない。すっこんどれ」
眼っかちの大男が、憎々しげに、怒鳴った。
「話がわかったら、いつでも、すっこみます」
「話はわかっとるじゃないか。おれたちがここで花見するけ、金物屋がどこかに行ったら、ええんじゃ」
「この場所は、あんたがたの土地ですか?」
「土地でなんか、あるもんか」
「先約でもしてあったのですか?」
「そんなもんは、しとらん」
「そんなら、あんたがたが、無理ですよ。金物屋さんたちは、一週間も前から、契約して、ここを借りていなさる。今日も、朝早うから、準備をしに来て、いま、皆さん、お揃いで、弁当を開かれたところらしい。それを、追いだして、ここを占領しようというのは、どういうわけですか?」
「どういうわけも、こういうわけも、あるもんか。ここの桜が一番きれいで、見晴らしもええけ、ここに、定めたんじゃ。つべこべ、要らん差し出口たたかんで、引き下がっとる方が、お前の身のためじゃろうで」
「わたしの身のためでも、金物屋さんたちが困りなさる。どうですか? もう、ええ場所がないなら、わたしたちのところを譲ってもええから、金物屋さんの方は、勘弁してあげたら……?」
「ここと定めたら、ここでやるんじゃ。……生意気な出しゃばり野郎奴、江崎満吉を知らんとか」
そう叫ぶと、眼っかちの男は、拳をふりあげて、殴りかかって来た。金五郎が躱(かわ)したので、よろめいた拍子に、石につ

まずいて、音を立ててたおれた。
「やり居ったな」
もう一人が喚くのと、残りの者が、金五郎に飛びかかるのと、同時だった。いうまでもなく、袋だたきにするつもりである。
しかし、金五郎は、敏捷に飛びまわって、なかなか、掴まらない。積極的に、立ち向かう気がないので、逃げてばかりいる。しかし、たまに、相手と組みあうと、かならず、江崎の子分の方が、引っくりかえるか、呻(うめ)き声を立てて、伸びるかした。
金五郎は、暴漢をおさえつけておいて、口の中に、一升徳利の酒をそそぎこんだ。
素手では駄目とみて、悪漢たちは五人とも、匕首(あいくち)を抜いた。
それを見た金五郎は、徳利の紐を口にくわえると、かたわらの桜の大木の幹を、するすると、よじ登った。またたく間に、高い梢に、猿のように、腰をおろした。
「やい、腰抜け、降りて来やがれ」
下から、呶鳴るのに、
「斬られに、誰が降りるもんかね。まあ、そう騒がんと、一杯、おあがり」
金五郎は、笑いながら、徳利をさかさにして、眼下の暴漢たちの頭から浴せかけた。撩乱と咲きみだれた桜の間を縫って、黄金色の滝がながれ落ちる。悪漢たちは酒に濡れて、飛び散った。
石を拾って、投げあげはじめた。みんな見当が狂っている。命中弾があると、金五郎は、徳利で受ける。コンと音がして、落ちて来た弾丸が、暴漢たちの頭に当たる。
「喧嘩じゃ。喧嘩じゃ」
と、弥次馬が、もう、だいぶん、集まっていた。そして、奇妙な喧嘩をながめて、げらげら笑った。
神社裏で、花見宴を張って、金五郎の来るのを待っていた玉井組の連中も、やっと、これに気づいた。かけつけて来た。彼等は喧嘩の見物や、仲間入りをする気はなかったのだが、桜の木のてっぺんにいる金五郎が見えたので、びっくりしたのである。
「六ゾロの源」、大川時次郎、「ノロ甚」、道具番の清七、新谷勝太郎、城三次、などの若い連中が「玉井組」の半纏(はんてん)姿で、血相変えてあらわれたので、暴漢たちは、たじたじとなった。急を聞いて、数名の巡査がやって来た。逃げ腰になっているところだったので、江崎の子分たちは、こそこそと、群衆をかきわけて、消えてしまった。
金五郎は、桜の木から、降りて来た。にこにこしている。
一幕終ったので、見物も散った。
「どうも、ありがとうございました。おかげで、助かりました」
金物商組合の幹部らしい中老人が、金五郎に、礼を述べた。
金五郎は、乱れた着物をつくろいながら、妙に、気恥かしげに、照れた様子で、
「なんの、かえって、御心配かけて、……もう大丈夫です。巡査さんが来ましたから。……失礼します」
子分たちをうながして、逃げるように、足早に、去って行った。

その後姿を、いつまでも、つぶらな眼を凝結させて、眺めている一人の青年があった。まだ二十歳を出ないらしい、少年といった方がよい、頬のふっくらとした若者である。火のような眸は、金五郎に釘づけにされ、なにか、心にうなずくように、しきりと、こっくりこっくりをしていた。

「安さん、なにぼんやりしとるとかい？　花見のやりなおしじゃ。こっちに、おいで」

紺の幔幕の内側から、声をかけられて、はじめて、我にかえったように、身体を廻転させた。幕をくぐって、中に入った。

「安五郎、今日は、なんぼか、酒を飲んでもええ。父が、許可してやる」

「井上金物商」は、目抜きの本町通りに店舗をかまえて、繁昌していた。

後に、玉井金五郎と生涯の盟友となって、吉田磯吉一派と拮抗した井上安五郎の、まだ若い胸の中に、このとき、なにかのはげしいものが、燃えあがったようであった。

金物商組合の一座は、五十人ばかり。家族子供づれで、賑やかである。芸者が四五人、胡蝶屋豆八という、小柄で、跛の幇間が一人、巡査も二三人、まじっていた。

一時はどうなることかと思ったのに、無事にかたづいたので、あらためて、酒盛りがはじめられた。

「玉井組というのは、なんかいな？」

若松に渡って日の浅い金五郎は、まだ、よく、街の人に知られていなかった。

「請負師かね？」

「それにしちゃあ、年が若かったが……」

「どこかの仲仕かも知れん」

「じゃが、面白そうな若い衆じゃったなあ」

そんな噂をしながら、酒を飲んでいると、中には、よく知っている者もあって、説明役を買って出た。井場という船具商である。

「あれは、玉井金五郎というて、このごろ、聯合組の小頭になった人です。私の店で、いつも、道具を買うてくれるんで、よう知っとる。道具番に、もと鍛冶屋じゃった清七さんというのが居ってね、これが本職じゃもんで、スコップでも、雁爪でも、チェーン・ボロッコでも、いちいち吟味したうえでないと、引きとらん。それだけ、現場の荷役には危げがないわけですな。若手じゃが、玉井金五郎さんは、ゆくゆくは聯合組を背負うて立つ人と、あの人を知っとる者は、みんな、いうとります」

「それにしても」と、幹部の中老人が、吐息をつくようないかたで、「若松は、こんなことでは困るなあ。こう暴力団がはびこって、堅気の者をいじめられては、まともな商売はやって行けん。吉田磯吉さんはえらい人かも知れんが、子分連中が、どうもなあ……」

「町会議員にも、ばくち打ちやら、ゴロツキやらが出るようになるぞ」

「今のうちは、まだええが、普選にでもなったら、なにが飛びだすやら、わからんわい。暴力団が政治の権力でも握ったら、大きな大事になる」

若い井上安五郎は、ちびちびと盃をなめながら、無言で、

大人たちの繰言(くりごと)を聞いていた。知的な光と、情熱的な光とが、同居している、張りのある眸(まなざし)、「金魚」と綽名された大きな眼玉に、はるか遠くを夢みているような、緊迫したいろがただよっている。

――政治。

――政治家。

安五郎が、みずからの青春を傾けつくした一生の方角が、このときに、決定したのかも知れない。前から、政治や経済には興味を持っていたが、その下地に、多感な青年の正義感が、仕上げをしたのである。

(政治家になろう。そして、政治が悪漢どもの手によって、壟断(ろうだん)される罪悪を、一掃したい)

安五郎の胸は、希望に燃えはじめていた。その安五郎の眼に、さきほど見た、玉井金五郎の面影が、はっきりと、印象づけられているのであった。

紺の幔幕の外を、「ドテラ婆さん」が、千鳥足で、通りすぎた。両腕を架しているお京と染奴とを、交互にふりかえりながら、

「芸者衆、見たかい？　玉井金五郎、惚れるなら、あんな男に惚れなさい。おれが若かったら、入れあげる。じゃが、馬鹿な喧嘩をしたもんじゃ。相手が悪い。金五郎どん、角助を待たんで、二三日うちに、江崎満吉から殺されるわい。太鼓判を押しとく」

島村ギンの予言したとおりであった。

その日の夕刻、江崎満吉の使いといって、一人の俥(くるま)ひきが、新仲町の玉井組を訪れて来た。

緑色に塗られた大きな公立病院の建物が、黄昏(たそがれ)の光の中に、聳え立っている。明治建築の様式に、いくらか新し味を加えた尖塔の中心に、痰壺のような白い陶器の飾りがある。

病院の横は寺である。墓地には古ぼけた墓石がならび、銀杏の樹の下に、鐘楼がある。いつぞや、パナマ丸の荷役をするため、燈台沖まで、伝馬船で漕ぎだしたとき、朝の五時になって、金五郎たちの聞いた鐘の音は、この安養寺の鐘楼で、撞き鳴らされたものであった。

新仲町は、この病院と寺とに接した狭い通りだ。玉井組は、病棟から、石炭酸のにおいや、患者の呻き声の聞えて来るような位置にあった。

がらんとした二階建である。玄関の入口右側に、「玉井組事務所」の看板、左に「玉井金五郎」の表札、いずれも、金五郎が、例の、独特な肉太字で書いたものであった。

「おごめんなさい」

玄関に入った五十年配の俥ひきは、ずらりと、壁間にかけられてある「玉井組」名入りの弓張提灯を見た。そして、あまかに、ひっそり閑としているのが不審らしく、小首をひねった。一段と、声を張りあげた。

「おごめん。誰も、居らんとですか？」

その声で、裏の小屋でワラジを編んでいたマンが、出て来た。

「なんぞ、御用で？」

「玉井金五郎さんは、居りませんか？」

「いません。お昼すぎに、若い衆(し)と、花見に行ったきり、まだ帰りません」

「あんたは、ごりょんさんですか」
「ええ」
「そんなら、あんたでも、よかろう。これを、江崎親分からことづかって来ました」
俥ひきは、腹がけの丼から、一通の封書をとりだした。マンに、渡した。
受けとって、
「返事が要るとですか？」
「はあ、返事を貰うて来い、といわれました」
「それでは、いま、見ますけ……」
マンは、封を切った。
奉書の巻紙に、なぐり書きのような太い筆で――「前略四月八日、午前零時、貴殿宅ヘ、ナグリコミヲ掛ケル所存ニ付、左様、承知下サイ。江崎満吉ヨリ」
マンの顔から、血の気が引いた。かすかに、動悸が打って来た。唇を、ぎゅっと噛んだ。
しかし、表面は落ちついた様子で、
「わかりました――と、江崎親分にお伝え下さい」
と、いった。
「そんなら」
そういって、出ようとするのを、
「あ、俥屋さん」
と、マンは、呼び止めた。
「まだ、なんか、用でも……？」
「ちょっと、待って」
マンは、奥に入ると、桐箪笥を探って、巾着を取りだした。十銭銀貨をひとつ、塵紙のなかにひねりこんだ。玄関に出ると、「煙草銭にでも」
そういって、俥ひきに、渡した。

料理屋は、朝が遅い、置屋も同様だ。「飛鳥」が、朝食と昼食とをごっちゃにして、食膳にみんなが揃うのは、大抵、正午過ぎ、それから、掃除がはじまるのである。
花見客の二次会、三次会が、午前一時二時は普通、夜明けがた近くまでも騒ぐ組があって、「飛鳥」の寝たのは、もう、東の空が白むころだった。
お京は、しかし、早くから、眼がさめた。蒲団のなかからは出ず、腹ばいになって、煙草を吸った。障子に、明かるい朝の光線がさしている。
六畳の部屋に、三つ、蒲団が敷きならべてある。同僚の芸者は、誰も、まだ、深更の夢を見ていた。白粉がはげ落ちたり、髪がくずれたり、枕を外したりしていて、あまりよい恰好ではない。夜、化粧をし、お座敷着姿でいると、なかなか美しいが、こうして見ると、興ざめだった。
（昼は、夜の言葉を殺す――なんかの本に、書いてあったわ）
お京は、そんなことを考えて、苦笑が湧いた。そうすると、
（金五郎さんは、昼も、夜もなかなか、つかまらない）
そのことも、はがゆいやら、おかしいやらであった。
（でも、きっと、いつかは、思いを遂げてみせる）
お京のその決心に、変りはなかった。
主人の森新之助は、六人居る抱え芸者に、口癖のように、いいきかせた。

「どうせ、花柳界なんて、色と恋の世界じゃけ、お前たちが、誰に惚れようと、どんな男を旦那に持とうと、おれは、なんにもいわん。ただ、玉井金五郎にだけは、手を出さんでくれ。口説いてみたって、玉井が相手にすりゃすまいが、そこは、男と女のこと、いつどんなはずみで、妙なことにならんとも限らん。もし、おれの抱え芸者のうちで、玉井と妙な風にでもなったら、おマンさんに対して、おれがすまん。顔向けならんことになる。頼むけ、玉井だけは番外にしといてくれ」

女将の君香も、機会のあるたびに、それをいうことを忘れなかった。

お京は、深謀遠慮、すぐに、看破されるようなへまはやらない。心中、焦躁に狂いながらも、忍耐づよく、ただ、機の熟するのを待っていた。それまでは、やたらに、金五郎の前にも、顔をあらわさないように心がけていたので、金五郎は、まだ、親友の家に、恐しいお京のいることを知らなかった。

食事になると、自然に、まっさきに、前日の金比羅神社での喧嘩話が出た。

お京は黙っていたが、おしゃべりで有名な染奴が、話に尾鰭をつけて、身ぶり手まね入りで、報告した。

「悪い奴と、出入が出来たなあ」

新之助は、心配顔である。

「ほんまに」君香も、眉をよせて、「金さんて、損な性質(たち)だすな。そないなうるさい掛けあい場やったら、黙って、避けて通りはったらええやろに。触らぬ神に祟りなし――やないか。そやけど、金さんは、それが出来はらん人や。祟りが来る、とわかりきったるのに、黙って居られん人や」

話していると、仕込みの娘(こ)が、

「玉井はんが、来やはりました」

と、告げに来た。

「ちょっと、あたし、お師匠さんとこ、行って参りますわ」

お京は、あわてて、立った。君香が、びっくりしたように、

「お師匠はんとこ、どないしやはったん？」

「春の温習会(おんしゅうかい)のお稽古、もうすこし、見て貰っておこうと思いますので……」

「阿呆らし。そないなこと、朝早よから騒ぐこた、あらへん。今、うちの旦那はんの兄貴分のひとが、来やはる。お京はん、まだ、逢うたことあらへんのやろ？　玉井金五郎はん、いっぺん、逢うといて」

「いえ、あたし、男なんかよりも芸の方が大事ですから」

笑いにごまかして、あたふたと、台所口から、部屋を出た。金五郎らしい足音が、近づいて来たからである。

「おかしな妓(こ)やなあ」

「金さんには、逢わんがええ。お京と金さんなら、なんか知らんが、気が合いそうにある。気が合うのはええが、合いすぎでもしたら、おれがおマンさんに、すまんことになるからなあ」

「そやけど、お京はんは、聯合組の親分衆や、会社のえら方に贔屓(ひいき)にして貰わんならんよってに、いっぺん逢うて貰(もろ)とくが、ええのやがな」

「それも、そうじゃが……」

夫婦がそんな話をしていると、金五郎が、廊下から、のれんを排して、入って来た。

「やあ、今が朝飯じゃな？」
　にこにこしながら、長火鉢の向う側へ、胡床をかいた。自分の家のような気やすさである。印半纏に、半ズボンをはいている。
「金さん、これから、仕事かね？　現場支度ども、しちょるが……」
「うん、五十トンばかりの焚料じゃ。夜業でやってくれちゅうことじゃったけど、繰りあげて、昼やらして貰うことにした。晩は、ちょっと、用事が出来たもんじゃけ」
「ときに、金さん、あんた、昨日、江崎の子分と喧嘩したそうじゃないか」
「喧嘩というほどのことはないよ。運動会みたよなもんたい」
「あんたは、その気でも、向こうは麻疹犬じゃ。日ごろから、江崎は、若松で、玉井組がのして来たのを心よう思うちょらんけ、うるさいことに、なりゃせんな？」
「こっちは、喧嘩が商売じゃない。仕事師じゃけ、あんなのには、相手にならん」
「おれたち、昔、彦島で、吉田親分から、江崎満吉との大喧嘩の話、聞かせて貰うたことがあったなあ。大嵐の晩のはげしい出入りの一件じゃった。江崎も、今はあのときほどの勢はないらしいんけんど、気をつけんと、馬鹿みるばい」
「ああ、おおきに。じゃが、まあ、心配なことはないよ。……そら、そうと、ちょっと、思いついたことがあって来た。これから、聯合組に行くとこじゃが、こないだ買うた刀を二本、出してみんな？　本阿弥の直弟子の、大層上手な鑑定家が来とるそうな。おれも、助広を鑑て貰おうかと思うちょる。お前は自慢しとったけど、おれは、どうも、お前のは備前物とは思われん。一杯、食わされちょる。一緒に鑑定して貰うてやるけ、おれにあずけなさい」
「そうかい、そんなら、頼もう」
　前にも、そんなことがあったし、新之助は、格別、疑う気持もなしに、奥の部屋から持ちだして来た日本刀を、二本、無造作に、金五郎に、渡した。
　聯合組事務所は、海岸通りにある。そこには、弁財天宮があって、通常「弁財天浜」と呼ばれている。道幅が一間あまりしかなく、風と波のはげしいときは、湾内の海水がしぶきになって、店の中まで入って来る。今日は波が静かで、林立した帆船の檣も、じっとしていた。
　金五郎は、事務所の裏口から廻り、小使に、日本刀をあずけた。
「仕事の帰りに貰うて行くけ、どこかに、蔵っといてな」
「玉井さんは、刀剣の鑑定が、大層、上手じゃげなのう。これも、銘刀かね？」
「うん、天下の銘刀じゃ」
　笑って、そういい、また、弁財天浜に、出た。岩壁の附近を見まわした。
「おうい、親方、こっちじゃあ……」
　サンパン小屋の附近から、大川時次郎が、手をあげて、呶鳴っている。
「玉井組」の看板をかけて以来、困ったのは、金五郎の呼びかたであった。小方には、昔の同僚や先輩がいるし、郷里の友人もいる。これまでの「親方」というのは、照れくさいし、

「親分」も、仕事師らしくない。「玉井さん」「金五郎さん」「金さん」などは、なお、ぴんと来ない。そこで、申しあわせの結果、マンの発案を入れて、「オヤジ」と呼ぶことに取りきめたのであった。初めはちょっと変だったが、呼びならわしてみると、奇妙な親しみがあった。

金五郎は、みんなの乗っている大伝馬船に、飛び移った。早くから、棚板やバイスケを積んで、金五郎の来るのを待っていたのだった。

伝馬船は、岸壁を離れた。ゆるやかな櫓のあやつりで、二番ブイにつながれている大成丸を目標に行く。

「オヤジ」と、舳(へさき)にいる「六ゾロ源」が、笑いながら、「江崎満吉の子分連中は、今日、花見のやりなおしをするらしいばい」

「誰から、聞いたな?」

「聞きはせんが、それに違わん。さっき、清(せい)やんと、井場の船具商で、ロオプを買うて、弁財天通りまで来たら、昨日の連中が、四斗樽を車力に積んで、曳いて行きよった。……なあ、清やん」

「うん」と、清七は大きくうなずいて、「子分が何人居るか知らんけんど、することだけは太(ふと)いのう。四斗樽一挺とは、豪勢じゃ」

「じゃが、江崎は、銭を払わんことで、有名ぞ。催促に行くと、刀を抜いて――長いのが、ええか? 短いのが、ええか? ……そういうて、ギョロッと睨むそうじゃ」

「それが、ええのう。おれたちも、その手で、行こか」

「お前のようなヘナヘナが、啖呵(たんか)を切ったところで、凄味はあらせん。顔に、庖丁で、二つ三つ、傷でも、こさえとかにゃあ」

小方たちは、そんなことをいいあっては、にぎやかに、げらげらと、笑った。

金五郎は、黙って、聞いていた。

江崎満吉が、今夜半、なぐりこみを掛けて来ることは、まだ誰も知らない。マンと、金五郎の夫婦だけだ。

金五郎は、彦島で聞いた話を思いだした。江崎満吉が、なぐりこみのときには、かならず、新しい四斗樽の鏡を抜くということは、ほんとうらしい。松川源十のいうように、花見酒ではないのである。

大成丸の荷役を終えて帰ると、金五郎は、夜を待った。

五時になると、安養寺の梵鐘が、鳴りだした。音は、近い。

金五郎は、玄関正面にかかっている柱時計を降(おろ)した。新品である。

「七分ほど、遅れちょる。この時計、あんまり狂うたことはないとじゃが、ゼンマイがゆるんどるんじゃろう」

台所で、晩飯の支度をしているマンを見て、そんなことをいいながら、坐りこんで、ギチギチと、ネジを巻いた。

時間をあわせてから、すぐには、掛けようとせず、両手で、愛撫でもするように、時計を、ためつ、すがめつした。八角形になった外枠(そとわく)の中に、アラビヤ数字で書かれた、丸い文字盤がある。振子(ふりこ)は、金メッキされて居り、透(す)かし彫りにした朝顔が、その肩のところに花を開いている。「精工舎製」の四字が、時計の中に見える。

振子が止まらないように注意して、金五郎は、ゆるやかに、

時計を廻転させた。裏に、肉太の字で書かれてある自分の字を、読んだ。

新仲町玉井組
明治三十九年四月二日求之
本品ハ請負業開業記念トシテ
愛智時計店ヨリ買収セリ
一金四円七拾銭也
営業開始ハ二月十九日

金五郎は、微笑した。この時計は、マンと二人で、買いに出たのだが、そのとき、店先で、夫婦間に、口喧嘩が出来たのである。

「あなた、こんな高い時計、あたしたちには、贅沢すぎますよ。こっちの安い方で、ええわ」

「馬鹿をいうな。玉井組の記念じゃけ。思いきって張りこむんじゃ。どうせ、今、お前の腹の中に居る子が、男じゃったら、跡継ぎをさせにゃならん。そのときに、安物じゃったら痛んでしまう。これなら、末代物じゃよ。こういうことには、けちけちせんものじゃ」

「けちけちするわけじゃないけど、……四円七拾銭ものお金、どこから出るの？」

「働いて、ひねりだす。一層、励みが出るじゃないか」

「ごりょんさん」と、愛智時計屋が、笑いながら、「心配しなさんな。月賦で、ええ。あるとき払いでも、ええ。玉井さんを信用して、売ります。持って帰って下さい」

その親切な計らいで、手に入れることが出来たのであった。

金五郎は、時計を柱にかけた。

「マン、飯は、まだか？」

「出来ました。もう、ええです」

「そうか」

金五郎は、二階の梯子段のところに行って、下から、呶鳴った。

「おうい、みんな、晩飯ぞう」

「はあい」

二階にいた子分連中が、どやどやと、降りて来た。

いつもと変らぬ食事をした。

夜が来て、八時、九時、十時と、時間が経った。町の家々も、一軒ずつ、灯を消す。静かになった夜の空気を、病院から、聞えて来る重病人の陰鬱な呻き声だけが、かすかに、破る。

十一時が打ったとき、金五郎は、マンに、

「大盥を、玄関において、一杯、水を汲みこんでくれ」

と、命じた。

マンは、いわれるとおりにした。なにをするのか、わからなかったけれども、無言で、いつも洗濯に使う盥を、金五郎から指示された場所に置いた。その盤に、バケツで五六杯、水を八分目ほど満たした。

「マン」

「はい」

「お前、出しゃばることならんぞ。女だてらに、喧嘩の中などに、入るなよ」

「はい」

「おうい、若い衆」
と、金五郎は、二階に向かって、声をかけた。
踊り場のところに、「ノ口甚」が、顔を出した。眠そうな顔をしている。
「なんか、用な？」
「すまんが、みんな降りて来てくれんか」
「全部かや？」
「うん、居る者は、みんな」
「みんな、居るよ」
マンは、金五郎から堅く口止めされていたので、誰にも話していなかった。それでも、さすがに、気にかかってたまらないので、松川源十に、「今夜、大事な相談があるけ、どこにも行かずに、みんな、家に居っておくれ」と、頼んでおいたのである。夫婦や、家族のある小方たちは、長屋の方に家をかまえていたが、独身仲仕だけが、金五郎宅の二階に、八人、下宿していた。――源十、時次郎、清七、甚七、「中学生」の俊次、松本重雄、新谷勝太郎、城三次。
もう寝ていた者が多く、寝ぼけ眼をこすりこすり、降りて来た。
「夜中に、なんごとですか」
と、時次郎が訊く。
「みんな、すまんけんど、あるだけの提灯に、全部、蝋燭をつけてくれんか」
そういいつけておいて、自分は、ランプに、火を入れた。
それから、思いだしたように、
「マン、永田に行って、ラムネを十本ほど、貰うて来てくれ」
「はい」
マンは、青ざめた顔をしていたが、なに一つ、夫の言葉に抗わなかった。火の入った弓張提灯を持って、小走りに、出て行った。
家紋である「丸に橘」と、「玉井組」の字の入った、五十箇以上の弓張提灯に、すっかり、明かりがついて、光の花壇のようである。それを、玄関を中心に、ずらりと、掛け並べさせた。
眩しいほど、明かるい。
数匹の猫が、なにごとかと不思議そうに、きょろきょろしている。
マンが、笊に、ラムネを入れて、帰って来た。
「まあ、きれい」
と、提灯の満艦飾に、思わず、呟いた。
ラムネを、一本ずつ、みんな飲んだが、
「オヤジ、誰か来るのかね？」
さすがに、頭にぴんとひびくものがあって、源十が、不審顔で、訊いた。
「お客があるんじゃ」
「こんな夜中に？　誰が？」
「みんな」と、急に、金五郎は、あらたまった顔になった。「今夜、十二時をすぎたら、江崎満吉がなぐりこんで来る。相手は、おれが一人でする。玉井組は、喧嘩商売じゃないけ、お前たちに、喧嘩の巻き添えを食わせとうない。二階にあがって、絶対に、降りて来ることはならん。おれが斬られても、手出しするな。さあ、早く、あがれ」

「そんな無茶が、あるもんか」
びっくりした松川源十は、菊石面(あばたづら)をふくらませて、膝を乗りだした。ほかの連中の眼も、ぎらぎら光っている。
「無茶？」
「そうじゃないか。あんたとおれたちは、一心同体、玉井組の看板をかけるときから――あんたのために、命をすてて惜しまん、と、みんな誓うとる。それに、おれたちに、なんにも知らせんで、江崎を一人で相手するなんて。そんな水くさいこと、いいなさんな。オヤジが、ゴロツキから斬られるのを、なんで、おれたちが黙って見て居られるもんか。……なあ、みんな、そうじゃろうが？」
「そうじゃ」
「そうじゃ」
と、異口同音だった。
「そういうてくれるのは、ありがたい。その言葉だけで、ええ。お前たちの気持は、ようわかった。じゃが、おれが頭を下げて頼むけ、もう、これ以上いわせんで、二階に帰ってくれ。そろそろ、時間にもなる。……さあ、早く、早く……」
立ちあがった金五郎は、子分たちを追い立てた。
その緊迫した金五郎の表情と態度に、つべこべと、抗弁する口を封じてしまう、おかしがたく厳(きび)しいものがあって、不服と不満で、仏頂面の子分たちは、だらしなく、二階へ追いあげられた。しぶしぶ、階段を登る。
重い足どりの子分連中が、八人とも、踊り場まであがりきってしまうと、金五郎は、梯子段を外してしまった。取り外し式になっている。力の強い金五郎は、それを、軽々と、廊下の板の間まで運んで行った。
「マン」
「はい」
「引っこんどれ。出て来んな」
マンは、うなずいて、台所に入った。
柄杓(ひしゃく)を手にすると、大きな釜の蓋を取って、中をかきまわした。もうもうと、真白い湯気が立つ。
この家に移ったとき、他のところには手をつけなかったが、台所だけは改造した。大勢の集会をしたり、夜業や遠出の弁当を炊いたりするために、どうしても、大きな釜が三つは要る。今、そのうちの二つ、三升釜と五升釜とが、ぐらぐらと煮えたぎっている。糊(のり)だった。
十時ごろ、金五郎が、釜になにかを仕込んでいるマンを見て、
「今から、飯を炊くのか」
と、訊いた。
「いいえ、すこし洗い張りをせんならんので、糊を炊いておこうと思うて……」
「ふウン」
夫から、喧嘩に手を出すな、といわれたマンは、暴漢どもが飛びこんで来たら、たぎり立った糊を、頭から打(ぶ)っかけてやろうと考えているのだった。
金五郎は、水の満たされた盥の前に、入口の真正面を向いて、胡床(あぐら)をかいた。手拭で鉢巻をして、着物の両肌を脱いだ。満艦飾の提灯の照明の中に、たくましい金五郎の白い肌と、青々とした龍の彫青(いれずみ)とが照らし出された。

金五郎は、新之助から借りて来た二本の日本刀を抜き身にして、盥の水に浸けた。チャポ、チャポと、洗った。そして、ときどき、表の夜の暗黒を、ぎょろりとした眼玉をむいて、のぞくように、睨む。

静まりかえった深夜の空気を、刀を洗う水の音だけが、かすかに、ゆるがせる。金五郎は、二本の日本刀を、交互に、盥の中で、ころがしながら、ときどき、水からあげる。雫の たれている冴えかえった刃を、裏表にかえして、しみじみと、眺める。刀の肌に、周囲の提灯が映って、刀身の中で光のゆらめきが、焔の乱舞のようだ。

（美しいなあ）

と、思う。

昔から、刀剣が好きであったが、欲しい刀を買う余裕はなかった。やっと、養子の交換条件で、蜜柑を売ったとき、道後の湯町で、前から眼をつけていた、助広の小刀を手に入れることが出来た。故郷を出奔するとき、それを大事にたずさえて出て、今日まで愛蔵している。しかし、金五郎が刀を愛するのは、その美しい肌を見ていると、乱れた心も澄んで来るからであって、それを殺人の道具と考えたことは、一度もなかった。

武蔵温泉から帰った夜、マンと時次郎との二人の前に、その助広を抜いて立ちはだかった。

「間男、見つけたぞ。打ち斬ってくれる」

そういった。しかし、心の中では、笑いをこらえていたのであって、助広を間男成敗に使う気持は、毛頭なかった。マンと時次郎が、話している様子をすっかり立ち聞いて、マンの潔白を信じてから、持ち前のおどけ癖で、一芝居打ったにすぎない。

ところが、若松に来ると、その日本刀が、さかんに、喧嘩用、殺人用に、使用されている。そして、今、自分も、その渦中に巻きこまれる運命に、陥っているのだった。しかし、金五郎は、助広を喧嘩用に使いたくなかったので、森新之助の刀を借りに行ったのである。

（なんという馬鹿げたことを、やっとるのか？）

金五郎は、刀から眼をはなすと、腹立たしい自嘲の思いに、気が腐った。笑いだしたい。しかし、いつか、パナマ丸荷役のとき、情ないやら、馬鹿々々しいやら、恥かしいやらで、笑ってやろうと思ったら、眼から、水が流れ出たことがある。今夜も、そんな気持だった。

（滑稽千万な、おどけ芝居じゃ）

自分が、派手な無台装置のまん中に坐っている、下手な喜劇役者のように思われて来た。

猫が、奇妙なこの場の様子を解しかねたように、金五郎が刀を動かすたびに、怪訝な眸で見る。盥の傍で、丸くなって眠っているのもある。

つまらなくなったように、去って行く一匹が、林立しているラムネの空びんを、一本、たおした。

カラ、カラッ、という、その音に、金五郎は、妙に、ぎくっとした。これまで、不思議と、恐怖の観念などはなかったのに、不意に、不安で、動悸が打って来た。

（ひょっとしたら、殺されるかも知れない）

そう思ったとき、故郷の松山のことが、急廻転する走馬燈

のように、頭に浮かんだ。その流れのなかに、嫂(あによめ)スギの顔だけが、にゅうと、大きく飛び出た。その軽侮と憎悪の眼が、金五郎を睨みつけている。

（そうじゃ。村を出るとき、無断で借用した三十円だけは、なんとか、無理算段してでも、かえしておくんじゃったなあ……）

その悔恨で、胸が痺いた。

チン、チン、チン、チン、……

時計が、十二時を打ちはじめた。

二階に追いあげられた子分たちも、じっとしていたわけではない。じっとしては居られなかった。音のしないように、大活躍をした。

四五人、屋根伝いに、裏の方に降りると、道具番の清七が、小屋の鍵をあけて、雁爪、スコップ、陸尺棒(ろくしゃく)、などを取りだした。それを、また、裏から、二階にあげた。武器である。

梯子をかけて、石炭を入れた小籠(バイスケ)を、天狗取り荷役の要領で、十個ほど、押しあげた。この作業は、お手のものだ。燃料用に貰った粉炭が、裏の箱に入れてあった。

「奴等が入って来たら、こいつで、眼つぶしを食らわせるんじゃぞ」

「六ゾロの源」が、金五郎に悟られないように、小声で、指示をする。

戦闘準備は、整ったのである。二階の明かりを消し、息を殺して待った。

大川時次郎は、胸を、どきどき、させていた。彼の心は、恐しい矛盾のなかで、錯乱する。

（もし、玉井金五郎が殺されるようなことがあったら……？）

その空想は、今は、時次郎に取って、地獄である。日とともに、強くなる金五郎への信頼感と、なお、あきらめきれぬマンへの思慕とが、からみあって、時次郎を呪縛する。それは、パナマ丸のとき、舷側を、猿のように、ロオプを伝って登る金五郎を見て、

（落ちれば面白い。落ちて死ねば、なお、ええんじゃが……）

と考えたときとは、心内の変化が段ちがいであった。

今では、金五郎に心服して、死ねばよい、とか、殺されればよいとか、考えたこともなかった。それどころか、この男らしい人とともに、自分も男を磨きたい、と、気負い立っていたほどだ。それなのに、今、悪漢が、玉井金五郎を殺しに来る土壇場に、立ちあったとき、

（もし、玉井金五郎がいなくなれば……？）

そういう悪魔のささやきが、時次郎の心の奥底で、まるで、このときを待っていたかのように、頭をもたげているのだった。

台所の方を、透かしてみると、もうもうと立ちのぼる白い煙の中で、柄杓を持ったマンが、眼を光らせて、表の気配に、気を配っている。

（マン坊は、金五郎のために、命を投げだして、闘かう気じゃな）

圧倒されるような威圧に、時次郎の心はすくむ。自分の醜い鬼の心と、エゴイズムとが、時次郎は、我ながら、恐しかった。恥かしかった。その癖、追っても、追っても、

――金五郎がいなくなれば、マンと夫婦になれる。

その美しい邪念は、心の一隅のどこかに、狡猾な鼠のように、潜んでいるのだった。
金五郎は、相かわらず、二本の日本刀を、大盤の水で、チャポン、チャポン、鳴らしながら、ときどき、表を見る。小手をかざし、姿勢を低めて、闇をうかがうような恰好をする。
家の内いっぱいに、はちきれそうにふくらんだ提灯の明かりが、表の道路までも照らしているが、外は、午前零時をすぎても、森閑として、人間の気配など、まるで、なかった。
一時が、打った。
二時が、打った。
三時が、打った。

翌朝、例によって、「飛鳥」が遅い朝食をしているところへ、幇間の胡蝶屋豆八が、あわただしげに、飛びこんで来た。
「森の大将、森の大将」
「なんじゃい？　豆八ッあん、朝っぱらから、騒々しいなあ」
「もう、朝や、あらへん。それに、これが、騒々しゅうせんと、居らりょうか」
「なんぞ、起ったんか？」
「起ったも、起らんも、大きな大事が、起っちょる」
小柄で、跛の剽軽な豆八は、息を、ふうふう、切らしている。走って来たらしい。
「なんごとかね？　早よ、いわんか」
「大将の兄貴分の玉井金五郎さんのところへ、江崎満吉一家のなぐりこみじゃ」
「なにや？」
と、新之助は、飛びあがった。
食膳に向かっていたお京も、君香も、染奴も、顔色を変えた。箸を置いた。
「ちょっと、行ってくる」
金五郎が、日本刀を借りに来たことが、俄かに、ぴいんと頭にひびいて、新之助は、心の中で、（しまった）と、叫んでいた。自分の迂闊さが、腹立たしかった。
表に、駈けだそうとする新之助の袖を、豆八が、しっかりと握った。びりびりと、縫い目の裂ける音がした。
「待った、待った。大将」
「離せ」
「今から、行っても、もう、間に合わん」
「殺られたのか？」
どきっとして、心臓が、胸壁の中で、宙返りした。
「もう、すんでしもうたですよ」
「すんだ、というのは？」
「江崎の方が、敗けたとです」
「詳しく、話してくれ」
豆八の語るところによると、こうである。
――五反町にある江崎満吉の家では、玉井家を襲撃するために、子分たちを鳩合した。昼間から、準備をして、首途に鏡を抜く四斗樽まで買いこんだ。もっとも、この酒代は払ったかどうか、わからない。夕方ごろ、江崎家には、三十人ほどの人数がいた。牛肉のすき焼かなんかで、晩飯を食い、酒を飲んでいた。竹槍、日本刀、鎌などが、牀の間に、ずらりと、ならべてあった。酔って来ると、歌う者、手をたたく者、

踊る者が出て来た。
「おいおい、あまり、ぐでぐでになるなよ」
江崎満吉は、気が気でないように、幾度も子分たちをたしなめていた。
十二時の定刻まで、みんな、一寝入りということになった。
十一時に、江崎が起した。そして、型どおり、向こう鉢巻、縄襷、尻はし折り、ワラジがけ、武器をものものしくたずさえて、赤穂浪士の討入り然と、出発した。しかし、落ち目になっている、このころの江崎一家というのは、まったくの烏合の衆といってよく、屁っぴり腰の者が多かった。酔っている者もある。腹心の部下というのは数人で、あとは傭兵である。日当を貰い、御馳走酒にありつく目的で、ひやかし半分に入りこんでいる者もあった。
それでも、衆を恃んで、外見ばかりは勇ましく、人気のない病院と寺との横道を、新仲町に出た。陣形をととのえ、玉井家を、包囲した。
斥候が、偵察に出た。玉井組の表まで、そっと忍んで行き、帰って来ると、隊長の江崎満吉に、
「どうも、変ですよ」
と、報告する。
腹心の者をやっても、同様なので、江崎が自身で行ってみた。彼も、(どうも変だ)と思わずには居られなかった。変を通り越して、不気味になって来た。
これまで、幾度も果し合い、決闘、なぐりこみ、遭遇戦などをやって来たが、こんなのは初めてだった。相手が、こちらのなぐりこみを待ちかまえ、武装を整えて勢揃いして居れば、同じ気合の弾みで、どっと、飛びこむことが出来る。しかし、玉井一家は、そんな註文どおりの隊形を整えていない。
五十張りを越える提灯を、玄関一杯に点し、その中に、ぽつんと、金五郎が、たった一人、いるきりだ。諸肌を脱いでいるたくましい腕には、らんらんと眼を光らす昇り龍の彫青が、青々と浮き出ている。しかも、その金五郎は、抜き身の長い日本刀を、しきりと、大盥の水で洗っている。かたわらには、ラムネの空びんがずらりとならび、数匹の猫が眠っている。金五郎は、ときどき、表の方を、ぎょろぎょろ眼玉で、透かしてみる。
江崎満吉は、その凄さに、足がすくんだ。金五郎に、数十人の屈強の子分がいることは、江崎も知っている。その連中が、どこに、どういう風に潜伏しているのか、それが、気味悪くなって来た。恐しくなって来た。
隊長が、こういう調子であるから、部下たちは、もう浮き足立っている。
「斬りこめ」
と、江崎満吉は、やけ糞で、命令を降したけれども、誰も、飛びこむ勇気を持った者はなかった。あべこべに、逃げだした。
「――というわけでしてな、わたしの家が、すぐ近くじゃもんで、一部始終を、見とりましたんですよ」
新之助は、ほっとしたが気合い抜けがして、どすんと、框へ、尻を落した。
「豆八ッあんも、ひどいなあ。何故、なぐりこみの前に、おれに知らせてくれんとか」

「そりゃあ、無理ですばい。江崎一家が、勢揃いして、酒盛しとる頃は、まさか、玉井さんとことは思わんし、また、今夜、誰か、気の毒な人が出来るなあ、って、考えとったんです。警察に知らしゃあ、わたしが後で殺されるし、……そしたら、今朝になって、わたしと仲ようしとる、やっぱり傭兵で出かけたバクチ打ちが、すっかり、話してくれたんです」

君香は、ためいきをつくように、

「ほんまに、金さんも、難儀やなあ。あての死んだお父はんが、よう、いやはってた――男は、いったん、家の閾をまたいで出たら、七人の敵が居る、と思え。帰って来ると思うな。……って。金さんも、売りだして、男になるのはええが、この若松は、七人どころか、百人もの敵が、うようよ、しとるのやさかい、命は、なんぼあっても、足らへん。ただ、ちょっと、頭をもたげかけさえすりゃ――生意気や、殺ってしまえ。……まるきり、無茶や。他人事や、あらへん。いつ、こっちの番に廻って来るか……？」

その兆候は、すでに、あるのであった。

お京の張りのある眼が、異様に、光っている。

父と母

夕暮近くなると、雨が降って来た。生あたたかい、煙った春の空気のなかに、金比羅山の桜がぼやけ、その右につらなる高塔山(たかとうやま)のいただきには、密集した松林が、山上に乗りあげた軍艦のようである。港の方で鳴る船の汽笛も、寝ぼけたように、ひどく、もの憂い。

「旅が、しとうなったなあ」

金五郎は、両手を頭の下に架(か)って、寝ころんだまま、ひとり言のように、呟いた。

今日は、仕事は休みであった。さっきまで、新之助から借りた刀の手入れをしていたが、それがすむと、自分の身体を、裏庭に面した縁の廊下に、面倒くさそうに、転がしたのである。

マンは、かたわらで、赤ン坊の襁褓(おしめ)をこしらえていたが、これも疲れたように、手を休めた。浴衣(ゆかた)や襦袢の着くずしを、オシメに縫いなおしたのが、五六枚、重ねてある。

かたわらの煙管をとりあげて、おいしそうに、一服吸ってから、肩で吐息をつくように、

「骨休めに、どこかに、行っていらっしゃいよ」

と、いった。

「一人じゃ、つまらん。お前と、行きたいんじゃ。一緒になってから、まだ、新婚旅行ちゅうもんを、しちょらんからなあ」

「ウフフ、新婚旅行なんて、そんな洒落(しゃ)れたもん、あたしたちのような貧乏人の働人(はたらきど)がする柄じゃないですよ。あれは、金持のするもんやわ。それに、もう、三年も経って、子供まで出来るというのに、新婚でも、ありゃせん」

「そんなこた、ないよ。これまでは、働くばっかりで、暇(ひま)も取れなんだが、今なら、ボーシンの源公に後を頼んで、五日や一週間くらいなら、二人で、出られる。……どうじゃ？新婚旅行のつもりで、道後(どうご)の温泉に行かんか？」

「そりゃあ、行きたいことは、行きたいけど……」

金五郎は、むっくりと、起きあがった。マンの煙管を取って、自分も吸い、しんみりした語調になった。

「おれは田舎を飛びだしてから、故郷なんて、糞食らえ、と思うとった。それが、どうしたわけか、このごろ、馬鹿に田舎のことが思いだされる。親父や、お袋のことを、夢に見たりする。なんかの機会があったら、いっぺん帰りたいと、考えとったんじゃ」

それは、マンも、同じ思いであった。しかし、口に出しては、いわなかった。

――故郷(ふるさと)。

どんなに、いやなことがあったにしたところで、人間の宿命のように、忘れることの出来ない、懐しい心の寄りどころであった。

「それで、今度、お前さえよければ、一緒に、帰ってみようと思う。お前も、あんまり、どん腹になったら、旅が出来まいけ、今のうちがええ。第一、子供の籍のことがある。まさか、若松に腰を落ちつけるなんて、思いもせんじゃったもんじゃけ、寄留もせんですましとった。今のうち、分家して貰

うとかんと困る。それに、兄貴から借りた三十円も、大庭親方からの前借りを足して、やっとこさで、出来た。……田舎には黒石という、おれが養子に行った先の、うるさい奴が居るけんど、……まあ、どうにかなろうたい。……な、マン、道後と松山とは続いとるけ、ゆっくり、二人で、温泉に、でも入ろうや」

金五郎は、楽しそうな顔つきだった。

「おれたちに、子供が出来る。おれが、親父になって、お前がお袋になる――なんか、変じゃなあ……」

「変なこと、あらせんわ」

「変じゃよ、森の新公が、三つになる女の子の親父なんて、どうも、変で仕方がないよ。……おれたちの、男か知らん？

女か知らん？」

「どっちが、ええの？」

「男じゃなあ」

「あたし、女が欲しいわ。一姫二太郎（いちひめにたろう）、というて、最初は女の方が、ええのよ。母親が助かるけ……」

「そんなに、都合ように、出来るかどうか、わかるもんか。おれは、やっぱり、男じゃ。そして、立派な男に仕上げて、玉井組の跡を継がせるんじゃ。そのころは、もっと、玉井組も大きゅうなっとるに違わんし、時代も変って、こんな野蛮な若松でも、無（の）うなっとるじゃろう。今のような、暴力団のはびこっちょる若松なら、こっちまで、暴力団かぶれしてしまう。でも、仕方がない。覚悟を定めて、若松に移ったんじゃけ、あくまで、この地で、やりあげるんじゃ。なあに、どんなに、暴力団が理不尽な横車を押したとて、正しい者が、最後には、きっと勝つよ」

「あたしも、そう、思っています」

夫婦の瞳には、どちらにも、強い決意が、みなぎっていた。

話していると、「中学生」の俊次が、焼き芋を頬ばった口を、もぐもぐさせながら、玄関口から、大声で、

「オヤジさん、「飛鳥」の大将が、お見えになりましたばい」

「そうか。こっちに、お通し。……それから、お前、永田に行って、ラムネを四五本、貰うて来てくれんか」

「はあい」

去って行く俊次と入れちがいに、新之助が、入って来た。

「やあ、よう来たなあ。これから、刀をかえしに行こうかと、思うとったところじゃ」

「新さん、こないだうちからは、いろいろ……」

と、マンも、挨拶した。

「いいえ、あんたの方こそ、大変じゃったなあ」新之助は、坐って、

「びっくりしたよ、なんにも知らんもんじゃけ、うかうか、金さんに刀を貸したりして、……金さんも、人が悪いなあ」

「お前に知らせて、心配かけとうなかったもんじゃけなあ」

「無事にすんだから、よかったものの、もしものことがあったら、おれは恨むよ」

「わかった。わかった。謝（あやま）る」

面倒なので、金五郎は、無抵抗作戦に出た。

マンは、お茶入れに、立った。

「金さん」

急に、新之助は、坐りなおして、あらたまった顔になった。

緊張の面持である。
「うん？」
「お前と江崎との喧嘩が、妙な風になって来たよ」
「妙な風？」
「どういうたら、ええか？……さっき、友田喜造の使いの者が来てな――この喧嘩の仲裁を、自分がやりたいので、中に入らせて欲しい。その仲直りの会場には、「飛鳥」を貸して貰いたい。吉田磯吉親分も、出席するかも知れん。……そういうんじゃよ」
「断ったら、ええじゃないか」
「一度は、断ったんじゃよ。そしたら、向こうで――友田喜造の顔をつぶすつもりか？　それなら、それで、考えがある。顔に、泥を塗られて、黙っては引っこめん。……そんなことをいう。なにも、こっちは、友田の顔をつぶしたり、泥を塗ったりした覚えはないのに、……どうも、この、顔――という奴、この世界じゃあ、憲法みたいなもんでなあ……」
――顔。
仁侠とやくざの世界に打ち立てられた、黄金のピラミッド。顔が立つ。立たぬ。顔に免じて。顔をつぶした。つぶさぬ。――傲岸（ごうがん）と、矜特（きょうじ）とが作りだす頑固一徹の虚栄心が、歪曲されたヒロイズムとなって、男性的と錯覚される。理非曲直を越えた場所に、つねに、暴力を背景にして、強引に押しだされて来る人間の陥穽（かんせい）――この地方の人々が、この「顔」のために煩わされていることは、想像以上のようであった。
新之助自身も、君香と別府温泉に行ったとき、追っかけて来た「蝮（まむしいち）一」から、
「貴様、おれの顔をつぶしやがって」
いきなり、その一言を投げられて、斬りつけられたのであった。新之助が、殺人罪を犯したのも、この「顔」のためであったといってよい。
金五郎も、これまで、たびたび、「顔」に苦しめられた経験があった。それで、今、新之助が、どんなに当惑しているかは、金五郎にも、よくわかった。
「金さん、お前、江崎満吉と仲直りするの、いやか？」
「おれは、誰とでも仲ようしたいと思うとる。いつでも、仲直りするよ」
「仲裁の顔が、不服か？」
「そんなこたない」
「そんなら、ここんとこ、ひとつ、折れて、友田の仲裁で、江崎と、手打ちにしてくれんか。吉田磯吉親分も、この喧嘩には、関心を持っとるというけ、変に、荒立てんがええ。おれが、なにも、お前のいやなことを強いとるわけじゃないことは、お前も、わかってくれるじゃろう？　この街に住んで、商売やっとりゃ、そんなに、街の風（ふう）に反（そむ）くことも出来ん。……それに、昔のおれなら、なにくそ、と思うが、娘の子の親となってみるとなあ……」
金五郎は、親友の弱々しげな口調を、さびしい思いで、聞いていた。
（新公は、変った）
新之助の立場や、苦衷は、充分に察していながら、金五郎には、兄弟盃をした親友の軟化が、やはり、さびしかった。情ない気もした。この若松では、ほとんど唯一の友人で、頼

みにしていた男なのに、いま、その新之助が、自分を離れようとしている。裏切るとは思わなかったけれども、金五郎は、俄かに、孤独感におちいって、気が沈んだ。

反動的に、快活な調子で、

「わかった。わかった。よし、承知。日日(ひにち)と時間とを知らせてくれ。いつでも、行く」

「そうか。そうしてくれると、ありがたい。……それからな、この刀、二本とも、お前にやる。そのかわり、仲直りの場で、お前が喧嘩に使うた刀は、おれから借りたもんということは、いわんようにしといてくれ」

「わかった。わかった。もう、帰れ」

森新之助は、いずれ日取りが決定したら、知らせるから、と、ひどくなって来た雨の中を、帰って行った。

番茶を運んで来たマンは、怪訝(けげん)な顔つきで、

「新さん、どうかしたの？　えらい早よ、帰りなさったが……」

「追い返したんじゃ」

「どうして？」

「用がすんだからよ」

投げだすように、そういって、金五郎は、また、ごろりと、縁(えん)に転(ころ)がった。放棄的な表情で、眼をつぶったが、急になにかを思いついたように、すぐに、くるりと、起きなおった。かたわらにある日本刀を二本、鷲(わし)づかみにして、立ちあがった。

「どこに、行きなさるの？」

「ちょっと、永田の親方のところに、行って来る」

裏口で、高下駄をつっかけていると、俊次が、ラムネを四五本、懐に入れて、帰って来た。客はもう帰った、お前たちが飲め、と、いい残して、金五郎は、番傘をさして出た。

雨に煙る黄昏(たそがれ)の町を抜け二町とは離れていない永田の家に行った。

聯合組を番下げされた永田杢次は、貰った退職金で、ラムネ製造業を始めたのである。もともと懲罰的処分を受けたのであったけれども、情に厚い大庭春吉は、金五郎と話しあい、永田がメカケのサクと別れることを条件に、ラムネ屋を始めるだけの資金を都合してくれた。永田はそれを機会に、若松へ移住した。そして、同じ新仲町の、玉井組と眼と鼻の先で開業したのは、なるべく近くにいて、旧親方の面倒をみたいという、金五郎の希望にもとづいているのであった。

表には、「永田清涼飲料水製造所」という看板が出ているが、入口の鴨居(かもい)には、昔の「永田組」の提灯がかかげられてある。一日の仕事を終えた工場では、四五人の従業員が、ラムネの瓶を箱詰にしたり、割れたガラスの欠片(かけら)を、竹箒で、掃き集めたりしている。

「おごめんなさい」

「おう、玉井か。おあがり」

茶の間で、長火鉢を挟み、永田夫婦は糸巻きをしていた。杢次が両手首にかけた白糸の束を、ヨネがくるくると巻き取っている。糸がほぐれてゆくたびに、手首を柔軟に動かして、杢次はなかなか要領がよい。

それを、かたわらで、息子の茂次平が、面白そうに眺めている。

長火鉢の横に、坐ると、

「親方、刀をあげましょう」
そういって、紫の袱紗(ふくさ)に入った二本の刀を、永田杢次の前に、置いた。
「そうか、そりゃ、おおきに」
永田は、糸を外し、日本刀を抜いた。何度も刀身を眺めて、よろこんだ。以前にくらべて、ずっと、健康そうである。
ヨネが、酒の燗をつけて来た。
「玉井、今度、お前の発案で、小頭(こがしら)の組合を作るそうじゃないか」
「そうしようと思っています」
「ええ事じゃなあ」
「でも、困ることがあるんですよ。聯合組や、三井物産、大高組、などは賛成してくれたんですが、友田喜造の共働(きょうどう)組だけが、どうしても入らんのです」
「やっぱり、野心があるんじゃな?」
「共働組でも、小頭の中には、加入したい希望の者が、なんぼか、あるんですが、なにしろ、大親方の友田が、睨みを利(き)かしとるもんですけ――玉井の組合に入りたければ、入れ。考えがある。……そんな風にいわれたら、誰も入らんですよ」
「友田は、前から、そうじゃったが、港の仕事は、自分がみんな取ろうと思うとるんじゃよ。荷主の方だって、なんぼでも安い方がええからのう。そっと、裏から廻って、協定の請負賃銀より、一トン当り、二銭でも、三銭でも引いてやるといえば、聯合組のお得意でも、友田の方へ、仕事を移さんともかぎらん」
「そうなんですよ。もう、その兆候が、出とるんです。現に、四五日前も、聯合組に来る筈じゃった三菱の玄洋丸の荷物炭が、八百トンも、共働組に持って行かれました。大体、働く立場の者が、仕事の奪いあいをして競争するなんて、まちがっていますよ。今でさえ安い賃銀を、また安うしたりして、結局、資本家をよろこばせるだけのことです。わたしは、これまで、沖仲士をして来て、どうして、こんなに、みんなが汗水たらして働いとるのに、生活(くらし)が楽にならんのかと、不思議でたまらなかったんです。それというのが、おたがいが馬鹿な競争をするからですよ。そのために、どうしても、組合をこしらえなくちゃならんと、思うようになりました。ところが、友田喜造の一派だけ、なんとしても、入りません」
「困ったもんじゃのう」
「おまけに、わたしのことを、友田が、こういう風に、いうとるということを聞きました――玉井金五郎の奴、このごろ、若松に来た新米(しんまい)の癖して、太い料簡の横道者(おうどうもん)じゃ。若松港汽船積(きせんづみ)小頭組合ちゅうもんを組織するというて、飛びまわっとるが、自分がその組合長になって、港の仕事を自由勝手にしようと企らんどる。そんな組合なんて、くずしてみせる。玉井を若松に居られんようにも、してやる。……そんな具合に、口癖に、いうとるというんですよ。請負師というのは、働く者の代表でなくてはならんのに、あの人は労働者の敵です。はっきり、資本家側、御用暴力団というても、ええくらいですね」
金五郎の眼は、おさえがたい憤りに、燃えていた。
永田杢次は、面倒くさいことがきらいのうえ、そういう複雑なことはわからないので、ただ、漠然と、

「ほんとに、困ったもんじゃなあ」
と、呟いているばかりである。
前夜の出来事については、永田家では、なんにも知らぬ様子である。（相かわらず、のんきな親方だ）と、思った。もともと、荒くれた立引と、生き馬の眼を引き抜く鋭敏さと、ときには、血で血を洗う争闘さえ、辞せられない請負師をしていたことが、永田杢次には無理なのであった。ラムネ屋という、普通の商売に変ってみると、実に、平和な姿で、板についている。
「玉井、碁を打たんか」
と、にこにこ顔でいう。
「碁は知りません。将棋なら、すこし、さします」
「将棋は、おれが知らん。碁の方が面白いぞ。知らんなら、教えてやろうか」
「教えて下さい」
「おい、ヨネ、碁盤を持って来い」
「いえ、今夜は、ちょっと、外に用事がありますけ、また、この次に……」
「そうか。そんなら、そうしよ。……玉井、お前も、一人前の仕事師になって、これから、玉井組が大きゅうなって行くんなら、碁は、ぜひ、知っとくがええぞ、趣味を持たん人間は、動物と同じじゃ。バクチを知っとるだけじゃ、つまらん。お前は、若いに似あわん面白い男じゃけ、そのうち、町会議員くらいには出られるかも知れん。いんや、かならず、町会議員にはなれる。そんなときには、えらい人とも交際わねばならんことが出来て来るけ、碁は知っとけ、きっと、役に立つ。おれが、指南してやる。……それにしても、……」
と、永田杢次は、俄かに、感慨に耐えぬような、遠くを見る回顧的な眸になって、
「お前と、おマンとが、二人で、乞食の引っ越しみたよな恰好で、おれのところを頼って来たのは、ありゃあ、もう、何年前になるかなあ……？」
「あれから、三年ほどが経ちました」
「そうなるかなあ。下関の「なんでも屋」ちゅうのは、同郷の直方でなあ、あんまりしゃんとはしとらんけど、正直なええ奴じゃ。その「なんでも屋」の紹介状を持って来たもんじゃけ、お前たち夫婦を信用したんじゃが、……その乞食の風来坊が、おれの跡を継いで、こげえ立派になろうなんて、そこまでは、おれも思わんじゃったよ」
「みんな、親方のおかげです」
「なんの、おれのおかげがあろうかい。おれみたよな、腑抜けの呆作は、人のためになったことなんて、一回もありゃせん。それどころか、おれが、今、こうして、安閑として居られるのは、玉井、みんなお前のおかげじゃと思うて、いつも、家内と二人で、感謝しとるぞ」
「なにをいわれますか。こんなことでは、わたしの親方に対する御恩返しは、足りないのです」
それから、なお、十分ほど、雑談した後、永田家を辞した。
わが家へ急ぎ、番傘を雨がはげしくたたく音を聞きながら、
（親方の家が、はじめて、家庭らしゅうなったわい）
微笑のわく思いで、そんなことを考えていた。そしてそれは、やがて、自分たちにも子供が出来る、その日のことを思

う、不思議に楽しい感慨に、一直線に続いていた。
翌朝、「飛鳥」の仕込みの娘が、森新之助の手紙を持って来た。仲直りの日取り通知状である。金五郎をはじめ、小方連中は、仕事に出て、留守だった。
マンが、受けとった。
「女髪結い処」という看板のうえで、黄色い蝶と、白い蝶とが、さっきから、二匹、しきりに戯れている。もつれあいながら、舞いあがり、くるくる廻り、また下って来る。看板の上部と、軒場の桶との間には、大きな蜘蛛が巣をかけて、獲物のかかるのを待っている。二匹の蝶は、なんの警戒心もなく、無我の境で戯れているうち、ときどき、網の線に触れる。中心にうずくまっている蜘蛛が、その都度、走りだしそうにするが、蝶が網に引っかかりはしないので、あきらめたように、いまいましげな様子で引っかえす。
「あの蝶々、危いわねえ」
お京は、さっきから、気にかかってならないらしく、独り言のように、呟いた。
「飛鳥」の芸者たちが四五人、つれだって、髪結いに来たのだった。お京は、写真画報を見ながら、順番を待っていた。投げ島田の頭を、銀杏返しに結いなおして貰うつもりである。
「染奴さんは、ハイカラねえ」
二〇三高地髷にしている染奴を見て、友達が、眼を丸くしている。二〇三高地は、日露戦争のとき、非常な激戦の後、日本軍が奪取したロシヤ軍陣地のあった山だ。その名を冠した髪が流行していた。庇髪の中央に、サザエのような瘤を作る。染奴が、特に、今日、この髷を選んだのには、魂胆があった。
「今日は、みなさんお揃いで、晩、なにかあると？」
髪結のおナツが、染奴の髪を結いながら、訊く。博多生まれ、四十年配の、勝気らしい、色の浅黒い、眉毛のつりあがった女である。
三人いる弟子たちも、それぞれ、鏡に向かって、一人ずつ、髪を結っている。店内には、強いびんつけ油のにおいがただよい、ときどき、元結をしめる、キュ、キュ、という音、髪を梳く櫛の、シュウ、シュウという音が聞える。
染奴が、いそいそした声で、
「宴会よ」
「宴会は珍しゅうも、なか。こげん、みなさんが気張って、髪を結いなさるとは、なんか、特別なことじゃろうもん」
「そうよ、おナツさん。大変よ。喧嘩の仲直りが、家である の」
「誰と誰との喧嘩？」
「玉井金五郎親分と、江崎満吉親分。仲裁役は、友田喜造親分。うちのお父さんが、玉井親分と兄弟分だから、あたしとこに、申し入れがあったの。それはええけど、今夜は、若松中の親分がたが、ほとんど揃うらしいわ。吉田の大親分さんも来られるということだし、山下剛一親分、長井久吉親分、花田準造親分、それに、ドテラ婆さん、……それから、玉井さんの方は、大庭春吉親分、田中光徳親分、三崎国造親分、……」
「わあ、親分の展覧会やなあ。そら、今夜、「飛鳥」は大事た

い。ばって、そげん、敵味方の親分衆が集まって、なんごとも無う、すむじゃろか？」
「それは、すむわよ。もともとが、仲直りやもの」
「染奴さん、なんか知らんばってん、嬉しそうやな？　逢いたい人があるとじゃろ？」
「当った」と、露骨に、にやにやして、「あたし、このごろ、玉井金五郎親分に、首ったけなのよ。あんな人となら、どんな苦労してもええわ」
　お京はそれを聞いて、金比羅山でのことを思いだした。ドテラ婆さんが、お京と染奴とに、両腕でもたれながら、「惚れるなら、玉井金五郎のような男に惚れるがええ。自分が若かったら、入れあげる」といったところである。しかし、染奴がそれに煽動されて、急に、惚れたのではないことも、お京は知っていた。金五郎は、「飛鳥」には、自分の家のように出入りしていたから、染奴は、早くから、金五郎に思いをかけていたようであった。
　二〇三高地髷に、染奴が結っているのも、今夜、このハイカラ頭で、金五郎の気を引こうという作戦らしい。また、よく似合った。
「染奴さん、待っててね。一緒に帰ろうよ」
「ええ」
　そして、二人はつれだって、おナツの店を出た。
　軽い汗ばみをおぼえるような上天気である。二人の下駄の音が、カラコロと澄んだ音で、青空の奥深くひびき登って行くようで、もう夏の気配がどこかに感じられた。一羽の鳶が、悠々と舞い、ときどき、笛のような声で啼く。
「染奴さん、ちょっと、話したいことがあるの。つきあってね」
「ええ」
　若い染奴は、姉芸者として、お京には一目置いていた。従順である。
　木柵でかこまれた町役場の横を抜けて、蛭子神社に行った。この古い由緒を持つ社は、石鳥居の下まで、洞海湾の波が来ていて、石段を洗っている。境内には、榎、杉、松、樟、などの大樹が、鬱蒼と繁茂して、昼なお暗い感がある。海の神様として、漁師たちの信仰が厚かった。まったく、人かげがない。
「姉さん、なあに？」
　あたりのあまりの静けさに、不気味そうにしながら、あどけない顔で、染奴は、訊いた。
「ほかのことじゃないけどね、あんた、玉井さんに惚れるの、止めなさい」
　染奴は、びっくりして、お京を見た。お京の顔はいつになく鋭く、染奴は威圧を感じた。しかし、彼女も、いつもの従順さをすてて、
「御意見なのね。姉さんのお言葉やけど、こればかりは聞かれないわ。いつも、お父さんからいわれることも、よくわかったうえでのことよ。「飛鳥」にいるために、女の命の恋がかなえられないというのなら、あたし「飛鳥」を出ようとまで、思うとるのよ。……お京姉さんにも、力になって頂きたいと考えとったのやわ。それに、姉さんが、止めなさい、なんて……」

「でも、あんた、玉井さんと変なことになったら、友田さんとのこと、どうするの？」
「無論、手を切るわよ」
「あんた、そんなに簡単にいったって……」
「ええのよ。友田さんて、あたし一人じゃないんだし、……いつか、別れた方がええって、考えとったの」
「駄目よ。そんなもんじゃないわ。それでなくてさえ、玉井さんと友田さんとは、なにかと張りあっているのに、女の問題がからんだら、どんなことになると思うの？　あんたのために、玉井さんへ、友田さんの恨みが、また新しく行くと思わない？」
「ははあ、姉さんが、玉井さん、好きなのね」
「そうよ」
　と、いってしまった。
「それなら、それでもええわ。あたし、お京姉さんと張りあうわ」
　染奴は、蟀谷（こめかみ）のいろを浮かべながらも、決意のほどを明らかにした。癇性らしい気質が、浮きあがった蟀谷（こめかみ）の青筋をびくつかせ一重瞼の細い眼が、狐のように、つりあがっている。
　お京は、妹芸者の決心が生やさしいものでないことを見抜くと、非常手段に訴える以外に、方法がないと覚悟した。
「染奴さん」
　と、強い語調で、あらためて名を呼び、凄んだ眸（まなざし）で、睨みつけた。
「なによ」
　と、相手も、もはや、挑戦的である。
「ほんとに、あたしと、張りあう気？」
「ええ」
「命がけで、でも？……」
「無論よ」
「アッハッハッハッ」
　突然、お京は、男のような声で、笑いだした。どうしても、その哄笑（こうしょう）が止まらないように、苦しげに、腹をよじらせる。
　染奴は、むっとして、
「なにが、そんなにおかしいの？　いくら、姉さんだって、あんまり、馬鹿にすると、承知できないわ」
「ワアハッ、ハッハッハッ……」
「姉さん、あたし、もう、帰る」
「ちょっと、待って」
　笑いやめたお京は、あわてて、染奴の袖をつかんだ。
「染奴さん、あんまり、あんたが威張るから、ふきだしたのよ。命がけ、だの、承知できない、だのって、子供の癖に、なにいうのさ。自分のいった言葉の意味が、自分でほんとにわかってるの？　でも、もう、こうなったら、仕方ないわ。あんたに無駄な苦労をかけさせては気の毒だから、なにもかも、教えてあげる。……染奴さん、玉井さんは、もう、あたしと深い仲なのよ」
「嘘（うそ）、嘘」
「嘘なもんかね。面倒くさいから、これまで隠していたのよ、あんたがおせっかいしそうだから、ちゃんと教えるのさ」
「あたし、信じないわ。お京姉さんたら、玉井さんに、一度も逢うたことだって、ない癖して……」

「そんなら、今晩、見ててごらんよ。なにもかも、わかるから。……染奴さん、あんた、一体、あたしを誰だと思ってるの？　これまで、猫をかぶっていたけど、素姓を知らせてあげようか。……ほら、これをごらんよ」

お京は、ちょっと、あたりを見まわしてから、右腕をまくった。牡丹に蝶の美しい彫青（いれずみ）が、あらわれた。「飛鳥」に来て以来、誰にも見せたことがなかったのである。

染奴は、さすがに、仰天した。顔色を変え、二三歩、後すざった。

「「蝶々牡丹（ちょうちょうぼたん）のお京」といったら、関東では、すこしは知られた姐御（あねご）さ。それが、こんな若松みたいな田舎に来たのも、みんな、金五郎さんのためよ。染奴さん、あんた、命が要らないなら、金五郎さんに、おちょっかいをかけなさい。それから、今日のこと――あたしの素姓や、金五郎さんとのこと、ちょっとでも、人にしゃべったら、やっぱり、命がないものと、お思い」

染奴は、袂で顔を掩うと、はげしく泣きだした。

その夜、「飛鳥」では、豪華な饗宴がひらかれた。

五十畳敷の広間には、今夜の主客である玉井金五郎と、江崎満吉とを中心に、この街の名だたる顔役連中が居流れた。両方の関係者を合して、約三十人、芸者が十五六人、料理は三の膳までついた最上等献立て、酒とビールは、無尽蔵に、席に運ばれた。

「まず、今夜は、めでたいよ」

右隣りの席にいる森新之助が、にこにこと、そういうのを、「うん、まあな」

金五郎は、ぶっきらぼうに、相槌を打って、あまり浮かぬ顔をしていた。

左隣りには、「六ゾロの源」がいた。

「向こう方（がた）が、大層多いのう」

と、いう。

「嚇（おど）かそうとしとるんじゃよ」

「吉田親分は、見えんようじゃないか」

「後で来るとか、いいよった」

新之助は、金五郎の弟分ということで、今日は「飛鳥」の亭主ではなく、正客として、金五郎とならんでいた。

森新之助は、この街では、一目置いた眼で、眺められている。殺人の前歴があるからだ。人を殺して、監獄に行って帰れば、箔がつくことは、一種のやくざ憲法ごときものになっている。新之助が殺した「蝮一（まむしいち）」は、関門北九州では、もっとも獰猛（どうもう）な親分であったので、新之助は奇妙な名声さえ持っているといってよかった。普段はおとなしいが、生来、短気で、かっとなると、なにをしでかすかわからない。そんな気質も、いつか、知られていて、

「あいつを怒らせると、うるさいぞ」

うるさいことでは人後に落ちない連中からも、そんな風な眼で見られていた。そのことが、いわば、敵方である吉田磯吉派の勢力圏内で、「飛鳥」を開業して、どうにか、これまで、無事にすんだ理由といえるかも知れない。しかし、今、例の「顔」が、その均衡と平和とを破ろうとしているのであった。

金五郎の側としては、新之助、松川源十、大川時次郎、大

庭春吉、三崎国造、田中光徳の七人きりであるが、友田喜造の側は、残りの大半である。山下剛一、長井久吉、市川弥兵衛、岡部亭蔵、花田準造、藤野清次、長富紋太、「ドテラ婆」の島村ギン、その他吉田一派の四天王、腹心、懐刀、猛将、といわれる人物が勢揃いしている。たしかに、これは壮観で、デモンストレーションとしては、重圧的といえた。

奇妙なのは、江崎満吉一党だ。もともと、江崎と玉井との仲直りという触れだしであるのに、この席では、江崎はまるで問題にされていない。昔は、吉田磯吉と対等の大喧嘩をしたことがあるけれども、現在では、落ち目になっているうえに、今度の喧嘩では、戦闘隊勢をととのえて、玉井家の表まで行きながら、盃で日本刀を洗っている金五郎に恐れをなして、退却したことは、知れわたっていたから、軽蔑されてしまっているのだった。

拍手が起った。お座つきが始まるらしい。舞台の幕があいた。地方の三味線と、鼓、唄い手などが六人、五葉松の背景のある舞台奥にならんでいる。

中央に、頭をさげて、お辞儀をしている銀杏返しの一人の女、踊り手が、顔をあげた。

金五郎は、びっくりした。

三味線と、地唄につれて、お京は踊りはじめる。水々しい銀杏返しの頭、裾を引いた市松模様の着物、手にひるがえす銀扇、豊醇に熟れきった身体のこなしが、柔軟に、音もなく、舞台のうえをすべって、さす手、引く手に、いいようもない妖しい色気がただよう。切れ長の細い眼は、なにかの愁いをふくんでいるように、青味を帯びている。

梅にも春の
色そえて
若水汲みか
車井戸……

踊りながら、お京は、ときどき、金五郎の方を見て、にこッと、笑う。金五郎が、呆気にとられた顔つきで、ぽかんと、口をあけて、自分を凝視しているのが、おかしくて仕方がない。そして、お京は、自分の美しさを誇示するように、さらに、あでやかに舞いながら、金五郎へ、モールス信号のような、ながしめの電波を送った。

「久しぶりでしたのね。博多以来、お逢いしたかったのよ。まだ、大切な用件があったのに、あなたは逃げておしまいになった。でも、あたしはあきらめません。今夜、あとで、逢って下さいね。きっとよ」

お京の眼の暗号は、はっきりと、金五郎へ、そのことを伝えていた。

しかし、踊りながら、お京の頭に、奇妙なものが、ちらついていた。昼間、「女髪結い処」の看板のうえを、しきりと戯れながら飛んでいた二匹の蝶、今にも、蜘蛛の巣にかかりそうなので、危いと思って、はらはらした。そのときは、ただ、蝶の危険が気にかかっただけであったのに、今、踊っている最中のお京の胸に、黄色い蝶の方が金五郎、白い蝶の方が自分であるような幻影が、浮かんでいるのだった。

（そんなら、蜘蛛は？……）

蜘蛛は、この席に、一杯、うようよしている――お京は、そんなことを考えだすと、不意に、不安がおこって来て、手

足の乱れを感じた。動悸さえ、打つ。
「おい、玉井」
大庭春吉が、金五郎の袖を引いた。
「はい」
「踊っとるあの女、二日市の武蔵温泉のときの女じゃないか」
「よく似ていますなあ。わたしも、そうかと思いました。でも、ちがうようです」
「そうかな？　どうも、あの女のような気がするが……？」
金五郎を愛している大庭春吉としては、もし、武蔵温泉の女であったならば、警戒しなくてはならぬと思っているのであった。旅先ではともかく、地元では、いろいろと困った問題が生じて来るのである。
友田喜造は、お京の艶冶さを、うっとりとした眼つきで眺めていたが、盃をおくと、そっと、仲居を呼んだ。
「なにごとでしょうか？」
「あの女、なんという妓かね？」
「お京と申します」
「気に入った。今夜、頼むぞ」
「さあ、……？　お京さん、どう、いいますか？……」
「どういうも、こういうもあるか。芸者じゃないか」
それを、染奴が、眼を光らせて、聞いている。
お京の「梅にも春」が、拍手のうちに終ると、すぐ、宴になった。列席者の紹介と、仲直りの式とは、すでにすんでいたので、後は無礼講である。盃が、飛ぶように、廻る。
「これから、一芸廻しにしよう。……玉井君、なんか、やりたまえ。わしが所望じゃ」
友田喜造が、そういった。
「やります」
金五郎は気軽に立ちあがると、
「ちょっと支度を」といって、部屋を出た。
五六分ほどの後、拍子木の音とともに、舞台の幕が開いた。中央に、二人の男女、向かって左に、肩衣をつけ、見台に両手をついて、頭を下げているのは金五郎、右に太枠の三味線を前に置き、これもお辞儀をしている、銀杏返しの女はお京。
拍子木を打っているのは、幇間の胡蝶屋豆八、頓狂な黄色い声で、口上を述べる。
「東西、東西、このところお聞きに達しまする浄瑠璃芸題、「艶姿女舞衣」、語りまする太夫、玉井春昇、三味線お京、いよいよ、三勝半七酒屋の段、そのため口上、東西東西」
拍手。
金五郎は顔をあげ、お京は三味線を取りあげる。
一座の視線も、好奇のいろで、二人に集中しているが、その中で、友田喜造、染奴、大庭春吉、三人の眸には、それぞれに違った複雑なものがみなぎっていた。
金五郎は、四国時代から、浄瑠璃が好きで、祭礼などで行われる素人大会には、幾度も出たことがある。「温泉座」の座員だった。若手のうちでは、語り手とされていて、師匠から、「春昇」という芸名まで貰っていた。戸畑にいるときも、若松に移ってからも、閑さえあれば、稽古を怠らなかった。師匠は豊沢団助、子分たちのくれた幔幕もある。森新之助も、それにかぶれて、自分もはじめていたので、たまたま、見台や肩衣、太棹の類が、「飛鳥」にあったわけである。

友田から、一芸廻しの先登に指名されると、悪びれず、すぐ義太夫をやろうと思い、さらに、お京に三味線を弾かせることも考えついたのであった。
両眼を閉じ、うっすらと、微笑を顔の全体にただよわせた金五郎は、やがて、三味の音に乗って、重厚な調子で語りはじめる。
「……後には、園が、うき思い、かかれとてしも烏羽玉の、世の味気なさ、身一つに、結ばれ、とけぬ片糸の、くりかえしたる独りごと……」
染奴は、蛭子神社の境内で、お京からいわれたことを思いだしていた。お京と金五郎とが、すでに深い仲――そんなことは信じられなかったのに、今、舞台で見る二人の呼吸の一致、話しぶりや態度のなれなれしさ、そういうものを、眼のあたり見せつけられて、（やっぱり、嘘ではなかったわ）
と、思わずには居られなかった。失意と嫉妬の思いが、染奴の眼に青い燐光を燃やす。
「……今ごろは、半七ッあん、どこに、どうして、ござろうぞ……」
金五郎のもっとも得意とする件である。酔ったように、陶然と、語る。
幕のあいたときから、友田喜造は、鳶のような細く鋭い眼を、異様にぎらつかせていたが、いかにも苦そうに舐めていた盃を、下に置いた。
「おうい、もう、わかった。そんな下手糞浄瑠璃、止めれ」
と、怒鳴った。
夢中で語っている金五郎には、その言葉はよく聞えなかったので、なおも、首をふりふり、
「今さらかえらぬことながら、わしという者ないならば……」
と、語りつづけた。
「止めちゅうたら、止めんか。味噌も、糞も、いっしょに腐るわい」
友田喜造が、また、そう叫ぶと、
「やれやれ、なかなか、うまいぞ」
と、列中から、声援する者があった。
松川源十と大川時次郎とは、友田が自分たちのオヤジを罵倒するのを、歯を食いしばる思いで聞いていたので、応援者が出て来ると、その声の方を見た。しかし、それは、聯合組の味方側からではなく、敵側と思っていた花田準造であった。花田が吉田磯吉の懐刀と噂されていることは、日ごろから聞いている。しかし、同じ吉田幕下として、友田喜造とは兄弟分のような間柄でなければならぬ筈だ。それなのに、友田へ反対する言葉を発しているので、源十と時次郎とは、ちょっと、意外の感じをうけた。
「妙ですなあ」
と、時次郎は、首をひねって、源十を見た。しかし、広島の田舎から出て来たばかりの時次郎にくらべて、さすがに場数を踏んでいる源十には、うなずけるものがなくもなかった。
「同じ吉田一家の中でも、いろいろと、また、派があるんじゃよ。友田喜造と花田準造――きっと、なんか、こみいった経緯があるにちがわん」
時次郎の耳に口をよせて、ささやくように、そんなことをいった。

幸い、金五郎の耳には、友田の罵声も、花田の声援も、どちらもはっきり聞きとれなかった。いい気持で、眼を細めて、語りつづける。三味線を弾いているお京だけが、二人の声に眼を光らせたが、なにもいわずに、浄瑠璃に調子を合わせた。

花田準造は、でっぷりと肥った色白の身体づきで、眼の光にやわらかさがあった。昔、川舟のりをしていたとは思われない。男ぶりもよく、二枚目の役者のようでもある。しかし、吉田磯吉が、戸畑の江木弥作親分の身分であった花田を、懇請して自分の子分に貰いうけただけあって、今では吉田一家の智慧袋として、重きをなしているのであった。

花田の声援が出ると、友田は、それ以上は、止めろとはいわず、いよいよ苦りきった不愉快そうな様子で、かたわらの染奴に、しきりと、酌をさせて、がぶ飲みした。

「……思えば思えば、この園が、去年の秋のわずらいに、いっそ死んでしもうたら、こうした難儀もあるまいもの」

そこで、金五郎が、ひとしきり泣いて、打ちどめにすると、どっと、拍手と笑い声とが起った。胡蝶屋豆八が、拍子木を打って、幕がしまる。

染奴が、友田へ盃をさしながら、妖しい微笑を浮ふべて、

「旦那、あなた、玉井さんとお京さんとのこと、御存知ですの？」

「どんなことをじゃ？」

「二人が、ええ仲ってこと」

「そんなことが、あるもんかい」

「お京姉さんに、だいぶ、御執心のようでしたけど、さあ、……ねえ……？」

友田喜造は、いくつかの傷痕の浮かび出た、どす黒いくすんだ顔に、鳶のような鋭い瞳をぎらつかせていたが、肩衣を脱いで、また、座敷にかえって来た金五郎を見ると、待っていたように、右手をあげて、呼んだ。

「おうい、玉井君、ここに、おいで。ちょっと話がある」

金五郎が前に来ると、友田は、無理に笑顔を作って、盃をさした。金五郎は、おとなしく、これを受けて、

「ほんとに、今度は、御厄介をかけました」

と、挨拶した。

「まあ、無事に仲直りがすんで、よかった。これというのも、おれたちの力よ。江崎満吉のようなうるさい男が、外の者の仲裁なら、どうして受けるもんか」

「そのとおりです。ありがとうございました」

かえされた盃を、ぐっと、一息に飲んで、

「ときに、玉井君」

「はあ」

「君は、小頭（こがしら）の組合を作る運動を、しよるちゅう話を聞いたが、ほんとな？」

「ぜひ、作りたいと思いまして……」

「ぜひ？……ぜひ、ということはないじゃろう。この間から、君に逢うたら、いっぺん、いおうと思うとったんじゃが、……どうも、君の考えは、間違うとるようにある。この若松というところは、石炭あっての港、石炭あっての町、ちゅうぐらいのことは、君に説明するまでもないが、その石炭は、三菱とか、三井とか、貝島とか、麻生とか、そういう荷主さんの炭坑があって、はじめて、この若松港に出て来るんじゃ。

いわば、おれたちは、その荷主さんのおかげで、食わせて貰うとるというても、ええ。こうやって、一杯の酒の飲めるのも、そのおかげじゃ。……玉井君、そうじゃろうが？」
「おっしゃるとおりです」
「そしたら、われわれの恩人の、その得意さんを、大切にせんならんことも、当りまえじゃないか。違うか？」
「違いません」
「そうすると、玉井君、君の組合を作る運動ちゅうのは、お得意さんに、弓を引くことになりゃせんか？」
「いいえ、弓を引くというわけでは、けっしてありません。それは、荷主さんあっての私たちということは、充分、承知して居ります。けれども、現場で、下働きをしている仲仕たちの生活が、あんまりみじめで、こんなに貧乏なのは、やっぱり、どこかに、無理がある、それは……」
「どこに、無理がある？」
「一口に、思うようにいえませんけど、結局、賃銀が安すぎると思いますのです。荷主さんと、働く者とは、持ちつ持たれつ、なるほど、荷主さんあってはじめての私たちですけれど、これを逆に申しましたら、やっぱり、私たち働く者あっての荷主さんでありますし、荷主さんだけが肥え太って、働く者が、いつも、ぴいぴいで痩せとるというのは、正しいこととは思われません。それで、組合を作って……」
「荷主さんへ、喧嘩をふっかけるというのか？」
「そんな風に、いわれますと、困りますのですが……」
「どんな風にいうたって、同じじゃないか。どうも、君はおかしいなあ。それは危険思想ちゅうもんじゃよ。君は、社会主義者と違うか？」
「とんでもない。私は、ただ、仲仕の立場として、実際の問題を考えているだけです」
「君が組合を作るちゅうのを、おれが止(と)めるわけにもいかんが、おれの共働組だけは、そんな義理知らずの組合なんかには、絶対、入らせんから、そのつもりで居ってくれ」
一芸廻しがつづいている。ドテラ婆さんが、例の「若松名所を知らない人に」を歌って踊ったり、江崎満吉が、浪花節をうなったり、大庭春吉が、「カッポレ」を踊ったり、無口で有名な岡部亭蔵が、しぶい声で、端唄をうたったり、花田準造が、剣舞(けんぶ)をしたり、――一座は、三味、太鼓入りで、賑やかなので、友田喜造と玉井金五郎との話は、まわりにいる数人にしか聞えない。
森新之助だけが、すこし離れた別の列中から、気づかわしげに、全身を耳にして、二人の会話に、注意していた。
（金さんも、あまり抗(さから)わずに、ええ加減にしとけばええのに……）
正しいと信じたことには、火が降って来ても、矢玉が飛んで来ても、避けようとしない親友の気質をよく知っていながら、新之助は、その融通のきかなさが、腹立たしくもあるのであった。なにも、わざわざ、平地に波瀾を起すようなことを、しないでもよいではないかと思う。昔、友田喜造が、江崎満吉との大喧嘩で、愛用の白鞘の日本刀が、鋸(のこぎり)の歯のようになったうえ、飴ン棒のように曲ってしまったので、敵方の刀をぶんどって奮戦したという、豪の者であることは、伝説的にすらなっている。現在では、名の聞えた請負師として、

若い頃のような無鉄砲はしないとしても、そのかわりに、子分連中に、多くの無法者を擁している。それをよく知っているので、新之助には、金五郎の奇妙な意地ッ張りが、ときには、子供らしいものにさえ思えて来ることがあるのだった。

友田の言葉に、金五郎が返事が出来ずにいると、友田は、小気味よげに、

「そら、そうと、玉井君、君は、この町に来たとき、吉田親分のところへ、挨拶に行ったな？」

「いいえ、参りません」

「どうも、君はいけんなあ。若松に、吉田磯吉親分の居ることを知らん筈はあるまいが、町長でも、警察署長でも、新任のときには、まっ先に、吉田親分に御機嫌うかがいに行くんじゃよ。まして、この港で仕事をしようという君が、一度も、挨拶に行かんちゅうのは、仁義に外れちょる。親分は、大層、君に好意を持っとるばい。それで、今夜も、出席しなさるように、自分から申し出て居られたんじゃが、夕方ごろから、持病の胃が痛くので、失礼する、玉井によろしゅう、と、お言付があったんじゃ。玉井君、明日にでも、親分のところに、顔を出して、お礼をいうときなさい」

森新之助は、金五郎が、どんな返事をするかと、はらはらしていたが、すなおに、

「そうしましょう」

といったので、安堵した。

「それから、玉井君、君、さっき、浄瑠璃を語ったとき、三味線を弾いとった女な、……お京とかいうた、……あの芸者と、ええ仲ちゅうことじゃが、ほんとな？」

「滅相もない。ただ、三味を弾いて貰うただけです」

「そうか、そんなら、ええ。おれが、今晩、抱いて寝ようと思うとったもんじゃけ、ちょっと訊いてみたんじゃ。君と鞘当てになっては、困るけのう」

友田喜造は、そういうと、女のような黄色い声で、カラスのように、けたたましく笑った。

しかし、まだ宴の終らないうちに、金五郎とお京の姿は、どこに行ったのか、「飛鳥」から、消えていた。

日が暮れてから、マンは、町に、買い物に出た。兄林助の一番上の娘の子、八歳になる光子の手を引き、すこし大きな荷物になりそうだったので、「中学生」の俊次を、供につれた。

小学校に上ったばかりの光子に、鉛筆や一厘半紙を買ってやった。玩具屋の店先を通るとき、いかにも欲しそうな眼つきをしているので、ゴム毬も買いあたえた。

「俊ちゃんも、なにか、買うて貰いたそうな顔しとるなあ」

マンが、笑って、そういうと、俊次は、もじもじしながら、

「お姐さん、僕、なんにも欲しゅうはないけど、芝居を観に、つれて行ってくれんかなあ……？」

「今から？　もう、遅いわよ」

「いンね、ちょうど、ええです。一幕だけ、「虎ノ間」で、結構じゃけ」

「なにが、あっとるの？」

「渡辺ノ綱、羅生門の鬼退治」

「ああ、森の新さんが、やるとかいうとった芝居、今あっとるのね」

「あの、……渡辺ノ綱が、鬼から、兜の錣をグヮシと、ひっつかまれて、ドロドロドロと、天に吊るしあげられるところ、そして、その鬼の腕を、刀でちょん斬るところ――何度見ても、飽かんです」
「前に、もう見たの？」
「二度、見ました」
「まあ、そんなら、三度も見ることはないじゃないの？」
「三度でも、五度でも、毎晩でも、見たいですよ。ええですばい。……お姐さん、そうそう、お姐さんも、ぜひ見なさるがえ。渡辺ノ綱に扮する、何とかいう役者が、玉井のオヤジさんにそっくりですよ。そして、また、鬼ちゅうのが、友田喜造に、よう似ちょる」
「そんなこと、いうもんじゃないわ。今夜は、その友田さんの肝煎りで、江崎満吉と、仲直りの式をしとるのに……」
そうはいったけれども、マンも、一度、その芝居を観たい気持にもなって来て、三内町の旭座の方へ、歩を運んだ。光子にも意向を聞いてみると、大よろこびで、観る方に賛成したのである。
森新之助から、招待券は来ていた。金五郎から、祝儀もやってある。新之助が、福岡監獄に服役中、知りあいになった熊丸虎市と、共同で、この、関西若手歌舞伎一座の興行をやっているのだった。しかし、まだ、表面には、森新之助の名は出ていなかった。それというのが、やはり、吉田一派との軋轢に原因しているのである。
マンは、木戸銭を払った。一人五銭。「虎ノ間」は、最下等の立見席だ。檻のように、張りめぐらされた木柵の外部から観るのである。この興行は、蓋をあけてから、連日、大入満員をつづけているようだった。二階や、桟敷はもとより、「虎ノ間」も、ぎっしりと詰まっていて、立錐の余地もない。
「光坊、来な。ビビンコしてやろ」
俊次は、そういって、光子を、肩車に乗せた。しかし、客が多すぎて、どうしても、うまく観ることが出来ない。台詞や音楽が、とぎれとぎれに聞え、花やかな舞台の色どりや、動きが、ちらちらするばかり、なんのことやら、さっぱりわからない。
「俊ちゃん、駄目やわ。大変な人気ね。明日は仕事休みじゃけ、みんなで、揃って出なおそうよ」
「癪じゃなあ」
いくら努力しても観ることが出来ないので、とうとう、あきらめて、外に出た。
「おやッ」と、俊次が呟いた。「ありゃあ、オヤジさんじゃないか知らん？」
暗い街角を曲る金五郎と、市松模様の衣裳の芸者とが、見えたのである。
「そうらしいわね」
そういって、マンは、ちょっと立ちどまったが、二人の姿が、街角から消えると、格別、なにごともなかったような顔つきで、本町筋に出た。もう灯の消された家が多く、街は暗い。
肩車されていた光子は、眠ってしまったので、俊次が負ぶった。「井上金物商」の店先に、立ち寄った。息子の安五郎が、大戸をしめようとしていた。マンの姿を見ると、主人が、奥

から、出て来た。
「これは、玉井のごりょんさん、大層、遅いお買物で……」
「芝居小屋に入ったりして、道草食うとったもんですから。……また、三升釜を、一つ、欲しいと思いまして……」
「もう、痛みましたか？」
「いいえ、痛む分は、鋳(い)かけで、修繕して使うとりますけど、どうしても、まだ、一つ足らんもんで……」
「御商売、繁昌で、結構ですなあ。三井物産の仕事も、おはじめになるとかで、おめでとうございます」
「これも、皆さまのおかげですわ」
「やっぱり、玉井さんが、正しい方じゃけ、福(ふく)がついて廻るとですよ。このうち、金比羅山の花見では、とんと、玉井さんのお世話になりました」
「その節は、御叮嚀に、金物商組合から、過分な物を頂きまして……」
「なんの、ほんの志です。私たち、町の者、いつも、集まるたび、話して居ります。玉井金五郎さんのような方が、町会議員にでも出るようになったら、なんぼか、この若松も、ようなるとじゃあるまいかって」
「とんでもありませんわ。主人は、政治はきらいと、口癖のように、いうとります」
「そんな、議員には自分で出たがらん人が、出て貰わんといけませんです。なんとも知れん、爪弾きされとるのが、ちょっと金があるばっかりに、出しゃばって、町会議員に打って出るのは、困りものですよ。おたくの御主人のような方に、ぜひ、政界に乗りだして欲しいですなあ」
「きっと、いやがるでしょうよ」
そんな会話を、大戸に手をかけたまま聞いている青年、井上安五郎の、金魚のように大きな澄んだ瞳が、決意に似た、なにかをきらめかせて、強い光を放っていた。
――政治。
――政治家。
そうして、庶民の生活を圧迫し、政治を毒する社会悪への怒り、その一掃――それは、すでに、この青年の青春の唯一の方向となっていた。
（玉井金五郎という人と、一度、逢って、ゆっくり、話がしてみたい）
その思いも、強くなりつつあった。
三升釜を買ったので、これを俊次が持ち、光子は、マンが負ぶった。
停車場の方角へ歩いた。「ステンショ」だけには、早くから、電燈が引かれていた。まだ、終列車まで、いくつかあるとみえ、暗い夜の中に、その一角だけ、煌々(こうこう)と、光を発散している。汽笛や、石炭貨車を連結したり、離したりするかんだかい金属音が、鉄道構内から、しきりに、ひびく。
「おうい、おマンじゃないか」
後から呼ばれた。林助が、ほろ酔いで、近づいて来た。にやにやしながら、
「おマン、さっき、老松町(おいまつちょう)の角で、金さんに逢うたがなあ、別嬢(べっぴん)の芸者と、二人づれじゃったど」
マンは、けろりとした顔で、「あたしも、逢うたわ」
「へえエ、……それで？」

「それで、というのは？」
「わからんなあ」
「わからんのは、こっちよ。兄さん、なにをいおうとしなさっとるの？」
「焼き餅、焼かんのけえ？」
「なんで？」
「亭主が、若い美人の芸者と仲ようしとるのが、お前、なんともないのか？」
「なんともないわ」
「お前、前に――女房以外に、女を作るような亭主は、承知でけん。……って、口癖のように、いうとったじゃないか」
「なに、いうてなさるの？　そんな狭い料簡じゃけ、兄さん、いつまでも、うだつが上らんのよ。あたしのその考え、今でも同じよ。変っては居らんわ。でも、うちの人が別に、あたし以外に女を作ったわけでもなんでもないじゃないの。芸者と二人で歩いたって、それが、なによ。男商売は、交際が大切よ。そうすれば、料理屋に行くことだって、遊廓に流れこむことだってあるわ。それを、いちいち、いい立てたり、女と一緒にいたくらいで、神経を尖らしたりしとったら、仕事師の女房は勤まらんわよ。あたし、うちの人、信用しとるけん、どんな女の渦の中に居っても、大丈夫。あたし以外に、女作ることなんて、絶対にない」
「金さんが惚れんでも、女の方から惚れたら、どうする？　だいぶん、惚れ手が多いちゅう話じゃが……」
「おお、うれし。そんなに、女から惚れられる亭主を持って、幸福やわ。女から、洟も引っかけられんような男が、どうなるものですか。……ウフフ、兄さんたら、自分が女から惚れられたことないもんで、自分が焼き餅焼いとるのね。きっと、そうよ」
「ふウン、見あげたもんじゃのう。うちのチエとお前とを、つきまぜたら、ちょうど、ええな。女房の奴、もう、子供が五人も出来とるとに、まだ、くだらん悋気ばかりして困る。お前は、いつも、おれがチヱを苛めるようにばっかりいうけんど、あいつが、根も葉もないことに、焼き餅焼くもんじゃけ、いつでも、大喧嘩になるんじゃ。金さんが羨しいわい」
　三年前、門司の浜尾組時代には、谷口林助の方が、玉井金五郎よりは、はるかに先輩であった。そして、新米の金五郎からぐんぐん追い抜かれるのを、嫉ましい感情で眺めながら、妹のマンに、金五郎の悪口をいったこともあるのだが、今は、その金五郎とは義兄弟となり、幕下となっている。しかし、それは自分に力がないとあきらめて、妹婿に仕える気持ではいるけれども、やはり、なにかと、反撥するものが出て来ることはおさえがたいのだった。
　新仲町へ曲り、しばらく黙って歩いた。玉井家の灯が見えてから、
「おマン、広島のお父さんが、大怪我をしたちゅうで」
　おどろいて、
「どんな？」
「簡単な手紙で、はっきりとはわからんがな、なんでも、薪割りをしよって、欠片が顔に飛んだらしい。それが眼に入って、盲目になるかも知れん、と書いてあった。それにびっくりして、お母さんも寝こんでしもうとるげな」

「あたし、一度、広島へ帰って来ようか知らん？」
俄かに、はげしい郷愁が、矢も楯もたまらぬもののように、マンの全身を焼いた。

死生

旗亭「緑屋」の二階から、夜の海が見える。そのあたりは、洞海湾の入口だ。港口にある中ノ島には鬱蒼たる森林と、聳え立つ骸炭工場の高い煙突とが、月光に照らしだされている。対岸の戸畑は、霞んで見えない。

この中ノ島は、という別名があって、昔は、筑前藩、黒田二十五騎の一人である三宅若狭守家義の守っていた若松城があったが、今は城址は石ころだけとなり、そこへ、コークス工場が出来たのであった。工場には、「河白斗の異人さん」と呼ばれた、エエ・メイ・コイという、月給を日本貨幣で二百五十円も取った、フランス人技師がいたけれども、今はもういない。

島の黒い大樹が、風に鳴っているのが、海をへだてて聞える。

それに、耳をかたむけながら、お京は、吐息をつくようないいかたで、

「今日の日を、どんなに待っていたか知れないわ」

と、金五郎へ、しなだれかかった。

「お京さんも、根性が悪いなあ。そんなに、前から、新公のところへ来とることなんて、まるで、知らんかったよ」

「博多から逃げだして、うまく、あたしとは縁が切れたつもりでいらしたのでしょう？　ウフフ、金五郎さんて、女の一念というものを、御存知ないのね」

「あのとき、すまんとは思うたんじゃけど、どうにも、ああするしか、仕方がなかったもんじゃから……でも、いつも気にかかっとった。彫青を彫って貰うた代金もあげとらんし、博多の宿賃も、そのままにしてしもうて……」

「野暮なこと、いいっこなしよ。銭金で、あたしがやったと思っていなさるの？」

「でもあんまり……」

「もう、いいの、昔のこと。あたしが、若松に来たのも、たった一つ、金五郎さんに逢いたいためだったし、こうやって思いがかなえられたら、以前のことなんて、どうだっていいわ。……ねえ、金五郎さん、わたしの思いをかなえさせて、頂戴」

二人のいる四畳半には、小さな餉台が一つ置いてあるきり、仲居も、簡単な酒肴を運ぶと、気をきかせて、後はよりつかない。窓は明けてあるが、前方は夜の海と島とで、どこからも見られる恐れはなかった。

この一夜のために、深謀遠慮、長期作戦を立てて、隠忍自重して来たお京の張りのある眼は、一層張って、絶対に、目的を達しなければ置かぬという、切なくはげしいものが、みなぎり燃えている。それは、一種、殺気にも似たもので、お京の艶麗な全身から立ちのぼる、妖しい攻撃精神は、今は気ちがいじみたものまでもまじえているようだった。着物の市松模様にさえ、嘗て、安珍を追った清姫の鬼気がただよっている感さえあった。

金五郎は、すっかり、堅くなって、

「お京さん」

「あい」

「すみません」
「なに、謝るの？」
「わたしを、帰して下さい」
「用がすんだら、何時でも。金五郎さん、あたしの一生の願い、かなえて頂戴。約束して頂戴。なんどもいうけど、銭金じゃないのよ。あたしの一念なの」
　金五郎は、いよいよ、当惑した顔つきで、尻込みし、
「お京さん、あんたの気持はうれしいんじゃけど、どうも、……なあ」
「どうも――どうって、いうの？」
「あんたと、変な仲になるちゅうことは、ちょっと、なあ……」
「アッハッハッハッ」
　と、お京は、男のように、笑いだした。それは、しかし、ほんとうに、おかしいのやら、腹立たしいのやら、すて鉢なのやら、自嘲なのやら、よくわからない。お京自身も、切ない胸のうちをおさえかねながらも、持ちまえの負けじ魂で、いたずらに、男の膝下に叩頭することは、きらいであった。けたたましく笑うことによって、なにかをごまかし、心機一転を装うのが、精一杯といってよかった。
　突然、哄笑されて、呆気に取られている金五郎を、あわれむ眸で眺めながら、
「おどろいた。金五郎さんて、思いのほかに、うぬぼれ屋だわ。変な仲になる――なんて、アッハッハッハッ、……あたしが、あなたに惚れてると思ってるのね。惚れて、若松まで追っかけて来て、可愛がって貰おう、と考えて、こうやって、お願いしてると思ってるのね。勘ちがいしないでよ」
「そんなら、お京さんの一生の願い、女の一念というのは、なんじゃね？」
「彫青よ」
「彫青？」
　と、鸚鵡がえしをして、お京の顔を、あらためて、見なおした。
「わかってるじゃないの。武蔵温泉で逢ったとき、ちゃんと、わたしに約束した癖して。……左腕に、昇り龍、右腕に、降り龍――あたしが彫るのなら、両腕に、一対、ぜひ頼みたいって。……そうでしょう？　金五郎さんも男なら、いったん約束したことは、忘れはしないでしょ？　あたしだって、すこしは知られた彫青師さ。うるさい関東の渡世人たちの間で、腕だけではなくて、気ッぷで、通って来た「蝶々牡丹のお京」よ。山ほど、銭金を積まれたって、いやだと思ったら、どんな貸元にだって、桃ひとつ、彫りゃしないわ。それが、金五郎さんの美しい肌に惚れこんで、……まちがわないでね。あなたにではなくて、あなたの身体に惚れたのさ。……銭金、損得抜きで、あたしが、こんなに打ちこむなんて、これまで、一度もなかったことよ。……金五郎さん、わかる？」
「うウン、わかったような、わからんような気持じゃが……」
「金五郎さん、お願い」と、また、お京は、蓮ッ葉な伝法調から、哀願する態度になって、
「ね、あたしに、右腕に、降り龍を彫らせて。もう、彫ってやるなんて、威張らないわ。あなたが、左腕だけで、博多から逃げてしまったときから、あたしは、病気になったのよ。狂人

になるかも知れないわ。夢にまで見て、うなされるの。どんなことがあっても、あなたの右腕に、降り龍を彫りたい――憑きもののしたような、命がけの願い。女の一念。……金五郎さん、あたしのこの気持、わかって」
「わからんこともないが……」
「あなただって、片方だけの半端じゃあ、ほんとの男の紋章とは思わないでしょう。あたし、金五郎さんが、立派な男で、約束を守る人だということを、信用するわ。武蔵温泉での約束、果して下さること、疑わないわ」
「弱ったなあ……」
「金五郎さん、彫青、もう一度、見せて」
仕方なしに、左腕をまくると、
「ああ、美しいわ」
お京は、我慢が出来ないように、金五郎の腕を両手でにぎり、龍の首のところに頬ずりをした。唇をつけて、青い絵具を舐めるかのように、彫青の部分を吸った。銀杏返しの髪のほつれ毛が、金五郎の顔に当る。
金五郎は擽ったく、変な気持になって来たが、お京を怒らせたくはなかったので、なすがままに、まかせていた。
「そっちの腕、見せて」
まっ白い左腕をさすりながら、火山のような大きな吐息をつき、
「この腕を、このままで置いとくなんて。ああ、金五郎さんがいやというなら、殺してでも、この腕に、降り龍を彫りたいわ」
「お京さん」
「あい」
「そうしておくれ」
「どうするの？」
「殺してから、彫ってくれんか。生きとる間は、どうもなあ……」
「どうして？」
「うちの女房が、あんまり、彫青なんか、好きでないんじゃよ」
その言葉に、さすがに、お京はぎくッとしたようだったが、すぐに、投げやりの伝法になって、
「ヘエン、金五郎さんて、おかみさんに頭が上らないの？ オンテレ・メンピンだったの？ そうか。それでわかったわ。博多から逃げだしたのも、おかみさんが怖かったのね。あなたのおかみさんのこと、……おマンさんとかいう名の、……いつも、うちの大将やお姐さんから聞かされてたわ。大変なしっかり者って、いうじゃないの。女のしっかり者が、ほんとうは困り者さ。彫青がきらいだなんて、そんなことじゃあ、折角男になる亭主を、殺すようなものじゃないか。女房の顔色見てなんかいたら、男になって売り出すことは出来はしないわよ。金五郎さん、しっかりおしよ」
そんな憎まれ口をたたきながら、お京は、妙なものが頭の中をちらつくのに、弱っていた。「女髪結い処」で見た二匹の蝶、それを、さっき、「飛鳥」の舞台で踊るときには、金五郎と自分とにたとえてみたのに、今、その二匹は、夫婦で、黄色い方がマン、そして、それを狙っている蜘蛛が、自分――そんな、いやな幻影が湧いているのだった。

金五郎の方は、左腕の彫青を眺めなおしながら、
（この龍が、前肢（まえあし）につかんでいる菊の花束、それが、マンであることを、お京は知らん）
そう思って、秘密の持つ、なんとなしの楽しさに浸っていた。
「金五郎さん」
「あん？」
「どうしても、いや？」
「女房に、相談してみる」
「馬鹿」
金五郎は、立ちあがった。
「帰るの？」
「うん」
「帰すもんかね。もし、金五郎さんが、彫青の約束を守らないなら、街中、いいふらしてやるわ。――玉井金五郎、って、このごろ売りだしかけてるけど、あれは、ほんとうは、嘘つきの、卑怯者の、男らしくない三ン下奴だ。……って」
「仕方ないよ」
「金五郎さん、待って。……そんなこというなら、殺してやる、殺して、彫青してやる」
お京は、金五郎に躍（おど）りかかった。

マンは、台所に、提灯を点（とも）した。「井上金物商」から買って来た新しい鉄の三升釜を、井戸端で、洗って、磨いた。湯をわかして置き、糠を藁（ぬかわら）タワシで、ゴシゴシ、こすりつけると、きれいに、垢と錆とが落ちる。

猫が、マンの手つきを、ものうげな眼つきで、眺めている。
柱時計が、チン、チン、チンと、鳴りはじめた。手を休めて数えると、十一、打った。二階で、将棋をさしたり、花札を繰ったり、酒を飲んだりして、賑やかに騒いでいた子分連中も、いつか、静かになっている。
（もう、帰る時分やわ）
と、思っていると、表の格子戸が、開く音がした。
「ただ今」
「六ゾロの源」の声である。しかし、いつもとちがって、その声には元気がない。
マンは、弓張提灯を持って、玄関に出た。源十と時次郎。あまり酔ってもいず、妙に遠慮勝ちな様子で、もじもじしている。提灯の光を、まぶしそうにする。
「御苦労さん、無事にすんだのね。……さあ、おあがり。お酒の燗が、つけてありますよ」
「もう、沢山。向こうで、いやというほど、よばれて来たけ」
「そんなことでは、鱶（ふか）の源さんが酔うとるとは、いえんじゃろ？　口なおしに、時やんと、一杯、やんなさいよ。肴に、イイダコが買うてあるわ」
「いんや、もう、寝る。きつい。くたぶれた」
「時やんも？」
「うん」
二人は、しめしあわせて来たかのように、こそこそと、しかし、大急ぎで、二階に上ってしまった。二人は、帰って来たとき、マンから、「オヤジと一緒じゃなかったの？」と訊（たず）ねられることが一番怖かったのであるが、当然あると予期した

その質問がなかったので、やれやれ、と思ったのであった。二人は、金五郎とお京とが、ひどく仲よくしていて、いつの間にか、「飛鳥(あすか)」から見えなくなったことを、マンに、話したくなかったのである。

（変やわ）

マンは、嘗てない二人の態度を、ちょっと、不審に思った。金五郎と芸者とが、街を歩いていた姿は、自分も見かけたし、兄林助からも聞かされていたので、源十と時次郎とが、金五郎と一緒でなかったことは別に不思議には思わなかったけれども、子分たちの、奇妙に、秘密めかした、マンを憚っているような、意味ありげな様子が、気にかかった。小首を傾け、眉をよせた。

兄林助には、大言壮語したけれども、そこは、マンも、女である。俄かに、胸中に、妬情めいた、疑心暗鬼が生じた。

それでも、マンが、なお、台所で、三升釜を磨く仕事をつづけていると、玄関の格子戸が開いた。

「おごめん」

出て見ると、若い俥(くるま)ひきが立っている。

「これを、「飛鳥」の女将(おかみ)さんが、あなたに渡して下さい、って」

一通の手紙である。

駄賃をやって、使いをかえすと、マンは、それを台所に持って来て、開封した。

読んで行くマンの顔色が、みるみる、変った。眼が、狐のように、吊りあがる。

たどたどしい女文字の片仮名文章は、

「オマンサン、コンナコト、アナタニ知ラセタクハ、ナイノダケレド、ヨクヨクノコトト、承知ノ上、読ンデ下サイ」

と、始まる。

「困ツタコトガ出来マシタ。仲ナオリノ式ハ、無事ニ終ツタノニ、女ノ事デ、オタクノ金五郎サント、友田喜造親分ト、ソシテ、ワタシタチノ間ニ、悪イイキサツガ出来テシマツタノデス。

今夜、ワタシトコノカカエ芸者ノオ京サンヲ、友田サンガ、世話セヨ、トイウ話ガアツタ。タイヘン熱心デシタ。トコロガ、オ京サンハ、前カラ、金五郎サント出来テイテ、ドウシテモ、ウン、トイイマセン。金五郎サンモ、自分ノ女ヲ、友田サンニ取ラレルノハイヤトミエテ、宴会ノ途中カラ、二人トモ、ドコカニ行ツテシマイマシタ。

オマンサン、

アナタハ、金五郎サントオ京サントノ事、ナニモ知ラナイデシヨウ。アタシモ、コンナ事、アナタニ知ラセタクナイノデスガ、ドウシテモ、コノ問題ハ、アナタニ解決シテモラウシカ、手ダテガナイト考エタノデ、急ギ、コノ手紙書クノデス。

手紙デハナク、新サンカ、ワタシカガ、出カケナクテハナラナイノデスケド、マダ宴会ハスンデ居ランシ、後始末モアルノデ、手紙デ、許シテ下サイ。

オマンサン、

新サンモ、ワタシモ、アナタタチ夫婦ノ、昔カラノ事ヲヨク知ツテ居ルノデ、金五郎サンニ、女ナドハ作ラセナイ様、ズイブント骨折ツテ来マシタ。シカシ、色恋ノ道ハ別トハ、

ヨウ、イウタモノ、金五郎サンハ、前カラ、オ京サントハ深イ仲ダツタラシクテ、ワタシタチノ忠告ナド、耳ニモ入レヨウトシマセンデシタ。

新サンモ、ワタシモ、イツモ、オ京サンニ向カツテ、口(くち)グセニ、

――玉井サント切レテクレ。オマンサンニスマンカラ。

ト、イウテ居ツタノデスガ、オ京サンモ、イランオ世話様トイウ、タイ度デシタ。

ソレデモ、二人ダケノ事ナラ、マダ善カツタノデスガ、今度ノ様ナ事ニナルト、困ツテシマイマス。相手ガ、今度ノ喧嘩ノ仲裁役デ、若松切ツテノ顔役、吉田一家ノ一ノ子分トイウ事ニナルト、ワタシタチニ振リカカル災難ガ、思イヤラレマス。

友田親分ハ、金五郎サント、オ京サントガ、二人デ、ドコカニ行ツタ事ヲ知ルト、カンカンニ怒ツテ、ウチノニ、コウイウノデス。

――森君、君ハオレノ顔ニ、ヨクモ、泥ヲ塗ツタナ。オレガ、オ京ヲ今晩世話シロ、ト、アレホド申シコンデオイタノヲ、知ツテ居ルクセニ、玉井トオ京トヲ、逃ガシテシモウタ。今度ノ喧嘩ノ仲裁シタ恩ヲ、仇デ返ストハ、ドウイウ考エジヤ。

――イイエ、ワタシハ何モ知リマセン。

新サンハ、ビックリシテ、ベン解シマシタケレドモ、友田サンハ聞キマセン。ソレデモ、

――マア、今夜ハ、ガマンシテヤル。明日ノ晩、オ京ヲ世話セナンダラ、考エガアル。

ソウイウテ、帰リマシタ。

オマンサン、

金五郎サント、オ京サントヲ切リハナスニハ、モウ、アナタノ力ヲ借ル外、ナイノデス。アナタノイウ事ナラ、金五郎サンモ、キット、聞クデシヨウ。オ京サント別レサセテ下サイ。頼ミマス。オ願イシマス」

マンは、まるで噴火山のようである。

君香(きみか)の手紙を読み終えるまで、青くなったり、赤くなったり、眼を白黒させたり、息を蒸気のように吹きだしたり、肩を大波打たせたり、幾度か、眼まいをおぼえて倒れそうになったりした。

手紙を、帯の間につっこみ、また、ゴシゴシと、三升釜を磨いた。腹が立つことがあると、一層、やたらに仕事がしたくなるのは、マンの癖であったが、今や、嫉妬の鬼と化したマンの、総身の力をこめた手で、釜は、ピカピカと、美しく磨きだされた。

(畜生)

はげしい怒りに燃えながら、ぽろぽろと、涙が流れた。

(あたしを、騙(だま)すなんて……)

町で見た金五郎と、市松模様の芸者との姿が、マンの人のよさと愚かさとを嘲笑うように、空間に、ぽっかりと浮かぶ。それを打ち消すように、マンは、眼をつぶって、はげしく頭を振り、ぎりぎりと、歯がみした。

(どうして、やろうか?)

夫を信じきっていただけに、反動が大きかった。

深夜に近くなって、あたりは森閑としている。釜を洗いはじめるころまで、裏の病院から、重病人の呻き声が、東風に

乗って聞えていたが、ひとしきり廊下を走る音、がやがやとざわめく声がしたと思うと、静かになった。死んだのかも知れない。

猫が、竈の上で、眠っている。

マンは、釜をきれいに洗って拭き、台所の一角にある、「荒神様」の神棚に供えた。菜種油の入っている土器に、燈心をかきたてて、マッチで、火をつけた。

静かに、合掌し、柏手を打った。その手の音が、しいんとした家の中に、不気味に、こだまする。猫が、ちょっと眼をさましたが、すぐに、また、ものうげに、眠ってしまった。

マンは、奥座敷に入った。

（どうせ、今夜は、帰って来ないに定まっとるわ）

そう思ったけれども、とり乱して、金五郎とお京のいるところを、探しに出かける気持はなかった。

いつか、時次郎とマンとが、二人いるところへ、旅先から帰って来た金五郎が、突然、あらわれ、

「間男、見つけたぞ。打ち斬ってくれる。二人とも、そこへ、坐れ」

と、怒鳴ったことが、思い出された。

（ふン、人のことどころか、こっちが、重ねておいて、四つに、打ち斬ってやろうか）

マンは、助広の短刀の在り場所などを考え、憎々しげに、心中で、そんなことを呟いてみた。しかし、その強気にもかかわらず、天地のくずれ落ちる中へ、ぐんぐん、吸いこまれてゆくような、いいようもない寂寥と、孤独感とが、全身を包んでいた。涙が、とめどもないように、後から、後から、湧きあがって来る。

その癖、

「ヘン、男は、あんた一人か」

そんな不貞腐れた言葉を、蓮っ葉に呟きながら、しきりと、荷物ごしらえをした。

桐箪笥から、数枚の着物、肌襦袢、腰巻の類をとりだして、風呂敷に包んだ。激情の果てのためであろうか。いつになく、腹の子供がひどく動く気配を、しきりに感じる。

（こんな子供まで、生まれようというのに……）

そう思うと、さらに、新しい涙が流れた。

旅支度を整えると、蒲団をしいて、もぐりこんだ。いつもは、二つならべる枕を、自分のだけにした。ひと寝入りした後、子分たちの朝御飯を作ってから、早朝、出発するつもりだった。

しかし、なかなか、眠ることが出来ないでいると、十二時を打ってから、表の格子戸を、たたく音がした。金五郎らしい。

「マン、開けてくれ」

と、怒鳴っている。

若松に住みついてから、これまで、金五郎は、まだ、家をあけたことがない。したがって、締めだされたこともない。交際で、どんなに遅くなっても、かならず帰って来た。マンも、一時が打っても、二時が打っても、表を掛けずに、待つのが習慣になっていた。

しかし、今夜は、十二時前に、戸じまりをしたのである。

「こらあ、どうして、締めるか。……開けんかあ」

がたがたと、格子戸を鳴らしながら、金五郎は、不服らしげに、喚いている。
マンは、蒲団の中で、息を殺していた。誰かが梯子段を鳴らして、二階から、降りて行くようである。畳を踏む足音が、玄関の方に出て、
「オヤジさんですか？」
時次郎だった。
「おれじゃよ」
「今、開けます」
内から掛けた鍵がはずされると、はげしく、格子戸が開いた。投げつける語調で、
「帰ることがわかっとるのに、何故、掛けるか？　マンは、居らんとか？」
「居ります」
「鍵は、誰が掛けたとかい？」
「姐さんが掛けました」
「馬鹿にしとる」
金五郎にしてみれば、若干の秘密があったにしたところで、女の誘惑を蹴とばして、帰って来たのである。お京へ心を惹かれた点は、マンにすまぬ、と思うけれども、最後の線では、マンへ貞節を通している。女房から、感謝されてもよい、と、考える。といって、別に褒められたい気持もないのだが、締めだされたりすると、
（おれのような亭主が、どこにあるか？）
そんな反撥心が、湧いて来るのだった。
請負師仲間では、女道楽、女郎買い、芸者買い、メカケ狂い、二号、三号、四号、の設置、等は、日常茶飯事となっている。女を多く作るだけ、甲斐性のようにも、いわれる。まして、「据え膳食わぬは、男の恥」、女の方から持ちかけられて、白旗をかかげる者は、笑い者になるほどだった。
それでも、金五郎は、そんな通俗に流れまいと考えて、これまでもやって来たし、今夜とて、美しい桃色の虎口を脱して来たわけである。それだけに、締めだされたことが、奇妙に、腹が立った。酒の酔いも、手つだっていた。
「時やん、もう、寝れ」
そういって、大川時次郎を、二階に追いあげておいてから、寝室に、殺到した。
真暗ではあるが、勝手はわかっている。無言で、着物を脱ぎすて、マンの寝ている蒲団に、もぐりこもうとした。
ところが、マンは、まるで、蓑虫のように、身体を、堅く、掛け蒲団で包んでいる。しっかりと、両手で巻いていて、金五郎を寄せつけない。
「なにしちょるか？」
「あんたこそ、なにをしとんなさるの？」
「蒲団を、退けんか？」
「ああ、白粉くさい。けがらわしいわ。用があるなら、お京さんところに、行ってしなさい」
「貴様、……そんなこというなら、強姦してやる」
腹の立つのと、おどけるのと両方で、笑いながら、金五郎は、マンへ挑みかかった。力ずくになると、マンは、かなわない。はげしく抵抗したが、蒲団をめくられてしまった。
しかし、次の瞬間には、マンの上にかぶさった金五郎が、

「ア、タタタ、……ツ」と、異様な呻き声を発して、顔を大根葉色に青ざめさせると、ぐったりと、投げだされていた。
マンは、はね起きた。両手と、尻餅とを、べったり、畳のうえについて、一つ、巨大なため息をした。がっかりとなった。動悸が、止まらない。
金五郎は、暗黒の中に、だらしなく、伸びている。苦しげに、うごめきながら、虫の息であったが、それも聞えなくなった。あたりは、急に、しいんとなった。
マンは、そっと、夫の胸に、耳を持って行った。それから、立ちあがると、台所に行った。神棚の燈心から、蝋燭に火をうつして、「玉井組」の弓張提灯に立てた。
座敷に来た。鏡台の前で、身支度をととのえた。旅の準備は、先刻、完了している。風呂敷包みを、玄関口に出しておいてから、右手に提灯、左手に、鉄瓶を持って、寝室に入った。
渚に打ちあげられたマグロのような恰好で、ころがっている夫に、蒲団を着せかけた。それから、鉄瓶の水を口にふくんだが、ひきつったように、青ざめている夫の顔を見ると、ふいにたらたらと、涙が流れ落ちた。
「ぷウッ、ぷウッ」
と、二度、顔に、水をふきかけた。
金五郎の顔の筋肉が、びくついて、息をふきかえす気配がわかると、あわてて、寝室の外に飛びだした。
階段のところへ行き、五六段、登ってから、
「時やん、時やん」
と、声をかけた。
一睡もせず、下の様子に気を配っていた大川時次郎は、這い出て来て、踊り場に、緊張で歪んだ顔をのぞかせた。
「なんけえ？」
「うちの人が、気分が悪いと、いいよる。あたしは、街の薬屋に一ッ走り、行って来るけ、あんた、しばらく、介抱しといて」
「薬なら、おれが買うて来るよ。あんたが、居った方が、ええ」
「時やんでは、わからん。そんなら、頼んだばい」
マンは、せかせかと、玄関に出た。風呂敷包みを抱きとると、格子を開け、深夜の戸外に飛びだした。戸をしめるとき、なんとなし、家の中全体を見まわした。きゅうと、胸が、ワイヤの箍ででも、締めつけられるようである。
提灯の明かりを頼りに、静まりかえった新仲町を抜けた。夜気が冷たい。天には、星が一杯、火の粉のように、頭のうえに振りかかる近さできらめき、マンの行く手で、つづけさまに、二つ、星が流れた。マンは、その流星に、ひやりとしたものを感じた。足のすくむ思いがした。
「永田清涼飲料水製造所」の白い看板が、夜闇に、ぼんやりと、浮きあがっている。
「今晩は」
戸をたたくと、すぐに、ヨネが顔を出した。永田杢次も、出て来た。まだ、起きて、誰かと碁を打っていたらしい。
「おマンじゃないか。今ごろ、他所行支度で、どげえしたとな？」
「広島のお父さんと、お母さんとが、どっちも悪いという知

らせがありましたけ、これから、ちょっと、田舎に、帰って来ます」
「また、急なことじゃなあ。今からちゅうたって、汽車があるまい？」
「いいえ、終列車に、ちょうど、間に合います。……それじゃあ、どうぞ、留守を、よろしゅう……」
永田夫婦が、見舞と餞別とをやるつもりで、声をかけたが、マンは、逃げるように、深夜の奥に、去ってしまった。
時次郎は、マンが出て行くと、ランプを持って、階段を降りた。
源十や、二三の者も眼をさましていて、一緒に行こうとしかけたが、押しとどめた。子分連中は、暗闇（くらやみ）の中で、気づかわしげな顔を突きあわせている。
わざと、足音を高くして、寝室に近づいた。
「オヤジさん」
と、呼んでみた。
返事はなく、かすかな呻き声が聞える。
時次郎が入ると、ランプの明かりで、朦朧とした意識を呼びさまされたものか、引っくりかえっていた金五郎は、顔を、光の方へねじ向けた。青ざめた顔が、一杯に、水で濡れている。
うっすらと、眼をあけて、
「マンか？」
「大川です」
「時やんか？……咽喉が、乾いてたまらん。ラムネをくれ」
「ちょっと、待って下さい。貰うて来ますけ」
時次郎は、襖をしめて、部屋を出た。二階の踊り場のところにかたまって、下をのぞいている源十たちに、
「もう心配なことはないけ、寝なさい」そういいおいて、玄関から、表に出た。
深夜の町を、永田ラムネ屋へ、急ぎながら、
（どんなむずかしい仕事でも、暴力団でも、なぐりこみでも、火でも、矢玉でも、怖れたことのない、そして、負けたことのない玉井金五郎が、女房から、やられてしまった）
それを考えると、おかしくてならなかった。
大川時次郎の頭に、故郷での昔の出来事が浮かぶ。――専売局の役人が、狐に化かされたことである。横柄で、弱い者いじめを専門にしていた、好色漢の「鬼」が、或る日の夕暮どき、七瀬（ななせ）の水車小屋の中で、倒れていた。高門（たかかど）の武十旦（ぶじゅう）那が、虫の息で、這いだして来る「鬼」に出逢った。それから、村中の大評判になった。しかし、それは、実際は、狐に化かされたのではなくして、マンを手ごめにしようとして、遭難したものだ、という真相は、いつか、誰からも、知られるようになっていた。
父親の谷口善助も、それを知ってからは、
「村の娘ッ子どもも、おらがのマン坊に見ならえ」
などと、自慢する始末だった。
その、父から伝授された、「女の護身法」を、マンが、夫に対して、用いたのである。
（はげしい女じゃ）
時次郎は、おかしい気持が薄らぐと、マンが、怖くなって来た。マンを慕い、マンを嫁にしたい一心で、故郷を飛びだ

して来たのだが、もし、夫婦になったとしても、到底、マンが、自分の手に負える女ではない、と考えられるのである。
しかしながら、そう思う一面、
（ひょっとしたら、今度の事件で、マン坊は、玉井金五郎と別れる。そうしたら、おれと夫婦になれるかも知れん……？）
その、胸のどきつく美しい邪念は、執拗に、狡猾に、時次郎の胸の奥底に、くすぶっているのであった。
永田から貰って来たラムネを、おいしそうに、二本、つづけさまに、飲んだ金五郎は、ぐったりとなったように、眠ってしまった。
一時が、打った。
薬を買いに行くといって出たマンは、そのまま、朝まで、帰らなかった。

翌朝になると、大騒動である。家事万端が、子分連中の分業になる。
「将棋と料理なら、おれにまかしちょけ」
「ノロ甚」は、そんなことをいって、生来の緩慢な動作で、味噌汁を作り、大根おろしをこしらえた。飯炊きの役の源十が、竈に薪をくべ、道具番の清七は、七輪をおこして、目刺を焼く。「中学生」の俊次は、水汲み専門、流し元で、皿や茶碗を洗う。
時次郎は、箒を持って、家の中を掃く。
雨戸をめくっているのは、二十五になる、力自慢の城三次。
外の掃除をしているのは、「カマキリ」という綽名の、背のひょろ高い新谷勝太郎。二十七歳。
雑巾がけは、伝馬番の松本重雄。三十一歳。
竈の前にしゃがみ、くすぶる煙に、ぼろぼろ、涙を流しながら、火吹き竹を吹いている「六ゾロの源」は、大根をすっている「ノロ甚」に、話しかける。
「おい、甚公、あきれたのう」
「なにがや？」
「今、おれたちが、八人でやっとる仕事を、毎朝、姐さんが、一人で、やっとったんじゃで」
「そういえば、そうじゃなあ」
「これでも、まだ、前の晩から、米が磨いで、釜に仕掛けてあったり、味噌やら、豆腐やら、大根やらが、買うてあるもんじゃけ、楽なんじゃ。買いだしも姐さんの仕事、それから、洗濯、縫い物、ワラジ作り、そして、現場にも出る。……こりゃあ、大事ど」
「猫の餌も、やらにゃ、ならんしなあ」
「なんでもない、当りまえのことのように考えとったことでも、ぶっつかってみると、ほう、と思うようなことがあるもんじゃのう。姐さんは、八人力じゃないか」
「ボーシン、大発見をしたわい。こりゃあ、うちの姐さんだけじゃないばい。女房ちゅうもんは、どこの女房でも、みんな、これだけの仕事をしとるんじゃよ。おれたち、今は、みんな独身じゃが、いずれ、女房貰うじゃろうから、ようと考えとかにゃ、いけん」
「そして、女房を大切にして、オンテレ・メンピンになるか」
そんな話をしながら、笑い声がさんざめき、台所は賑やかだった。

「オヤジは？」
「まだ気分が悪いちゅうて、寝ちょる。――あんまり欲しゅうないけ、みんな、勝手に朝飯食べてくれ。味噌汁を一杯だけで、ええ。……ちゅうことじゃった」
俊次の運んで来た、やたら辛い、ダシの利いていない味噌汁を吸いながら、金五郎は、蒲団の中で、苦笑ばかりを浮かべつづけていた。
（おどけ芝居よりも、まだ、滑稽じゃ）
重大な生活と運命の高まりが、人間にとって、ぎりぎりの場所に来たとき、常に、その転換や、再生が、奇妙に、滑稽な形であらわれる。悲痛さとか、悲壮さとかいう、真実の歌声は、人に語ることの出来ないような、馬鹿げた場所で、人間を嘲笑しているものであろうか。悲劇か、喜劇か、誰も識別することは出来ない。
故郷の村にいたとき、のっぴきならぬ義理で、黒石家の養子に行ったことがある。夜毎、ヤスという、白痴の大女に悩まされて、遂に、逃げだした。女彫青師のお京からは、博多で一度、若松に来てから一度、挑まれたが、逃げた。そうして、今、自分の女房から、逃げられた。抱腹絶倒したい。しかし、口辺に浮かぶのは、歪んだ、苦い、声のない、うす笑いばかりだ。
（死んだら、どうするつもりじゃったのか？）
ほんとに、一時は、死ぬかと思ったのである。マンに、殺す気のあるわけはあるまいが、過失ということがある。
マンにしてみれば、経験者であり、すでに一種の熟練工でもあるから、死ぬ筈のないことを、計算しての所業であったろうが、金五郎には、そんなことはわからなかった。
（よく事情をたしかめもしないで、こんな無茶するなんて……）
これまで、心の底から、信じあい、マンに貞操を立てて来た金五郎としては、女房の誤解と、嫉妬による暴力行為が、糞面白くない。考えていると、次第に、腹が立って来て、
（マンの奴がその気なら、こっちも……）
と、反撥的に、危険な思考におちいって行くのだった。
「用があるなら、お京さんのところに行きなさい」
と、マンは、いった。
「行ってやろうか？」
声に出して、そういってみて、（どんなことになったって、知らんぞ）と、マンが、そこにいるかのように、力みかえる。
「緑屋」で、お京から責め立てられ、「それでも男か」と詰られて、右腕に降り龍を彫ることだけは、約束したのである。無論、彫青だけの接触だが、もうこうなったら、そのもう一つ奥の交際にまで、発展しないともかぎらない。くしゃくしゃしている金五郎の心に、悪魔が忍びこんで来た。
朝の光線が、障子窓いっぱいにさしている。今日もよい天気らしい。雀のさえずりが、台所にいる子分連中の騒ぎといっしょになって、にぎやかな交響楽を奏でる。
頭のしんが鈍くうずいて、重い。味噌汁椀を置いた金五郎は、枕元にあるラムネを飲もうと思って身体をねじ曲げた。その眼に、水色の一通の封書の落ちているのが映った。手をのばして、拾いあげた。
表に、「玉井マン殿へ」、裏には「飛鳥、森キミより」――

キミというのは、君香の本名である。すでに、封が切られてある。
金五郎は、不審の面持で、中の手紙を引きだしてみた。目読した。読み終って、
「なあんじゃ。そうか」
と、吐きだすように、呟いた。マンの行動の原因がわかったのである。
そうすると、今度は、こういう手紙をマンに書いた君香、そして、君香と同調しているにちがいない森新之助への憤りが、俄かに、金五郎の全身を燃え立たせた。
（こうまで、腐った心になっとろうとは、思わんじゃったが……）
門司以来、兄弟分として信頼しあって来た唯一の親友であったのに、訣別しなくてはならぬときが近づいたか？　――と、金五郎は、いいようもない寂寥感と、孤独感とにつつまれて、気が滅入った。
「オヤジさん、永田の親方がお見えになりました」
俊次が、取り次いで来た。
「今ごろになって、風邪を引いたそうじゃないか」
永田杢次が、にこにこ顔で、入って来た。ヨネと、息子の茂次平とが、後につづいている。
数日が、経った。
金五郎は、虚脱したような気持で、嘗て、経験したことのない、索漠とした毎日を過ごした。身体の調子は、すぐに恢復したので、仕事にも出たけれども、なにをやっても、まるで、張りあいがないのである。
マンのいない家の中は、あたかも、歯の抜けてしまった口のようだ。そして、それは、そのまま、金五郎の心に、似ていた。
なにもかもが、奇妙な風に、狂ってしまった。
（マンといっしょに、久しぶりに、故郷に帰って、道後の湯に、ゆっくり、入るつもりじゃったんじゃが……）
それも、もう、一人では、出かける気持にならなかった。
すると、腹立ちまぎれ、危険な考えが、頭をもたげる。
（四年前、お京とはじめて逢った道後の「四国屋」、そこへ、お京と二人で、行ってやろか。そして、右腕へ、降り龍を彫ってもらい、いっそ、ええ仲になってやろか）
近所の人たちが、訊く。
「このごろ、ごりょんさんを見かけんようですが、どげえしましたか？」
「広島の両親が悪いちゅうもんじゃけ、見舞にやりました」
そう答えれば、日ごろの仲のよさを知っているので、疑う者はなかった。誰も、途轍もない夫婦喧嘩をした揚句、マンが飛びだしたことなど、知る者はない。
「中学生」の俊次は、
「旭座の芝居を、観につれて行ってくれると、約束しとったのに……」
と、ふくれ面をしている。
子分連中は、一日だけで、家事をやることに、へこたれてしまった。マンのいなくなった当日は、面白半分、大騒ぎをして、八人分業でやってみたが、食事をすましたあと、大事業のあることを知った。

「食う支度をすることより、後かたづけが、大事じゃのう」
八人で食い散らした食卓の残骸を見て、うんざりした顔を、つきあわせるのである。残り物は、猫にやっても、よごれた茶碗、皿、鍋、釜、箸などを洗うことは、つまらなくて、大儀千万であった。
それに、仕事があるので、彼等が、毎日、こんなこともして居られない。すると、松川源十が、夜になって、にこにこしながら、一人の女をつれて来た。
「ええ女中を、雇うて来たぞ」
中肉中背、いかにも健康そうで、色の浅黒い、人のよさそうな、無口な女である。三崎組のボーシンの姪に当るとかで、やはり、女仲仕として働いていたという。田崎ジュン、二十六歳。
金五郎も、逢ってみて、
「マンが帰るまで、よろしゅう、頼むよ」
と、いった。

或る朝、金五郎は、吉田磯吉に逢うために、一人で、家を出た。「飛鳥」で、友田喜造から勧告されて、約束したのである。
底抜けの青空が、動かない白雲を、天に貼りつけている、風のない日である。もう夏が来たかと思われるように、歩いていると、全身が汗ばんだ。綿羽織が、重たい。下駄も、重たい。
金五郎の心も、重たかった。
手土産をなににしようかと思ったが、顔見知りの「魚勝」に寄って、鯛を二枚、揃えた。
「お使い物ですか？　お届けしときましょうか？」
気さくな「魚勝」が、そういったけれども、
「いや、自分で持って行く」
青笹を添えた鯛の皿を、風呂敷に包んで、ぶら下げた。
連歌町の角まで来たとき、うつろな気持で歩いていた金五郎は、
「やあ、玉井君じゃないか」
その声と同時に、突き飛ばされたかと思うほど、はげしく、肩をたたかれた。ふりかえって、
「品川さんですか。びっくりしましたよ」
「びっくりすることはあるまい。だが、君のように、ぼんやりして歩いとったら、いつ、敵に、ブスッと殺られるかも知れんぞ。この街は、物騒だからのう」
そういって、相手は、全身をゆすぶって、磊落に哄笑した。
「若松実業新聞」を独力で発行している、品川信健である。五十年配だが、若いころ、志を抱いて、朝鮮満洲を放浪した、大陸的な、利かぬ気と、闘志とが、てらてらと光る、酒好きらしい赤ら顔に、なお残っている。そういえば、まだ昼前なのに、もう、すこし飲んでいるようだった。
山高帽に八字髭、洋服姿の品川は、近くの者が、耳をそばだてるような、不遠慮な大声で、
「玉井君、君は、えらい。大いに、やりたまえ。大きな傘の中に入っとれば、雨には濡れん。それは、わかっとる。この若松では、吉田一派は、大きな傘というても、ええ。だが、雨にぬれても、曲った傘の中には入らん、というのが、男の

意地だ。雨にびしょ濡れになっても、正義のためには、なに厭(いと)わんや、だ」
「急いでいますから……」
「まあ、待ちたまえ。志を同じゅうする者は、席を同じゅうすべし――じゃないか。同志、玉井君、君が、弾圧と迫害の中で、若松港汽船積中頭組合を作るというて、奔走しとることを、壮としとるんだよ。僕は、経験があるんだ。この街では、吉田派の傘の外で、なにかをやろうとすることが、どんなに、困難か。……友田喜造が、君を脅迫したことも、聞いたよ。だが、やりたまえ。神は、正しき者を守るよ」
「失礼します」
居たたまれなくなった金五郎は、耳をおさえるようにして、そこを離れた。
「おうい、玉井君、ちょっと待て。まだ、話があるんだ」
その声にもかまわず、走るように、急いだ。
立ち話をしているときに、友田喜造の子分が、果物屋の店先で、耳を傾けている姿を見たのである。いや、この狭い街では、全町が耳であるといっても、過言ではない。品川信健もそれを知らない筈はないのだが、この豪放な新聞社々長は、つねに、自分を守る正義の神を、信じきっているもののようであった。
吉田邸の門前まで到着したときには、汗があふれて、軽い動悸が打っていた。ふりかえってみたが、品川は、後を追って来る様子はなかった。
格子戸を、開いた。
「おごめん下さい」
「おうい」
二三度、顔をあわせたことのある、玄関番が、出て来た。
「吉田の親分さんに、お目にかかりたいのですが……」
「おかしいなあ……？　玉井金五郎が、うちの親分に、用があるわけがないじゃないか。なんの因縁をつけに来たんじゃ？」
金五郎は、むっとしたが、腹の虫をおさえて、おだやかに、
「親分さんは、おいでではないのですか？」
「おいでにはなるが、お前さんなんかに、逢うわけがないよ」
「お取り次ぎを願います」
「わからん男じゃなあ。取り次いだって、無駄に定まっとるというのに……」
「わたしは、あなたに逢いに来たのではありません。吉田親分さんに、お目にかかりに参ったのですから、ともかく――玉井金五郎が来た。……と、お伝え下さい。親分さんが、逢わぬとおっしゃるのでしたら、帰ります」
「しつこいのう。そんなら、ちょっと、待っとれ」
「それから、これは、ほんの御挨拶の印で……」
金五郎がさし出した鯛の皿を、玄関番は、せせら笑う眼つきで見下したが、面倒くさそうに抱えあげて、奥に、入った。喧嘩の名残りか、跛(びっこ)を引いていて、右足の傷も刀痕らしい。色黒で、人相の悪い、「小猿の久八」という、五十男である。
間もなく、出て来た。憎々しげな語調で、
「おれのいうたとおりじゃよ。親分は、いわっしゃった――玉井金五郎が、なんの用で、おれに逢いに来るか。おれを殺しに来たんじゃないか。玉井なんちゅう奴の顔、見るのも、

いやじゃ。追い返してしまえ。……って。とっとと、帰れ」
「さよですか。そんなら、帰ります。どうぞ、親分さんによろしゅうに」
表に出た金五郎が、町角を曲りかけたとき、背後で、けたたましい呼び声が起った。
「ピス来い。ピス来い。ピス、ピス、ピス、ピス……」
ふりかえると、先刻の玄関番が、鯛をのせた皿を両手にかかえて、しきりに、呶鳴っている。そこは、吉田邸の裏口に当っていた。ごみため箱が置いてある。やがて、松林のある寺の方角から、一匹の犬が走って来た。茶褐色のたくましい土佐犬である。ピスというのは、その犬の名らしい。
「ほら、御馳走やるぞ」
「小猿の久八」は、魚を、犬に投げあたえた。大小二枚の新鮮な鯛は、生きているように、空間に躍り、鱗が太陽の光線にきらめいた。しかし、それも瞬間で、土の上に落ちた鯛は、犬の泥足に踏まれ、口に銜(くわ)えられた。ひろい皿が投げすてられ、大きな音を立てて、微塵に砕けた。
そういう動作が、すべて、金五郎への当てつけに行われたものであることは、一点の疑う余地がない。久八が、大声で、ピスを呼んだのも、わざわざ、金五郎へ聞えるように仕向けたのである。
しかし、金五郎は、なにもいわず、無言で、その場を去った。
(吉田磯吉という親分は、もうすこし、増しな侠客かと、思うて居ったんじゃが……)
腹立ちや、憎しみよりも、心の底から、軽侮の念だけが、湧くのだった。そうすると、心も軽くなって来る。相手が立派でないとわかれば、問題にするに足りないのである。解放されたような気持だ。口笛が吹きたい。
俄かに、軽い足どりになった金五郎は、「今ごろは、半七ッあん、どこに、どうして、ござろうぞ」と、口三味線で、義太夫を口吟みながら、「飛鳥」の方向へ、足を向けた。
森新之助の顔を見ると、金五郎は、仏頂面になって、
「新公、今日は、すこし、こみ入った話をしに来たんじゃ」
と、いった。
「そうか。こっちからも、こみ入った話がある。奥へ、来てくれ」
庭に面した六畳の部屋で、二人だけで、対した。どちらの顔も、緊張している。
「お京さんは、居らんかね?」
坐ると同時に、金五郎は、そう訊いた。
「その、お京のことで、すこし、金さんに、話しとかねばならんことが、出来たんじゃが……」
「聞かんでも、わかっちょる。とにかく、お京に逢わせてくれ」
「お京は、居らんよ」
「どこに行ったかね? どうせ、髪結いか、風呂か、稽古じゃろ? それとも、友田喜造のところか?……仕込みにでも、呼びにやってくれ。どうしても、お前の居る眼の前で、逢うとかにゃならんことが出来た」
「お京は、もう、この若松に居らん」
「なにや?」

さすがに、おどろいた。
新之助は、沈痛な面持で、
「さっき、お前に、こみ入った話があるというたのは、お京のことなんじゃが、……今日あたり、お前の家へ報告に行こうかと、考えとったんじゃ。お京は、おれが、頭を下げて、この若松から、出て貰うた。お京一人のために、あちこちに、面白うないいざこざが出来るんでは、困る。おれは、お京の前に、手をついたよ。お京に、頼んだ――あんたも辛かろうが、ここのところは、あんたが身を引いてくれさえすれば、方々が、丸くおさまる。もう、ここまで来たら、なにもかもが、さっぱり行くとは思われんけれど、あんたさえ居なければ、なんとか、辻褄のあわせようもある。すまんが、死んだと思うて……」
「そしたら……？」
「そしたら、お京は、げらげら笑いだしてな――ああ、おかし。たった女一匹のために、大親分、中親分、小親分、寄ってたかって大騒ぎ。面白かった。でも、もう、こんなけちくさい若松なんて、頼まれたって、居てやるもんか。……そんなことをいうてな。どこかへ行ってしもうたよ」
「それは、いつのことじゃ？」
「あの、仲直りの翌る朝よ」
「そうか」
金五郎は、腕組みして、複雑な苦笑をたたえていたが、
「新公、お前、お京のことで、友田喜造から、脅迫されたらしいな？」
「脅迫？……友田から？……そんなことはない」
「あの晩、おれとお京とが、途中から、居らんようになったもんじゃけ、大層、嚇(おど)かされたちゅうじゃないか――よくも、おれの顔に泥を塗ったな。おれが、お京を世話せえ、と、あれだけいうとったのに、お京と玉井とを逃がした。仲裁の恩を仇で返すとは、なにごとか。……ちゅうて」
「誰が、そんなことをいうんじゃ？　まったく、そんなことはないよ。友田は黙って、帰った。ひどい出鱈目をいう者が居るなあ……？」
「お前のおかみさんの手紙に、書いてあった」
「おれの女房の手紙？　キミが、お前に、手紙を書いた？」
「そうよ」
「おかしいのう。キミの奴は、おれに輪をかけた無学文盲で、自分の名の外は、一字も書けん女じゃよ。それが、手紙なんか、書くわけがないがなあ」
これには、金五郎もびっくりして、ふところから、持参して来た君香の手紙を取りだした。無言で、新之助に渡した。
目読していた新之助は、読み終ると、大きな吐息をついた。
「そうか。これで、なにもかも、わかったよ」
「やっぱり、おかみさんの字とちがうか？」
「ちがうも、ちがわんも、女房の字なんて、おりゃ見たことがない。これはな、染奴が書いたんじゃ」
「染奴？」
「うちの抱え芸者じゃが、あの翌る日に、急に、仕換(しか)えをするというて、「山根(やまね)」に変ったんで、妙なことに思うとった。こんな卑怯な芝居をしくさっとる」
「染奴が、なんで、こんな偽手紙を書くんじゃ？」

「お前に、惚れちょるからよ」
「おれに？」
「染奴の旦那は、友田喜造じゃが、友田は外に何人も、女がある。友田はけちけちしとるし、誰か、ええ旦那に鞍替えしようと、前から考えとった。その白羽の矢が、お前に立ったんじゃ。ところが、お前とお京との関係を知ったもんじゃけ、こんな芝居を仕組んだんじゃよ。それにちがわん。どうも、女ちゅうのは、色気に眼がくらむと、なにをするか、わからんのう」
「ふウン」金五郎も、ほとほと、あきれはてた顔つきで、「おれは、実は、今日は、この手紙のことで、お前と喧嘩する気で来たんじゃよ。おかみさんが書いたにしたところで、お前が知らん筈はないし、まかりちがえば、絶交するつもりじゃった」
「それで、おマンさんは、どうした？」
「飛びだしてしもうたよ」
「こんな手紙を見たら、なんぼ、お前を信用しとるおマンさんでも、腹を立てるわい」
「それというのが、お前のおかみさんを信用しとるからたい。……そういえば、おかみさんは？」
「友田喜造のところへ行った」
「なんで？」
「どうもこうも、困る。あの仲直り宴の費用が、途方ものう掛ったとに、友田が払うてくれん。キミがお百度を踏んどるが、知らん、ちゅうんじゃ。もともと、友田からの話で、指図（さしず）どおりにしたんじゃけ、友田がすっかり勘定してくれるもんと思うとったら――仲裁をしてやっただけでも、ありがとう思え。飲み食いの跡始末まで、知ったことか。……なんて、いう。あれだけの宴会をして、一銭も取れなんだら、おれの店はつぶれるよ」
「そんなことか。友田のいいそうなことじゃわい。もともとは、おれから出たこと、お前に迷惑をかけてはいけん。おれが、なんとかしよう。いっぺんには払えんが、……なんぼ、掛った？」
「いや、お前から出して貰うことはない。仲裁役が全部を見るのが、やくざの仁義じゃないか。友田もこの町では名うての顔役じゃ。なんとかして、友田から出させるよ」
新之助は、口で、そんな強いことをいっているけれども、それがきわめて困難事で、或いは不可能に近いかも知れぬということは、自身でよくわかっているのであった。
夕暮、玉井家では、晩餐がはじまっていた。明日は、早朝から、聯合組の大仕事、アメリカ航路のメキシコ丸の焚料（バンカ）炭、三百トン積込み荷役を控えて、前景気に、金五郎中心に、一杯、飲んでいた。
女中のジュンが、甲斐々々しく立ち働いている。けれども、肝腎のマンがいない家は、妙に、気抜けしたようだ。
にぎやかに談笑していると、玄関を訪れる者があった。時次郎が、出て行くと、着流しに、ふところ手をした大男が、にゅうっと立っている。
「吉田磯吉じゃがなあ、玉井君は居るな？」
時次郎は、青くなって、晩餐の席に、飛びかえって来た。団栗眼（どんぐりめ）をむいて、声をひそめ、

「オヤジ、大事(おおごと)じゃ」
「なにを、あわてちょるとかい？　お客は、誰な？」
「吉田磯吉が、仕掛けて来た」
「吉田親分？」
金五郎も、不審の眉を寄せて、緊張の面持になった。盃を置いて、坐りなおした。
「玄関に、ニュッと立って、オヤジは居らんか、って、訊くんですよ」
「吉田親分が？……一人で？……」
「うん」
「人ちがいじゃないか？」
「自分で、名乗りました。玄関に居るのは、吉田磯吉だけじゃが、表に、誰か、何人も居るようにあった」
「オヤジ」と、松川源十が、「あんた、出らん方が、ええ。おれが出てみる」
「待て」金五郎は、もう立ちかける源十を、押し止めた。「おれが、出る。……お前たち、来ること、ならんぞ。声も立てるな」
金五郎は、身づくろいをし、通路の板戸を閉めきって、静かに、玄関に出た。
無造作な懐手(ふところで)の恰好で、鴨居に吊るしてある提灯や、帳場の壁に貼った、子分連中の勤怠表(きんたいひょう)などを、のんきそうに、眺めまわしていた吉田磯吉は、金五郎を見ると、
「やあ、玉井君、久しぶりじゃのう」
ぶっきらぼうではあるが、どこかに、親しみの感じられる調子で、いった。

それが、かえって気味悪く、金五郎の方は、警戒心を、いよいよ、厳にした。この街で、「吉田天皇」という者さえある、大親分の吉田磯吉が、なにかと対立している玉井組の牙城へ、先方から、予告もなしに訪れて来ることも変であるし、たった一人というのは、なお、おかしい。
油断をさせるためかも知れない、と思い、金五郎は、それとなく、表の気配に、注意した。黄昏(たそがれ)の薄明の中に、石ころの多い狭い道路が、白々と、ひろがって、わずかの風に、溝縁(みぞぶち)の雑草がゆらいでいる。しかし、金五郎の鋭い眼は、表格子の戸袋のかげになっているところに、誰かの潜んでいることを見逃がさなかった。
（懐手をしているが、ピストルか、匕首(あいくち)かを忍ばせているのかも知れん……？）
いつかは一度、来なければならぬ最後の対決のときが来たという緊迫感で、金五郎は、武者ぶるいして来た。中腰になっていたが、いつでも、機敏に、跳躍出来るように、全身をバネ仕掛けにした。
両子の三つ指を、畳のうえに、軽くついて、
「よう、お出で下さいました。わたくしに、なにか、御用で？……」
「うん、ちょっと、君に逢いたいと思うてな」
「おあがり下さいませんか」
「ここで、ええ。……玉井君、今日、家(うち)へ来てくれたちなあ……」
金五郎は、おどろいて、
「あなたに、取り次いで貰うた筈ですが……？」

「いんや、おりゃ、なあも知らん。後で聞いて、すまんことしたと思うたもんじゃけ。ぶらっと、出かけて来た。玄関番の小猿が、おれに知らせんで、なんか、勝手にふるもうたらしいわい。まあ、怒らんでくれ。玉井君、おれのところにゃ、いろんな者が転げこんで来るんじゃよ。端の者は、いつも、――大将、もう、あんまり、世話の仕甲斐のない者を、相手にしなさんな。……ちゅうけんどな、そんな奴は、おれでも面倒見てやらにゃ、誰も、うてあわん。いうてみりゃ、おれは人間の反古籠のようなつもりで、居るとたい。そりゃ、ええけんども、今度みたよに、忠義ぶって、お客に失礼することがあるもんじゃけ、困る。玉井君、悪う思わんでくれ」

「わかりました」

「「飛鳥」にも行くつもりじゃったけど、行けんで、残念じゃったよ。どうも、胃の具合が悪うてかなわん。腹を切らにゃなるまいかと、思うちょる。……そういやあ、「飛鳥」のときに、お祝いを持って行こうと思うちょったのに、不精しとった。森君にも、君から、よろしゅういうといてくれると、ええ。……おうい」

吉田磯吉は、表に向かって声をかけた。応じる声がして、中年の俥ひきが、朱塗りの魚桶を、重そうにかかえて人づて来た。さっき、金五郎が誰か戸袋のかげに潜んでいると思ったのは、この俥ひきらしく、そこには、人力車も待たせてある様子だ。

水引と慰斗とをかけた桶の中には、青笹を蒲団に、巨大な赤鯛が二尾、イセエビが一匹、鯛の肌のうえには、「祝儀」の二字を太い筆でかいた奉書包み、それには、少からぬ紙幣束が入っているらしく、厚くふくらんでいる。さらに、一斗樽が運ばれた。

俥ひきが、玄関の框に、それらを置くのを、当惑した金五郎が、言葉もなく眺めていると、

「玉井君、そのうち、ゆっくり、遊びに来ない」

ぶっきらぼうに、そういった吉田磯吉は、俥ひきをうながして、表に出た。俥に乗った気配がし、もう暗くなった黄昏の道を、プッ、プウッ、と、ラッパの音が遠ざかって行った。

魚のにおいをかぎつけて、早速、猫が何匹もやって来た。それを追い散らしてから、金五郎は、端坐して、魚桶の前に腕組みしたまま、しばらく、動かなかった。

（世の中は、むずかしい）

四年前のことが、思いだされた。彦島の病院に、袋だたきされた森新之助が入院していたとき、吉田磯吉が見舞をくれたことがある。そのときと似たような感慨が、金五郎の厚い胸を領した。

――人間と人間との関係の複雑さ、結びつきや、つながりの深さ、浅さ、その溝や谷、食いちがう歯車、敵と味方という危険な想念、理解と誤解との生む修羅――そして、こういうものが、時間の流れを背景にして、死と生とを交錯させながら、織りなして行く運命の劇。思えば、人生は多端で、前途は多難である。

（それにしても）と、金五郎は、思う。（――それにしても、やっぱり、吉田磯吉は、ええとこがある。大きいところがある）

そして金五郎は、まだ、自分の人生勉強の足りなさを、唇

を噛んで、強く、反省するのであった。

命

あたしゃ、仲仕で、
半纏育ち
長い着物にゃ、
縁がない……

澄んだ張りのあるよい声で、「ゴンゾ唄」を歌っているのは、女仲仕の原田タネである。

メキシコ丸の舷側に、棚が吊られ、雛壇式の天狗取り荷役が、調子よく、つづけられている。その作業の動作に合わせ、はずみをつけるように、タネは、艀の中で、入れ鍬をしながら、仲仕歌をうたう。

かっと照りつける太陽に、汽船の鉄板からは陽炎が立ち、仲仕たちは汗みどろである。洞海湾内の水は青く、浮標を拠点にして、数十羽のカモメが魚をねらって、群れ飛んでいる。ときどき、海面にボラがはねる。

タネが一くさり歌い終ると、待っていたように、艀の船頭が、銅鑼声をはりあげて歌いだした。

沖のゴンゾが
人間ならば、
蝶々トンボも
鳥のうち……

「こン畜生」

棚に立っている「六ゾロの源」が、舳にしゃがんで、帆の修繕をしているその船頭を、団栗眼をむいてにらみつけた。

それから、歌いだす。

船は破れ船、
船頭は片目、
艫の垢引きゃ、
カサ頭

船頭の息子らしく、十二三の男の子が、竹ポンプで、しきりに、艀にたまった垢水を汲みあげている。鉢のあいた頭いっぱいに、吹き出ものがしていて、それに、蝿が四五匹、とまったまま動かない。

仲仕たちはげらげら笑う。子供はなんで大人たちが笑っているのかわからないが、ふりかえって、きょろきょろしながら、自分も笑った。また、どっと、新たな哄笑。

船頭は、いまいましげに、しかし、心から怒っているわけでなく、自分も笑いながら、また、仲仕をからかう文句を歌ってやりかえす。仲仕の方も負けずに、今度は船頭の女房を槍玉にあげる。メキシコ丸の連中が、船橋や甲板の上で、面白そうに聞いている。

「おいおい、お前たち、そんな歌喧嘩すんなよ」

舷の欄干から、上半身をのぞかせて、金五郎が呶鳴った。にこにこしている。

「そんなら、オヤジのを、いっちょ、聞かせてくれえ」

城三次が、棚の下段からあおむいて声をかけた。

「よし、歌うぞ」

金五郎は、機嫌がよい。

若松みなとの
ゴンゾは花よ、

粋な手さばき
日本一……

どっと起る歓声と、拍手。笑い声。石炭がばらばらと飛ぶ。金五郎は、なお、つづける。

雛壇の上に、ならんで立っている甚七と、清七とが、港内の一点に視線を集めて、低い声で話している。

「あの梅丸には、ドテラ婆の組が来ちょるが、角助は見えんようにあるのう？」

「甚公、お前、知らんのけ？　角助は、バクチで、小倉監獄にかまうとるぞな。もし」

「へえン、それで、このごろ見んと思うた。ドテラ婆に、うちのオヤジを殺すことを請負うちょったそうなが、……」

「そらそうと、時やんは、姐さんを迎えに行くちゅうて、広島に帰んだが、うまいこと、つれて戻りきるじゃろか？」

「オヤジも、危いことをするなあ。時やんは、昔から、姐さんに惚れとったとじゃろ？　姐さんと夫婦になりたいばっかりに、村を飛びだして、尋ねて来たとじゃろ？　その時やんを、迎えにやるなんて……」

「時やんが、自分で行くというたんぞな」

「なお、危いじゃないか」

「オヤジには、小いときから、そがいな胆の切れるところがあったのはあった。わしらには出来んことぞな」

「おれが知っとるが、時やんは、いつか、こんなときの来るのを、待ちかまえとったんじゃ。……帰るかなあ……？」

二人は、この内憂外患のときにのんきたらしく、上機嫌で、「ゴンゾ唄」などを歌っている金五郎が、不思議でたまらなかった。

高塔山の頂上の、乗りあげた軍艦のような松林のかげに、真紅の夕焼をきらめかせて、太陽が沈んだ。暗くなってしまわないうちに、メキシコ丸の荷役も終った。

道具をかたづけ、全員、二隻の伝馬船に分乗して、聯合組のある若松側岸壁に引きあげた。

金五郎は、事務所に入って、荷役終了を告げ、掛けられてある「玉井組」の番札を、後に下げた。

海岸にある「玉井組詰所」では、「小使」と称する賃銀の内金を、松本重雄が子分連中に渡している。勘定は半月毎にすることになっていて、仕事のあった日は、帰りに、夫婦者は三十銭、独身者は二十銭、内渡しするのである。

帳面方、兼会計は、大川時次郎であるが、留守なので、松本が代行している。

「頼む。今日だけ、三十銭」

酒好きの城三次がねだる。

「今日だけとはなんかい。毎日じゃないか。あんまり安酒は飲まんがええで」

「女に振られたけ、やけ酒じゃよ」

「飲みすぎるから、嫌われるとよ。……ほんとに、今日だけばい」

後に、松川源十の後をうけて、玉井組のボーシンになった松本重雄は、しっかりしているところがあった。

それぞれの文句をいいながら、子分連中はにぎやかに帰って行く。途中、露店や、おでん屋、居酒屋などに寄る者が多い。彼等の楽しみは、なにより、「角打ち」だ。桝の角から、

キュウッと、冷酒を一息に飲むことである。
金五郎は、荷役の監督をする甲板番の労をねぎらおうと思った。
「副島さん、ちょっと、そこらへ行きましょう。簡単に、晩飯でも……」
「ああ、つきあおう」
二人が事務所を出ようとしたとき、老小使が金五郎を呼びに来た。だいぶ前から、客が来て、裏で待っているという。
金五郎は、「ちょっと」と、副島にいいおいて、裏に廻った。幇間の胡蝶屋豆八であった。
「豆八ッあんか。誰かと思うた。なんごとじゃね？」
「大将、これをごらん下すって」
あたりをはばかって、豆八がとりだした一枚の紙片を、ランプの光で黙読した。
「金五郎さん、京は待っています。きっと、あなたが約束を果して下さることを信じます。京の命は今はこの一ことだけにつながっています。豆八さんに聞いて下されば、いつでも妾と連絡がつきます。京より」
「わからしゃったか？」
「うん」
「それでは……」
日ごろの剽軽に似あわず、深刻めいた顔付の豆八は、紙片をくるくると丸めると、ランプの火に投じた。秘密の手紙は燃えた。
副島甲板番が、ビフテキでビールが飲みたいというので、山手通にある「突貫亭」に行った。豆八も帯同した。
高塔山の麓、近くに白山神社のある高台に、鹿鳴館張り、青ペンキ塗りのハイカラな木造洋館がある。アーチ作りの門にかけられた看板が、ガス燈の光で「最新式高等西洋料理店・突貫亭」と読まれる。大広間には、ガスとともに、電燈も引かれている。まわりには、深い竹林や、鬱蒼とした大樹の森があって、夜になると、フクロウが鳴き、ときには狐や狸も出没する。
「いらっしゃアい。御新来、お三人さあん」
白エプロンの若い女給が、歌うような声で迎えて、金五郎たちを大広間の一隅にみちびいた。
テーブルの椅子に腰をおろすと、副島はチョビ髭をひねりながら、
「やあ、お歴々が来とるなあ」
と、部屋中を見まわした。
畳敷にすれば、六十枚以上も敷けそうな板の間に、幾組もテーブルが置いてある。一番奥では、三十人ばかりの宴会がひらかれている。仕切りとは名ばかりの低い衝立が立ててあるきりなので、客は丸見えだ。賑やかに談笑している。
金五郎は、仕事関係以外、まだ、よく、この街の人を知らなかったので、訊いてみた。
「副島さん、お歴々というのはどなたですか？」
「なにが、今夜、あっとるのかな？　町会議員の顔が、仰山、見えるが。……蒲瀬町長も来とる。小田助役、石井収入役も居るな。……玉井君、あれが、佐藤慶太郎氏だよ。炭鉱をいくつも持っとる大金持だ。……その右手のが、安川敬一郎氏、安川財閥の御大。……それから、右に、順々に、帆足市右衛

門氏、瓜生徳平氏、大貝潜太郎氏、石崎敏行氏、……」若松生えぬきの副島は、よく土地の名士を知っていて、一人のこらず、金五郎に教え、「築港会社の田中さんも居るし、……役場で、昼間、市制施行についての懇談会でも、やったのかも知れん」

運ばれて来たビフテキ、トンカツ、エビフライなどを、馴れぬナイフとフォークで切りながら、ビールを飲んだ。

「玉井君」酔って来た副島は、いくらか、からかい気味の語調で、「君も、ひとつ、町会議員にならんかい？」

「とんでもない。わたしらのようなゴンゾが、そんなこと、考えただけでも罰があたりますよ」

「罰？　なんの罰が？　たれが罰をあてるんだね？　僕はいつも考えるんだよ。この若松は石炭の街だから、石炭仲仕の代表が、町会に出る必要がある。聯合組の重役では、田中光徳親分などが出たい意向があるんだが、ほんとに、石炭の中で、まっ黒になって働いとる君たちの中から、誰か出にゃいかん。それには君が持ってこいだよ」

「いやです」

高台になっているので、窓から、若松の街が一望である。金五郎はコップを口につけ、苦いビールの泡を噛みながら、光の少い若松の街を、感慨をこめた眸で見おろした。

（とうとう、若松に、腰を据えることになってしまった）

運命の不可思議さを、今さらのように、考えずには居られなかった。

テーブルには幾組も客があったが、そのどれからかの声が、ふと、金五郎の耳をそば立てさせた。

「玉井の奴が、組合を作ろうたって、出来るわけがないよ。それに、うちの親分から嚇かされて、釘を刺されちょるけ、作りきりゃせん」

それが、金五郎のいることを知っての、聞えよがしであることは明瞭だった。

二つほど間を置いたテーブルに、五六人の客が、金五郎たちの入って来る前から、洋食をつつきながら、ウィスキーを飲んでいた。芸者が二人まじっている。言葉を発した筒っぽ袖の男は、金五郎に背を向けていたので、誰かわからなかった。けれども、それが、友田喜造のいる共働組の誰かであることは、容易に想像された。

金五郎は、その席にいる芸者の一人の顔を、見たことがあるように思った。

（染奴だ）

と、すぐに気づいた。

「なんぼ、玉井が謀叛人ちゅうたって、命は惜しいにちがわんからなあ。うちの親分に楯ついて、組合作ったら、どげなことになるか、玉井が一番よう知っとろうだい」

筒袖の男は、まだ、つづけている。

「大将、出ましょう」

いたたまらなくなったように、胡蝶屋豆八が、金五郎の耳にささやいた。

「うん」

女給を呼んで、勘定を払った。もう千鳥足になっているデッキ番を支えながら、その部屋を出た。背後に、男と女と入りまじって、爆発するように、嘲るように、けたたましく、笑う声

が聞えた。
「突貫亭」を出た。門のガス燈が青白く、あたりは霧でもかけているように霞んでいる。裏の森で、フクロウがしきりに鳴いている。港の方で、汽船の汽笛が聞える。
副島がまだ飲み足らぬらしいので、豆八に、「飛鳥」に一緒に行って、二次会をするようにいいつけた。
「大将はお帰りになるとですか？」
「今日はくたぶれたから、あんたに、万事まかせる。新公によろしゅういうておくれ」
金五郎が歩きだすと、豆八は追いすがって来た。
「大将、お京さんに、なにか、言づけは？……」
金五郎はそれには答えず、すたすたと、その場を去った。
家に帰ると、女中のジュンが、一通の封書を持って来た。マン宛の書留郵便である。差出人を見ると、「福岡県遠賀郡戸畑町字牧山、石川二右衛門」――まるで心当りのない奇妙な名だ。
金五郎は、開封して見た。
「拝啓、イツゾヤ拝借ノ金、ヨウヤク都合ツキタルニツキ、返却仕候。長々ト有難ク、御礼申シ上候、泥棒ヨリ」
文面は簡単で、六円の小為替が同封してある。
金五郎は、笑いだした。あんまり笑いすぎて、涙が出た。
昨年の秋、彼が武蔵温泉に行った留守宅に、侵入して来たおかしな泥棒の話は、マンから聞かされていた。そのときも、笑いが止まらなかったが、今、その泥棒が金を送りかえして来たことを知って、金五郎は抱腹絶倒したのである。
（立派な泥棒じゃ）

この日ごろ、むしゃくしゃすることばかり続いて、憂鬱でならなかった金五郎の心に、パッと窓が開き、カッと明かるい光線がさしこんで来たような、愉快さであった。石川二右衛門――その名も洒落れている。為替を組むためには、名が必要なので、偽名を使ったのであろうが、五右衛門から三右衛門少いところが面白い。
すると、金五郎は、急に、忘れていた大事なことに気づいた。
（おれも、松山の親父に、三十円かえさなくちゃならん。明日、早速、送ろう）
そう思って、心が晴れ晴れした。

それから数日後、奇妙な事件が起った。
染奴が、或る夜、お座敷の帰りに、何者かのために、ザンギリ頭にされてしまったのである。丸坊主にされたわけではなかったけれども、鋭利な刃物で、黒髪を、ほとんど根元から、全面的に、切り取られた。染奴は、「飛鳥」から「山根」に仕換えして、相変らず、友田喜造と関係をつづけていたが、その夜は友田と逢ったのではなかった。三菱の宴会によばれたのである。
振袖の袂で、御高祖頭巾のように頭と顔をつつみ、けたたましく泣き喚きながら、「山根」に走り帰って来た染奴を、誰も、はじめは、発狂したのではないかと疑った。
「染ちゃん、どうしたのよ？」
女将をはじめ、おどろいて、居あわせた者が、寄ってたかってなだめすかすけれども、半狂乱の染奴は、畳のうえを、

断末魔の芋虫のように、ころがりまわって、泣き叫ぶことを止めなかった。手がつけられない。
やがて、染奴の頭が、不様なザンギリになっていることを知って、あらためて、みんなは仰天した。
「誰が、こんなことをしたの？　染ちゃん、わけをお話しよ」
まっ青になった女将は、自分も染奴について泣きだしながら、しきりと、この恐しい出来事の顛末を聞きたがった。
「畜生、……鬼、……鬼、……」
染奴は、泣きじゃくりながら、囈言のように、そんなことを口走るばかりである。
「誰が畜生なの？　誰が鬼なの？　さあ、話して……」
並みいる者は、こういう無残なことを、誰が、どういう理由でしたのか、知りたがった。
ところが、染奴は、どんなに問いつめられてもそれを語らない。その夜は、すぐに寝てしまい、朝まで、蒲団の中で泣いていたが、朝になってからでも、彼女が犯人を明らかにせぬ態度は変らなかった。頑強である。警察沙汰にまでなって、刑事が調べに来たけれども、犯人のことになると、染奴はただ――誰か、自分にもわからない。ほろ酔いで、帰る途中、家並の切れた寂しい場所で、いきなり、暗闇から飛びだした者が、短刀で、こんなことをして逃げたのだ。……そういう風にいうだけで、後は泣く一方である。
「痴漢のしわざらしいな」
刑事は、したりげに、うなずいた。警察官も、なにか恨みを含む者の復讐的行為ではないか、という疑念が湧かぬでもないらしかったが、その犯人が、女であると考えた者はないようである。
女のもっとも大切な黒髪を奪うことによって、染奴に制裁を加えたのが、外ならぬお京であることに、うすうす気づいたのは、新之助夫婦、金五郎、胡蝶屋豆八、くらいにすぎなかった。
染奴は、命が惜しいので、絶対に、犯人がお京であることを、口に出さない。そのとき、お京から脅迫された言葉は恐しい。
「染奴さん、あたしは約束したことは、実行することが好きな女よ。蛭子神社の境内で、あれだけいっておいたのに、あんたは裏切ったのね。おまけに、血迷って、玉井さんのおかみさんに、偽手紙を書くなんて。……今夜は、髪だけで、勘弁してあげるけど、このことをあたしがしたなんて、一言でもしゃべってごらん。そのときこそ、ほんとに、命がないとお思い。「蝶々牡丹のお京」は、一度いったことは、ちゃんと守るのが大好きさ」
その後、お京の行方は杳として知れない。

三つになる娘の百合香に、可愛い洋服を着せ、君香が手を引いて、玉井家を訪れて来た。
金五郎の顔を見るなり、
「おマンはんは、まだ、帰って来やはらんのだッか？」
「もう、帰らんかも知れんよ」
「そないなこた、あらしよまいけど、……すみまへん」
「あんたが謝ることはない」
「染奴て、無茶しよる。……そらそうと、昨夜から今朝にか

けて、えらい騒ぎや」
「なんで？」
　このときは、まだ、金五郎は斬髪事件を知らなかったので聞きかえした。
　君香は、ひととおり、輪郭を話して、ため息をつくように、
「そんな思いきったことするのは、お京はんに定まったる。お京はんとしては、無理あらへんやろ。そやけど、やっぱ、困るのは結局はこっちや」
「友田から、なんか、苦情でもいうて来たのかね？」
「染奴は、誰からされたともいわへんらしけど、友田は、あての方に、因縁つけて来よるのや。理窟も屁ったくれもない、横車やよってに、なんぼ、理を詰めた話したかてあかへん。友田の子分で、「山犬の松」とかいう、すごいのがやって来て――小指を切って、詫びを入れるなら、こらえてやるが、そやなかったら、今すぐ染奴の髪をもとのとおりにしてかえせ。……そないなことをいう。どっちも聞かなんだら、なぐりこみを掛けるぞと、いわんばっかりや。――仲直りの勘定も払わんといて、よう、そんな理不尽なことがいえるもんじゃ、いやはって、新さんは歯を食いしばって、泣きよった。……金さん、ほんまに、この百合香が居るばっかりに、新さんはこらえたんやで。そいで、涙をのんで、小指切って、ここんところは、一時、おさめる覚悟定めたんや」
「馬鹿な」金五郎はびっくりして、「それで、指切って出したのか？」
「すんでのところを、切らんですみました。花田準造親分が友田をおさえてくれはったらしゅうて……」
　吉田磯吉が、自分は人間の反古籠をもって任じている、といった言葉を、金五郎は思いだした。友田や花田などの錚々たる子分が、反古であるわけはないが、少くとも、雑種であることは間違いないらしい。親の心、子知らず、というのであろうか。花田準造は江木弥作親分から乞いうけて貰った子分といえば、一種の外様大名だ。譜代大名である友田喜造とは、なにかと暗流を衝突させているのかも知れない。しかし、その軋轢が、はからずも、森新之助には幸したわけである。仲直り宴の経費で、倒れるかと心配していたのに、吉田磯吉が金五郎のところへ届けてくれた祝儀で、急場を凌ぐことが出来た。二つの偶然が新之助を救ったことになるのだが、それが、敵か味方か、判じかねるものからの結果なので、狐につままれたような気持から抜けきれなかった。
　それは金五郎とても同様だ。
（無用の闘争に、巻きこまれないようにしなくてはならぬ）
と、いよいよ、警戒心が湧くのである。
　君香は、「この街が、なんや、怖うなった」といい、あどけない無心の百合香に頬ずりしながら、ぽろぽろと涙を流した。そして、
「おマンはんも、今年は赤ちゃんが出来はるのやろ？　つまらん意地なんか捨てて、早よ呼び戻したがええのになあ」
　姉のように、金五郎を諭して、帰って行った。
　二ヶ月ほどが過ぎ、真夏のころになって、ようやく金五郎の努力は実を結んだ。「若松港汽船積小頭組合」の発会式まで、どうにか漕ぎつけることが出来たのである。

とはいっても、その組合は完全なものではなかった。はじめから強力に反対し通していた友田喜造の共働組からは、一人の参加者もないうえに、栄盛組、大高組、三井物産、その他の中にも、加入しない小頭があった。それは、友田に気がねする者、組合の外にあって仕事を狙う野心家、組合の必要性に、まったく理解と関心とを持たない無知な者、などであったが、聯合組自体の中にすら、新参者である玉井金五郎の擡頭を快く思わず、そっぽを向く者があった。しかしながら、曲りなりにも出来た小頭組合は、これまでは無統制の強い者勝ち、馬賊と海賊との修羅場に似ていた若松港湾の石炭荷役に、一つの秩序と規律とをあたえる基礎となったのである。

もっとも金五郎を支持してくれた大庭春吉は、結成式をあげる段取りになったことを聞くと、蛭子顔でよろこんだ。

「お前を見こんだおれの眼は、狂わんじゃったのう。お前は、これからは、聯合組だけでのうて、若松港の大黒柱じゃ」

しかし、その言葉を聞いても、金五郎は、浮かぬ顔つきをしていた。

（女房が、組合を作ることに、一番、熱心に賛成しとったんじゃが……）

マンは泣いてよろこぶかも知れない。そのマンがいないことが、金五郎にはさびしくてならなかった。マンが逃げてから、なにをしても張りあいがなくなっていたが、精魂を打ちこんだ筈の組合がやっと出来あがっても、妙につまらぬ感じがしてならないのである。

大庭春吉には、そんな金五郎の気持などはわからないので、なおも、

「これからも、頑張ってくれ。どうで、お前が組合長に就任するとじゃろうけ、お前の力で、この喧嘩港を平和な模範港にしてくれ」

と、いうのであった。

「とんでもありません。わたしの小さい力では、とてもそんな大仕事は出来ません。皆さんと力を合わせて努めるだけです。それに、組合が出来たら、わたしなどのような若造は引っこんで、先輩の年功の方に、組合長になって貰います。わたしは平組合員で結構です」

幾度も準備世話人会が開かれた結果、聯合組の古参小頭、進藤利三が組合長に決定した。金五郎は、責任ある位置につくことを堅く固辞したけれども、満場の推挙で、副組合長の役に据えられた。

小頭組合発会式の報を聞いた友田喜造は、

「ふン、半年もつづいたら、お目にかからんよ」

と、せせら笑ったということであった。

品川信健が、「若松実業新聞」の社説で、金五郎を賞讃した。漢学をやったという筆者の論調は激越で、これを読んだ金五郎を当惑させた。

「暴力をもって、正業の人士を扼す。それ何ぞ、鬼畜に類するや。正義の徒、断乎、起つべし。最後の勝利は、吾にあり」

「吉田一派の弾圧と迫害とに屈せず、遂に小頭組合を結成せる玉井金五郎君に、満腔の拍手を送る。吾、彼に一個の英雄を見たり。百万人といえども行かんの気概、壮とせざるべけんや」

「同志よ、暗黒の中に、炬火をかかげたる玉井金五郎の後に

続け」
そんな文句があって、金五郎は、顔が赤らんだ。（勇ましい社長さんじゃ）と思い、自分のことよりも、品川信健の身の上が案じられた。

快晴の日を選んで、中ノ島に伝馬船の洗濯に出かけた。
朝食のとき、
「今日は、伝馬タデに行くぞ」
金五郎がそういうと、子分連中は、ワアッと子供のように、歓声をあげてよろこんだ。
伝馬船は長くそのままにして置くと、船底の外部に、貝殻や、青苔がくっついて、船足が重くなる。おまけに、船板が痛んで、腐りが早い。それで、ときどき、陸に引きあげて、船の裏をきれいにこそぎ落し、火をたいて焙（あぶ）る。これを方言で、「たでる」というが、仕事休みの日を利用して行われる。この「伝馬タデ」は、仲仕たちにとって、遠足のように、楽しいものであった。弁当がけ、酒肴持ちで、景色のよい浜辺に出かけるからである。
金五郎を隊長に、女仲仕もまじえて、十四五人、「玉井組」と彫りこんである大伝馬船二隻、小伝馬二隻に、それぞれ分乗して、聯合組岸壁の桟橋から、中ノ島に向かって漕ぎだした。洞海湾（どうかいわん）の入口、若松と戸畑に挟まっている中ノ島に着くと、早速、乗って来た伝馬船を、渚から白砂の浜に、引きあげた。たでた。
四隻ともよく船裏を磨き、火で焙（あぶ）って、コールタールを塗ると、仕事は終りである。あとは、泳ぐ者、魚を釣る者、干潟で、マテやアサリ貝を取る者、酒をのむ者、寝ころぶ者、など勝手放題、ゆるやかな波がよせてはかえす島の海岸で、時間をすごした。
褌ひとつで、金五郎は泳いだ。沖合に出て、左手の蓊鬱（おうつ）と繁茂している中ノ島の大樹と、右手に望まれる緑屋の二階座敷とを見くらべながら、奇妙な感慨に浸っていた。
（あそこの二階で、お京と話をしながら、島の樹が風に鳴っているのを聞いたんじゃが、……その晩から、マンは居らんようになってしもうた。お京も、どこかへ行った）
そして、海水に洗われる左腕の青い龍と、その前肢の菊の花とを眺めて、さびしいような、腹立たしいような、滑稽のような気持で、波に浮いていると、すぐ耳のそばで、
「オヤジ」と、呼ぶ声が聞えた。
ふりかえると、谷口林助である。あまり水練の達者でない林助は、伝馬の船板をブイにして、浮いている。それで、金五郎のところへ泳ぎ寄って来たらしい。金五郎が微笑を返すと、
「わしに、四五日、暇をおくれんか？」
「どうして？」
「おマンを、わしが呼び返しに行って来ようかと思う」
「それなら、放（ほ）っちょいてくれ」
「妹からの手紙によると、親父やお袋はもう大したこともないようにある。薪（まき）が飛んで、親父は片眼はまるきり見えんようになったらしいけんど、片方が大丈夫じゃけ――眼は一つありゃええ、なんて、元気でいうとるらしい。そんなら、もう、おマンも帰って来りゃええのに、あれから三ヶ月にもな

るとに戻ろうとせんし、……」
「時やんが、つれて帰るよ」
「それが、オヤジ、変じゃよ。時やんは、村に帰っちゃ居らんらしいで」
「そんな筈があるもんか」
「それでも、マンの手紙に、そう書いてある。それで、わしが帰んで来ようかと考えたわけじゃが……」
「要らんお世話」
　投げつけるように叫んだ金五郎は、くるりと身体を廻すと、急に、はげしく抜き手を切って、沖に向かって泳ぎはじめた。
　ぐんぐんと、沖合を目ざし、島を遠ざかって行くと、響灘の水平線のうえに、ぎらぎらと照りかえす純白の入道雲が、絢爛たる行列をつくって、雲部隊の進軍のようである。せせこましい地上の出来事など、この太陽と、海原と、青空との壮大な交響楽の前には、塵芥にも等しい。
（この海をこのまま泳ぎつづけて行けば、支那に行ける。この海は、支那大陸へ、一直線に続いている）
　嘗て、青春の夢にとりつかれ、放浪と漂泊の情熱に全身を灼かれたとき、つねに、その若々しい志は、はるか支那の天地につながれていた。自由を求め、ひろびろとした世界に出て、龍となって昇天する筈であった。それなのに、今は、北九州の一角、若松という不自由の天地に、土龍のように蹋踏している。泳ぎながら、金五郎は、左腕を見る。直径三寸ほどの白い筋肉の丸太のうえに、ものものしく眼玉を光らせた一匹の龍がいる。角や髭など生やし、えらそうにしているけれども、この腕の中から、出ることも出来ねば、動くことも出来ない。金五郎は、笑いだしたい衝動をしきりに感じた。
　しかし、実は、金五郎の胸の中は、この哀れな龍よりも、もっと、せせこましく、偏狭になっていたのであった。
（どうも、マンと、時次郎とが、怪しい）
　はじめて湧いた疑念である。
（おれが焼き餅を焼くなんて……）
　邪念を蹴とばすように、心中で呶鳴ってみても、ひとたび、胸奥に生じた疑心暗鬼は消えなかった。
　大川時次郎がマンに惚れ抜いていることは、百も承知だ。それなのに、マンを迎えに行くという時次郎の申し出を許したのは、マンを信じきっていたための寛厚さであった。マンの誤解は、いつか解ける日があるであろう。それまでは、一ヶ月帰らなくとも、三ヶ月帰らなくとも、一通の便りが来なくとも、金五郎は苦にしなかった。たとえ、その期間中、時次郎が傍にいたところで、心配はしない。まして、嫉妬の感情など、全然、湧かなかった。おどけ好きの金五郎は、それを面白がる気持さえ、なかったとはいえない。
　ところが、林助から聞かされた言葉は、青天の霹靂より、もっと、衝撃が大きかった。
（マンが、時次郎のいることを隠すとなれば、ただごとではない）
　金五郎は、あたりが暗黒になるような昏迷と、絶望感とで、泳ぐ手から、次第に、力が抜けた。それでも引っかえす気にならず、機械のように、無意識に、なお、青空と白雲の隊列とを目標に、沖へ沖へと出て行った。手足の痺れるのを感じ、ときどき、くらくらと眼まいをおぼえた。それでも、金五郎

の頭は、水平線の方角から動かなかった。
「おうい、オヤジい」
意識朦朧となりかかっても、なお泳ぎつづける金五郎の背後から、一隻の小伝馬船が、全速力で、追っかけて来た。「六ゾロの源」、清七、「中学生」の三人が乗っている。
金五郎は、伝馬船のうえに引きあげられた。
三人は、どうして自分たちの親分が、無茶な遠泳をしたかを知らない。それどころか、日ごろの水練上手を知っているので、いくらか疲れているのを見ても、格別、心配もしていなかった。追っかけて来たのは、別のことだった。
「早よ帰らんと、大時化(おおしけ)になるちゅうて、中ノ島の漁師が話しよる」
それを告げに来たのである。
果して、夕刻ごろから、すさまじい突風を加えた大嵐になった。
玄界灘は若松の北方に位している。そのまた北方には、満洲があり、シベリヤがある。冬になると、北風の冷たさはお話にならない。しかし、夏でも、もっとも強烈な暴風はこの方角から吹くのを常とした。
昼間の上天気は仮面でもあったかのように、豪雨をまじえた北風は北九州の空を吹き荒れた。ときに、なぐりつけるように、風速二五メートルもの突風が、トタンの看板を飛ばし、屋根瓦をはぎ、掛け小屋を倒した。夜に入るにしたがって、雷鳴まで加わって、暗黒の中に、洞海湾は今にもくつがえるかとばかり煮えくりかえった。
「船を流すな」
闇のどこからか、金五郎の声がひびきわたる。声は風と雨とに消され勝ちだが、子分たちの耳には聞えた。
「大丈夫」
合言葉のように、誰かが答える。
中ノ島から、聯合組岸壁まで、どうにか漕ぎ帰ったころから、嵐の気ざしに出あったのだった。伝馬船は仲仕の生命だ。夕食などそっちのけで、四隻の船の防衛に当った。
たぎりたつ波に翻弄されて、岸につながれた多くの船は、舷を接し、もみあい、ぶっつかる。ギギイ、バリバリと、船体が分解してしまいそうな音が、あっちこっちで起る。艀や黒船の林立した柱が、振り子のように傾き、編んだように交錯する。折れるのもあった。どこからかわからないが、悲鳴のように、汽笛や、サイレンが鳴って、地獄の叫喚が現出されていた。
「纜綱(もやい)が切れたあ」
そう喚いたのは、「ノロ甚」らしかった。
「よその船に、つないどけ」
金五郎はそう絶叫したが、もう返事がなかった。またたく間に、流されてしまったらしい。
「やっぱり、将棋のほかにはなにをやらしても、のろくさいのう。あの小伝馬にゃ、清七も乗っとったのとちがうか。清七の奴も、朝、頭をたたかれて、夕方ごろ、アイタというような奴じゃげ、よう揃うたもんじゃ」
金五郎は、かたわらにいた「六ゾロの源」に、そんなことをいって笑った。
「大丈夫じゃろか？」

「流されたところで、湾の奥の方じゃけ、それは心配ないが、……沈んだりすると、どっちも泳げん奴じゃからなあ」
「オヤジ、この嵐は朝までは止まんばい」
「徹夜で船を守るんじゃ」
暴風雨は勢を増す一方だった。
暗くてよくわからないけれども、どこの組からも人数がくりだされて、伝馬船の警戒がなされている。暗夜の中に黒い人かげが動き、カンテラの灯がちらつく。
金五郎は、桟橋の反対側にある大伝馬のことが気がかりになって、荒れ狂う船づたいに、桟橋に飛びあがった。危く足をふみ外して、海に落ちそうになった。やっと這いあがって、桟橋に立った。
正面からのはげしい風雨に、頭を突っこむように、身体を傾けて歩きだしたとき、いきなり、カンテラをなにかで殴った者があった。思わず取り落すと、ガラスが割れて、火が消えた。
「誰か、乱暴するのは？」
そう叫んだ金五郎の眼に、ばらばらと、五六人の人かげが自分を取りかこむのが見えた。稲妻の青い光の中に、その連中の一人々々が、それぞれ抜き身の日本刀、匕首を持っているのが認められた。
手ぶらの金五郎を、一気に斬りふせようという作戦らしく、暴漢たちは、金五郎にかまえる隙もあたえず、いっせいに、襲いかかって来た。
「名乗れ」
桟橋の突端に退いて、そう叫んだとき、金五郎は、背中と後頭部とに、はげしく殴られたような衝撃を受けた。よろめきながら、一人の暴漢を、右腕で小脇にかかえこみ、その匕首を奪いとった。そのとき、指の怪我をした。
「角助(かくすけ)かあ？」
「そんな者(もん)じゃねえや」
嗄(しわが)れ声で、誰かが答えた。
「江崎満吉か？」
「馬鹿ぬかせ」
「友田組じゃな？」
「文句いわんと、斬られてしまえ」
身体が敏捷なのと、多少柔道の心得があるのと、持ちまえの糞度胸とで、これまでの喧嘩のときは、どうにか切り抜けて来たのだが、暗夜、足場の狭いところで、兇器を抜きつれた大勢の敵を相手にすることは、いままでのようには行かなかった。悪い条件が揃っていた。
「くたばりやがれ」
喚いて、無茶苦茶に、刀をふりまわし、突いて来る敵のために、金五郎は数ヶ所を斬られた。左の太股に、刀の切っ先を突き立てられて、桟橋の上に片膝と左手とを突いた。そのとき、前額部に、どっと、巨大な石でも落ちかかったような、するどい衝撃を感じた。自然に、頭が後へひかれると同時、顔中に、だらだらと生ぬくいものが流れ落ちた。それは眼に入り、口に入った。魚のように、生ぐさかった。
口中に入った血を、ぷッと吐きだし、
「吉田の身内か？」
そう呶鳴ったけれども、それはもう声にはならなかった。

雷鳴をとどろかせて、なおも吹き荒れる暴風雨が、ときどき、アセチリン瓦斯(ガス)のように、稲妻の中に、まっ青に浮きあがる。湾内のどこかで、沈没する船でもあるのか、悲鳴と、汽笛と、鉦の音とが、しきりに鳴りひびいている。

金五郎は桟橋の上に倒れて、意識朦朧となりつつあった。全身を、刀と匕首とで、膾(なます)のように突かれ、刻まれるのが、もはや、痛みのない麻痺の中で、はっきり、わかった。死という観念も、命という思想も、瀕死の神経には湧いて来ない。そして、気ちがいじみた奇妙な滑稽感が、金五郎の唇を苦笑で歪ませようとしていた。

「止(とど)めを刺せ」

そんな声がかすかに、聞えた。

すると、それを聞いた瞬間、不思議なことに、突如、猛然と、(生きたい。殺されてたまるか)というはげしい生命慾がよみがえり、

「貴様らに、負けるか」

そんな言葉が口を突いて出た。しかし、それは全然言葉にはならず、蟹の泡のような、哀れな呟きにすぎなかった。起きあがろうとしたけれども、微動も出来なかった。そして、次第に、意識をうしなって行った。

金五郎が倒されるまでは、短い時間だった。「玉井組」の連中も気づかなかったほどである。

稲妻の青い光の中に、まっ先に怪しい光景を認めた「六ゾロの源」が、桟橋に飛びあがった。

「角助、待て」

と、叫んだ。

当てずっぽうではなかった。桟橋におどりあがった瞬間、きらめいた稲妻の青い光のなかに、源十の眼は、指の短い一つの手を鋭く認めたのである。生姜(しょうが)のような、奇怪な形の青白い手だけが空間に浮かび、桟橋から岸壁の方へ飛び去ろうとしていた。

走った。夢中だった。

岸壁に繋留された大伝馬、小伝馬、サンパン、押売り船、などが、芋を洗うように、はげしい音を立ててもみあっている、その岸壁をすれすれに、角助は逃げて行く。稲妻の閃光のなかに、今度は手が二つ見えた。どちらも第一関節から先を何本か切断した指の形が、不思議にはっきり、病的な幻影に似た不気味さで、源十の眼を刺した。日本刀はどこかに捨てたらしい。

「角助、貴様、……」

若い源十は足が早い。蟹股(がにまた)で逃げる角助は、すぐに追いつかれた。黒い雨合羽を頭から被った角助は、後から抱きついた源十のために投げたおされた。

起きあがろうとするのに、飛びかかってねじ伏せた。暴風雨はなおはげしく、二人の転んだところは水のたまった泥沼だ。まるで、二人ともドブ鼠である。格闘しているうえを電光が照らす。

角助は、金五郎を殺したと思っている。源十は、オヤジを殺されたと思っている。どちらも必死だった。しかし、どちらも武器がない。ただ、組んずはつれつしながら、叩きあいをしているばかりだ。

ところが、数分の後に、角助は、源十の打擲(ちょうちゃく)の下に、急

におとなしくなった。「六ゾロの源」はもう無我夢中である。狂気に近かった。金五郎を慕う心が、この誠実で一本気の男を逆上させたのである。いつか、赤煉瓦のかけらが、右手に堅く握りしめられていた。異様な呻きに似た声を発しながら、それを力まかせに、角助の頭に打ちおろしていた。角助が動かなくなっても、頭蓋骨を砕く力を抜こうとしなかった。源十はここに一個の機械と化したごとくである。

そして、おかしなことに、痴呆のごとくなった源十の口をついて、

「おマンさん、おマンさん、……おマンさん、……」

その言葉が、これも蓄音機のように、単調に、間断なく、吐きだされているのだった。

やがて、桟橋上での異変がみんなの知るところとなった。大騒ぎになった。

「玉井金五郎が殺された」

その報は、たちまち、波紋のようにひろがった。

暴徒たちは一人のこらず逃げ去っていた。一本の日本刀が、桟橋の根につながれてある小伝馬船の中に見出された。角助は海中に投じたつもりであったのである。

海岸派出所の巡査がかけつけて来た。水上警察署からもやって来た。桟橋は黒山の人だかりになった。

玉井組の子分連中は、狂気のようになって、敵を探し求めたが、もはや、一人として捕えることは出来なかった。源十と角助とが発見されたのは、しばらく時間が経ってからである。

子分連中は、なお吹き荒れる嵐の中で、文字どおり、天を仰ぎ、男泣きに、慟哭(どうこく)した。

無残な金五郎の身体は、戸板に乗せられて、病院にかつぎこまれた。

幾時間経ったのか、何日がすぎたのか、時日の経過など、まるでわからなかった。生と死との境を夢幻の気持でさまよう金五郎には、もはや、苦痛の感覚もなく、喜怒哀楽の感情もうごかない。ただ、奇妙なことに、いいようもない寂寥(せきりょう)感だけが残っていて、

（どこか、誰もいないところへ逃げだしたい）

そんな脱出の欲望が、身うごき一つ出来ぬ癖に、発作的におこるのみであった。

……ものものしい白衣の手術着や、マスク、メス、鉄、血と石炭酸のにおい。それから、ばらばらに解体した玩具を修繕でもするように、つなぎあわせてぐるぐる巻きにした白い繃帯。ベッドのうえに、そんな哀れな姿で横たわっている青ざめた金五郎は、誰の眼にも、死んでいるものとしか見えないのに、本人はどこかへ行きたくて仕方がないのである。

病室の中には、陰気くさい空気がたれこめている。重苦しい。窓には明かるい外気があたっているけれども、カーテンがそれを遮断している。

医者が、入って来た。うしろに、銀色の箱を持った看護婦がしたがっている。

医学博士の鹿爪らしい八字髭と、金縁眼鏡とを眺めて、金五郎はいった。

「散歩させてくれませんか」

「とんでもない」医師はびっくりして、「一尺動いたら、死んでしまうよ」
「そんなら、そこの窓から、外を見せて下さい」
「カーテンを引きなさい」
命ぜられた看護婦が、静かにカーテンをめくった。
上部につけられた環(かん)の金属音が、鈴を鳴らすように、金五郎の耳に、こころよくひびいた。それよりも、彼の眼を奪ったものは、窓外のすばらしい青空である。指をさしだせば染まりそうに濃い。高く、深く、底なしに澄んで、そこに、馬の形をした雲が、しきりに、早い速力で飛んでいる。白馬の競走のようだ。
「窓を開いて下さい」
と、金五郎は弾んだ語調でいった。
「窓ガラスをお開(あ)け」
看護婦が、また、窓を開いた。
金五郎は、いきなり、ベッドの上に立ちあがった。
医者と看護婦とは仰天して、両方から、金五郎の腕を捕えた。
「なにを、無茶なことを……」
「離せ。昇天するんじゃ」
絶叫した金五郎は、ウンと、一つ弾みをつけて、跳躍した。窓から飛びだした。頭と眸(まなざし)とを青空に向け、泳ぐように、両手を天に向かってさしだした。
しかし、次の瞬間、金五郎が自分の身体を発見したのは、天上ではなかった。地面(じべた)である。しかも、いつか、龍に化している長たらしい全身から、鱗が一枚ずつ剥(は)げ落ちて、ウナギに似た無残さになっていた。そして、金五郎は、自分の前肢が空っぽになっていることに気づいたのである。大事につかんでいた筈の菊の花束がない。
「畜生」
禿げちょろの龍は、口惜しさで、地上をのたうちまわった。さらに、音を立てて、鱗が落ちる。
まっ青な天には、相かわらず、白馬の群が快適な逸走をつづけている。
力尽きようとしたとき、瀕死の耳に、
「あなた」
女の声が、息のかかる近さで聞えた。
龍は七転八倒するのをやめて、耳を傾けた。
その声は、聞いたことのあるような声でもあれば、まるで知らない声のようでもあった。毎日聞きなれた声のようでもあり、一度も聞いたことのない声のようでもある。
しかし、その声が、ふたたび、
「あなた」
前よりも、一層大きく、近く、鼓膜をふるわせてひびいたとき、金五郎は、全身に電流のようなものがつたわるのを感じた。すると、地面に、花びらをまき散らしたように、剥げ落ちていた鱗が、あたかも、強力な磁石で吸いよせられるように、一枚ずつ、音を立てて、身体に飛びかえって来た。気がつくと、いつか、前肢には、ふさふさとした菊の花束が握られている。
その美しい花の色が眼を射、強い芳香が鼻孔をえぐったとき、龍は、唐突に、一つのことを思いだしていた。一間四角

の箱である。それは、上海コレラ騒動のとき、とじこめられた掘立小屋だ。この箱の中にさし入れされた、菊の花のにおいにむせたことがある。そのときの菊と、今、手にしている花と、においが寸分ちがわない。

「あなた」

と、また、聞えた。

金五郎は、うすく、眼を開いた。意識が朦朧としていて、夢と現実との境がはっきりしなかったけれども、霞をかけたような視野の中に、幻のように、妻の顔を認めることが出来た。

「マン」

反射的に、その声が出た。しかし、それは、呟きのように低く、力のない声で、かすかに、唇が動いた程度にすぎなかった。マン一人に聞きとれただけだ。

そして、マンがはげしく号泣する声を聞きながら、金五郎は人事不省におち入り、またも、深い昏睡の中に、意識をうしなって行った。そこには、もはや、夢もなく、死の暗黒があるばかりだった。

病室には、マンの外、子分連中と四五人の見舞客がいた。

嵐の夜、金五郎が奇禍に遭って以来、病室には客が殺到した。しかし、「玉井金五郎が殺された」――それは決定的な噂になって、街にひろがっていたので、どの客の顔も沈痛だった。誰も見舞ではなく、お悔(くや)みに来るのである。

常に金五郎の後楯になっていた大庭春吉の歎きは大きかった。

「おれが殺したようなもんじゃ」

そういって、男泣きに泣いた。

「親方」と、永田杢次も涙をためて、大庭春吉にいうのだった。「わたしが甲斐性なしだもんで、玉井をこげな目に逢わせることになったとですよ。わたしが殺したというてもえです」

しかし、もっともはげしい歎きと悲しみとに打ちのめされていたのは、マンであったことはいうまでもない。マンは、発狂の一歩手前にあるといってよかった。しっかり者といわれ、どんな困難や危険の前にも、男以上に立ちむかって来たのに、今、夫の死に逢おうとして、半狂乱になっていた。

「オヤジカクスケニキラレタ」セイメイキトク」マツモトシゲオ」

広島に来たその子分からの電報で、宙を飛ぶようにして、帰って来たのだが、帰る途中も、帰ってからも、

(夫を殺したのは、あたしだわ)

その恐しい自責の念が抜けなかった。

(あたしがいたら、こんなことにはならなかった)

そんな気がするのであった。

誤解と誤解とが衝突して、馬鹿げた結果を招いたことは、もう、マンにはわかっていた。人間の小さな感情が、命にかかわる大事をひきおこす。マンは泣いても泣ききれなかった。

森新之助夫婦に逢って、染奴と金五郎とのことを聞き、夫の潔白を知った。君香の手紙とばかり信じこんでいたものが染奴のからくりであったこともわかった。

「金さんのような人は珍しいわ。どんな男でも、お京はんみたよなええ女子(おなご)からいい寄られて、肱鉄食わすことなんて、

でけへん。それも、おマンさん、みんなあんたはんに操を立ててのことやで」
君香からそういわれても、後の祭、追っつくことではなかった。
しかし、マンは、金五郎の方も、自分を疑っていたと知って、身ぶるいのする思いがした。
兄の林助から、
「オヤジは、お前と時やんとが、田舎で、都合ようやっとるように考えとったらしいぞ。時やんはお前を迎えに行くというて、広島に帰ったとに、お前が手紙の中に、時やんは居らん、なんて、書いて来るもんじゃけえ……」
そういわれて、びっくりした。
「でも、ほんとうに居らんのじゃもん」
「時やんが迎えに行っても、二ヶ月も三ヶ月も帰らんのなら、おれが迎えに行かにゃ、オヤジにすまんと思うたんじゃ」
「おかしいわねえ。時やんはどうしたのか知らん？……あたしは、ずっと、峯から出たことなかったのに、時やんが帰ったなんて、誰からも聞いたことないわ」
「ふウン……？　オヤジは、もうお前と時やんとがくっついて、それを隠しとるように……」
「そんなあたしと思うなんて、……」
マンは、口惜しい。
しかし、今さらなにをどういってみたところで、金五郎が斬られて、死に瀕しているという現実を、どうしようもないのであった。マンは、暗黒の中にたたずむ気持で、ただ、狂うことからわずかにまぬがれているだけである。そのマンの悲しさを、そのまま、受けとるかのように、腹の中の子供がはげしく動く。胎児は生長して、マンの妊娠腹は、もう、誰の眼にも目立つようになっていた。
（父なし子になるのか？）
それを思うと、マンは、すでに、自分の人生は終ったような絶望感に捕われて、生きて行く勇気をうしなおうとするのだった。
しかし、金五郎の命は、たびたび、消えはてようとして、なお、細々と、息をつないでいた。
「駄目でしょうかね？」
気づかわしげに訊ねる大庭春吉に、外科病院の院長、浜野健一郎博士も、首をひねりながら、答えるのだった。
「不思議ですなあ。普通の者だったら、とっくに死んでいますよ。手当としては、もうこれ以上のやりようはないですが、……ひょっとしたら、命を取りとめるかも知れません。今日明日というところが峠です」
その日の夕刻近く、看護婦が見舞客を取り次いで来た。
「島村ギン、という女の方が、御面会ですが、……」
「ドテラ婆」である。
マンの眼がギラッと光った。
マンは、床に敷かれた畳のうえで、煙草をのんでいた。「ドテラ婆」が来たと聞かされると、あらためて新しいきざみをつめなおし、ゆっくりと、マッチで火をつけた。雁首を口にくわえ、こころもち身体を後に反らせるくらい、胸を大きく張って、深々と、一服を吸った。くるりと二つの乳房の張った鳩胸と、妊娠七ヶ月の太鼓腹とが、奇妙な瓢箪のようであ

る。
ふうッと、煙をはきだし、
「どうしますか？」
という松本重雄の緊張した顔に、
「通して」
凜とした語調で答えて、立ちあがった。躊躇するところなく、金五郎の寝ているベッドを廻って、枕元の右手に行った。そこには、ベッドの藁蒲団と、鉄座との間に、助広の短刀が隠してあるのである。手をさしこんでみて、柄(つか)を触り、あることを確かめた。
（夫をこんなむごい目にあわせたのは、ドテラ婆じゃ）
それを疑うことは出来ない。
あの夜、金五郎を襲撃した兇漢たちは、まだ誰も捕まらない。張本人の平尾角助は、発見されたけれども、頭を砕かれて、絶命していた。夢中で殺人罪を犯した松川源十は、警察に留置されている。
「六ゾロの源」は、警察官の訊問(じんもん)にはっきりと答えた。
「オヤジを襲った人数が、何人であったか、誰であったか、あの咄嗟の場合ではわかりませんでした。しかし、角助が大将になって、そいつ等を率いて来たことは、太鼓判を押します。そして、その角助に、オヤジを殺すように、命令を降したのが、「ドテラ婆」にちがいないことも、もう一(ひと)廻り、大きい太鼓判を押します。死人に口がないからというて、「ドテラ婆」にいいのがれはさせません。あの鬼婆とわたしとを逢わせて下さい」
源十は、泣いて、「ドテラ婆」との対決を懇請したけれども、それは許されなかった。
「困った事件が起ったわい」
と、警察署長も首をひねり、ほとほと、思案に暮れていたということである。
証拠もないのに、単なる噂や、子分たちの申し立てによって、島村ギンを逮捕することは出来ない。ことに、ギンと友田喜造とは密接な関係があり、友田には、「吉田天皇」と称せられる、吉田磯吉という強力な後楯がある。うっかりギンに疑いをかけた行動をとれば、どんなうるさい政治問題が起らぬともかぎらないのだった。しかし、「オヤジを殺したのは、「ドテラ婆」だ」――それは、玉井一家の動かすべからざる確信であった。
扉が開いた。
「ドテラ婆」が、入って来た。てらてらと艶のある浅黒い顔全体に、妙におどおどした、ひどく当惑したいろが漂っている。相かわらずの大丸髷、夏でも脱いだことのない綿入れのチャンチャンコ。そして、女角力のような肥った身体を、すりよせるような、警戒心に溢れた歩みで、金五郎の枕元に運んだ。
その後から、ぞろぞろと、四五人の子分たちがつづいて入った。廊下にも、七八人、ひしめいている様子である。
こちらは、松本重雄、「ノロ甚」、「中学生」の俊次、それに、マンだけしかいなかった。
ギンは、マンを見ると、黄色い声でいった。
「あんたが、ごりょんさんな？　玉井さんが斬られたちなあ。気の毒なことが出来たもんじゃなあ」

マンは、そっと、ベッドの下に手をさしこんだ。柄を握りしめると、すらりと、刀を引き抜いた。
「ごりょんさん、あんた、ほんとに、心配じゃろ？　あんたの気持、おれにはようわかるよ。おれの親父が、やっぱ、喧嘩で、こげな目に逢うたことがあるけん。……それで、どげな風な？」
容体を訊ねたのに、相手が答えようとしないので、ギンは、臆病そうな眼つきで、マンを見た。
内側にまくれこむほど、唇をきっと結び、豹のような鋭い眸で、瞬きもせず、自分を凝視しているマンの血走った顔に、ギンはぎょっとした。眉は吊りあがり、瞳には、怒りと、憎しみと、復讐のいろとが、燐光のように燃えている。後手に隠している刀は見えなかったけれども、大きく波打っている肩と胸とに、不気味な殺気があった。
それでなくてさえ、びくびくもので入って来たギンは、たじたじとなる思いで、二三歩、後ずさった。急に、あわてたように、
「ごりょんさん、おもがな、今日来たのはな、あんたに一言、いうて置きたいことがあったけんじゃ。おれも困ったよ。今度のこと、玉井さんやあんただちにとっても、大事じゃったことはようわかっとるが、……これが、おれの方にも、こたえた。角助の馬鹿たれ奴、バクチで、小倉監獄にかまうちょったけ、ええ厄介払いが出来たと思うとったのに、いつ出て来やがったのか、玉井さんにこげなことをしちょる。おれは、なんにも知らん。……ほんとに、……ごりょんさん、おれを信用しておくれ。世間じゃ、まるで、おれが玉井さんを殺したようにいいよる。角助の奴が勝手にやったことで、おれはなんの関係もないのに。……ほんとじゃよ。おれが、なんで、玉井さんのような立派な男を殺すわけあいがあろうか。それなのに、玉井組の若い衆が、おれを恨んで、おれの家になぐりこみを掛ける、ちゅう噂を聞いたもんじゃけ、おれはびっくりして、飛んで来たんじゃ。……な、ごりょん、おれを恨むのは筋ちがいばい。おれは、心から、玉井さんの災難を気の毒に思うとるんじゃよ」
早口で、追っかけられるように、ギンは弁解する。
歯を食いしばって、相手を睨みすえていたマンの眼から、すこしずつ、強い光が消えて行った。刀の柄を握りしめていた右手からも、力が抜けた。
（さし殺して、自分も死のう）
そんな張りつめた気持でいたのに、マンは、いつか、ささくれだった復讐の念をうしなっていた。
女侠客として、勇名のとどろいている「ドテラ婆」、それにしては、意外にだらしのない態度である。堂々と、金五郎を嘲笑し、止めを刺しに来たのかと思った。子分を十四五人も引き具している。ところが、ギンは、ひたすらに、弁明につとめるばかりだ。ふるえてさえいる。つれて来た子分は、玉井一家の仕返しを恐れる、自分の護身のためらしい。戦意などは微塵もない。はじめから降伏しているといってもよい。
それを見ると、マンは、憎しみや怒りよりも、はげしい軽侮の念が湧いて来て、（こんな虫けら同然の女と、さしちがいなどしたくない）その気持になったのであった。
また、ギンがしゃべっているとき、金五郎が身うごきして呻

いた。それは無意識に発した苦痛の声であったろうが、マンの耳には、
「女の癖に、出しゃばるな。引っこんどれ」
そういう、はっきりした言葉になって聞えた。
しかし、ほんとうに、マンを静まらせたのは、腹の中の子である。どうしたのか、胎児はしきりに暴(あば)れて、母親へなにかを告げようとしているかのようだった。興奮していたマンが、生まれ出る子に気づいた瞬間、完全に、危険な想念が消えていた。
その日から、なお、金五郎に昏睡の日がつづいた。
病室の表に、「面会謝絶」の札が掛けられた。
吉田磯吉や、花田準造、品川信健なども、見舞に来たが、浜野病院長は、患者に逢わせることを差し控えた。いずれも見舞の品を置いて帰った。
井上安五郎がやって来た。父に話し、金物商組合からの見舞品を、届ける役を買って出たのである。正義感に溢れるこの青年は、玉井金五郎の遭難を、街中の誰よりも歎き悲しんだ。まだ一度も話したことはなかったけれども、心の中では、もっとも信ずるに足る人、すでに、同志としての強い結合さえ感じていたのである。それだけに、怒りも大きかった。
（この若松は、なんという野蛮な暴力の街だろう）
しかし、安五郎は、それを恐れる心よりも、その理不尽を除去しなくてはならぬ、という強い情熱と勇気とを、若々しい胸にたぎらせているのであった。
「一目(ひとめ)だけで、結構なのですが、……」
病院の玄関で、懇請したけれども許されなかった。
「どなたの面会も、お断わりして居りますから」
「それでは、これを……」
やむなく、見舞品を置いて、虚(むな)しく帰らなければならなかった。力のない足どりで、街の方へ引き返しながら、
（どうぞ、死なないで下さい）
と、心の底から祈った。
マンは、帰った次の日の朝から、三社詣りを欠かさなかった。氏神の白山神社、蛭子(えびす)神社、金比羅神社の三社へ、早朝、日参をして、「お百度(ひゃくど)」を踏んだ。
まだ真暗な、深夜といってよい午前三時から起きて、まず、白山神社に出かける。百段ある高い石段を登る。鬱蒼たる森林が風にざわめき、高い杉のうえで、フクロウが鳴く。キョーン、と鋭い狐の声が聞えるときもある。しかし、マンは、不気味さも、恐怖も忘れて、洗足(はだし)になって、神前を、百回、往復した。
暗黒の金比羅神社も、蛭子神社も、その凄さは白山神社に劣らない。合掌したまま、土の上を踏む一心不乱のマンには、夫の生還を祈る心のほか、なに一つ余念はなかった。その切なさのあまり、
（もし、夫の命を奪うのだったら、この世に、神様というものはない）
そんな突きつめた気持さえ湧くのだった。
三つ目の社(やしろ)で、「お百度」が終るころ、東の空が白んで来る。明かるい太陽の光線がさして来る。それは、あたかも、死の暗夜から、生の朝がよみがえったように、マンには感じられる。

（こんな風に、夫も生きかえってくれれば……）
そう思うと、そんな気がして、宙を飛ぶように、病院へ走って帰る。しかし、金五郎は、昏々と眠って、なお、死の谷の中に横たわっているのであった。
五日目の朝、マンが三社詣りから帰って来たときである。
これまで、動くこともしなかった金五郎が、苦しそうに呻いて、顔をねじまげた。
「あなた」
思わず、マンが呼ぶと、うすく、眼を開いた。
「マンか？」
「はい」
「ラムネをくれ」
「はい、ちょっと、待って」
そう答えると、うれしさで、息がつまりそうだった。ぼろぼろと、堰を切ったように、マンの眼から、大粒の涙があふれ落ちた。

秋風が立ちはじめるころになって、金五郎は退院することが出来た。無論、まだ仕事をすることなどは思いも寄らなかったけれども、杖をつけば歩けるほどになったので、自宅で静養することにしたのである。
大よろこびの大庭春吉は、持ち前の蛭子顔（えびす）を、さらににこにこ綻ばせて、病院長の浜野博士に、礼を述べた。
「ありがとうございました。玉井の命を取りとめたのも、みんな先生のおかげです。この御恩は、終生、忘れません。玉井に代って、お礼を申します」
「いや」と、温厚な浜野博士は、当惑した面持で、「どうも、変ですよ。玉井さんの命を救ったのは、僕ではないようですな。この間も申しあげたように、普通の者だったら、あれだけの傷を受けて、三日とは生きて居られませんよ。即死するでしょうね。おどろいた頑強さです。不死身（ふじみ）という感じを受けました」
「不死身――ああ、そういえば、昔も似たようなことがありましたよ。もう三年ほど前になりますかな？……門司で、大層、上海コレラが流行ったことがあるでしょう？」
「知っています。毎日、何百人といって罹病し、何十人といって死にましたね。僕も、専門ちがいですが、医者の手が足りないということで、応援に行きましたよ」
「そのときです。玉井は、あれの弟分の、ほら、今、三内町（さんないまち）で、「飛鳥（あすか）」という料理屋をやっている森新之助、その森と二人で、コレラ患者のまっただ中で、まっ裸になって、毎日、仲間を介抱したのに、コレラにかからなかったんですよ。――コレラのバイキンの海の中で、平気でいた不死身男。……なんて、新聞に、写真入りで書かれました」
「致命傷がなかったのも幸でしたね。なにしろ、相手は、首魁の角助をはじめとして、剣客でもなんでもない。腕の鈍いのが、生（なま）くら刀を、しかも、びくびくもので、やたらに振りまわしただけ。それに、玉井さんは雨合羽を着ていましたから、急所を外れています。……いずれにしろ、死を免れたのはなによりでした」
「よっぽど葬式を出すのかと思いましたよ。葬式はあまり好きではありませんからな」

「医者も、お寺とはあまり仲よくしたくありませんよ」
そうして、親分と博士とは、明かるい声を立てて笑いあった。
金五郎が人力車に乗せられて、病院の玄関を出て行くとき、群衆の中にまじって、ひそかに、これを見送っているお京の姿があった。
病みあがりでもあるのか、豊艶であった顔は青白く、ひどく痩せが目立っている。水々しかった銀杏返しの頭も、洗い髪にしているが、油気が抜け、ほつれ毛がたれさがったまま、張りのある眼にだけ、なお、昔ながらの妖(あや)しい光がただよっているけれども、それすらも弱々しく、深い憂いのいろに彩られていた。その眼に、うっすらと、涙がたまっている。
プッ、プウッと、ラッパの音とともに、数台の人力車は、街の方へ、ゆるやかな速度で出て行った。先登の車に、大庭春吉、次に、金五郎、その後に、マン。いずれも、幌(ほろ)が被せられていて、顔は見えない。幌の小さいセルロイド窓から、金五郎の白い繃帯だけがちらちらした。
お京は、かたわらの胡蝶屋豆八をかえりみた。その耳に口をつけて、なにか、ささやいた。豆八は、深刻な顔つきをして、何度も、しきりと、うなずいた。その豆八の眼にも、涙が光っている。
群集の中に、お京の姿は消えた。

北九州の空に、満洲シベリヤの野から、日本海を渡って来る寒風が吹きはじめる。
十二月に入ると、すぐに、蛭子神社の大祭だ。祭は春と冬との二季に行われるが、冬の方が本祭である。近郊近在からの参詣客で、毎年、鼎(かなえ)のたぎる盛況を呈するのを常とした。
「オヤジ、サーカスにつれて行って下さい」
一週間も前から、「中学生」の俊次は、金五郎にねだっていた。
金五郎も、もう、杖なしで自由に歩けるようになっていたので、
「今年は、おれの快気祝いを兼ねて、玉井組全部、「蛭子座(えびすざ)」に坐ろうと思うとる。サーカスでも、ロクロ首でも、八幡の藪しらべでも、なんでも、つれて行ってやるぞ」
上機嫌で、そんなことをいった。
祭の第一日目に、早朝から、「蛭子座」が開かれる。社殿とは別に建てられた広い拝殿で、参拝者が座につく。エビと鯛(たい)つきの膳で、神酒(みき)をのみ、打ち込みをして、縁起を祝うのである。希望者が多いので、なかなかその資格が得られないのだが、金五郎は、なんとかして、今年は玉井組全員、「蛭子座」に就きたいと考えていた。
「マン、お前も坐れよ」
「さあ……？」マンは、小首をひねって、「ウフフ……、こんなドン腹で、……」
「ドン腹だって、恥かしいことあるもんか」
「恥かしいことはないけんど、「蛭子座」のまん中で、産気づきでもしたら、大きな大事(おおごと)やわ」
「なお、めでたいじゃないか。産婆さんを雇うで、隣りに置いといてやるけ、お前も来い」
「そんなこと、……」

すると、横から、松本重雄が声を落して、
「オヤジ」
「うん？」
「変な噂がありよるですよ。床屋で話しよったが、――玉井組が全員、「蛭子座」に坐るというなら友田組も全部坐って、なにかの因縁をつけて、今度は根こそぎ、玉井組をやっつけてしまう。……なんて、気をつけたがええです」
「またか。うるさいのう」金五郎は、舌打ちしたが、闊達(かったつ)に笑って、「勝手にさせちょけ。おれは一度死んだ人間じゃ。もう、どんなことが来たって、恐いことはない。どこまで彼奴等の無茶が通るか、こうなったら、根(こん)くらべじゃよ」
死の谷を抜けて来て、金五郎には、自分でもよくわからぬ、なにかの新しい力が、自分に附与された思いがしていた。後退するよりも、さらに前進する勇気が、身内に溢れている。
金五郎は、ようやく繃帯の取れた額に手をやった。横なぐりに叩きつけられた鈍刀で、頭の皮が帽子をぬぐようにめくれた。それをまた被せて縫ったところが、三日月型の大きな傷になっている。そこから、たくさんの血が流れ出たが、そのかわりに、なにか新しい元素のようなものが、注入されたようであった。
（もう、おれは、二度と死なない）
そんな奇妙な自信も生まれていた。
十二月三日、寒風の中に霰(あられ)がまじった。
未明、玉井組の連中は、新しい半纏姿で、新仲町の家に勢揃いした。ここでも、神酒(みき)をひっかけ、まだ暗いので、弓張提灯を持って、金五郎先登に、蛭子神社へ出かけた。
産婆に注意されて、マンは家に残った。
東の空が白み、「蛭子座」で、神主が祝詞(のりと)を読みはじめたとき、あわただしく、女中のジュンが飛んで来た。
「オヤジさん、男の子が生まれましたよ」
「蛭子座」で、一騒動持ちあがるかと思われたが、それは噂だけで、なにごともなく終った。
マンの生んだ男の子に命名するために、金五郎は数日の楽しい苦吟をした。そのとき、文字を知らず、学問のない悲しさを味わった。それでも、人に頼む気にならず、漢和大字典だの、暦や、姓名学の本などと首引きをした。
それを見て、マンも笑いながら、
「どんな名をつけなさるの？」
「人に負けんような、ええ名をつけてやるんじゃ」
「そんなら、勝(カツ)という字を入れたらええのに」
「そうじゃなあ……？」
「あなた」
「うん」
「あたし、今、気がついたけど、今年は丙午(ひのえうま)よ。女でのうてよかったわ。丙午の女ははげしすぎて、男を食う、男を殺す、なんて、昔からいうけん」
「そんなこた、迷信じゃよ。……じゃが、今年は、いろいろ、苦しいことは多かったけど、忘れられん年じゃったなあ。若松に移ったのも今年、玉井組の看板をかけたのも今年、お前とはげしい夫婦喧嘩したのも今年、殺されて生き返ったのも今年、跡継ぎの男の子が生まれたのも、今年、……」
「それから、四円七拾銭もの高い時計を買うたのも、今年」

「明治三十九年――先になってから、記念の年になるなあ」
「先になって？　あたしがお婆さんになったとき？」
「おれが爺になったとき。そのときは、この子も大きゅうなっとるぞ。……そうじゃ。勝、という字を入れた名にしてやろ。……勝、勝、……勝、何がええかのう？……」
誕生五日目に、やっと、「勝則」という名が出来た。それを、日本紙に、例の我流の肉太字で書いて神棚の下に貼りつけた。
ところが、困った問題が起こったのである。戸籍がないのであった。金五郎も、マンも、故郷を無断で飛びだしているので、若松に籍がない。早く寄留をしなければと何度か相談はしたのに、そのためには、郷里へ帰るか、手紙で連絡するかしなければならないので、つい、ずるずるになっていた。
「どうしたもんかなあ？」
夫婦は、ほとほと、途方に暮れた。なんにも知らずに、可愛い眼をぱちくりさせている赤ン坊を眺めては、夫婦顔見あわせ、来る日ごとに、ため息をついた。
永田杢次が見るに見かねて、
「わしに委せときなさい、こんなときくらい、腑抜けの呆作のわしでも、役に立つかも知れん。わしが手続をして来てあげよう。なに、気の毒がることはない。道後の入湯、それに、宮島詰りをすると思やええ」
そういって、わざわざ、四国と広島とに行ってくれた。
「玉井組」の仕事は、順調に捗っていた。松川源十が小倉監獄に収容された後、松本重雄がボーシンとなって、金五郎を助けた。金五郎も、十二月には、聯合組事務所に顔を出し、ときには、現場の見まわりも出来るようになっていた。
歳晩近くなって、永田杢次はがっかりした顔で、帰って来た。
「おれはなにやっても詰らんのう。戸籍取りも出来んが。いやはや」
苦笑して、頭をかいた。
年が、明けた。
元日、勝則に、新調の晴衣を着せ、夫婦揃って、氏神の白山神社に宮詣りをした。
赤ン坊は色が白く、近所の人たちが、
「ゴンゾの子に、よう、こげな可愛い子が出来たもんじゃ。カラスがトンビを生んだちゅうのは、このことたい」
などというので、マンはうれしくて仕方がなかった。
それで、もっと息子をきれいにしてやろうと考え、銭湯につれて行くと、糠袋と卵の自身とで、ゴシゴシ磨き立てて、とうとう、赤ン坊の顔をすりむいてしまった。
戸籍のことはなかなか解決しない。両方の籍から抜いて、結婚届をした上、出生届を出さなくてはならないので、おいそれと行きそうもなかった。
「倅をいつまでも籍なしで、置いといちゃいかんばい。お前たちの方は先になってもええが。とりあえず、息子はわしの方の籍にでも入れといたら、どうな？」
永田杢次のその言葉にしたがって、勝則を、永田家の二男として入籍した。ところが、誕生日は昨年の十二月三日であるといっても、規則一点張りの戸籍係りが、頑として聞き入れない。そのため謄本には、明治四十年一月二十五日生として記帳された。

冬の蛭子祭が近づいた。勝則が、ようやく障子の桟をつたいながら、歩けるようになったころ、マンは、顔を染めて夫にいった。
「あなた、また、出来たらしいわ」
「なにが？」
「赤ちゃんよ」
「へえエ、勝則が出来るまでは、お前は石女（うまずめ）かと思うちょったが、出口がついたと見えるのう」
「今年は、女の子ならええけど、……」
翌年、女の子が生まれた。文子（ふみこ）と命名。
それから、マンは、まるで、命の製造機械かなにかのように、次々と、子供を生んだ。そして、年子（としご）のようにして、勝則、文子、政雄、秀子、国子、と、家族が増してゆく間に、「玉井組」も次第に膨脹して、時代は、明治から、大正に移っていた。
大正三年一月十二日、桜島が大爆発をした。鹿児島南端の山から吹きあげた火山灰は、風に乗って、北九州の空まで流れて来た。勝則は、小学二年生であったが、学校の校舎の屋根は雪が降ったように、まっ白になっていた。天気なのに、母のマンから、灰よけに、傘をさして行け、といわれた。多くの者が傘をさしていた。
この年、第一次世界大戦、勃発。
玉井家は、正保寺（しょうほうじ）町に移転していた。前の新仲町とは裏表で、一町とは離れていない。新築したのである。長男の勝則の外はみなこの家で生まれた。
裏庭は、菊の好きなマンが花畑にしてしまい、家の中には、相かわらず、猫がうようよしていた。そうして、欅箪笥（けやきだんす）の抽斗（ひきだし）は、三段ほど、助広の短刀をはじめとして、日本刀で埋められていた。
「お父（と）さん」もう、あなた、と呼ばず、マンはそう呼ぶようになっていた。「これまでも大変じゃったけど、これからが、一層、大変よ」
「おれも、そう思うちょる」
大正三年四月一日、若松に、市制が布かれた。ときに、戸数六二五八、人口三七三九三。因（ちな）みに、若松村が若松町になったのは、明治二十四年三月一日、戸数八八一、人口三一三一。明治五年には若松村は戸数二〇、人口五八〇の一漁村にすぎなかった。
市制施行祝典が盛大に催された。
玉井金五郎、三十五歳。
同マン、三十一歳。
同勝則、九歳。